

異世界より☒超高校級☒
が参戦するようです
よ！

ヤッサイモッサイ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲で超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

生き残った四人の仲間と未来機関の三人と共に現実への帰還を果たそうとする日向創。

だが希望を宿した日向でさえカムクライズルを完全に克服することは叶わず帰還と共に絶望が蘇る。

希望と絶望がせめぎ合う中なんとか島を脱出したカムクライズルは手紙によって異世界へと誘われて——ダイナミックに着水した!!



問題児の世界に日向創をぶち込んでみました。

ゲームとアニメしかやっていないためゼロの内容なんかは知識不足です。

ついでに言えば超高校級の格闘家でも十六夜君に勝てる気がしないので身体能力の面で明らかにダンロン世界の常識を超える描写が入るかもかもしれません。

なお日向くんはチートにするつもりですがそれでもせいぜい十六夜くんと同レベルになると思います。

いきなり白夜叉さんと戦う系主人公？そんなのバトル漫画の人に任せますわ。日向くんはサイコミステリーの世界の住人ですし。

と思っていたのですが話を聞く限り問題児の世界にカムクラくんがいた場合、それはヤバイ存在へと昇華されるらしいのでその方向性で行きます。でも普段というか基本的に十六夜君を超えることはありません。条件が限定された状態でのみ本当の力を取り戻す的な感じで行こうと思案中です。読者の皆様には作者の知識不足で迷惑をかけます。今後とも是非お力添えの程を宜しくお願い致します。

なお受験凍結中ではありますがその受験も二月の中盤までには終了いたします。そこからまた地道ながらも執筆を再開したいと思っておりますのでどうか今しばらくお待ち

ください《02月02日》

一応受験が一段落したため再開します。《2015年2月13日》

作者の馬鹿のせいでまた暫く凍結。お待ちください……まじすいません《2015年

11月12日》

再開したい思います。《2016年8月16日》

目次

chapter 1 絶望からの浮上と

異世界からの落下

異世界の手紙 1

サヨナラ希望、コンニチハ異世界

6

ドキドキワクワク！ウバイアイ異世界

旅行 15

異世界の果ては男のロマン 30

ロンパロンパロンパ！それは違うぞ黒

ウサギ！ 42

千の目で見える元の世界 62

大和装ロリ決戦！白い夜叉VS黄色い

ひよこ 74

あああの白を絶望色に染め上げたい

91

災禍の痕、既視感、そして憤怒

106

水も滴るいい男の顔も三度まで

113

chapter 2 人喰い虎食い料理人

食い熊

ケモノさん、赤ずきんさんはこちらで

はありません 123

オーガ・サーカス《燃える館から私を連

れ出して》同時上映、「母ちゃんの立つ食

祭り明け、夜空に残る、火の香り。日向

心の一句 ————— 310

燻りはやがて火事とならん ————— 327

異界の北端で友を思う ————— 338

やがてうねりを上げた業火に洗われる

————— 351

黒死よりも美しき死色の鮮やかさよ

378 絶望という病と希望という薬 ————— 393

絶望という病と希望という薬 ————— 393

絶望という病と希望という薬 ————— 393

406 前を向く、それ即ち絶望の直視なり

前を向く、それ即ち絶望の直視なり

420 前を向く、それ即ち絶望の直視なり

あらゆる物は既に手の中に ————— 436

黒き嵐の過ぎし空 ————— 452

少女は瞳の雫を通して神へと懺悔する

————— 473

一歩進んで一寸先の闇を見る ————— 486

負けているのに負けられぬその理由

500

chapter5 なぞなぞ『頭は鳥、顔

は熊、変身すると巨人になる生き物』

無くしものは隠されもの、帰って来ぬ

限りは見つからん ————— 515

三步進めば忘却の虜なり ————— 540

巨軀すら墮とす破壊の神様 ————— 558

素直な子は良い子、みんながみんな素

直なら

578

人に生まれたことを嘆いた事はない

595

番外 新しい力?

628

番外 孫子曰くパンツは愛の現象であ

る

635

カムクラ設定集

653

龍使いは人間か否か

658

竜の羽ばたきに人は結束する

667

切つてはまた繋ごう、人の縁はけして

綺麗ではないのだから

686

番外 もしも全てを終えていたのなら

苦惱こそ知性体の持つ特権である

695

713

番外 召使いと蛇

720

番外 黒く泣く少女へ、幸運は舞い降

りる

732

chapter 1

絶望からの浮上と異世界からの落

下

異世界の手紙

異世界の手紙

「——クソッ……………」

暗く……………長い髪を引き摺りながらも男は荒廃した世界を進む。

さながら幽鬼のような外見ながらも力強いその歩みと妖しくも輝く紅き双眸は力に満ち溢れていた。

顔に浮かぶ玉のような汗が唯一彼の疲労具合を表している。

男の名はカムクライズル……………様々な実験を経て一時期は超高校級の“希望”と

まで言われるようになった元凡人。

……いや“元”を付けるのならばそれは凡人ではなく超高校級の希望に対しての方が適切か……。

今の彼は世界を絶望で満たすための端末……希望を絶望に塗り替えた女の駒に過ぎない。

先程までだって彼女の意思のままに絶望を伝播させる為の活動をしていたところなのだ。

(まあ半ば失敗に終わりましたがね。)

その時の記憶まではないものの無事に電子の世界から脱出出来た……そこまではいい。

問題はなぜか自身と同じ絶望の端末がその身に希望を宿していたことにある。

ゲームの中で何が起きたかまではわからないまでもこうして自分がここにいるということは間違いなく希望化は失敗した筈なのだ。

江ノ島盾子に何が起きたかはわからないが、現に捕らわれた端末の三分の一以下とはいえ確かにかつての同級生達はかつての……いや、それ以上の輝きを持っていた。

(……………わからない。)

カムクラには理解ができなかった。

かつて超高校級の希望と呼ばれたからこそ“本物の超高校級の希望”を知らないカムクラにはその情報が……その才能だけが唯一欠落していたのだ。

(わからない——がおもしろくもない。)

未知——ある意味カムクラが求めているものではあるが何故かこの“未知”だけは不思議と癪に障った。

そもそもカムクラがそういった感情を抱いている事が異常なのだが憔悴しきったカムクラがそれに気づくことはない。

いくらカムクラとはいえ希望に囲まれた状況下……自身の正体不明の不調もあり取れる選択は逃亡しかなかった。

「——本当につまらない。」

だが本当のところカムクラにとって計画の失敗などどうでも良かった。

彼の目的は現状ただ一つ………”つまらなくない事”。

先ほどの未知すらもカムクラからしたら「おもしろそうだから」と言った考えでしかない。

ただただ希望であり続けるために必要なもの以外のすべてを………むしろ必要なものすらも捨て去ったカムクラに残るのは機械的な絶望への奉仕と未知への極僅かな“諦観”。

どうせ未知なんて無いと断言しきる………運命すらも自身の才能だと断言しきる“元”希望ゆえの諦め。

それが唯一辛うじてカムクラを人間の形に止め絶望へと誘った理由。

——故にカムクラがどんよりとした空から落ちてくるそれに興味を持ってしまったのは仕方のないことだと言える。

伸ばした手に収まったのは蠟で止められた豪華な便箋。

宛名は間違いなく自分宛だ。

空から降ってきた自分宛の手紙というだけでも十分に怪しいがそれが無くとも星の数程もあるカムクラの才能の全てがその手紙の怪しさを証明していた。

だがカムクラが興味を抱くにはそれで十分。

感情など忘れた身で有りながら少し焦り目に開かれた手紙にはこう書かれていた
『悩み多し異才を持つ少年少女に告げる。

その才能を試すことを望むならば、

己の家族を、友人を、財産を、世界の全てを捨て、

我らの”箱庭”に來られたし』

その意味をカムクラが理解するまでの極々僅かな時間間にカムクラの視界は荒廃した世界から自然豊かな異世界へと移り変わったのだった

サヨナラ希望、コンニチハ異世界

サヨナラ希望、コンニチハ異世界

カムクラにとって自身の認識の外というのはそうそう存在するものではない。

かつて希望の象徴と呼ばれたその性質は伊達ではないのだ。

ことを起こす前から結果はどうなるのかはだいたいわかるし事物が起こる前にそれが起こることを推理する事だって可能なのである。

かつて自身も崇拜した絶望の象徴ですら完璧にこの推理から逃れることはついで出来なかつたのだからその凄まじさは語るまでもない。

だがその卓越した推理でも今回のことばかりは理解が追いつかなかつた。

手紙に目を通した瞬間、手紙が発光したと思えば突如宙へ投げ出されているのである。

しかも眼下へ広がるのは今ではみることもできないであろう大自然。

そして自身が希望と呼ばれていた時代ですらも見ることの叶わなかった世界の果てまで見える。

「うおおおああああ——っ!!」

「キヤー——!!」

ついでに男一人と女二人、さらには陸上生物も一匹。真下には随分と不思議な装いをした女がまた一人。

流石にこの高さから落下して無事である術はないが——

（“幸運” くらいならば自分でも持っている——）

まあきつと何とかなるだろうとカムクラには無いであろう思考をしている事に気付かぬまま五つの影は湖へと沈んだ……………。

そんなカムクラにあるはずのない気の抜けた状態が生んだ変化に本人すら気づかぬ

まま。



「し、信じられないわ！まさか問答無用で引き摺りこんだ挙げ句、空に放り出すなんて！」

「右に同じだクソツタレ。場合によっちゃその場でゲームオーバーだゼコレ。石の中に呼び出された方がまだ親切だ。」

「……………。いえ、石の中に呼び出されては動けないでしょう？」

「俺は問題ない。」

「そう。身勝手ね。」

「そこでは四人の少年少女が湖から這い上がり皆一様に服を絞るといふある意味倒錯的な光景が広がっていた。」

「此処……………どこだろう？」

「三毛猫を抱えた少女があたりを見回して皆の気持ちを代弁する。」

「さあ。まあ、世界の果てっぽいものが見えたり、どこぞの大亀の背中じゃねえか？」

「三毛猫を抱えた少女の眩きにつきの悪い少年が答えた。」

どこか馬鹿にした言い回しにもう一人の少年は「濃い」という印象を抱きながらも同じように辺りを見回す。

最も薄ぼんやりとした記憶だが空から落ちてくる時に確認したのでそれ以上の発見はなかったが。

服をあらかた絞った金髪の少年が濡れた髪を掻き上げながら目の前の三人へ確認する。

「まず間違いないだろうけど、一応確認しておくぞ。お前らにもあの変な手紙が？」

「その通りだけど、そのお前つての訂正して、——私は久遠飛鳥よ。以後は気を付けて。それで、その猫を抱きかかえている貴女は？」

「……………春日部耀。以下同文。」

「そう。よろしく春日部さん。次に野蛮で凶暴そうなその貴方は？」

「高圧的な自己紹介をありがとよ。見たまんま野蛮で凶暴な逆廻十六夜です。粗野で凶悪で快楽主義と三拍子揃ったダメ人間なので、用法と用量を守った上で適切な態度で接してくれお嬢様」

「そう。取扱説明書をくれたら考えてあげるわ、十六夜君」

「ハハ、マジかよ。今度作つとくから、覚悟しとけ、お嬢様」

「最後に、その……………独特な髪型をしている貴方は誰かしら？」

そこでようやくこちらへと視線が向けられる。

独特な髪型というのはおそらく脳天のあたりで真上に逆立った後横へと急激に折れた一部分のことを言ってるのだろうか……これは別にセツトじゃない。

まあ流れるのこちらへ来るのは当たり前だが目の前で繰り広げられた衝撃的すぎる自己紹介に何とも口を開きづらい

「俺は日向、日向創だ。よろしくな。」

「あら、貴方は十六夜君とは違つてちゃんと挨拶出来るようね。こちらこそよろしく。」
十六夜は何がおかしいのかただひたすらに笑い続け、飛鳥は顔をそむける。耀は依然としてどこか違うところに意識が行っているようで先程から反応が薄い。

俺はといえばなぜこんなところで目が覚めたのかわからずにいた。

覚えてるのはジャバウオック島での一幕……最後の最後で姿を現した悲劇の元凶との正面对決のことまで。

より正確には日向と未来機関の三人の説得によつて前を向くことにしたみんなと一緒に脱出をするところまでだ。

それ以降のことは思い出そうとしても痛みが走るばかりで何もわからない。

結局日向は一人「みんなはどうしたのか？無事なのか？」という疑問を抱えて唸つていた。

そんな彼らを茂みに隠れて見ていた黒ウサギは、
(うわあ……………なんか問題児ばかりみたいですねえ
……………)

自慢の耳で密かに聞いていた自己紹介やその態度から早速彼らの第一印象を決めて
いた

「で、呼び出されたはいいけどなんで誰もいねえんだよ。この状況だと、招待状に書かれていた箱庭とかいうものの説明をする人間が現れるもんじゃねえのか？」

「そうね。なんの説明もないままでは動きようがないもの」

「…………。この状況に対して落ち着き過ぎているのもどうかと思うけど」

「春日部だつて十分に落ち着いてると思うぞ？」

呼び出した黒ウサギとしては、もつとこう騒然とするのだろうと思つていたため完璧に出るタイミングを失つていた。

そんな時、ふと十六夜が呟いた。

「——仕方がねえな。こうなつたそこにいる奴にでも話を聞くか？」

「あら、貴方も気づいていたの？」

「当然。かくれんぼなら負け無しだぜ？そっちの2人も気づいていたんだろ」

「風上に立たれたら嫌でもわかる。」

「え？……………ああ、そう言えば何か変なのがいたようないなかつたようない……………居たようない？」

「……………へえ？面白いなお前ら」

（なにか一人怪しい方がいらつしやいますけど!!?）

黒ウサギは驚いて、茂みを揺らしてしまった。これ以上の不満が出てくる前に、と茂みから出た。

「や、やだなあ皆様。そんな狼みたいに怖い顔で見られると黒ウサギは死んじやいますよ？ええ、ええ、古来より孤独と狼はウサギの天敵でございます。そんな黒ウサギの脆弱な心臓に免じてここは一つ穩便に御話を聞いていただけたら嬉しいでございますヨ？」

「断る」

「却下」

「お断りします」

「何か頼りにならなさそうという一点でウサミにそっくりだな。」

それ以外の……………主に身体のパフォーマンスに言えば比べるのがおこがましいほどに

整っているが。

もちろん目の前の黒ウサギと名乗った謎の女性の方がだ。

「あつは、取り付く島もない……って最後の方もすごく失礼でございますね！」

両手を上げ、降参のポーズをとりながら黒ウサギは、四人を値踏みしていた。

簡単に言うならこの状況で自分を見失うわけでもなく、あくまでもマイペースに返答

を返す四人の胆力をだ。

そんな風に思考にふけていたからか音もなく背後に回り込んだ影に黒ウサギは気

づくことができない。

「えい」

「フギヤー！」

耀に後ろからウサ耳を引つ張られていた。

「ちよ、ちよっとお待ちを！触るまでなら黙って受け入れますが、まさか初対面で遠慮無

用に黒ウサギの素敵耳を引き抜きに掛かるとは、どういう了見ですか!？」

「好奇心の為せる業」

「自由にも程があります！」

「へえ？このウサ耳って本物なのか？」

「……………じゃあ私も」

「それでは俺も」とならないのが日向の良いところだが………だからと言って助けを
求める黒ウサギに応えるほどの力を持たないのもまた日向であった。

結局日向の疑問は何一つ解かれることなく時間が無遠慮に過ぎていったのだった。

ドキドキワクワク！ウバイアイ異世界旅行

ドキドキワクワク！ウバイアイ異世界旅行

「あ、あり得ない。あり得ないですよ。まさか話を聞いてもらうために小一時間も消費してしまうとは。学級崩壊とはきつとこのような状況を言うに違いがないのです。しかも、参加しなかったお一人様は何をしておられるのですか！」

そう遠回しに日向のことを指した黒ウサギの間に日向は疲れた様子で返した。

「閃きアナグラムだよ。」

黒ウサギの切実な問いをそう投げやりに返したのには訳がある。

そもそも閃きアナグラムとは日向が事前情報に無かったものを推理する時に使う独自の思考法である。

散りばめたピースを並べ偏見を持たないようにして眺めることで通常では考えられないような事物に対しての答えを出す………そんな方法であるが故に思考中は軽いトランス状態に陥っている。

それほどまでの集中を必要とするこれを使つてもなお答えの見えてこない現状に少し困惑していたのだ。

なお日向が答えを求める時に使う思考法としてもう一つロジカルダイブというモノがあるのだが今回は時間が足りなかつたので割愛する。

「なんですかそれ?」

黒ウサギと同じように疑問の視線を投げるほかの三人に苦笑いしながらも日向は大了したことにゃないと話を終わらせた。

「誰も黒ウサギを助けて下さる優しい方はいないのですね……」

「いいからさっさと進めろ」

涙を浮かべている黒ウサギに十六夜は話の先を促す。日向を除いた三人も一応話を聞く気はある様だったので黒ウサギは気を取り直して咳払いをして、話し始めた。

「それではいいですか、皆様。定例文で言いますよ?ようこそ、“箱庭の世界”へ!我々は皆様にギフトを与えられた者達だけが参加できる『ギフトゲーム』への参加資格をプレゼントさせていたどうかと召喚いたしました!」

「ギフトゲーム?」

「そうです。既に気づいていらしゃるでしょうが皆様は、普通の人間ではありません!その特異な力は様々な修羅神仏から、悪魔から、精霊から、星から与えられた恩恵でご

ございます。『ギフトゲーム』はその“恩恵”を用いて競い合う為のゲーム。そしてこの箱庭の世界には強力な力を持つギフト保持者がオモシロオカシク生活できる為に造られたステージなのでございますよ！」

「……………普通の人間じゃない？」

聞くことを優先しようとした日向の呟きは誰に拾われる事も無く宙に消える

「まず初歩的な質問からしていい？ 貴女の言う“我々”とは貴女を含めた誰かなの？」

「YES！ 異世界に呼び出されたギフト保持者は箱庭で生活するにあたって、数多ある

“コミュニティ”に必ず属していただきます♪」

「嫌だね」

「属していただきます！ そして『ギフトゲーム』の勝者はゲームの“主催者《ホスト》”が提示した商品をゲットできるといふシンプルな構造になっております」

「……………“主催者”って誰？」

「様々ですね。暇を持て余した修羅神仏が人を試す為の試練を称して開催されるゲームもあれば、コミュニティの力を誇示する為に独自開催するグループもあります。」

「結構俗物ね。……………チップには何を？」

「それも様々ですね。金品、土地、利権、名誉、人間……………そしてギフトを賭けあう事も可能です。新たな才能を他人から奪えばより高度なギフトゲームに挑むこともできるで

しよう。ただし、ギフトを賭けた戦いに負ければ当然——ご自身の才能を失われるのであしからず」

「ゲームそのものはどうやったら始められるの?」

「コミュニティ同士のゲームを除けば、それぞれの期間内に登録していただけたらOK! 商店街でも商店が小規模のゲームを開催しているのでよかったら参加していつでもいい」

「……つまり『ギフトゲーム』はこの世界の法そのもの、と考えてもいいのかしら?」

飛鳥の指摘にここに来る前のことを軽く思い出す。

自分達がまだ強大な絶望に囚われ、成す術なく操られていた頃の生活はまさにギフトゲームに近かった。

あれをゲームというのはどうなのだろうとも思うが………あの史上最悪の黒幕にとってはあれもゲームだったのだろう。

「ふふん? 中々鋭いですね。しかしそれは八割正解の二割間違いです。『ギフトゲーム』の本質は一方の勝者だけが全てを手にするシステムです。」

「そう。中々野蠻ね」

「ごもつとも。しかし主催者は全て自己責任でゲームを開催しております。つまり奪われるのが嫌な腰抜けは初めてからゲームに参加しなければいいだけの話でございます」

そこで黒ウサギは一度流れを区切ってこう続けた

「話した所で分からないことも多いでしょうから、ここで黒ウサギと一つゲームをしませんか？」

「ゲームだって？」

十六夜と俺の問いかけに首肯で答え、虚空に向かつて指を鳴らすと何処からともなくカジノにありそうな木製緑の布が貼られたテーブルが落ちてきた。

今まで沈黙を続けていた十六夜は片眉を上げ、日向は止まってしまった説明に少し残念を感じて眉尻を下げる

「ルールは至ってシンプル。ジョーカーを含めた53枚のトランプの中から絵札を1枚選んでとっていただきます。カードに触れるのは一人一回までとさせていただけます♪商品は、そうですねえ……黒ウサギに何でも一つ命令できるといふことにしましょうか♪」

「ほう？……何でも、ねえ……………」

そう言つて十六夜は黒ウサギの豊かに育つた双丘を眺め

「勿論性的なこととはダメですよ!!??」

その視線に気がついた黒ウサギが自身のそれを庇うように腕を回す

「冗談だ。」

十六夜は笑いながらそう言うがもはや冷たくなった女性陣の目が十六夜の印象を表していた。

それにしてもなるほど……………、と日向は思う。

考えていたのは十六夜の行動やそれに対するみんなの視線ではなく黒ウサギのサービス精神……………そしてその態度である。

自分たち四人が落下して来た所にたまたま居合わせた案内役……………何てことはあるまい。

この世界に山賊なんてものが存在するかは知らないが、こんな山の中に突如現れた新参者なんていいカモだ。

聞く限りに弱肉強食が法のこの世界で初心者だからと見逃す道理はない。

(……………となると。やっぱり黒ウサギが俺たちの突然の異世界旅行に関わっているのは明らかだ。そしてその目的が俺たちを狩ることではなく、俺たち自身にあることも……………また明らかだ。)

「チップには、……………貴女の言うギフトを賭けないといけないのかしら?」

態度には匂わせないが少し竦んだ飛鳥が尋ねた。黒ウサギはそれに対して答えるが……………それが日向にとっての確信だった。

「最初のギフトゲームということでチップはなしとさせていただきます。強いて言うな

ら皆さんのプライドを掛けるといった所ですか」

安い挑発………と言えれば楽なのだろうが他の三人には効果的面だったようで皆異様に乗り気だ。

才能豊かな友人に恵まれる日向だからこそわかる事だが力や才能を持ち、それで生きている者達と言うのは異様にプライドが高かったりそれを神聖視している節がある。

十六夜はある意味表情が固定されているせいで読めないが他の二人はもはや冷静とは言えないだろう。

それではゲームを、と言いかけた黒ウサギに十六夜はカードのチェックを申し入れた。

まあ申し入れたというほどお行儀の良い言い方ではなかったが。

別に日向は負けて失うものなどないし見たところでどうこうできる才能がない。

イカサマなどにしたってアソコまで必死な彼らが見つけられないのなら自分に見つけられるはずもないと各々カードに何やらするのを遠巻きに見るだけにとどめた。

そんな日向を三人は訝しげに見ることこそしたが遂に話しかけるものはおらずゲームは開始された。

やたら自信ありげな十六夜は一番手を名乗り上げ、テーブルのカードをざっと見た。

「さっきは粋な挑発をありがとよ」

「き、気に入っていただけで何よりデス……」

十六夜の皮肉に内心ビビっているのか若干引き攣りながらも言葉を返す。

「これはその礼だ!!」

十六夜が突如テーブルを平手で叩きつけた。日向と黒ウサギは本当に突然のことに驚き、耀と飛鳥は表になった絵札のカードを取っていく。

なんていうか強かな女子たちだな……………。

「エエツ、な、何をやっているんですか!?!」

「二人一回、絵札のカードを選びとる。ルールには抵触していない筈だろ」

驚く黒ウサギを余所に十六夜はしれっと自身の正当性を主張する

すぐさま黒ウサギはウサ耳を立ててどこかと連絡を取った。

というかアレ受信だけじゃなく発信もできるのか……………。

と元の世界で散々弄られた自身の髪型に似たそれに少し愛着を覚えつつも不憫そうに黒ウサギを眺める。

「うう、箱庭の中枢から正当であるとの判断が下されました。し、しかし、十六夜さんと

日向さんがまだですよ!!」

「え、俺も?」

表になったカードはまだあるので自分もそれを取ればいいのではないかと言外に主張するがどうやら十六夜の行動に頭に血が登ったらしい黒ウサギには聞いてもらえなかった。

なお当の十六夜は

「俺を誰だと思ってるんだ? ほらよ」

などと言いながら手に持つカードを返し、ちゃっかりとクラブのキングを引いていた。それを見て黒ウサギは目を丸くする

「一体どうやって!」

「憶えた」

「は?」

「だから53枚のカードの並びを憶えたんだよ。」

何でも無さそうに言う十六夜に、黒ウサギは戦慄しているが、対して十六夜は、既にニヤニヤとした表情でこちらを見ていた。

「さあ、お前の番だぜ?」

内心今の衝撃にこちらのことを忘れててくれたらいいのと思いつつも日向は焦る

事無く適当なカードをひっくり返す。

盤面のカードから確率を計算するとか無駄な動作すらしなかったそれに期待の面持ちで日向の手元をのぞき込むが——— 現実はそう甘くはなかった。

「やっぱりダメだったか。」

予めわかっていた結果だが周りの成果とも言えるそれを見たあとではやはり悔しい。

日向がめくったのはハートの7……………つまり敗北だった。

周囲に走った衝撃はある意味十六夜よりも強かったと言ってもいい。

何故かと言われれば期待していたからとしか言い様がないがその期待のレベルが普通とは違ったのだ。

黒ウサギは人類の中でも最高レベルのギフト所持者が召喚されるという事前知識があつたが故のある一種の偏見があつたし、十六夜や飛鳥達にしたって未だに力の一端を見せずただ後ろに控えるだけの日向に素振りこそは見せないものの興味を持っていたのだ。

———それが手酷く裏切られた。

「まあ俺のプライドはズタズタにされたってことかな。」

そうやって手に持ったカードをヒラヒラとしながら苦笑いを浮かべる。

そんな日向の態度に明らかに納得のいつていないという表情の四人。

中でも取り分け黒ウサギは困惑の色が強く、十六夜は不信が表面に出されており、女子二人に至っては十六夜に向けるそれよりも視線が冷たい。

そんな目で見られても日向にとってはこれが全力で隠しているものはない。

確かに自分はかなり特殊な例だが数々の死線をくぐり抜けてきたしある意味自身の手で仲間達を処刑台に送り込んできたという自覚もある。

だがそれでも自分自身は何ら特別ではないことを知ってしまったているのだ。

だからこそあの最後まで希望を求めて死んでいった狛枝のように自分にも都合よく“幸運”が微笑むとは思っていない。

そんな沈黙を割るように目をさらに鋭くさせた十六夜が口を開く。

「お前……………なんか隠してんだろ？」

「別に隠してることなんてないさ。」

隠す必要もない。

ただあの生活を経験した日向には不確定な事や曖昧なことをそのまままで伝えたくないという潜在意識があった。

皆の様子を見るに自分とは別の世界から呼ばれていることは确实と言っている。

まず服に統一感がない、それにギフトと呼ばれる存在に心当たりがあるであろう彼らを希望ヶ峰が見逃す筈がない。

……………だがその希望ヶ峰学園に彼らの姿はなかった筈だ。

自分たちを救出に来た後輩は既に五人を覗いて死亡、同級生も同数を除けば意識不明の昏睡状態。

自身が入学する前の世代に彼らのような存在がいなかったことは知っていた。そう考えると彼らが同じ世界……………少なくとも同じ時代にいたとはとてもじゃないが思えなかった。

だから自分の事で特筆して語ることも想像がつかないし十六夜がそこまで自身を疑う理由に心当たりが無い。

「そこまで言いたくないなら一つ言いたくなるようなことを言つてやろうか？」

そう前置きした割には俺の返事を聞く間もなく話始められたそれは確かに俺にとっての毒だった。

いやむしろそれは——

「俺の記憶力はさつき見てくれたと思うんだが……………」

——悪意を持たないが故に致命的なまでの力を持った猛毒とも言えるものだった。「俺達がスカイダイビングの真つ最中の時、お前は居なかつた。居たのはもつと危ない感じの不審者然としたロン毛の男だつたはずだ。」

そんな十六夜の言葉に何やら女性陣は半信半疑の視線を向ける。

俺はと言えば——完全に思考を停止していた。

自分がここにいる以上完璧に消滅したのだと思つていた絶望がまだ“生きている”。それは正しく日向にとっての絶望だつた。

「着水した後、何処かに消えたあの男と変わるようにお前が現れたわけなんだが………これって普通か？」

日向にとって解決したはずのあの絶望の事件は………まだ完全に終わったわけではないらしかつた。



そうしてどれだけの時間がたつただろうか。

今度は十六夜の言葉に驚かされた俺が何とかつぶやけたのはその男の名前だけだつ

た。

カムクライズル——かつて希望ヶ峰学園で開発された人造の天才……………超高校級の希望と呼ばれた男。

そして俺であって俺でない……………普通じゃない男の姿が十六夜の言った特徴と一致するのである。

一向に回復が見られない場の空気を変えたのはこの中でも最年長と見られる黒ウサギだった。

両手を打ち合せて注目を集めるとお願いの話を全員に振ったのだ。

「まあ日向サンは失敗してしまわれたので今回はなし……………ということになります。他のお三方はお願いがありましたらこの黒ウサギが全力で持つて叶えさせてもらいますですよ!」

あくまでも性的な事以外と付け足したのは場を和ませるためなのか意外とマジな視線で十六夜を見ているあたり本気で警戒しているのか。

黒ウサギの意図を悟った十六夜もしょーがないと言わんばかりに頭を掻き自身に注目を集めた上でこれまた暴力的な自信に満ちた笑顔で持つて問いかけた。

「黒ウサギ。俺が聞きたいのはただ一つ。この世界は面白いか?」

そう聞かれて黒ウサギは、花開く様に笑みを浮かべ、こう答える。

「Yes。『ギフトゲーム』は人を超えた者たちだけが参加できる神魔の遊戯。箱庭の世界は外界より格段に面白い、と黒ウサギは保証いたします♪」

若干回復した空気の中自然とこの世界で生活していく流れになっていることに日向が気がつくのは話が終わり黒ウサギのコミュニケーションへ移動が始まってからのことだった。

異世界の果ては男のロマン

異世界の果ては男のロマン

「おい、日向。」

十六夜がその声をかけてきたのは俺達が黒ウサギの先導でこれから所属する予定のコミュニティに向かう途中のことだった。

先程までとは違い周りをはばかりる様な声量にこちらも合わせながら問い返す

「なんだよ？ 言っておくけどさっきの話なら」

「それも気になるがそうじゃない。」

俺の予想を裏切り要件は全くの別物だと断言する十六夜。

正直カムクラのことを聞いたただされるのは困るので助かるといえば助かるのだが
……………なんでだろうな？ 欠片も安心出来ない。

「じゃあなんなんだよ。」

少し強めに聞き返した俺の肩を掴んで十六夜は答えた

「世界の果てに行こうぜ！」

「馬鹿なのかお前は。」

落下中に見えたが世界の果てとやらまでは随分な距離がある。

大体土地勘のない俺達が進んで黒ウサギから離れてどうするんだ。

「俺は馬鹿でもけっこーだぜ？ いいか、〃ロマン〃を追い求める男つてのは総じて馬鹿なもんなんだよ。」

「——ロ……マン……………？」

何故かはわからないが十六夜が不意に放った言葉が俺の何かを刺激する。

「ん、おお？ そうだよ〃ロマン〃だ！ いいじゃねえか世界の果て。男ならこれを逃す手は無え！ 新しい発見が！ 未知が！ 新鮮が！ 新世界がそこには待ってんだ日向！！」

十六夜の言葉がココロにガツンツと響きまるで眠っていた野生を呼び起こすかのよう
うに体が震え出す。

(男の……………ロマン？ ロマン……………ロマンロマンロマンロマンロマンロマンロマンロマンロマンロマンロマンロマンロマンロマンロマンロマンロマン——〃マロン〃ツツ!!!)

その一部始終を見ていた女子二人は蔑みと呆れをより濃くして黒ウサギへとそのままついて行つたのだった。



「お疲れ様黒ウサギ。後ろの二人の女性が新しい仲間？」

「はいな♪この二人が——あれ、もう二人ほどいらつしやいませんか？あの目つきが鋭く如何にも“問題児です”といった方と色々な意味で悪目立ちしている方が………」

コミュニティへの案内を終え新しい仲間をリーダーを務める十一歳の少年、ジンⅡラッセルに紹介しようと振り返つて初めて異変に気がついた黒ウサギの質問に飛鳥が答えた。

「十六夜君と日向君なら二人して世界の果てを見に行つたわよ。」

だがその突拍子もない言葉に黒ウサギとジンの思考が一時停止する。

「な、なんで止めてくれなかつたんですか！」

「止めてくれるなよ、と言われたから」

「なんで黒ウサギに教えてくれなかつたんですか!？」

「黒ウサギには言うなよ、と言われたから」

妙に息のあった返答に黒ウサギは改めてその問題児っぷりに肩を落とす。

「大変です！箱庭の果には強力な幻獣たちの住処が!!」

「あら？じゃああの二人はもうゲームオーバーなのかしら。」

「始まる前からゲームオーバー……新しい。」

「そんな呑気なこと言わないでください！ああ、もう！ジン坊ちゃん、このお二方を宜しくお願いします！黒ウサギはあの問題児様方を連れ戻して参りますので!!」

そう言つて体に力を溜めるようにしやがみこんだ黒ウサギの青みがかつた髪がその怒りを表すかのように赤く染まっっていく。

「この黒ウサギを怒らせたことを後悔させて差し上げます！」

そう言つて全身の力を解き放ち一息の間に視界から消えて行つた黒ウサギの姿に残された三人は感心したように話を続けてドーム状の街の中へと消えていった。



「ほんとうにあのお二方はどこまで！」

黒ウサギはその尋常ならぬ脚力を持つて駆け続けるが一向に二人の痕跡が見えて来ないので既に通り返したことも検討に入れてもう少し範囲を広げるかどうか考えてい

た。

それでも思い止まったのは間もなく二人の目指した世界の果てと言われる方向から聞こえてくる何かの炸裂音と上空高くまで立ち上る水柱を見つけたからだ。

「ま、まさか!」

最悪の光景が頭を過ぎり一度は止めたその足をさらに前へと進ませる。

一息で距離を埋めたところで黒ウサギはようやくやく目当ての人物を見つけることができた。

岩場に湖に向かって座り込む日向とそのもう少し前方で同じように湖に向かっている十六夜の姿。

どうやら最悪の状況はまぬがれた様だと緊張の息を吐いて体を弛緩させる。

「十六夜さん、日向さん! よかった、ご無事ですっね!!」

「お、遅かったな黒ウサギ。」

「一体どこまで来てるんですか!!?」

「世界の果てまで」

「来てるんですよ? ってな。」

これまた残してきた二人のように仲良くハモらせながら帰ってきた言葉に少々ならぬ苛立ちが立ち込めるが無事であったことが何よりも嬉しくそれは表に出ることなく

黒ウサギ自身にも一瞬で流された。

(ようやく追いつけましたね。お二人にも怪我はないようですし……………?)

“ようやく追いつけた”?箱庭の貴族とも言われる私が追い付けなかった?

落ち着いたところで感じた疑問を口にしたところを十六夜に先回りして止められた。

「わりの黒ウサギ。説教は後にしてくんねーか?」

「……………はい?」

「今は色々立て込んでるんだよ。」

十六夜の言葉を引き継いで答えたのは先程から全くと言っていいほど微動だにしない日向だった。

「あのお……………それはどういう」

『まだまだ!まだ試練は終わっていないぞ小僧共オ!!!』

黒ウサギの言葉を遮るように答えを出したのは日向や十六夜ではなく湖を割って突如現れた巨大な白蛇だった。

「水神!?どうやったらここまで怒らせられるんですか!?!」

黒ウサギの言う通り湖から姿を現した大蛇はその声色からも憤怒している事がわかる。

その証拠に大蛇の力なのか左右で巻き上げられた水が強力な渦を作って発射を待っていた。

「何やらいきなりえつらそーに”試してやる”だなんてほざくもんだからよ、俺達を試せるのかどうか……………逆に試してやったんだよ。」

「結果は見ての通りだよ。……………つってもやったのは十六夜で俺は何もしてないけどな。」

「おい日向てめえ裏切りやがったな」

「事実じゃないか。」

それを前にしても変わらずに会話問題児二人……………そう、二人である。

先程のギフトゲームを身体能力のみで、あるいはそれを強化するギフトのみでクリアした十六夜だけではなく、為す術なく、強者としての矜持すら持っていない問題児達の中でもダントツで謎の強い日向までもがこの濃密な殺気が立ち込める中でそれがなんでもないかのように振る舞う。

例えばの話……………何の力も持たない、ランプの絵札すら当てることのできなかったの男子高校生が突然自身に怒りを向ける圧倒的上位存在の前に放り出されたとしてその少年はどうするか？

まあ回答は様々だろうが少なくともそれぞれの殆どが負の方面の考えだろう。

(一体どういふことなんでしよう?)

箱庭で強者として生まれ強者として二百年を過ごしてきた黒ウサギを持ってしてもそれは異常な光景だった。

『つけあがるなよ人間！我がこの程度で倒れるかあ!!』

蛇神の怒りに比例して勢いを増す渦が周りの木々まで巻き込み始める。

「十六夜さん、下がってください!!」

「おいおい下がるのはお前の方だけ黒ウサギ。これはあいつが売って俺らが買った喧嘩だ。割り込もうってんならお前から潰す。」

「さり気なく俺を巻き込むなよ、俺はそんな押し売り商法に引つ掛かってないぞ。」

「そんなことを言っている場合ですか!」

『心意気は認めてやろう。故にこの一撃を凌げば貴様らを勝者としてやる。』

「ちよつと待ってくれよ、俺関係ないだろ」

「腹を括れよ日向。そんでその蛇にひとつ言つといてやる……バカ言え決闘するのは勝者が決まって終わるんじゃない、敗者を決めて初めて終わるんだ!」

『減らず口をお!!』

蛇神がその長い身をくねらせ触れればそれだけで吹き飛びそうな渦を飛ばして来る。

「十六夜さん!」

黒ウサギの叫びも遠く、無慈悲にも竜巻は地面を削りながら動き始めた。水でできたその竜巻は先程よりも勢いを増し既に蛇神の背丈すらも超えてこちらへと迫る。

まさに絶望的——そう表すしか無いほどに目の前の光景は想像を絶していた。

「——ハッ！しゃらくせえ!!」

それに対して十六夜が取った行動は………ただ腕をふり抜くだけという巫山戯てると思えないものだった。

だが何よりもふざけていたのはそんなただ振られただけの腕にあれ程の威力の水流が吹き飛ばされ、消滅した事だった。

「嘘っ!？」

『馬鹿な!』

「おいおいウソだろ。式大とか終里とかそういうレベルなんじゃないか?」

驚く黒ウサギや蛇神をほっておいて、いやあの二人でも無理か?でも式大ならあるいはなんてことを考える日向へと攻撃の余波が迫る。

「おい、日向!!」

「——はっ。」

十六夜の声にようやく目を向けた日向に迫る炸裂した水弾。砕かれてもお鉄すら粉碎しかねないそれに日向は反応する。

手に取るのは辺に飛び散る一本の木の枝。

丈夫そうではあるがどう考えても眼前の脅威を退けるには役不足なそれを無意識に拾い——そのまま振るう。

十六夜のそれと同じように適当に振るったように見えるがその実超高校級の剣道家とも言われる技術で振るわれたそれはいとも容易く水弾を切り裂き——そのまま湖を両断した

「辺古山……………お前本当に凄いぞこれ。」

『又ウツ!?!』

足場を失い姿勢を崩した蛇神へと跳躍した十六夜が迫る

「まあ……………中々だったぜお前。」

その割には既に興味を失ったと言わんばかりの声色で告げた十六夜は先程と同じように適当に撃った蹴りで蛇神を沈めた。

「おい十六夜!今のわざとこつちに飛ばしただろ!!」

「さあてね、ちよつとわかんねえや。」

「お前……!」

あまりにも非現実的な光景に黒ウサギは固まっていた。

(神格を持った者に……:……:唯の人間が勝った?それもいと簡単に……:……:)

これなら自分たちの悲願が叶うかもしれない!そんなことを目の前で騒ぐ二人を目にして思う。

「ていうかやつぱり出来るんじゃないかよ日向。まあ俺の速度に耐えられている時点で分かってたけどな。」

「あ、いや、今のは違っ——」

「なあに謙遜すんなよ。いや本当におもしれえなこの世界は。」

「話を聞け!!」

ロンパロンパロンパ!それは違うぞ黒ウサギ!

ロンパロンパロンパ!それは違うぞ黒ウサギ!

「おいおいいくら水も滴るいい男って言ったって限度ってもんがあるぞ。クリーニング代位は出るんだろうな?」

「アハハ―善処させて頂きます……………つて今のは黒ウサギ関係無いですよ!?!自業自得です!」

「俺は不可抗力——」

「ここまで来た時点で同罪です!」

「裁判ちよー、執行猶予を求めまーす。」

「そんなものありません!即効ギルティです!!」

「なんでかはわからないけど何かこう……………黒ウサギって左右田と同じ感じがするんだよな。」

弄りたくなるっていうか。まあ今のは違うけど……………。

「なんにしてもお二人が無事で良かったです。とりあえず私は蛇神様からギフトをもらってきますね。試練……………とは行かなかったみたいですが勝者は十六夜さんですし蛇神様も文句はないでしょう。」

「ああ？」

「神仏とギフトゲームを競い合う時は基本的に三つの中から選ぶんですよ。最もポピュラーなのが『力』と『知恵』と『勇気』ですね。力比べのゲームの際は相応の相手が用意されるものなんです……………十六夜さんはご本人を倒しましたから。きつと凄いのを戴けますよー。これで黒ウサギたちのコミュニティも今より力をつけることが出来ます♪」

そう小躍りしながら黒ウサギがプカアと浮かぶ蛇へと近寄る。

何だかはワカラナイが蛇がウサギを丸呑みにするという妙に生々しい映像が脳裏に浮かぶ。

なんにせよご機嫌な黒ウサギだが、そんな黒ウサギとは対象に蛇神を倒した当の本人、十六夜は機嫌が悪そうだ。

その理由は良く分かる。

分かるからこそ……………俺は見逃すわけには行かない。

「なあ十六夜。」

未だに治まらぬ高揚に何処か自分の体が自分のものじゃないかの様な感覚を受けるがそんな奇妙を差し置いて明確な疑問を口にする。

「俺たちはどうするべきなんだろうな?」

強者ゆえの選択肢を持つゆえの傲慢な発言。

そんな言葉かスラリと出てくる時点で………否、友人の力を使っている時点で間違はなく自身の身に何かが起きている。

本来の日向に水弾を切り裂くような才能はない。ましてやその後ろにある湖をあまつさえ木の棒程度で切り裂くなんてことは逆立ちしたって不可能だ。

今さらになって考えないようにしていた事実が日向を襲う。

それを含めての“解”を………十六夜に求めていた。

無論理解しているとは思っていない。

「黙ってるわけにも行かねえだろ。せつかく見つけた楽しみをそんなつまんねえ事で台無しにされたくないな」

そう言う十六夜は心の底から白けたようで、いつも不敵に浮かべていた笑もなりを潜めている。

「結局は黒ウサギの対応次第ってこった。」

「それでもつまらなかつたら去るんだろ？」

「当然。逆に日向、お前は どうするんだよ？」

俺はその答えを聞いたかつただけだな。

俺は十六夜のように考えられない。

正直帰りたいし何故か使えると確信しているみんなの才能もなぜ使えたのかわからない俺が役に立つとは思えない。

俺の目標は纏めれば仲間の復活と世界の再興……………それに尽きる。

自分の事もできないのに他人を……………ましてや異世界のことを気遣つてる余裕は正直ない。

(それでもそう簡単に切り捨てられるとは思えないんだよな。)

もう自分でも認めてしまっているのだ。

別にとともに戦つたわけでも無く、癖の強過ぎるお世辞にもいい奴らとは言い難い十六夜達を……………

「仲間……………だからな。」

仲間だと認めてしまった。

快樂主義で言動の一举一動全てが人の神経を逆なでするがそれでも常に物事に真剣に向き合っている十六夜

言葉がキツくプライドの高い問題児の中でもダントツの高潔さを持つがそれ故にそれ以上の正義感を持ち悪を許せない真っ直ぐな飛鳥

口数が少なく、またコミュニケーションの取り方も少し独特ながら行動の節々に俺達に対する気遣いが見え隠れする優しい心を持つ耀

打算を含んでこそいるとはいえ俺達のような問題児を纏め、時には怒り、そして思いつきり心配してくれる黒ウサギ。

まだ俺はこつちに来てそんなに時間もたつてないし会ったのだったの四人だけ……………だからこそ、

「見捨てたくないんだよ。仲間を疑う事はしても——仲間を裏切ることも、仲間を憎む事も、仲間の犠牲に泣く事もしたくない。」

だからこそ——

「もしもなんて無い。確かに今の黒ウサギは信用ならないけど……………俺は信用したい。信頼できるようにになりたいんだ。」

「現実理想論じゃ語れないぜ?」

……………ロマンチストがよく言うよ。

「だからこそ——俺は疑うよ。信用するためにも。仲間だからこそ——俺は疑う

ことをやめない。」

俺は何やら笑顔で植物の苗らしきモノを受け取る黒ウサギを見てそう言い切る。

十六夜はそんな俺に呆れたのか………それともまた面白いとでも思っているのか。再び不敵な笑みを顔に戻して口癖のようにこう締めた

「やっぱ面白いな………。」

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「見てください十六夜さん、日向さん！こんなに立派な水樹の苗を頂きましたよ！これで水に困ることもなくなります!!」

悪い事なんて何も起らないと確信しているかのような笑顔で黒ウサギはそう言った。

「そうかい。んじゃ、いいことついでに一つ教えてもらってもいいか?」

「はい? 何でございましょう♪この黒ウサギに答えられることでしたら何でも——」

「お前、何か決定的なことを俺たちに隠してるよな?」

そんな笑顔が凍り付く。

何度も何度も見てきた表情………人が………絶望に飲み込まれる時に決まっています

るあの顔だ。

「な、何のことでしょう?箱庭のことならばお答えすると約束しましたしゲームの話もしました。黒ウサギが皆様に隠す事なんて何も——」

『それは違うぞ黒ウサギ。』

十六夜と黒ウサギの問答に割り込んだ俺の声はその音量に合わず静かな森の中にもこまでも響きわたっていった。

いいなれたこのセリフ……………仲間を助けることもあれば死地に送り出すこともあったこの言葉は……………この世界ではどちらへ機能するのか。

「隠す事ならあるはずだ。」

セリフを奪われたにも関わらず口を挟まぬ十六夜は既に静観モードの様で、火付け役の癖に一歩下がって黒ウサギをじっと見つめている。

そこに軽薄な色はもはや無く、何処までも真剣な面持ちで話の進展を待っていた。

「だ、だから何が「コミュニティのことだよ。」——え?」

俺の言葉が紡がれ、打ち出される度に黒ウサギの表情はあの醜悪な裁判所に立った仲間達のそれをなぞる様に変化する。

「黒ウサギ……………なんでも答えてくれるというなら教えてくれないか?」

“ なんてお前は俺達を呼んだんだ? ”

「そ、それは……………みな様をぜひこの世界に招待したく——」

「おい、黒ウサギ。正直に言えよ。そうじゃなけりや俺はお前のコミュニティには入らない。」

「そんなっ!!?ちよつと待つてくださいい!」

「黒ウサギ……………正直に言ってくれ。お前は何を隠してるんだ?」

俺たちの追求に口を開いては閉じるを繰り返す黒ウサギ。

そこには先程までの元気な姿は見え……………見えない何かに怯えるような……………元来のウサギが肉食獣や狩人に恐怖するときの姿がそこにはあった。

だがそれではダメだ。

十六夜は躊躇い無く切り捨てられる。

それはある意味当然だし何も悪くは無い……………でも俺の個人的な感情でそれは許せない。

十六夜が他に行くかどうかは……………十六夜本人がちゃんと現状から判断すべきだ。

間違えてもこんな別れ方は許せない。

「もしかしたらだけど……………黒ウサギのコミュニティは限りなく弱小な、もしくは訳あつて衰退したコミュニティ……………だったりするんじゃないか?」

そんな俺の言葉に黒ウサギは目を見開く。

「これが最後のチャンスだ黒ウサギ。俺も日向も大体の推測はできている。お前が俺たちに隠していることを——しっかり話せ。」

黒ウサギは俺達に箱庭のことを説明するときもコミュニティの部分はやけに必死だった。

十六夜のおふざけに対する返答もやけに余裕がなかったし水神からギフトをもらった時の発言も余裕のある者のする内容ではなかった。

はじめからヒントは有ったんだ。

「……………話せば協力していただけますか?」

黒ウサギの観念したかのような……………それでもまた別の希望を捨てきれないと言った姿勢が俺の心を揺さぶる。

「おう、面白ければな。」

刺激や自身の好みで行動できる十六夜とは違い俺は即断ができない。

「俺は……………」

ためらう理由ならそれこそいくらでもある。

自身が元の世界でやらなければならぬ事があるというのもそうだし自身の体の異変もそうだった。

帰らなければ元の世界の仲間を捨てることになり帰れば黒ウサギ達を捨てることにもなる。

帰れる帰れないは別にしてそういう選択をした時点で俺はどちらかを捨てた事になる。

——それだけはしたくなかった。

してはいけなかった……………。

「日向、お前は何がしたい？」

「は？いきなりなんだよ。」

いつまでも俺が返事を返さないことに痺れを切らしたのか十六夜がそう聞いてくる。

「お前が何を悩んでんのか俺にはわかんねえけどよ。お前って結構ロマンチストだろ？自分で言うのもなんだが俺は快樂主義者だ。だから世界の果てが見たいってだけでここまで来た。お前もそうだろ？ロマンがあるからここまで来た。」

——あ……………そうだ。

「この選択とさっきの決断は何が違う？何が縛るってんだこんな何でもアリの世界で。」

「十六夜さん……………」

「好きに選べよそんなくらい。最善の決断が出来ないなら、自分にとっての最高を選べ。」

……………それもそうだ。

考えるのをやめれば死ぬ……………そんな世界だった。

でもだからって考えるだけで生き残れる世界じゃなかった。

(仲間を信じる……………か。さんざん疑ってようやく信じられた仲間たちを疑うなんて俺もどうかしてたな。)

「俺は黒ウサギを疑ってる。だから信じられたなら……………面白かったなら手伝ってやるよ黒ウサギ!」

こんな世界で俺が役に立てるのかはわからない……………それでもできることはある。立ち止まる理由にはならない。

あの絶望的な世界でも前を向けたんだ……………今度だつて

(それができない筈がない!)

「……………そうですね、それでは黒ウサギも腹を括ってせいぜい面白可笑しくコミュニケーションの惨状を語らせていただきます。」

黒ウサギも声色こそ下がったままだが顔には若干の余裕が戻ったようだ。

ていうかやつぱり惨状なんだな。あれだけ言っておいて外したら赤っ恥なので安心……………というのには不謹慎だが少しホッとしたのも事実だ。

「まず私達のコミュニケーションには名乗るべき『名』がありません。よって呼ばれる時は名前の無いその他大勢……………『ノーネーム』という蔑称で称されます」

「名前が無い……つてそれコミュニティっていうのかよ。」

「だからこそそのその他大勢扱いなんだろ。それで？」

「次に私達にコミュニティの誇りである旗印もありません。この旗印というのはコミュニティのトリトリを示す大事な役目も担っています」

「……………それで終わりか？」

まあ確かに国を名乗るのに国名も国旗も無かったら話にならない。

なんでそうなったのかは……………ギフトゲームなんだろうけど……………どこのどいつが国名と国旗を賭けに出すんだ。そんなの侵略されたのと同じだろ。

だが黒ウサギの“惨状”語りはまだ終わらない。

「いえ、“名”と“旗印”に続いてトドメに、中核を成す仲間達は一人も残っておりません。もつとぶつちやけてしまえば、ゲームに参加出来るだけのギフトを持っているのは現コミュニティメンバーの一二二人中、黒ウサギとジン坊っちゃんだけで、後は十歳以下の子供ばかりなのですヨ！」

———国民もいなかった!?

「もう崖っぷちだな！」

「それでコミュニティを名乗れるのが俺には一番の不思議だ。」

「ホントですねー♪コミュニティとは名ばかりのごっこ遊びが適してるかもかもしれません

♪

「名ばかりというかその名前がないんだけどな!」

俺達の素直な感想にガツクリと肩を落とす黒ウサギ。

なるほどな………確かに手を借りたいというのもわかる。

聞けば聞くほどに黒ウサギのコミュニティ、『ノーネーム』とやらは組織とは言えぬ有様で絶望的だ。

だが気になるのはなぜそこまで絶望的にならざるを得なかったのか。

仲間の件は置いておいても旗印と名前は賭けなければいい。

やむを得ずかけなければならぬ状態になるほど崖っぷちのコミュニティならば今度はこだわる理由がない。

なにせ一度解散させてもう一度作り直す、もしくは他所に引き取ってもらえばいいのだから。

他のメンバーがどうあれ仮にも神といわれる存在を圧倒した十六夜に追いつく力を持つ黒ウサギならそれはそう難しくはない筈なのだ。

「で、どうしてそうなった? 黒ウサギのコミュニティは孤児院か何かか?」

俺と同じ結論に至ったらしい十六夜の言葉が黒ウサギに先を促す。

だがその質問に黒ウサギは一気に顔を暗くする。

先程のような自嘲をすることすらできないほどに思いつめた……………真の絶望の顔で首を横に振る。

「いいえ……………彼らの親は奪われたのですよ。名前も旗印も仲間も何もかもが奪われたのです。……………箱庭を襲う史上最悪の天災……………《魔王》によつて」

……………魔王というとあれか？ゲームなんかのラスボス的な……………さすが異世界。でもある意味前の世界でも魔王的なやつはいたか。

まあ倒したのは俺らじゃないしむしろ復活させかけたのが俺らなだけだな。

「ま……………魔王!？」

絶句する俺とは違いむしろ子供のように目を輝かせて身を乗り出す十六夜。

本当にそういうところはすごいと思う

「魔王！なんだよそれ超カッコイイじゃねえか！なんだよ、箱庭にはそんな素敵ネーミングで呼ばれてるやつらがいるのか!？」

「え、ええまあ。けど十六夜さんが思い描いている魔王とは差異があるかと……………」

「そうなのか？けど魔王なんて名乗るんだから強大で凶悪で、全力で叩き潰しても誰からも咎められることのないような素敵に不敵にゲスい奴なんだろ?」

「十六夜……………流石にそんな横暴な奴らがいたら互いに衝突しあつて勝手に潰れてる

んじやないか?」

「ま、まあ……倒したら多方面から感謝される可能性はございます。倒せば条件次第で隷属させることも可能ですし……日向さんの言うこともごもつともなのですがこの場合は少し事情が違います。」

「へえ?」

事情が違う?………というか隷属ってことは

「前例でもあるのか?」

「ええと、まあ。その通りでございます。……魔王は『主催者権限』という箱庭における特権階級を持つ修羅神仏で、彼らにギフトゲームを挑まれたが最後、誰も断ることが出来ません。私達は『主催者権限』を持つ魔王のゲームに強制参加させられ、コミュニティは……コミュニティとして活動していく為に必要な全てを奪われてしまいました。それまでは私達のコミュニティにも仲間になった元・魔王は居たのですが………」

「奪われた………つてか?」

「そのとおりでございます。」

悔しそうに、そしてそれよりも悲しそうに悲痛な姿で黒ウサギは話し続けた。

おかげで状況はよく理解できた。

黒ウサギのコミュニティは降りることが許されない賭け金エンドレスレイズのノーマリミテッドポーカーを挑まれ……………負け続けた……………そう言う事なんだろう。

笑えないな。

「でもそれならコミュニティに“新しい名前”と“新しい旗印”を付ければいいんじゃないのか？コミュニティへの所属が前提の世界でそんな理不尽存在が居るってことはその後のリカバリーだつてあるはずだろ？」

「そ、それは……………」

言いよどむ黒ウサギ。

その様子だと出来ないと言うよりかは……………

「またなにか事情があるってことか。そしてそれこそが黒ウサギが俺たちを呼んだ理由な訳だな？」

十六夜の言葉に無言で黒ウサギが頷く。

「コミュニティの“名”と“旗印”を新しく申請することは可能です。……………でもそれは実質的にコミュニティの解散を意味します。」

そこまで言われれば俺達にも話が読めてくる。

結局のところ黒ウサギは嫌なのだ。

魔王に仲間を奪われて、悔しくて、それで俺たちを呼ぶほどに必死になった彼女はコ

コミュニティを………失いたくないらしい。

「それではダメなんです。私達は………何よりも、仲間が帰ってくる場所を守りたいのですから!」

それが願ひ。

それが黒ウサギたちの希望。

「茨の道だと言うのは分かっています。けど私達は仲間が帰る場所を守りつつ、コミュニティを再建し………何時の日か、コミュニティの名と旗印を取り戻して掲げたいのです。そのためには十六夜さん達のような強大な力を持つプレイヤーを頼るほかありません!どうかその強大な力、我々のコミュニティに貸していただけませんか………!」

こんな時アイツならどうしたんだろう。

誰よりも希望に憧れて………焦がれて死んでしまったあの幸運を持つ男はどう思うんだろう?

希望は尊い。

ギフトを希望だとは思わないが黒ウサギが掲げる物も十六夜達も間違いなく希望だ
と思う。

だからこそ俺の答えは一つしかない。

「…………ふうん。魔王から誇りと仲間を、ねえ？」

そんな俺の決意とは対象に淡泊な返事を返す十六夜。

あれ？ そう言うのは十六夜の好みだと思っただが……………俺の勘違いか？

王道熱血モノとか好きそうなんだけどなあ。

そんな風に内心どうやって黒ウサギをフオローするか考え始める俺に予想外の言葉が飛び込んでくる

「いいな、それ。」

……………。

「……………はっ。」

「HA？ じゃねえよ。協力するって言ったんだ。もつと喜べよ黒ウサギ」

「え……………あ、あれれ？ 今の流れってそんな流れでございましたか？」

「俺にもそう聞こえたぞ!? 一瞬ダメかと思ったんだよ！」

「何だよその反応。それとも俺がいらねえのか?失礼なこと言うと本気で余所行くぞ」
「だ、駄目です駄目です!絶対駄目です!十六夜さんは私達に絶対必要です!」
「素直でよろしい。日向も来んだろ?てか来いよ。お前もお前でなかなかおもしろそう
だ。」

「お前こそ魔王みたいだよ。」

人をおもちやか何かのように言う十六夜に皮肉を一つ返し黒ウサギへと向き直る。

「俺も十六夜と同じだ。俺は黒ウサギのコミュニティ復興に協力したい。本当なら元の世界に帰りたいんだけど……でも思ったんだよ。絶望から逃げてばかりで世界なんて救える筈がない。なあに、世界の復興に挑もうとしてたんだ。コミュニティの復興ぐらい……やって見せるよ。」

「俺はそんな高尚な理由じゃねえぞ一緒にすんな。」

「そのセリフは普通俺のセリフじゃないか!」

言ったのは確かに俺だけでも!

「お二方………本当にありがとうございます!」

そんな俺たち二人の様子に黒ウサギが目尻に涙を浮かべながら礼を言ってきた。

その姿に不覚にもドキッとしたのは秘密だ。

「んー、なんかエロいな。」

……俺も俺だが口に出したら感動も台無しだぞ十六夜。

結局、俺と十六夜の世界の果てまでのちよつとした冒険は水神退治？と黒ウサギのコミュニケーションへの正式加入をもつて終わりを告げた。

千の目で見える元の世界

千の目で見える元の世界

「なんでそんなことになっているのですかあああ!!?」

帰りも行きと同様十六夜に物理的に振り回されながら石造りの街へとやって来た。

入ってすぐドーム状の天井の話の間を聞かされながら進み近場の喫茶店の前で飛鳥や耀、そして俺たちのコミュニティのリーダーらしい十一歳の少年ジン||ラツセルと合流したのだが………そこで黒ウサギが吠えた。

なんでも俺たちが世界の果てを観光している間にここいらを牛耳るコミュニティのリーダー、虎の獣人ガルド||ガスパーとの勝負を決めてしまったらしい。

しかもこちらが得られるのは自己満足だけという確かに怒鳴りたくもなるような内容だ。

それでも俺は飛鳥達と同じように行動したと思うが。

「聞いているんですか三人とも！」

「ムシヤクシヤしてやった、今は反省している」

「黙らっしやい！」

まあ黒ウサギの気持ちもわかる。だが……………人の命つてのは何かと比べるものじゃない。

「まあいいじゃねえか黒ウサギ。見境無くケンカを売ったわけじゃねえんだ。」

確かにここでゲームを行わなくとも地道な証拠集めから入れればそのうちガルド率いるコミュニティは解散せざるを得なくなるだろう。ガルドだつて罪に問われる。

でもそれじゃあ遅い。

その間にまた新しい犠牲者が出たら？

口封じのために俺たちのコミュニティから人がさらわれたりしたら？

白黒つけられるのなら……………それはどんなに嫌なことでも付けるべきだと俺は思う。

「ハア、仕方ないですがまあいいでしょう。腹立たしいのは黒ウサギも一緒ですしフォレスガロ程度ならば十六夜さんと日向さんがいれば「何言つてんだ、俺と日向は参加し

ないぞ。」——えん？」

「え？」

「当たり前よ。あなたなんか参加させないわ。もちろん——日向君もね。」

「ちよ、ちよつと待てよ。確かに力になれるかもわからない俺はともかくとしてなんで十六夜は——」

「これはこいつらが買ったケンカだ。お前の主義主張が違うのはさっきのでわかったがそれでも今回は当の本人たちがいらなくなって言ってるんだ。ここは引いとけ。」

「あら？ わかつてるじゃない。私達は十六夜君の助けも必要としていないしましてや——負けることを良しとするような人の助けなんか死んでもごめんよ。」

「——ッ!!？」

これは……………『亀裂』だ。

俺は俺自身のことかわかっていない。

先程の辺古山の力だって十六夜の言葉を聞いてから昂っていた気分のせいでよく覚えていなかった。

だから俺はやっぱり飛鳥達のように自信を持たないし、逆に矜持やプライドを持つ飛鳥達は俺のような負け犬を認められない。

十六夜や黒ウサギはさっきの俺を見ているからか評価が高いみたいだけど……………

「ああ、そうだな……………俺は今回手を出さない。」

「日向さんまで!？」

「黒ウサギもあんまりしつこいとその耳引っこ抜くぞ」

「ヒイツー!」

十六夜の冗談めかしたガチの脅しに黒ウサギも涙目になって耳を抑えながら折れる「わかりました。もう好きにしてください。」

……………ごめんな。でも今は相手の主張を曲げるべきじゃない。相手が不要だと言っているんだ……………無理して亀裂を広げることも無いだろうしな。

「それで、この後はどうするんだ黒ウサギ。案内はもう終了か？」

「あ、はい。まだもう一件……………大型コミュニティ《サウザンドアイズ》の支店に行くかなと。」

「何しに行くんだ？」

「皆様のギフトを鑑定してもらいに行くのですよ。皆様も自身の力の出処が気になるのではないですか？」

そう気分良さげに聞いてくる黒ウサギだが対する俺たちの反応は芳しくない。興味が無さそうなほか三人とは違い俺は大いに興味を持っている。

——だがそれだけだ。

気になる理由は“自分の物じゃないはずの力がなぜ使えるか”であって自分の力ではない……………そういうのは……………もう諦めた。

だからあまり期待していないだけ。

「本当は皆さんを歓迎するために素敵なお店を予約して色々とセッティングしてあったのですが……………不慮の事故続きで、お流れとなつてしまいました。また後日、きちんと歓迎を」

「いいわよ、無理しなくて。私達のコミュニティって崖っぷちなんでしょう？」

あれ？まだ黒ウサギはその話をしていないし共謀してたと思われるジンが話すとは思えないんだけど……………なんで知ってるんだ？

「久遠はなんで知ってるんだよそんなこと？」

「あの悪人が色々と話してたからよ……。私は組織の水準なんて気にしないから文句なんてないわ。それで、春日部さんは何かあるかしら？」

「私も怒ってない。そもそもコミュニティがどうの、とかどうでもいい……。あ、でも

——」
「どうぞ、気兼ねなく言ってください。僕らに出来る事なら最低限の用意をさせてもらいますから」

ジンが、コミュニティの状況をわざと黙っていたことへの詫びのつもりか、身を乗り出して尋ねる。

「そ、そんな大それた物じゃないよ。ただ私は……。毎日三食お風呂付きの寢床があればいいな、と思ったただだから」

——その三食風呂付きすら怪しいから水を買に行ってたんだよ……。よくもまあそんな状態で集団生活ができてたもんだよ。

「それなら大丈夫です！十六夜さん達がこんな大きな水樹の苗を手に入れてくれましたから！これで水を買う必要も無くなりますし、水路を復活させる事も出来るのです♪」
物凄く嬉しそうにそう語る黒ウサギ。

というかやつぱりウサギでも女の子であることには変わりないんだな。やつぱり俺も一度引いとくべきだったかな、あの耳。

「私達の国では水が豊富だったから毎日入れたけれど、場所が変われば文化も違うものね。今日は理不尽に湖に投げ出されたから、お風呂には入りたかったところよ」

「それには同意だぜ。あんな手荒い招待は二度と御免だ」

「あう……それは黒ウサギの責任外ですよ……」

「俺は十六夜に水弾を飛ばされた気がするんだが」

「だってよ黒ウサギ」

「私じゃありません！十六夜さんでしょう!？」

「未遂だからノーカンで」

「らしいぞ、黒ウサギ」

「だから私じゃないのデスよ!?!何で日向さんまで私に振るのですか!？」

「一回濡れたのは確かだし。ダイナミックに落とされたのは中々記憶から消えないな。」

「ですから私のせいじゃ……もういいです。好きにしてください。」

先程までの飛び跳ねんばかりの元氣は消え失せ、今や肩を持ち上げる力もないようだ。

やつぱりウサミに似ている。

そのせいだろうか？こどもも弄りたくなるのは。

「そんじやその発育の——」

「性的なことはダメです!!」

「んじや水も手に入ったことだし、今日は豪勢にうさぎ鍋でも——」

「ヒイツ、物理的に食べられるっ!!?」

「二人とも、もうよしなさいよ。黒ウサギがかわいそうじゃない。」

好きあらば自分も弄るくせによく言うな。

「んじや、話を戻すが《サウザンドアイズ》ってどんなコミュニティなんだ?」

「店っていうからにはなんか売ってるのか?」

だとしたらお金は大丈夫なのだろうか?

いささか不安になるんだが……………

「《サウザンドアイズ》は特殊な「瞳」のギフトを持つ者達の群体コミュニティです。未
来視や目的の鑑定なんかもそうですね。だから売り物は持ち込まれて買い取ったギフ
トなどが主です。」

「瞳……………かあ。」

力を持っているのは少し違いかもしれないが……………確かに瞳は不思議なモノが

ある。

粕枝なんかは覗き込むだけでこっちまで飲み込まれるように濁っていて……それだけでその奥で鈍く、強く光るものが秘められていて。

七海なんかはすごくキラキラしていて、暖かった。

そんな風に感傷に浸っていたので気付かなかったが何やら視線がこちらに集まっている。

「え………どうかしたのか？」

「いや、ちよつと気になったんだが日向はどんな世界から来たんだ？」

やっぱり十六夜も俺たちの出身が違うことには気が付いていたのか………それにしても俺たちの世界か。

「別に………普通に生きて死んでいく。そういう世界だったよ。」

服を見る限り十六夜の世界が一番近そうだな。学校があつて勉強して仲間と前へ、前へ歩いていく。そういう世界だった。」

———確かにそういう世界”だった”。

「普通が悪いみたいにするのね。」

久遠の何処か刺の含んだ言葉が俺に刺さる……………というわけでもないが随分と確信をついてきた。

「そういう風に聞こえたか？」

「ええ、聞こえたわ。嫉妬や羨望に塗れた言葉に聞こえた。」

「おいおい、お嬢様。そりや踏み込みすぎだぜ。」

「あら、十六夜くんは気にならなかつたのかしら」

そう聞いたのは十六夜も自身と同じような強者であり、プライドや誇りと言った譲れないものを持っていると思つたからだろう。

それは間違つてない……………でも受け取り方は違う。

「確かに気になることはあるが……………別に日向は俺らのことを羨んじやいねえだろ。そりやお嬢様の勘違いつてやつだ。」

「いや別に間違つてるわけじやないさ。久遠の言うことは確かに一理ある。」

「羨んでないのに……………羨ましいの？」

春日部の言い回しがある意味一番近い。

複雑怪奇すぎる今の“日向創”は……………そう言つた矛盾でしか表せない。

「そうだな。羨ましいよ……………でも羨ましくない。今ならそう思えるんだ。」

そうやって笑つて見せるが周りの反応はイマイチ芳しくない。

「随分と耳にいい台詞ね。」

少しの沈黙を破ったのはそっぽを向いた久遠の言葉だった。

「飛鳥さん！」

黒ウサギの咎めるような声も聞こえるがまあそれはいい。

俺には俺の、久遠には久遠の考えがある。

それを曲げない事が大事なんだろうから。

「えーつと……それじゃあ僕は先に戻ってるよ黒ウサギ。」

若干騒がしさが戻りつつあった中そう言つてジンがどこかへと走つていった

「話を遮つて悪かったな。《サウザンドアイズ》の説明の続きをしてくれよ。」

十六夜のタイミングのいい発言で再び話がサウザンドアイズへと戻る。

「えー、では説明の続きですが、サウザンドアイズは箱庭の東西南北・上層下層全てに精通する超巨大商業コミュニティです。幸いこの近くにその支店がありますから今はそこに向かってます。」

「ギフトの鑑定というのは？」

「言葉通り、ギフトの秘めた力や起源などを鑑定する事です。自分の力の正しい形を把握しておいた方が、引き出せる力はより大きくなります。皆さんもご自分の力の出処は気になるでしょう？」

ここまでがさっきの話か。反応はさっきと変わらない。

あまり興味がなさそうな三人と少し興味がそそられている俺。

少しアンバランスなコミュニケーションティだが………この中で俺は上手くやっていきたいと、改めてそう思った。

大和装ロリ決戦! 白い夜叉VS黄色いひよこ

大和装ロリ決戦! 白い夜叉VS黄色いひよこ

「サウザンドアイズ」に向かう道中、石畳の通りに沿うように脇に咲き誇る桃色の花弁をみて元の世界の桜を思い出す。とはいえこの花とは少し形が違うが……………」

「桜の木……………ではないわよね? 花弁の形が違うし、真夏になっても咲き続けているはずがないもの」

「いや、初夏だろ? 気合が入った桜が残っててもおかしくないと思うが」

「……………? 今は秋だったと思うけど」

ん? さっきその話はしたよな? 違う世界から来ましたよーみたいなの……………。

「皆さんはそれぞれ違う世界から召喚されているのデス。元いた時間軸以外にも歴史や文化、生態系など所々違う箇所があるはずですよ」

わからずに話してた!!?

「へえ、パラレルワールドってヤツか?」

「近いですね。正しくは立体交差並行世界論と言うものなのですが……今からコレの説明を始めますと一日二日では終わらない話ですのでまたの機会ということにしましょう」

そう話を切り上げた黒ウサギが暖簾を取り下げ今まさに店を閉じようとしている女性の姿を捉える。

……
……
……
……
……
……
……
……

「まっ——」

「待った無しです御客様。うちは時間外営業はやっていません」

—— 呆気なく撃沈した。

残念だな黒ウサギ。大手の店なんてそんなもんだ。

「なんて商売つ気のない店なのかしら」

「ま、全くです！閉店時間の五分前に客を締め出すなんて！」

「文句があるなら他所へどうぞ。あなた方は今後一切の出入りを禁じます。出禁です」

「出禁!?!これだけの事が出禁とは御客様舐め過ぎでございますよ!?!」

「なるほど。箱庭の貴族であるウサギのお客様を無下にするのは失礼ですね。中で入店

許可を伺いますのでコミュニケーションの名前をお伺いできますか？」

「……………」

先程まで元気に客を主張していた黒ウサギが言葉に詰まったのは名前がないことの弊害か……………というか店員の対応からして既に足元を見られていること間違いないだ。

ひよつとしたらこれまでもなにか似たようなことをやらかしていたのかもしれない。

ためらう黒ウサギに代わって堂々とノーネーム宣言をした十六夜にこの場は任せて店に取り付けられた大きな旗を見る。

空を思わせる蒼い生地に向かい合うように刺繍された女神像……………これがコミュニケーションの旗印。

道中も至る店に旗はあったがやはりコミュニケーションによって千差万別なんだな。

などとポケーっとしていたのがいけなかったのかバケツをひっくり返したかのよう
に突如降ってきた水に再び体を濡らす。

「……………なんで？」

気の毒そうに俺を見る飛鳥と春日部の視線とは対称に何が面白いのか腹を抱えて笑
いながらこちらを指さす十六夜。

何が原因なのかと振り向けば通りを流れていた水路の真ん中に倒れ込む黒ウサギとそれにセクハラをし続けている謎の白い生物が見える。

——あれのせいかな！！

ダイナミック着水と蛇による神造シャワーに続いて本日三度目の水浴びに少し仄暗い感情が沸き起こる。

……………まあなにもしないけどな。

沸き起こった怒りを沈めているとついにガマンの限界が来たらしい黒ウサギに投げられた白い生物がこちらへと飛んでくる。

俺が体を半歩下げる事によりそれを回避したことで白い生物は奇妙な音とともに十六夜の足へと無事(?)着地した。

「お、おんしら、飛んできた美少女を見て引いたような顔で避けて、挙句足で受け止めるとは何様じゃ！」

地面からすごい勢いで起き上がり文句を言ってきたのは……………どこことなくサイズと服装に既視感を覚える白髪和装の少女……………というよりは幼女だ。

「いや避けるだろ普通。」

「十六夜様だけ、以後宜しくな和装ロリ。そんで日向、普通って言うならトラップからのボレーだろ」

「それは普通じゃない、ここはコートの外だ。」

「つれねえな。んじゃボレーは俺がするからお前はとりあえず俺によこせ。」

「それならやっただろ、スルーパス。」

「いやいやおんしらワシをボール扱いしているところにはまずは疑問をだな。」

「飛んできた白黒のものは基本サッカーボール。」

「おんしら色々とおかしいぞ。」

否定をしたのは以外にも春日部だ。

先程まで飛鳥と話していたと思っただが……………

「パンダもありえる。」

「そつちか!?というか流石にパンダは……………」

「いや、和装ロリが飛んでくる方がありえないからな?」

十六夜に突っ込まれるのが妙に新鮮だ。

もう色々々と混沌としてきた場を取めたのはいち早く正気に戻り、かつ手持ち無沙汰をしていた飛鳥だった。

唸っていた白髪ロリに

「貴女このお店の人？」
と聞いたのだ。

.....え？お店の人？

嘘だろと思いつつながら視線を白髪ロリへと向ければ当の本人は身長のせいかわらしさを誘うように体を反らしエヘンツと言わんばかりのドヤ顔で答えた。

「おお、そうだととも。」

.....俺にとって衝撃的すぎる答えを。

「この『サウザンドアイズ』幹部様の白夜叉様だよ御令嬢。仕事の依頼ならばおんしのその年齢の割に発育の良い胸をワンタッチ一揉みで引き受けるぞ」

「オーナー、それでは売上が伸びません。ボスが怒ります」

オーナー!?! 幹部!?

.....どうやら俺と十六夜が無礼を働いた相手は随分と偉かったらしい。

まあそれが俺たちに対する演技でなければ.....だが。

普通はないと思うがおれたちに無礼を働いたと気負わせる事で精神的に優位に

.....

ふと他の四人に目をやってから考える。

……………このメンバーなら気にしないな。というかそれなら黒ウサギが知ってるか。

ようやく水路から上がってきた黒ウサギを労う……………実は因果応報と言う言葉を贈りたいほどに嬉しいのだが……………それは顔へ出さないようにする。それはあんまりにも酷という物だろう

「うう……………まさかまた私まで濡れるなんて」

「因果応報……………かな」

「にやー」

春日部の言葉に同意するように三毛猫が答える。

異世界にまで連れてきただけあってなにか特別な猫なのか？

「ふふん。お前達が黒ウサギの新しい同士か。異世界の人間が私の元に来ると言う事は……………ついに黒ウサギが私のペットに!？」

「なりません! どういう起承転結があつてそういう事になるんですか!」

「ちつ、全くつれないのお黒ウサギは。まあよい。話があるなら店内で聞こう」

「ですがオーナー。彼らは旗も持たない」ノーネーム」。規定では

「『ノーネーム』だと分かっているながら名を尋ねる、性悪店員に対する詫びだ。身元は私が保証するし、ボスに睨まれても責任は私取る。いいから入れてやれ」

意外と身長に似合わぬ広い心の持ち主だった。

店員の女性もオーナー（？）の言葉には逆らえないのかももう阻むこともなく俺たちを通してくれる。

中は外観からは想像できない広さで………というか完全に土地面積がちがうだろ。

景観こそ和風に整えられているがその実この中庭フアンタジー要素満載のようだ。

「生憎店は閉めてしまったのでな。悪いが私の私室で勘弁してくれ」

縁側を進みながら白夜又がそう言ってきた。

もつとも止まったのは建物や着物と同じく和風に整えられただけの明らかに私室と
いうには大き過ぎる部屋。

普段からこの部屋をこの小さな白夜又が満喫しているとするとするのなら………ブル
ジョワめ。

中に入ってみれば焚かれた香が体の力を抜いてくれるので広さの割には落ち着く空

間となっていた。

なおのこと恨めしい

「さて、もう一度自己紹介をしておこうかの。私は四桁の門、三三四五外門に本拠を構えておる。『サウザンドアイズ』の幹部の白夜叉だ。この黒ウサギとは少々縁があつての。コミユニティが崩壊してからもちよくちよく手を貸してやっている器の広い美少女だと思つてくれ」

「はいはい、いつもお世話になつております本当に」

投げやりな黒ウサギの言葉にも白夜叉は気にしたような反応を見せない。

「その外門つて何?」

「箱庭の階層を示す外壁にある門の事ですよ。数字が若いほど都市の中心部に近く、強大な力を持った方々が住んでいるのです」

つまりあの蛇はかなり弱いほうなのか……………あれ?あれで弱い方つて……………強い奴は星でも壊す気か?

黒ウサギが示した七つの壁を見て少し気が遠くなる。

しかしこの形は……………

「……………超巨大タマネギ?」

どちらかといえば……………

「いえ、超巨大バームクーヘンではないかしら？」

「そうだな。どちらかといえばバームクーヘンだ」

「バームクーヘンだな、完璧に。」

俺たちの残念な例えにもはや恒例のように肩を落とす黒ウサギ

そして対極に呵々と笑い声を上げる白夜叉。

「ふふ、言い得て妙じゃの。その例えなら今いる七桁の外門はバームクーヘンの一番薄い皮の部分に当たると。更に説明するならば、東西南北の四つの区切りの東側に辺り、外門のすぐ外は『世界の果て』と向かい合う場所となる。あそこはコミユニティに属していないものの、強力なギフトを持った者達が住んでおるぞ——その水樹の持ち主のよう」

そこで瞳を鋭くして黒ウサギのもつ水樹の苗とこちらを舐めるように見渡す。

「して……………一体誰が、どのようなゲームで勝ったのだ？ 知恵比べか？ 勇気を試したのか？」

「いえいえ、この水樹は十六夜さんと日向さんがここに来る前に、蛇神様を素手と木の枝で叩きのめしてきたのですよ」

「なんと!? クリアではなく直接的に倒してきたとな!? ではその童共は神格持ちか？」

「いえ、黒ウサギはそうは思えません。神格なら一目見れば分かりますから」

「む、それもそうか。しかし神格を倒すには同じ神格を持つか、互いの種族によほど崩れたパワーバランスが無ければありえん。種族の力で言うなら蛇と人とはドングリの背比べだぞ」

白夜叉が唸り出したその隙に飛鳥がこちらをジトリとした目で見ながら口を挟んだ。

「とうかその水樹の持ち主がどれほどのものなのかわからないけれど……………私にはとても信じられないわ。日向君が叩きのめしたというあたりが特にね。」

「勘違いのないように言っておくが俺は別に何もやってない。その場にいただけだ。」
「木の枝で湖を二つに切り分ける行為を無かった事にしたら概ね間違っつてねえな」

……………いつ。

「湖を……………」

「……………二つに切り分けた？」

「それはワシも興味があるのう。」

白夜叉まで乗ってきた。

全員の好奇の目に晒されながらも答えに困った俺はとりあえず誤魔化すことにした。
「これもまた……………あんまり好まれるやり方じゃないが

「無我夢中だったんだよ。」

「だよ。……………まあ別に秘密の一つや二つ持っててもいいだろ。」

だからなんでお前の俺に対する評価はそんなに高いんだよ十六夜！

「ふむ……………神格持ちを素手で打倒し、木の枝で攻撃を凌ぐ……………か。あの蛇も断じて弱いわけではないのだがの。」

まあ仮にも神だ。弱いわけが無い。

童だつて神がつけば神童。

鬼だつて龍だつて馬だつて変わらない。それなら蛇だつて神がつけばそれだけで軽く人間の上位存在だ。

それも遥か上と言つていい。

「白夜叉様はあの蛇神様とお知り合いなのですか？」

「知り合いも何も、あやつに神格を与えたのはこのワシだ。もつとももう何百年も前の話になるかの。」

どこか遠い目をする白夜叉だが……………

ちよつと待て何百年つて何だお前それ何歳だ、というか他者をいきなり神にできるとかお前なんなんだ。

とかとどまるところを知らない疑問が溢れ出してくるが聞いたら長くなること請け合い、話がそれること間違いないのでここはグツと我慢して続きを聞く。

「へえ、じゃあお前はあの蛇より強いんだな？」

「ふふん、当然。私は東側の『階層支配者』だぞ。この東側にある四桁以下のコミュニティでは並ぶ者がいない、最強の『主催者』なのだから」

あれ？これ話を逸らしていたほうがマジの流れじゃないか？

少し他の3人から圧力が放たれている気がするんだが………まるで終里のような剥き出しの闘志——マジで？

「そう……ふふ。ではつまり、貴女のゲームをクリア出来れば、私達のコミュニティは東側で最強のコミュニティということになるのかしら？」

「無論、そうなるの。」

「そりゃ、景気のいい話だ。探す手間が省けた」

「抜け目無い童達だ。依頼しておきながら、私にギフトゲームを挑むとは」

「え、ちよ、御三名様!?!」

「やめとけつて。神様作れる相手だぞ？」

「よいよ黒ウサギ。私も遊び相手には常に飢えている。それにそんなことはこやつらも理解しているであろうよ」

——言葉通りの意味ではない。

俺が言いたいのは神様作れる程の存在相手に戦いになるわけが無いとかそういう事じゃない。まあもちろんそれもある。

俺が言いたいのはその影響……………白夜又は今の所性格こそ魔王と呼ばれるような存在には思えないが……………だとしてもその実力は間違いなく箱庭でも上位に当たらずだ。

そんな存在に喧嘩を売ったとあらば黙っていないところがあるかもしれない。

特にそれは目の前の白夜又は幹部を務めるサウザンドアイズなどで……………

というかそもそも理解していて喧嘩をふっかける方がなお危険だ。理解していなければ教えれば事足りる。

だがそうでないのなら……………いつか怪我をする。

「ノリがいいわね。好きよ、そういうの。」

「ふふ、そうかそうか。——しかし、ゲームの前に一つ確認しておく事がある」

「何だ？」

心無し顔を引き締めた白夜叉に緊張を走らせる黒ウサギを含めた5人。

白夜叉が着物の袖へ手を伸ばし取り出したのはサウザンドアイズの旗印たる向き合う女神が刻印された一枚のカード……………。

「おんしらが望むのは」挑戦か? それとも——「決闘」か?」

そう呟いた瞬間——何処かで味わったことがあるような景色が一瞬で切り替わる感覚が身を包む。

刹那とも呼ぶべき一瞬間の間、地面が離れ耳はまともな音を拾わず、景色は今まで見たことがあるかのような光景を一瞬でいくつも流して一つの景色で定着する。

——そこは白銀の世界。

太陽が水平に回る白夜の銀世界。

遠くに連なる雪や大地は雪をかぶり、少し奥には大きな湖畔が広がる……………幻想的と言言葉を体現したかのような景色が先程までの和室という空間を飲み込んで現れた。今ではこの高鳴った心臓を落ち着かせる香の香りすら……………してこない。

「——なっ………!?」

世界の創造………その存在の強大さにより神と呼ばれるようになった存在とは違う、真正正銘世界創造の奇跡。

そんな事が出来るのは神と呼ばれる存在が多く語り継がれていた元の世界でもそう多くはない。

「今一度名乗り直し、問おうかの？ワシは“白き夜の魔王”——太陽と白夜の星霊・白夜叉。おんしらが望むのは、試練への“挑戦”か？それとも対等な“決闘”か？」

そんな風に圧倒的な存在感を出す白夜叉を前にしてまだ俺が冷静でいられたのは同じような存在感を持ったあの絶望を相手に一幕を演じたからか………はたまたその絶望を経験したからか………何にせよその改まった自己紹介を聞いて思ったことが

「ああ、やっぱり魔王だったんだ」だったことには——正直自分でも呆れた。

そして何故か遠くなる視界に——俺はあの男の影を見る。

世界のすべてがつまらないと断言しきるあの“絶望”の影を——

あああの白を絶望色に染め上げたい

あああの白を絶望色に染め上げたい

——似ている

目の前で行われている問答や試練も何処か遠く……日向は魔王のあり方をそう考えた。

たくさんの絶望振りまくその姿にあの金髪の少女を重ね……そしてまた日向自身も——

「おい日向。」

……。

「なんだよ?」

「……別に。ただちよつと気になっただけだ。試練とやらも無事終わったみた

いなのにボーっと突っ立ってたからな。」

「ちよつと考え事をな。」

白夜叉の問いに自身らの矜持を守りながらも“挑戦”と答えた3人は知恵と勇気を試すグリフォンの試練を受けていた。

挑んだのは春日部耀。

ルールはグリフォンの背に捕まり湖畔を一回りして戻ってくるまで振り落とされなければ良いというもの。

簡単そうに見えてこの寒さの中遠慮のない速度で激しい軌道を描いて空を飛ぶグリフォンについていくのは大変だろう。

事実最後は落下していたが春日部耀のギフトらしい木彫のネックレスの効果でグリフォンの特性を手に入れたらしく自力で帰還してきた。

さつきまでは健闘を称えていた筈なのに気がつけばゲームの報奨をどうするかと言う話へと移っている

春日部耀のギフトの話から鑑定の話へと移り、黒ウサギが期待していたそれを白夜叉

は「専門外よりもひどい無関係」と言いきってどうしたものかと頭を悩ませている。

「おんしら三人は素質が高いのはわかるが……その劍豪殿は全く力が感じられん——いや？ なにか妙なものが作用している気も……ううむ、ダメだよくわからん。おんしら自分のギフトをどの位把握しておるのだ？」

「企業秘密」

「右に同じ」

「以下同文」

「知らない」

「うおおいッ!? いやまあ仮にも対戦相手だったものに自身のギフトを明かしたくないのはわかるが……それでは話が進まんだらう。」

「別に鑑定なんていらねえよ。他人に値札を貼られるのは趣味じゃない。」

「随分とかっこいいことを言うな。ハッキリとしすぎていて逆に困惑する。よくもまあ二人もそれに追従できるもんだ。……従ってはないけど。」

「おんしはどうなのだ。よもや本当にわからないと言うわけではあるまい。」

「本当にわからないんだよ。強いていうなら、何も持っていないことは知ってる……位のもんだ。」

「ふむ。何にせよ『主催者』として、星霊の端くれとして、試練をクリアしたおんしらに

は何らかの「恩恵」を受けねばならん。少しばかり贅沢な代物だが、コミュニケーション復興の前祝いも兼ねて、コレを受けよう」

そう言って白夜叉が手を打ち合わせると虚空から四枚のカードが現れてそれぞれ俺たちの元へと降りてくる。

逆巻十六夜にはコバルトブルーのカードが。

久遠飛鳥にはワインレッドのカードが。

春日部耀にはパールエメラルドのカードが。

そして俺にはアッシュグレイのカードが……………なんだこれ？

「——それはギフトカード!?!」

黒ウサギの驚く声が聞こえる。……………がギフトカード？

「お中元?」

「お歳暮?」

「お年玉？」

「クーパー券？」

「違います！何で皆さんそんなに息を合わせたギャグをかますのですか!? これはギフトカードと言つて、顕現しているギフトを収納出来る超高価なカードです！耀さんの「生命の目録」だつて収納可能で、それも好きな時に顕現出来るのですよ！」

黒ウサギをいじるといふことで共通の意志を持つてるからじゃないか？もちろん口には出さない。

「つまり素敵アイテムつて事か？」

「四次元ポケットみたいな物かしら？」

「だから何でそんな適当な反応なんですか!? あーもう、そうですよ！とても便利な超素敵アイテムですよ！」

何やら興奮冷めぬと言わんばかりの勢いでそうまくし立てる。

「我らの双女神の紋のように、本来ならコミュニケーションの名と旗も記されるのだが、おんしらは「ノーネーム」だからの。少々味気なくなつてしまつておるが、文句は黒ウサギに言つてくれ」

「なるほどな、おい黒ウサギ。」

「そうよ黒ウサギ」

「……………黒ウサギ」

「なんとも寂しいカードだと思わないか黒ウサギ。」

「また私になるんですね！わかってましたともええわかってました!!」

体はいつものように肩を落としているのに口調だけはテンションが上がっていく黒ウサギに不思議を見た気がする

「それにしても寂しい……………じゃと？日向、ちよつと見せてみる」

催促されたとおりにカードを渡す。

「な——なんじゃこれは!？」

「え、どうしたのでございますか？」

カードをのぞき込んだ白夜又があげた悲鳴に他の四人も反応してカードをのぞき込む。

「こ、これは……………」

「何もねえな。何も書いてない。」

そう、俺のカードには……………何も書かれていない。

あるのはアツシユグレイの刺繍のみ。それ以外のギフトの類は……………何も無い。

「どういふ事？」

「このカードはラプラスの紙片と呼ばれるもの……全知の欠片じゃ。つまりこれでもここに表示されないということは……全知でも拾えぬ未知か、はたまた真に何も持たぬか……。いやしかしそれはどちらも考えられん。ラプラスの紙片は未知が無いからこそその全知じゃ。かと言ってギフトを持たぬということは……おんし、本当に蛇神の攻撃を弾き、更には湖を両断したのじゃな？」

嘘をついたところで意味はない。

大人しく頷いておく。

しかし何がそこまで疑問なのか。

あらゆる世界が全てをギフトを元に成り立っているとは限らないのに……。

それが無いと思っているのか首を傾げ悩み続ける白夜叉に今度は十六夜が悩みの種を持ち込んだ。

「んじゃ俺のもレアケース……ってことだな。」

「なに……そんなバカな。」

余裕もなく十六夜からひったくる様に取りられたカードには《コードアンソウ正体不明》と刻まれている。

「正体不明……………バカなラプラスの紙片がエラーを起こすだと？全知で理解出来ぬ事が一つ？」

「何にせよ鑑定は出来なかった、そう言う事だろ？俺的にはそっちの方がありがたいや。」

そう言うて呆然としている白夜叉の手からギフトカードを抜き取った。

「俺のは理解できないじゃないじゃなくて何もないんだよ。別にエラーじゃない。」

初めからギフトじゃなかったってだけの話。

言っても信じてもらえろとは思ってないけどな。

「どこから湧いてくる自信なのか気になるが……………そろそろ出ねば遅くなるな。」

十六夜や俺に対する追求もそこそこに俺たちは暖簾をくぐり再び店外へと戻っていた。

「今日はありがとう。また遊んでくれると嬉しい」

「あら、駄目よ春日部さん。次に挑戦する時は対等の条件で挑むのなもの」

「ああ、吐いた唾を飲み込むなんて、格好つかねえからな。次は渾身の大舞台で挑むぜ」

「ふふ、よかろう。楽しみにしておけ。……………ところで今更だが一つ聞かせて欲しい。」

再び真面目な声色になった白夜叉の様子に何度目かの緊張が走る

「おんしらは自分たちのコミュニティがどういう状況なのか……………理解しておるのか

「？」

「ああ、旗とか名前とかの話か？それなら聞いたぜ、別に大したことじゃねえよ」

「ならばそれを取り戻すために“魔王”に挑まねばならんことも？」

「聞いたぞ。全く持つて絶望的だな。」

「……………ではおんしらは全てを承知の上で黒ウサギのコミュニティに所属するのだな？」

「そうよ、打倒魔王だなんてカッコイイじゃない。」

「“カッコいい”だとかで済む話ではないのだがな……………全く、若さゆえのものなのか。無謀というか、勇敢というか……………まあ、魔王がどういうものかはコミュニティに帰れば分かるだろう。それでも魔王と戦う事を望むというなら止めはせんが……………そこ
の娘二人——おんしらは確実に死ぬぞ」

白夜叉の警告の言葉に思わずと言った様子で反応する二人だがそれでも元魔王の言葉を軽視するのは愚かだとわかっているのだろう。結局何かを言うわけでも無くそれぞれが思う事があるといった様子で引き下がった。

「魔王の前に様々なギフトゲームに挑んで力を付けろ。小僧はともかく、おんしら二人の力程度では魔王のゲームを生き残ることは出来ん。嵐に巻き込まれた虫が無様に弄ばれて死ぬ様は、いつ見ても哀しいものだ」

「そこは小僧共じゃないんだな。」

白夜叉の言葉に十六夜が問を投げる。

対して白夜叉は少し顔をしかめた。

「……………そつちの小僧に少し聞きたいことがあるのだがの。」

示されたのは俺だ。

「なんだよ、改まってどうしたんだ？」

「いや——」

——貴様はなんだ？

白夜叉の言葉はそれまでに見せた迫力などという生易しいものではなく確かな敵意をにじませて投げられた。

「白夜叉様!? 一体何を——」

「静まれ黒ウサギ、これは必要な問だ。……………答える小僧、貴様はなんだ？」

……………。

……………。

心や考えまで変える“超高校級の役者”の才能があっても見破られるのか……………
これは——つまらない。

「日向創だよ。間違いなく、日向創本人だ。」

……………演技をしてもそれは嘘じゃない。

俺は日向創……………希望ヶ峰学園二年の日向創に相違ない。

絶望の汚染を受けようが……………まだ大丈夫。

……………。

俺はアイツじゃない。

「……………そうか。そういうのであればまあ良いだろう。」

「そう言いながら近づいてきて俺にしか聞こえないような声量で言葉を続ける

「……………儂でも勘を頼りにせねば気付けぬほどの邪気……………だが一度気がつけば恐ろしいほど濃密なそれだ。そんなものを身に纏いながら無事でいられるなど……………星という存在でもありえん。ましてや種族としてもそう強固ではない人間が生身で耐えられるはずもない。

「せいぜい気をつけることだ小僧……………それは百害あつて一利なしだぞ。」

「何のことはわからないけど……………俺はただの高校生だ。」

「……………まあ儂にもよくわからんしそういう事にしておこう。何にせよその邪気に動く気は見られんしの。」

「そう言つて離れた白夜叉に変わり十六夜が話しかけてくる

「何やらすげーときめくワードが聞こえたのは気のせいか？ 邪気つて何？ 光線とか撃てるの？」

「イヤホンしててよくもまあ聞こえるもんだ

「……………なあ、俺思うんだがお前は俺をなんだと思ってるんだ？」

「人間ビツクリ箱不思議アンテナ」

………かつてない罵倒のされ方をした。

「どういう事ですか白夜叉様。」

いたって気楽な俺たち二人とは違い言葉に多少の怒りを匂わせながら黒ウサギが白夜叉へと問いかける。

加入して一日もたつていないのに仲間というだけでこの扱い………人徳と言えばそれまでだが危険でもあるな。

「そう怒るでないぞ黒ウサギ。ほれ、小僧だつて納得しておる。」

まあ確かに怒りがあるわけじゃない。むしろ自身の内に潜む“コイツ”の存在を認識できただけ感謝したいぐらいだ。

それでも話が理解できない黒ウサギには納得が行かないようだ。
「それでも話が理解できない黒ウサギには納得が行かないようだ。」

「小僧のことだが………まあ何とかなるじやろう。一見して不安しか掻き立てないような脆弱さじゃが………なかなかどうして曲者だよ。」

言外に話を打ち切られた黒ウサギは仕方なくといった風に引いていく。

「………まあ、ありがとう。肝に銘じておくわ。そして、今度は貴方の本気のゲームに挑

みに行く……………覚悟しておきなさい」

「望むところだ。私は三三四五外門に拠を構えておる。いつでも遊びに来い。……………ただし、黒ウサギをチップに賭けてもらうがの」

「嫌です!」

「そうつれないことを言うな。私のコミュニティに来れば生涯を遊んで暮らせると保証するぞ?三食首輪付きの個室も用意するし」

「三食首輪付きつてそれも、完全にペット扱いじゃないですか!」

本当に苦労人だな黒ウサギは……………とりあえず先ほど俺のために怒ってくれた礼を込めてフォローしてやろう。

「ブラツシングがないと嫌だとさ。」

「うむ、考慮しよう。」

「絶対におかしいです!本当にもうこのおバカ様方は!!」

そうして白夜叉とのゲームも終わり店から離れたところで自身の内に蟠っていた絶望の影が薄れていくのを感じる。白夜叉から離れたことが原因かはまた時間の経過か……………何にせよこれで自分がこの世界に来るまでの記憶がない理由が分かった。

——絶望はこの世界にも存在する。

そうわかったただけで尚更自身がこの世界でやるべきことが見えてくる。
皆の為にも……やり遂げて見せる。

そんな俺の決意を対称的な二つの視線が見ていたことには気付かず俺は心の底で
う誓った。

災禍の痕、既視感、そして憤怒

災禍の痕、既視感、そして憤怒

——何だ………これ………。

眼前に広がるはかつて人が住み営みがあったであろう痕跡………風化してほぼ更地になった広大な大地である。

かろうじて形を保つ建造物には日常の風景が残されており、それが何よりもこの場の異常性を証明していた。

だが何よりも俺が覚えたのは——既視感。
自身が“絶望”としてあらゆる破壊と恐怖を振りまいた世界………ここはそれの縮小劣化版だ。

「なるほどな、確かにこれは………。」

ここは黒ウサギのコミュニティが存在していた場所……これが仮に魔王とやらが襲撃した結果だとするのなら……それは一体いつの話だ？

どう言った破壊を振りまけばこうなる？

少なくとも物理的じゃない……単なる風化ならばまだ振動や酸による酸化で規模に違いこそあれど再現は可能だろうが……それならばここまで自然な感じは出ない。作り物のような感じが出るだろうし何よりもまだるっこしい。

かと言って時間を操りました——なんて言われたら黒ウサギには悪いが勝ち目が無い。

言っちゃなんだがそれは那由多の数のモノクマを相手にするのと大して変わらぬ絶望具合だ。

「おい、黒ウサギ。魔王とのギフトゲームがあつたのは何百年前の話だ？」

十六夜が破壊の片鱗に触れながら驚きを含んだ声でそう問いかける。

どこか興奮混じりの十六夜とは対称的に黒ウサギは湖で見せた悲痛の表情で驚愕の事実を告げる。

「わずか三年前の話でございませう。」

——三年。

変化の激しい子供でさえ三年でここまで変わることはないだろう。
でもそれ以上に……………三年である。

絶望が入学し過ぎた”二年”

世界が崩壊したのは三年目だ。

ひどく奇妙な運命である。

「ハッ、そりゃ面白い冗談だ……………いやマジで面白いぞ？この風化しきった街並みが
三年前？」

だが十六夜はそんな運命や現実すらも鼻で笑って飛ばした。

「……………俺は面白いとは思えないけどな。あんまりにも馬鹿げてる。」

ここに来て俺はようやくひとつの可能性が見えてきた。

俺が先程まで才能を使っていた原因はカムクラだ。

つまりまだ絶望は死んでいない……………むしろあの世界において神の如き扱いを受けていた”絶望”という存在がこちらに来ている可能性は……………割と高い気がする。

白夜叉がカムクラの存在に気がついたのももしかすれば――

「……………確かに馬鹿げてやがる。断言するがどんな力のぶつかり方をしようがこんな事にはならない。この木造の壊れ方なんて膨大な時間経過による自然崩壊にしか見えない。」

「ベランダのテーブルにティーセットがそのまま出ているわ。これじゃまるで生活していた人間がフツと消えたみたいじゃない。」

「……………生き物の気配が全くしない。整備されなくなった人家なのに獣がよってこないなんて……………」

「『どうやって成したのか』、『なにが起きたのか』、『なぜこうなったのか』……………わからないことだらけだな。」

何せ見た目はただの廃墟。調べようにも調べられることはそう多くない。

考えることは多いが考えられることは少ない、こう言った状況じゃロジカルダイブもヒラメキアナグラムもあまり意味はなさそうだな

「……………魔王とのギフトゲームはそれほど未知の戦いだったのでございます。彼らがこの土地を取り上げなかったのは魔王としての力の誇示と、一種の見せしめでしょう。彼らは力を持つ人間が現れると遊び心でゲームを挑み、二度と逆らえないよう屈服させます。僅かに残った仲間もみんな心を折られ……………コミュニテイからも、箱庭からも

去って行きました」

……………どうにも深刻だな。

やはりどの世でも人を殺すのは絶望なのか？

何にせよこれで白夜叉がゲーム盤とやらを持つている理由がわかったな。

どちらにせよあれほどのものを展開しなきゃならない程の力ってどんなものなのか……………

そして————それを使わずにここまで人を踏み
にじれるわけか

どこの世界でも本質は絶望か？神とか星とか言われるような存在が揃いも揃ってこれなのか？

弱者が自身のところへ這い上がるのがそんなにも怖いか？弱者をいたぶるのがそん

なにも楽しいか？

醜悪が過ぎる。

それを許すこの箱庭のなかの汚染が許せない。

結局は自分の力を一方的に振るうことに快感を覚えてるただの下衆じゃないか。

そんな人間でも分かることが……………

「……………なんでわからないんだよ。」

気のせいなのか頭の中の主張がまた強くなった気がする。

……………気を落ちつける。俺が絶望に飲まれてみる……………手伝うって決めた事を
投げ出す以上に最低な状況になるに決まってる。

「魔王……………か。ハッ、いいぜいいぜいいなオイッ！想像以上に面白そうじゃねえか
!!」

そんな日向の激情をよそに十六夜はどこまでも十六夜らしく嘲笑う。

自身の決意の元となった惨状に感情を殺す黒ウサギ

自身が協力すると誓ったものの大きさに言葉を失った飛鳥と曜
絶望を認識したことでより深く失意に染まる日向

そしてただただ嘲笑う十六夜………コミユニティ《ノーネーム》が再び翼
を広げようしていた

水も滴るいい男の顔も三度まで

水の滴るいい男の顔も三度まで

僕らが廃墟をこえて進むと徐々に外観の整った地区へと出る。

どうやら今のノーネームはこの奥の一際大きな館とも呼べる建物で集団生活をして
いるらしい。

だが今はそれよりも先に用水路へと向かう。

この先には貯水池とも呼べる全ての水路がつながるポイントがあるらしくそこに手
に入れた水樹の苗を設置すると言う話だ

かくして着いた先では子供達がそれぞれ清掃用具を持って掃除をしていた
「あ、皆さん！水路と貯水池の準備は整ってます！」

「ご苦労様ですジン坊ちゃん。みんなも掃除を手伝っていましたか？」

するとたくさんの子供が黒ウサギの元へと集まって各々に主張を開始する

「黒ウサギのねーちゃんおかえりー！」

「眠たいけど掃除手伝ったよー！」

「ねえねえ、新しい人たちって誰!？」

「強い?! カッコイイの!？」

なんとも和む光景だがその真ん中にいるのが自分たちとそう歳の離れていないように見える黒ウサギなので元の世界の常識から少ししんみりとしてしまう。

元の世界が平和だった頃は多くても四五人の兄妹を高校生、またはそれに準ずる年の少年少女が働く親の代わりに面倒を見る程度のもだった。

仕事となればこれに準ずる数の子供も集まるだろうがそれにしたって複数人でそれぞれに均等に割り振って昼間だけ一時的に監督するだけだった。

一人でこれだけの人数をずっと……………

(大変……………だよなあ。)

二百年……………途方もない年数だし俺たちからすればお婆ちゃんもいいところだ……………でもそれでもだろう。

コミュニケーションの復活という目的を掲げジンというサポーターがついていたとしても所詮17歳……………こうして子供達の面倒も見て俺たちのわがままにも付き合っ……………対したもんだ。見た目通りの年齢ならば超高校級の保母と言う名を進呈したいくらいだ。

なんてことを考えているといつの間にか俺たちの紹介へと移りコミュニティ内での子供達の役割についても教えられる。

ギフトゲームに参加できない子供達は参加出来るものたちの補佐、身の回りの世話などを担当するらしい。

それに意見した飛鳥をこれも教育の一環だと言わんばかりの勢いで説き伏せた黒ウサギはやはり様になっている。

すると今度は子供達がこちらへと向き直って元気良く頭を下げる

「「「よろしくおねがいます!!」」」

……………元気が良すぎて耳が痛い。

「ハハツ、元気がいいじゃねえか。」

「そ、そうね……………」

「……………」

「よ、よろしくな。」

十六夜はよくもまあ普通に返事が返せるもんだ。

「さて！自己紹介も終わりましたし、それでは水樹の苗を植えましょう！黒ウサギが台座に根を張らせるので、十六夜さんのギフトカードから出してくれますか？」

「あいよ」

それにしても立派な水路だ。長年水が貼られていなかった影響がところどころに見えるがそれも子供達で掃除したのだろう。少なくとも目に見えてというところは無い。

目に見えないところはわからないけど……………

逆に言えばそれほど広いわけで、やはり規模だけなら凄いなノーネーム。

「大きい貯水池だね。ちよつとした湖ぐらいあ

るよ」

曜が三毛猫に話しかけている。流石に猫がなんと答えているかはわからないが賛同していたりするのもかもしれない。……………あれ？猫つて水が苦手だっけ？いやでも湖に落ちたときは別に溺れてなかったし……………はて？

「はいな、最後に使ったのは三年前ですよ、三毛猫さん。元々は龍の瞳を水珠に加工したギフトが貯水池の台座に設置してあったのですが、それも魔王に取り上げられてしまいました」

「龍の瞳？何それカッコいい超欲しい。何処に行けば手に入る？」

「さて、何処でしょう？知っていても十六夜さんには教えません」

「賢明な判断だな。」

「おい、なんでお前はそっちの肩をもつてんだよ。」

気のせいだろ。

「水路も時々は整備していたのですが、あくまで最低限です。それにこの水樹じやまだこの貯水池と水路を全て埋めるのは無理でしょう。ですから居住区の水路は遮断して本拠の屋敷と別館に直通している水路だけ開きます。此方は皆で川の水を汲んできた時に時々使っていたものなので問題ありません」

「あら、数kmも先の川から水を運ぶ方法があるの？」

「はい。みんなと一緒にバケツを両手に持つて運びました」

「半分くらいはコケで無くなっちゃうんだけどね」

「黒ウサのねーちゃんが箱庭の外で水を汲んでいいなら、貯水池をいっぱいにしてくれるのになあ」

「……………。そう。大変なのね」

そりやまあそんな異世界チックに素晴らしい技術があったら水樹なんて喜ばれないだろ。

神を倒して手に入れたのがそれってどんな貧乏神だったのかと。

「それでは苗の紐を解いて根を張ります。十六夜さんは屋敷への水門を開けてください
！」

「あいよ」

十六夜が水路へと降り立ち門を開けるとそれを確認した黒ウサギが水樹を包んでいた布を貯水池の真ん中にある台座の上で解く。

水樹から溢れだした水は瞬く間に激流となり貯水池を満たしながら水路の先の十六夜へと——つて大丈夫かあいつ？

「ちよ、少しは待てやゴラア!! 流石に今日はこれ以上濡れたくねえぞオイッ!」

濁流に飲まれる直前何とか水路から飛び上がって俺らのところに着地した十六夜が恨めしげに黒ウサギを見る。

まあ振り回されてた復讐か？

自業自得だな十六夜。

何やら言い争いを始めた二人は置いておいてすごいな水樹の苗。

伸びた根が用水路へと広がるとそこからは放出する量もさらに増えて張り巡らされた水路へとどんどん水を送り込む。

「凄い！これなら生活以外にも水を使えるかも……!」

「なんだ。農作業でもするのか？」

「近いです。例えば水仙卵華などの水面に自生する花のギフトを繁殖させれば、ギフト

ゲームに参加せずともコミュニティの収入になります。これならゲームに参加出来ない皆様にも出来るし……」

「ふうん。で、水仙卵華って何だ、御チビ」

「花だろ。鳳仙花とかの水上演みたいな？」

「鳳仙花はわかりませんがまあ花であることに変わりはありません。水仙卵華は別名アクアフランとも浄水効果のある亜麻色の花なんですよ。薬湯に使われることもあつて観賞用にもよく取引されています。確か噴水広場にもあつた筈ですが……」

「……ああ、あれか。確かに似た特徴の花が咲いてたはずだ。名前の通り卵のようなものが。」

「ああ、あの卵のような蕾のこと？それならひとつくらいもらつておけば良かったかしらっ。」

「確かに綺麗だったけどな。採つたら景観を損ねないか？」

「ひとつくらい大丈夫ですよ。」

「だ、駄目ですよ！水仙卵華は南区画や北区画でもゲームのチップとして使われるものですから、採つてしまえば犯罪です！」

「……あんなところに生えてたら子供が間違つて摘んじゃいそうなものだけだな。」

「おいおい、ガキのくせに細かいことを気にすんじゃねえよ御チビ」

「いやいや細かいくないだろ、犯罪だぞ犯罪。」

「俺の法は俺が決める。結果無罪放免。」

「……………既にやらかした後かよ。」

それにしてもジンの方もいろいろ溜まっているようです先程から少し顔が険しい。

御チビ呼ばわりされていることが一番なのだろうがほっておけば身長なんて伸びるものだ。

……………極たまに伸びない奴もいるが。

「悪いが、俺は俺が認めないかぎりは“リーダー”なんて呼ばないぜ？今の御チビはリーダーの器じゃないしな。この水樹だつて気が向いたから貰ってきただけだ。コミュニケーションの為、なんてつもりはさらさらないからな。」

「あまり苛めるなよ。可哀想だぞ。」

今の十六夜の言葉はここまで幼いながらにコミュニケーションを引つ張る代表として過ごしてきた少年とそれらの面倒を見てきた黒ウサギにあまりにも酷だ。

「バカ言え、これは必要なことだろうが。いいか？黒ウサギにも言ったことだが俺は召喚された分の義理は返してやる。箱庭の世界は退屈せずに済みそうだしな。だがもしも義理を果たした時このコミュニケーションがつまらないことになっていたら……………俺は

躊躇なく抜けるぞ。」

威圧的にそう言い切った十六夜をこの中で一番扱いにくいと改めてそう判断したよ
うだ。

というか現状を面白いと言い切る十六夜のつまらない……………とはどういうことなの
だろう？

「あ、俺もやる事が終わったら元の世界に帰るぞ？」

「ええ!？」

なんで黒ウサギが反応するんだよ。さっき言っただろ。

「日向さんが帰ったら残った問題児様方の相手を黒ウサギが一人でしなくてはならない
じゃないですか！」

……………うん、諦めてくれ。

「俺も抜ける可能性あるから負担はそんなにねーだろーさ」

「自覚があるなら少しは自重してください……………」

そう笑いながら告げた十六夜に耳を垂らしながら力無く項垂れる黒ウサギ。

「十六夜さん！」

先程の暗い空間から少し空気が回復したところでジンが再び十六夜へ呼びかける。

「僕らは『打倒魔王』を掲げたコミュニティです。何時までも黒ウサギに頼るつもりはありません。次のギフトゲームで……それを証明します。」

決意を固めた様子の子のジンを見て更に笑を深めた十六夜。

だがジンはわかっているのだろうか？

“何を” 証明すればいいのか。

——十六夜にとってのつまらないとはなんなのかを。

chapter 2 人喰い虎食い料理人食い熊

ケモノさん、赤ずきんさんはこちらではありません

ケモノさん、赤ずきんさんはこちらではありません。

水樹を植えたあと、俺たち一行は現在コミュニテイメンバーが寝泊まりしているという館にやってきていた。

「案外でかいな。」

「たしかに貧乏という割には………かなり豪邸だよな。」

久遠はそうでもなさそうだがどうにも予想よりも大き過ぎる建築物に驚かされる。

別館まで付いているというのだから想像し難い規模だ。

「遠目からでもかなり大きいけど………近づくとも一層大きいね。何処に泊まればいい?」

「コミュニテイの伝統では、ギフトゲームに参加できる者には序列を与え、上位から最上階に住む事になっております………ですが、今は好きな所を使っただけで構いませんよ。移動するのも面倒でしょうから」

「そう。そこにある別館は使っても構わないの?」

「あちらは子供達の館ですよ。警備上の問題から皆で此方に住んでます。ああ、あちらを使っていたらいても構いませんよ……………もつとも飛鳥さんが二十人の子供と一緒に住みたいのならですが。」

「ぜひ遠慮するわ」

何故かいい笑顔で言い切った黒ウサギに一瞬でゲンナリとした表情になった久遠が即断する。

確かに一二十人の子供と生活するのは……………よほどの子供好きでなければ一日と持たないだろう。

「というかもう夜も深いけど……………浴場の掃除はできてるのか？」

少し疑問だったのが水門を洗わなければならないほどの期間使って無かったと言う事は同期間風呂も使われてなかったということだ。

黒ウサギが一切話題に触れなかった為に気になってはいたのだが……………冷や汗を流す様子から見ると洗ってなかったようだ。

「すぐに掃除してまいりますので少しの間お待ちください」と力強く言って駆け出していった黒ウサギに俺の「手伝おうか？」と言う言葉は届かず俺たち四人は少しの間立ち尽くした。

子供達を別館へと案内して戻ってきたジンにそれぞれ部屋に案内された後は俺は

ベッドへと倒れ込んだ。

不思議と疲労感はそのでもないがそれにしたって今日は色んなことがありすぎた。

風呂に入るにしても先に女性陣が入るらしいのでだいぶ後になるだろうしなんなら少し寝てしまおうか……………そんな風に少し微睡んで来た所でその鈍い幸せが突如乱入してきた十六夜に壊される。

「おら集合だぞ日向！」

……………。

「扉を蹴つ飛ばすことはないだろうに、壊れたらどうすんだよ。」

「こないお前が悪い、寝てないで早く来い。」

なんて横暴な……………。

しかし一度覚めた睡魔は都合良く襲ってきてくれるわけでも無く十六夜を追い払ったところでもう一度先程の多幸福感に身を包む事は出来そうも無い。

……………しようが無いか。

「わかった。女子の部屋はそんな乱暴にするなよ?」

「あいつらは自主的に来たぞ?」

……………あれ?俺がおかしいのか?

少し自分を疑いながら十六夜に連れられて入った貴賓室では既にほかの二人がくつろいでいた。

「あんまりにも遅いもんだから連れてきた。」

「なんか盛り上がりすぎてた見たいだけど何を話してたんだ？」

女子二人で話すことといえは男には入りづらいイメージがあるが………あの修学旅行の経験もあるし何より二人の住んでいた時代の違いや一般的な女子から離れた二人のことを考えると意外とすんなりとそう聞くことができた。

「あら、ようやく来たのね日向くん。春日部さんに友達がいなかったと言う話をしていたのよ。」

「なんだ、俺が部屋を出た時から話が変わってねえじゃねえか。ちったあ女子らしい会話を出来ねえのかお嬢様。」

「女子がしていたらそれは内容に関わらず女子らしい会話でしょうよ。」

「……………そういう意味じゃないと思うぞ。」

「あら、日向くんも私たちの女子トークになにかご不満が？」

どこか底冷えする笑みを向ける久遠に警鐘を鳴らす本能のままに話を変える。

「ところで本当に友達がいなかったのか？小さい頃とか遊ばなくても話すやつとかは？」

流石にデリケートな話だとは思ったが自分から話し出したらしい様子を見て少し踏み込んでみることにした。

結果は頬を膨らませて視線をそらすというどこか小動物じみた反応だったので別の意味でタジタジにさせられたが……。

「別に友達がいなかったわけじゃない。人間じゃないだけ。」

「……………ああ、なるほどな。そういえば春日部のギフトは動物とも会話ができたんだ。何だいいじゃないか！俺の仲間にも春日部と似たような奴がいたぞ。」

「……………似たような人？」

「ああ、田中っていう奴でな。いつも破壊神暗黒四天王っていうハムスターを4匹連れ歩いてたんだ。本当に動物と心を交わしてるみたいだったよ、あいつ自身動物としゃべれるとか言ってたから本当に話せていたのかもな。」

「そう……………すこし、会ってみたいかも。」

「……………そうだな、きつと二人は話が合うと思う。」

……………田中の話を理解できるかは別として。

「それにしても破壊神暗黒四天王なんてスゲー強そうな名前じゃねえか。実は戦えたりするのかそのハムスター？」

「……………いやあ、それはどうだろうか？」

式大の時は確か一緒に正面から戦ったらしいけど……………どうしても芸達者で表情豊かなハムスターとしか思えない。

「それにまあ気にすんなよ。俺も友達少なかったしな。」

「……………え？」

「あら意外、日向くんは別に忌避されるような事はないでしょう？」

「そのまるで俺たちは忌避されてるみたいない方やめねえか？別にグサツと来るわけでもねえがなんかスゲエ虚しいぞ」

「別に私は十六夜くんを指していたわけではないのだけれど……………ひよつとしてここにいるのって全員友達いない寂しい人達？」

「……………ぼっち。」

「いやぼっちっていうほどでもないけど……………まあ疎まれたりはしてたな。」

蘇るのは中学時代の記憶……………必死に勉強して希望ヶ峰への進学が決まった頃の周りからの声。

「……………この話やめないか？ぼっち自慢なんかしてもつまらないだろう。」

「それもそうね。それに今は春日部さんという友達もいる事だし」

「……………飛鳥、友達。」

「待て待て俺たちは違うのか。」

「十六夜は……………うん。一匹狼……………みたいな？」

「……………動物は友達だよな？」

「おい待て十六夜！いくら悲しいからって狼はどうなんだ!？」

「うるせえ！さりげなく俺のメンタルを削りに来たのはお前らだろうが！」

「あらごめんなさい。取扱説明書をもらっていなかったから少しぞんざいに扱い過ぎたみたい。」

「……………以下同文。」

どことなく既視感を覚える光景だが被害を受けてるのは黒ウサギではなく十六夜だ。というか十六夜がいじられてるのはすごく新鮮だ。

「この扱いは黒ウサギの役目だろうが！」

「いやそれもおかしいでございますよ!？」

浴場の準備ができたことを知らせに来た黒ウサギが自身の扱いに素早く異議を申し立てる。

「チツ……………」

「なんで舌打ちするんですか十六夜さん……………もう！湯殿の準備ができましたので女性様方からどうぞ。」

「それじゃ行きましょうか春日部さん。それじゃあお先にいただくわね十六夜君たち。」

「……………それじゃ。」

「俺は二番風呂が好きなのだから特に問題はねえよ。」

「俺も別にこだわりはないから構わないぞ。」

早速浴場へと向かった三人を見送って再び柔らかな椅子へと身を沈ませる。

微睡みを対価として払っただけあってコミユニティ内の壁は少しとつぱらえた気もするな。

特に久遠のことは気になってたんだけど……………普通に話す分には問題なさそうだったし……………。

「さて……………そんなじゃ今の内にお客様にご要件を伺わねえとな。」

「お客様？なんの話だよ。」

「おいおいわかんねえのか？外だよ外。」

……………外？

別に窓に影が映っているわけでも——待てよ？そう言えば久遠はガルドの手口について何か言ってたな……………。

たしか対戦相手のコミユニティから女子供を攫って人質にしているとか……………。

「なるほどな。まあ子供だらけのうちのコミユニティはさぞ狙いやすいだろうな。警備上の問題から一緒に居るらしい黒ウサギは今は風呂だし。」

「そこまで考えての行動かはわからねえけどな。」

まあそこまでわかつていてここで座っているわけにもいかないだろ。

椅子から離れたがらない体を無理やり気持ちで立たせて十六夜と共に外へと出る。

夜の暗さもあつて俺にはイマイチ居場所がわからないが十六夜の視線は脇の茂みに固定されている。

ということはそのこに隠れているのだろう。

片手で拾った小石を弄びながら十六夜は暇そうに立っている。

仕掛けてくるのを待っているのか。理由はわからないが俺は沈黙に耐えられなかったので空を仰ぎながら話しかけてみた。

「箱庭の星空は綺麗だな。星も月も……………」

「相変わらずのロマンチストだな。空なんか見てなかったぜ。」

嘘をつけ嘘を。

「十六夜は星座なんかわかつたりするのか？」

「まあそこそこにはな。だけど箱庭のはどうもバラバラだ。星座があるにはあるがとなりあつてないはずの星座までとなりあつてやがる。」

「……………わからん。」

「まあ今度時間があるときにでも教えてやるよ……………それより来るのか来ないの

か早く決めてくれねーか？じやないと風呂には入れねえーんだわ。」

突如十六夜が俺以外の何者かに問をかけた。

だが返事は返ってこない。

「来ねえなら——こつちから行くぞゴラアツ!!」

痺れを切らしたのか手に持つ石を振りかぶって茂みへと投擲する。

いや投擲というよりはもはや射出に近いそれはとんでもない威力で茂みを抉って着弾した。

「……………死んでないよな？」

「当てちゃいねえよ」

「いやあててなくても人が死ぬレベルだぞ!？」

心臓に悪いわ!

「な、何事ですか!？」

先程の轟音の正体を確かめようとしたのか館から出てきたジンが眼前の光景にしばし言葉を失った

抉れ隠れる場所のなくなったそこに黒い装束に身を包んだ男が数人姿を現すように立っている。

「招かざる客………つてやつか？」

「分かつてて放置したつてのは招いてるのときして変わらない気がするぞ。」

「何を——貴方達はフォレスガロのツ!?何故ここに？」

だがそれにしても………本当に来るとは………なんて”つまらない”

人質が取られたからまた新しく人質を取る………そんな負の連鎖を怯えゆえに抜け出せず愚鈍故に現実が見えていない。

つまらないというよりは………

「愚かな連中だよ。」

誠に面白くないがそれ以上にこれ程までに悲しみを誘う劇はない。

もつとも劇の分類としては大変チープな道化オーギュストが踊り狂う喜劇だが。

「落ち着けよ日向。怖い目してるぜ？」

………いつの間に。

少しほの暗い感情を抱いただけでこれとは………クソツ、情けない。

「大丈夫だ、それよりも」

「——ああ、こいつらの話を聞くとしようか。」

視線をくれただけでびくりと震える男たち。

黒い装束の隙間から覗く特徴的な耳と尻尾から殆どが獣族という存在であることが伺える。

中には爬虫類のような特徴を持つ者までいるのだから箱庭のバリエーションには感服の一言だ。

「お前から人間じゃねえんだな」

「あ、ああ。いかにも我々は人をベースにケモノのギフトを持つもの……格が低くこのように半端な変幻しかできないが。」

「なるほど、格が高けりやよりその特性を濃く引き継げるのか……いや特性を濃く引き継いでいるからこそ格が高いっていうんだな。」

「興味深い話だな。………で、話したいことがあるんだろ？さつさと話せ」

十六夜の催促に侵入者たちは顔を見合わせてから跪いて俺達の予想と寸分たがわぬ事を言ってみせた。

「恥を忍んで頼む。我々の………いえ、魔王の傘下であるコミュニティ、『フォレスガ口』を叩き潰していただきたい。」

「嫌だね。」

「そもそも俺たちは参加しない………というかさせてもらえないから知らない。」

俺と十六夜の辛辣な答えに侵入者もジンも驚いて言葉がなかなか出てこない。

「別に俺は他人でも助けられるなら助けたいとは思ってるさ。……………だけど別に見捨てられないわけじゃない。悪いとは思うけど俺はアンタらを助けたいとは思えなかった。今だって俺らに助けを求めに来たわけじゃないんだろ？」

「人質を取りに来て失敗して勝手に勝手に希望を持って自分勝手に頼み込んで来た……………違
うか？」

俺の対応が厳しいのは気のせいじゃないだろう。

だが自分のために他人を犠牲にできる人間を俺はよく知っている。

その人達を切り捨てる事だってたくさん経験してきた。

仲間ですええ切り捨てられる人間がどうして赤の他人を……………しかも仲間を狙った奴らを切り捨てないと言う結論に至るのか。

俺に救うことはできない。俺には彼らの希望になることができない。

あまりにも鋭い言い方に言葉をつまらせる侵入者と意図が掴めずその場で立ち尽くすしかないジン。

「人質を……………取られているのです。」

「自分勝手だな。ついでにいうならその人質既にこの世に存在しねえから。はい、この話題しゅーりょー。」

「いい、十六夜さんいくらなんで——」

「そこで口を挟むのは違うぞ、ジン。」

十六夜の余りにもはばかりぬ物言いに流石にと止めに入ろうとしたジンを嗜める。

確かにジンの行動は人としては美德だろう。

敵にも気を使い、仲間の過ぎた行動を止める……………だが敵は敵だ。そして彼はリー

ダーなのだ。

彼が気を使った相手は……………自分達に害をなす敵にほかなら無い。

覚悟を示すというのならば……………十六夜にリーダーであると認められたいのなら

ば……………選ぶ道はそうじゃない。

温いだけのリーダーなんて誰にでもできる。

逃げ道を示すことなんて誰にでもできる。

リーダーが示すべきは逃げ道ではない。少なくとも俺が知っているリーダーは

……………最後までそうであろうとしていた。

言葉にせずに伝わるとは思わないが……………気付かなければ意味が無い。十六夜の

意図はあらゆる意味で毒だ、叶うことならば自分の意志で歩いて欲しいと思う。

「そ、それでは本当に人質は……………ッ!!?」

「……………はい、ガルドは人質をさらったその日に殺していたそうです。」

「そんな……………」

ジンの態度にそれがタチの悪い冗談ではないことを悟ると力を失ったようにその場に項垂れる。

自身の中での「仲間のために」という免罪符が消えただけでなく自身と同じ存在を増やし犠牲を積み重ねた先に何も無いことを知った彼らの絶望は余程の物だろう。

だが俺に彼らにかけられる言葉はない。絶望に付け入る隙を与えたのは自分たちだ。

俺は原因を許すことはできないし彼らに同情もする……………だが彼ら自身を恨まないでいられるかと言われれば話は別だ。

……………だが十六夜はそんな俺のさらに上を行く。

俺も自分でも残酷なことをしていると思っているが十六夜は……………この後に及んでもなおその顔に笑みを浮かべ何かを言い出すタイミングを待っていた。

「お前ら…………『フォレスガロ』が……………ガルドが憎いか？叩き潰されて欲しいか？」
口から出るのは途轍も無く甘美な毒。

希望を奪うのが絶望ならばまたその絶望を払うのも希望にほかならない。

「……………あたりっ……………まあだ！俺たちが！あいつのせいで！！どんな目に遭ってきたか！！」

そして絶望に囚われた人間は絶望に墮落しながらも無意識に希望を求め。それはもはや明かりに誘われる虫の如く逆らい難い事象とも言える。

誰にも止めることはできない。

「そうか……………だがお前達にその力は無い。」

……………残酷な話。十六夜の差し出した希望は作り物だ。

悲しみに暮れる彼らだからこそ希望に見えるだけで彼らの罪が消えるわけでも死んだものが戻ってくるわけでもない。

失ったものたちは変わらさず怨嗟の声を向けるだろうし死んだ者へいくら話しかけても声は返ってこない。

「そうだ……………アイツは腐っても魔王の配下。ギフトの格も実力も俺達とは違うし万が一勝てたとしても魔王に目をつけられれば……………」

……………でもそれは希望を信じてはいけない理由にはならない。

いくら十六夜や俺が作り出した仮染の希望だとしても、俺たちが彼らを利用するために作った状況だったとしても……………彼らの気持ちは本物だ。

力を持たないことに苦悩し後悔することを罪だとは……………言わせない。

俺たちはこのコミュニティを——力を持たないもの達の為のコミュニティとして

再び立ち上がらせる。

その為にも――

「――仮にその魔王を倒すためのコミュニティがあるとしたら？」

「な、何を言っているんですか二人とも！」

その先に待ち受けるのが目的の魔王以外だったとしても俺たちはそれらをまとめて打倒する。

理解不能の現象？世界の創造??それがどうした。今も俺の目的は死者の蘇生だ。脳まで改造されて消滅はずの俺がこうしてここに立っている奇跡がどうしてまた起きないといえる？

「魔王を倒す為のコミュニティ……？一体それは」

「言葉の通りさ。俺達は魔王のコミュニティ、その傘下のコミュニティも含め、全てのコミュニティを魔王の脅威から守る」

「対価なんて大それたもんは請求しないさ。俺たちが求めるのは失った『名前』に代わるもの。」

「〃押し売り、勧誘、魔王関係お断り。まずはジンⅡラッセルまでお問い合わせを〃つてな。」

「ちよ、なにを——」「さて！あんたたちは何をしてくれる？ちようどお望みを叶えてくれる存在が目の前にいる。それも俺たちと違いガルド挑まんとする存在だ。」

突然のことに異議を申し立てようとしたジンの言葉を遮るようにして侵入者たちに問いかける。

「人質のことは残念だった！だけど安心していいぜ。明日ジンⅡラッセル率いるメンバーがお前達の仇を取る！その後の心配もしなくていいぞ！なぜなら俺達のジンⅡラッセルが『魔王』を倒すために立ち上がったのだから！」

「おお……！」

………俺もそうだけど随分と芝居がうまいことだ。頼むから次回からはもつと言葉にして意図を伝えて欲しい。

考えていることが同じだったから良かったものの違いはこのチャンスを無駄にするところだった。

これ程までに打算に塗れた希望を掲げるチャンスは早々ない。悪役と被害者とヒーローが揃ったのならば………せめて舞台ぐらいは整えるさ。

「やることはわかるな？わかったならさっさと帰れ。そうすれば後は万事上手くいくさ」

「わ、わかった！明日は頼むぜジンⅡラッセル！」

「ま、待ってくだ——」

もはや彼らの耳にジンの言葉は届かず仲間を失った悲しみとその悲しみを晴らす希望に浮かされた表情で素早く去っていく。

自身の預かり知る所で手も出せずに事が進む様を見せつけられたリーダーは力無く膝を折り、どこか自失呆然としながら黒装束の去っていった方角を見ている。

そんな可哀想な犠牲者を見ながらも俺は………自身の掲げてきた希望が毒になる様を見て………最後の裁判所での誓いを汚したかのような———そんな罪悪感に苛まれていた。

オーガ・サーカス《燃える館から私を連れ出して》同時上映、「母ちゃんの立つ食堂」

オーガ・サーカス《燃える館から私を連れ出して!》

まだ女子たちは風呂に入っているんだろうか?別に長ぶろは否定しないが今日に限っては早くして欲しいと思う。

水に濡れるし今の投石で土っぽいし………なによりジャバウオック島にいた間洗浄されていたらしいとはいえ自分でお湯に入りたい。

「——なんてことをしてくれたんですか!!」

ジンが放心中の痛い沈黙の中そんなことを考えていると先程の轟音に勝るとも劣らぬ勢いでジンが怒鳴り声を上げる。

まあ確かに俺たちがやったことは打たれる杭のようなこと。出しゃばれば打たれるのは必然、壊滅状態の今そんなことをして何の得があるのか?

「まあ落ち着いてくれよジン。」

まあなければこんなことはない。

あんまり騒げば他の子供まで出てくるかもしれないし十六夜が我慢できずに口を開けばどうせいらぬ言い方をするに決まっている。

「落ち着けるわけが無いでしょう!?!なんで魔王に喧嘩を売るようなことを——」

「なんだ俺達は魔王に喧嘩を売るために呼ばれたんじゃないやなかったのか?」

「十六夜はちよつと黙ってる。」

早くも場がカオスだ。ただでさえ世界規模で無秩序なのだからコミュニティの中までそれを適用しないでくれ。

「いいかジン。まずお前が納得できるように説明しよう。今俺たちに必要なものはなんだ?」

「……………戦力です。日向さんたちのような戦力が必要です。でも今はまだ時期尚早です!」

「だから落ち着けて。確かに戦力は必要だ……………でも俺たちには問題がある。」

例えばの話たまたまフリーの実力者がいたとしよう。これは別に実力者じゃなくてもいいけどその実力者に二つのコミュニティから勧誘がかかった。片や人気絶頂中、コミュニティとしての実力も右肩上がりなコミュニティA。

対するのは名前もなく旗もない、噂も聞かないしメンバーの殆どは子供ときた、そん

なコミュニティB。……………さて？この実力者はどちらに入るでしょう？」

「まあ間違いなくコミュニティAだろうな。」

「十六夜は黙ってる。」

口を閉じてられないのかこいつは？

「まあでも十六夜の言う通り酔狂なやつでもない限りは必ずAに行く。だからこそジンと黒ウサギは自身のコミュニティの実状を隠したわけだしな。わかるよな？」

「……………ええ、そのとおりです。」

「だけどおかしいな。ここで矛盾がひとつ……………今の俺達じゃ魔王と戦うには時期尚早、力を蓄える必要があるが……………しかしこのままいつても力はやって来てくれな。さてどうすればいいのだろうか？」

「……………名前を売って強者を募る。」

「Exac'tly. そのとおりだよジン、やれば出来るじゃないか。そう、名前を売ることから始める……………そのためにも効果的かつ俺らの目的に即したのは『対魔王』としての名前、コミュニティの名前が無いのなら個人の名前が望ましいよな？」

「——そして打って付けの状況がちょうどある。」

……………。

「おい十六夜。」

「お前ばかりずるいじゃねえか。俺だつて目立たせろよ。というわけで第二問だ。『対魔王』として名前を売ることができ、かつその証明をしながらも売名行為のデメリツトを打ち消せるような状況とは？」

「……………実際に魔王の影響を取り除いて見せること。そしてその影響が魔王にとって取るに足らないものであること。」

「おめでとう、無事に二問目も正解だ銀のたけしくん人形をやろう。」

「いりません！」

「おお怖い怖い。さて先生三問目をどうぞ？」

俺を押しつけて問題を出し始めた十六夜が今度は大人しく俺に順番を回してきた。

……………正直怪しすぎる。

「……………第三問。今のコミュニティに必要なことがわかった。そしてそれを実行するのにこれ以上はないほどにお詠え向きの状況がここにできている。これを実行すべきは誰だろう？」

「……………。」

「そこで黙り込むからジン坊ちゃんなんだよ。やるのは他の誰でもなくお前だ。黒ウサギでも俺でも日向でも他の誰でもなくお前だ。」

「で、でも僕がやるよりも日向さんや十六夜さんがやった方が——」

「なあジン？このコミュニティってゲームに参加出来ない子は何をやるんだっけ？」

十六夜の介入のせいで少し意地悪になったが俺はそう続けた。

「そ、それは……………皆様の身の回りの世話等です。」

「そうだよな。それでお前はこのコミュニティのなんだっけ？」

「……………。」

「……………黙っちゃダメだジン。前のリーダーがどんな人物だったかは知らないけどな、リーダーに力なんて要らないんだ。俺たちを呼んだ目的はなんだ？」

「……………打倒魔王のためです。」

「違う、まだまだ甘いぜジン坊ちゃん？」

「……………コミュニティの復興のため……………です。」

「そう、目的は復興のためなんだよ、ジン。復興のために一番重要なのは『力を持っているか』もそうだけど『力と頭をどう使うか』なんだ。……………自分に出来ることを考えようぜ、力なんかなくても……………案外成し遂げることは出来るもんだ」

話をそう締めくくって早々に館へと歩き出す。

既にヒントを与え過ぎたぐらいだが自分が何をやるべきかは自分で決めることだ。

たえ道筋が出来上がっていたとしても自分で決めたことに意味がある。

「ちよいとお節介が過ぎたんじゃねえの先生？」

「お節介は甘いから良いんだよ。甘いお節介つてのは総じて厳しいお節介に繋がるもんだ」

「……………経験者は語る……………つてか？」

「……………別に経験してなんかないぞ？」

「なかなかガードが硬いなお前。まあいいさ男二人で汗臭く風呂でも覗きにいこうぜ」

「ああ——つておい!!」

「ヤハハハッ！」

十六夜の無駄に高らかかつ夜でも失せぬ元気な笑い声にからかわれた事に気が付くが何にせよ……………

「……………今日はもう疲れた。」

そろそろ限界だった。

戻った貴賓室にてお風呂が空くまでの時間をガリガリと精神を削る十六夜との対話に当てながら夜空を眺めてふと思う。

星座が変わっているとか言ってたけど……………ジャバウオック島で見る星空も箱庭で見る星空もさして変わりはない。同じように綺麗で同じように仲間がいる。

明日のガルドという男とのゲームのことも気になるけど今は……………

(もう少し感傷に浸っていたい。)

そうしてようやく来てくれた微睡みを再びお風呂が空いたという声に飛ばされながらも俺達の箱庭一日目が過ぎていった。



夜も明けて来る日の朝、途中であつた猫娘(?)にエールと共に今日のゲームは舞台区画ではなくフォレスガ口の居住区で行われるという噂を聞かされて来てみたわけだが……………

「どう見ても人が住む場所に思えないのだけれど……………」

「……………森?」

「虎の住むコミュニティだしおかしくはないんじゃないか?」

「随分とワイルドなんだな。虎だからって自宅を森にするか?」

「いえ、前までは普通だった筈ですが……………一体何が?」

「素晴らしいながらジンが触れた木は不思議と脈動を繰り返して……………脈動ツ!」

「これは……………」
「鬼化」している? いやでもまさか——」

久遠のギアスロール発見の声で中断されたジンの分析を引き継いで木を見てみる。

木に詳しいわけではないが確かにあまり見ない生態だ。水仙卵華のように違う生体があるとはいえここまで異質となると……………それにジンが言っていた“鬼化”って鬼になつてゐることか？

ゾンビに噛まればゾンビに、吸血鬼に吸われれば吸血鬼にと言われてはいるけどなんだってそんなものがフォレスガロに？

……………それ以前にこの木……………何か嫌な感じがする。

この感じは……………そう。何かいけないことが起こる直前のあの感じ。

こういつた感じの後にはだいたい誰かがいないとか死体が見つかったとか——

「……………ん？」

そんなふうにして一人だけ別の方を向いていたからか茂みの奥に何やら小さな影を見た。

俺が目を向けた瞬間木に隠れたせいでよく見えなかったがあれは確かに人影だった。

ガルド……………ではない。そもそもガルドは大男らしいしガルドのコミユニティは今皆屋敷にいないと猫娘が言っていた。仮に嘘だとしても子供がうるさくて殺してしまっただなんてことをしてしまうような男のコミユニティに子供なんて……………では誰

だ？

そこで何やらガルドを倒す為の指定武器の話をしている仲間たちを一度振り返る。

………戦いの前に心配を増やすような真似はしたくない。そして他の二人にしたらって黒ウサギは審判としてゲームに集中して欲しいし十六夜だって結末を見届けなきゃいけない。

——よしつ、行こう。

俺は木々と同じように脈動をする茂みを掻き分けて奥へと進んだ。

見えた影がいたのはそう遠くない位置。草や枝を掻き分けて何とか這い出たそこは軽い広場になっていた。

木々がそこだけをよけたかのように拓けたその真ん中に俺が見た影はいた。

異様に低い身長に対して少し太めの横幅と櫛で丁寧に撫で付けられた外国風のリーゼント。

左右の髪は編み込まれ後ろへと流れる。

少し派手な髪型と対象に清潔に整えられた赤いスカーフ白いシャツに白い帽子。腰には赤い布が巻かれている……………

「ソフフツ、アバンチュールな夜は過ぎさせたかい？日向くん」

——
考えていた中でも最悪の形を作って絶望はそこに立っていた

味わい深き絶望の舌

味わい深き絶望の舌

——— なんて？

「ムムツ？何やら君から怪しい香りがするなあ……………ひよっとして恋の味を知っちゃったりしたのかい？」

小さな影は洒落た髪に櫛を通しながらキザったらしくそう問い掛けてくる……………いやむしろそれは問いなどではなく自己紹介に近いものだったのかもしれない。その言葉は確かに俺の知るあの男らしい台詞に相違なかったから。

「何をしてるんだよ……………花村！」

——— 男の名前は花村輝々。

超高校級の料理人として希望ヶ峰学園に招かれた逸材。
料理の腕前もさることながらこと〃性〃に関して並々ならぬ興味を持つ。

そしてジャバウオック島で最初の事件を起こした人物。……………それが花村輝々。

「なんで？なんでつてそりゃあ……………」

「……………それは？」

顎に手を当て顔を顰めさせて俺の問に答える

「——そこに女の子がいたからさ！——」

「——はあ？」

非常に碌でもない答えだった。

「花村……………ふざけるのはよせ。俺は真面目に聞いて——」

「ひどいや！日向くんは僕が嘘をついてるっていうんだね!？」

「いや、そういうわけじゃないけど……………」

……………だけどそれを信用するわけに行かないのも事実だ。そもそも俺が聞きたかった答えは理由ではなく原因……………なんの目的かではなくどうやってここに来たのかだ。

そしてめでたいはずの再会を素直に喜べない一番の理由は……………花村が漂わせる

深い絶望の臭い。

「……………なあ花村、もう一度聞くぞ？なんでお前はここに来たんだ？」

見逃すわけにはいかないそれ。

花村が俺を誘い出した理由。

俺がそれを再度問いかけなければならなかった。

また変な事を言つて煙に巻こうが俺は僅かな反応すらも見逃さ無いと眼光鋭く観察する。

「ソフフ♪君は変わらないね。」

だがそんな俺の視線を知った事じゃないと言わんばかりに花村は尚のこと絶望を深めて表情を笑みに変えた。

先程までの困つたような表情はもう見えない。

「……………どういう事だ？」

「そのままの意味だよ。僕がとつてもジューシーに揚げられた時と何も変わっていない。君の希望は……………ひどく脆い、ナンセンスだ！」

花村がそう言つてこちらへと指を向けた瞬間黒い紙が溢れるように花村の後ろから吹き出してきた。

その光景に少し後ずさりしながらもこちらへ飛んできた一枚のそれを掴み読んでみ

る。

書かれているのは……………ゲームの内容？

「俺はこんなゲーム承諾してないぞ!？」

「それでいいんだよ日向くん。もともと絶望という味覚は自身で刺激する事は出来ないんだから!」

「な、何を言ってるんだよ!」

何かに酔ったように狂言を吐きながらも花村は確かな口調で続ける。

「絶望は最高のスパイスだ!最高のオードブルで最高のスープで最高のフィッシュで最高のシユラスコで……………??？」

「お、おい!行っていることが滅茶苦茶だぞ!」

だがこの感じは記憶がある。たしか絶望病に犯された罪木も……………!!

「やっぱり絶望に犯されてるんだな……………花村!!」

「……………絶望?ンフフ、何を言っているんだい日向くん。絶望なんて……………絶望なんて……………最っ高じゃないかア!!絶望は絶望に絶望が絶望を——ああ絶望絶望絶望絶望絶望絶望絶望!!ぬウウらべっちゃアア!!どげんかせんといかん!どおげんかせんといかんでそれはああああ!!」

……………どうか……………している。

絶望……………なんでもここに居るのかはわからない。

でも……………ここにあるのならそれは祓わなくちゃいけない。

「目の前で花村が絶望に深く落ちていくことに俺は逆に自分の中の希望を意識出来るようになっていた。」

以前以上の活力に満ち溢れむしろ眼前の絶望を飲み込めんと体を動かそうとする。

——いいぜ、やってやるよ花村。

「……………その絶望……………撃ち抜かせてもらおう!!」

——ゲーム開始だ。

▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽

ギフトゲーム名 “絶望の味覚”

・プレイヤー一覧 日向創 花村輝々

・クリア条件 相手の希望、または絶望を奪う

・敗北条件 希望、または絶望に飲まれる 死亡した場合。

宣誓 上記を尊重し、誇りと御旗とホストマスターの名の下、ギフトゲームを開催します。『絶望の星』印

△△△△△△△△△△△△△△△△

*

「ソフフ、いいのかい？ スマートにいうけどこれは君に得なんて無いんだよ？」

「得がなかったのはロシアイ修学旅行の時から変わってないさ。これはあれの延長戦だ………なら決着はつけない。そうだと花村？」

「フーム、随分と凝った希望だね。なら解してあげないと………料理には使えないからね！」

やはり面と向かって対峙するだけで飲み込まれそうだ。

話していたって俺に勝利は見えてこない。

「それで？ 結局ゲームの具体的な内容はなんなんだよ。」

この謎の黒いギアスロールにはゲームの深い内容が書かれていない。

勝利条件が相手を希望に戻す事なのはいいとしても問題は手段だ。

「ン？僕は優しいからね、そんなものはないよ。好きにすればいいのさ！どうしてもというなら僕とアバンチュールなひと時を過ごすかい？」

「いや、いい。」

何故かわからないがアバンチュールなひと時と言われると背筋がゾツとする。

「つれないね。そんな消極的な考えで僕を希望化出来ると思うのかい？」

「出来るさ。いや……………してみせるよ。俺が勝つて……………お前を助けて見せる。」

「助けてみせる……………ねえ？」

俺の言葉の何かが琴線に触れたのか花村はそう俺の言葉を復唱して顔を俯かせる

「なんだよ。」

「いや……………別になんでもないさ。ただ他の人がどうかは知らないけど僕を希望化するのとは不可能だよ。」

「そんなことないぞ花村。それが難しいことなのはわかる。でも不可能なんてことは無

いー」

「……………ンフフ、傑作だよ日向くん。」

……………俺の言葉が聞こえてないのか？

「それじゃ仕込みをはじめるとしようかな？」

「……………仕込み？」

「例えばの話。日向くんは僕がどこまで〝あの世界〝の真実を知っていると思う？」

……………花村が死んだのは何も明らかになっていない時だ。もちろん何かを知っているわけが無い。

だが絶望としてここに立っているということは逆にジャバウオック島での事を知らないという可能性も出てくる。両方の知識を持つてるのは俺とあの時俺と共に脱出した四人だけの筈なんだから……………。

問題は花村の絶望がギフトによるものなのか前の世界でのものなのか……………それによつて花村の記憶がジャバウオック島でのものなのかそれ以前のものなのかはつきりする……………。

「……………全部だ。花村は外の世界のこともジャバウオック島でのことも全部知っているはずだ。」

「……………ハア？頭がおかしくなっちゃったのかな日向くんは。それとも忘れちゃったの？僕が死んだのは一番最初の学級裁判の時で……………」

「その言葉……………」 斬らせてもらおう!!」

「……………アポ？」

……………アポ？

「と、とにかくサービスが過ぎるんじゃないか花村？なめてるのかどうかは知らないがこんなのを考えるまでもない。」

「そんなこと言わずにちゃんと味わって欲しいものだね。」

「悪いけどそれは無理だ。そもそも真実を知らない人間は『どこまであの世界の真実を知っているか？』なんて言い回しはできない。というかそもそもそういう話題すら振れるはずがないんだよ。そして何よりも希望化と言う言葉は未来機関のごく一部が使っていた言葉……………絶望だった頃の花村にもジャバウオック島での花村にも知る機会なんてなかった筈なんだ。」

思い込みを利用した巧妙な叙述トリック……………だけど俺は伊達にあの修学旅行を生き抜いていない。

「なるほどね。そうして日向くんは謎を美味しく頂いちやったわけか。」

「……………待て。その表現は色々と危ない気がする。具体的に何とは言わないけど俺の良く使う言葉と相まって凄く危険な感じがする。」

「それじゃあなんで僕はそれを聞いたのかな？これは解けるかい？ヒントが欲しければこのブーメラパンツに着替——」

「俺を絶望させるためだろ。自分が希望を持たないことに自信があるってことはその理由を相手が知れば相手は勝利できないことを悟って手早く諦める……………つまり絶望

するわけだ。」

「——あべばっ?!……ムムツ、なかなかやるね日向くんは。予想以上だ。」

「花村、言っておくぞ。俺も絶望なんてする気はない。お前を絶対に希望に導いて見せるー!」

「導いて見せる………か。やっぱりあの人が言っていたとおりだ。」

「………あの人?」

脳裏によぎるのは罪木も言っていたあの人と言う言葉………まさか——

「日向くんは脆い。日向くんのそれは絶望には眩しすぎるよ。ほらよく居るだろう?やたら暑苦しい熱血キヤラ。下級生にも一人いたね。石丸くんだっけ?まあどうでもいいけど彼みたいな輩ってあまりやる気を持ってない人からすれば冷めるだけなんだよ。鬱陶しいのさ。今の日向くんは——あの狛枝に似ているね。」

——へ?

「俺が………狛枝に?!冗談じゃない!俺はただ希望を!」

「希望希望希望希望希望希望——冗談じゃないっぺよ!!いったい何様だズラア!!」

オラは希望なんかいらねえ!

オラは絶望でええ!

オラはもう料理人なんかじゃ………ねえんだよおおお!!!!

「話を聞いてくれ！」

「話?! またオラを処刑台に送るんか?! オラは守ろうとしただけ! それだけしかないっぺよお!!!」

ダメだ。また錯乱状態になった。

「オラは望んで絶望に落ちたんだあ! 真実を知ってなおオラは絶望になっただ! 余計なお節介もいい加減にしてけろ!! オラは、オラはああああ!!」

「————望んで絶望に落ちた?」

どういうことだ?

なんで花村は絶望になったんだ?

望んで?

そんな訳が無い。だって花村は………最後まで母親のことを………???

「………母親?」

………真実を知って………それはどこまで?

————全部。

なんでそれを俺に？

——絶望させるため。

……………なぜ花村は俺が絶望すると？

——俺が超高校級の希望だったから？だからこそ俺だからこそ絶望すると……………。

「そん……………な……………嘘だ。」

花村が絶望したのは……………俺のせい？

俺が超高校級の希望になった事を憎んでるのか？

俺がああ事件の元になったから……………なのか？

「嘘じゃないよおう」

そんな風に失意に沈む俺の意識を……………どこか状況にそぐわぬ明るい第三者の声

が見送るのを最後に俺の視界は暗転した

最悪の絶望と最初の絶望と絶望の豚カツ

最悪の絶望と最初の絶望と絶望の豚カツ

「よもや目覚めて最初に見るのが貴方とは……………もはや分かりやす過ぎて考えるまでもない。」

「ちよつとちよつと！そんな使い古された存在みたいな言い方って無いクマー！」
「ぴ、ぴいー！内容と語尾が噛み合っていないよ！」

……………何だこの茶番は。

「何にしても帰ってきてくれて嬉しいよ。あの超高校級の希望を、あのザツコザコな日向君のままにしておくのは世界クラスの損失だもんね！」

「な、なんか良く分からないけど……………僕、ゲームに勝ったんだよね！だよね！」

「うん！そりやもちろん——ありや？」

身体の調子は悪くない。状況も理解出来る。

いきなり彼女が出てきたことに懸念はあるが……………この体を使っている以上問答

無用で絶望に犯されることはないはず……………そう考えればこの体も悪くは無いのか？

——まあ何にせよ……………

「ゲームが続いてる？ どういう事だよ。お前、何かした？」

そう問いかけてくるのは天使の如き愛くるしきを持つシロクマの右半身と悪魔の如き醜悪さをみせる赤き瞳のクロクマの左半身をくつつけた様なヌイグルミ。

「した……………とも言えるししていないとも言える。非常に瑣末ごとですがこの状況の原因は僕ではなく……………日向編僕ですよ。」

「……………腐っても超高校級の希望……………って事だね。全く前哨戦にしか過ぎないここでこんな妨害に合うだなんて僕つてば本当についてない。これじゃまるで超高校級の不幸だよ！」

……………ゲームの内容は自由。

先程までは討論で決めていたか……………討論というには些か片方が正気を失いすぎていてお粗末だったが。

「あれれえー？ 返事が無いのは寂しいなあ……………学園長を無視するなんて、許しませんよおー！」

「箱庭に来てもおその体とは……………先の勝負では随分と手痛く絶望できたみたいで

すね。ここはひとまずおめでとうと言うべきですか？」

「……………本当に嫌味なやつだなあ。そういうお前は随分と明るくなつたじゃないか。ツマラナイしか感情のない妖怪ツマラナイな君はどこに行つたのさ。体だつて日向創ままじゃない。」

自身の体を見下ろすが確かにあの暗く世界と自分を分けるかのように伸ばされた髪は視界に入つてこない。

「……………希望を持たない希望に向かつて希望の質問とはまた随分と絶望らしいですね。僕日向創のことは知りませんよ。そもそも希望と絶望は言葉で表現できるような存在じゃない……………もつとわかりやすい形であるのなら僕が希望と呼ばれることもなかったでしょう。そして貴方が出張るまでもなく僕は絶望のままだった…………。」

「世界の破壊者が随分と希望を語るね……………。まあいいよ、花村くん。やつちやいなさ……」

「え、僕!?というかだつてあれ絶望に染まつたんじゃないか——」

「無理ですよ。いくらあなたが頑張ろうと僕を絶望させることはできない。」

「……………希望が努力を否定するのかい?」

「希望カムクラだからこそ否定する。残念ながら僕日向創とは違い僕は努力した事がありませんから。」

「と……とん主人公に向かないやつだなあ君は。」

「友情一割、努力一割、勝利一割、運7割よりも勝利十全、運十全のほうが事件は解決できると思えますけどね。逆境がお望みならば確かにそうでしょう。最もそれは何よりも絶望的なあなたが望むものではないんでしょうけど。」

「……………さて、虎狩りも終わつたようだし。あまりノンビリもしてられませんね
「ゲームを終わらせましょうか。僕は僕ほど希望日向割をしていない……………それでも既に掬われている足元をどうにかできないほど軽く見られるのは元希望としても屈辱ですから。」

「あの不良生徒の根性を叩き直してあげちゃつてよ花村くん！」

「え、だから僕なの!？」

恐らくながら彼は元々完璧に絶望に沈みきつてないように見える。

だからこそ僕の希望日向割が作用して不安定になる。

それが彼女の狙いだったのなら……………そんな風に考えれば絶望につけ込まれるか。
今の状態では僕の才能も十全にその力を発揮できないようだ……………

「状況的には五分と言つたところじゃないかな?」

「違いますよ……………状況は既に五分ではなく僕に十全です。」

たしかにこのままいけば良くて硬直状態……………でもだからこそ貴方にはこの一手は予測出来ない。

「花村輝々は初めから僕を憎んでなんかいませんから。」

「……………何言っちゃってるの？花村くんの絶望の根底は君だよ」

「ええ、だからあなたは彼を初めに僕に当てたのでしよう？でも当の花村輝々は僕の言葉を否定できない。」

事実花村輝々は僕の言葉を否定していない。

「……………なんで？」

「さあ？ただ……………彼にも思うところがあつた。それだけですよ。」

「……………そうだとしてみんなでそんなことが分かつたのさ。花村くんの絶望は本物だつたはずだよ？」

「この際絶望が本物かどうかは関係ないんですよ。問題なのはその絶望の原因を目の前にして彼の態度が何も変わらなかつたこと。そしてついでにいうならば彼の絶望は本物じゃなかつたということですよ。」

「お、オイラは確かに絶望して——」

「絶望した人間は絶望なんか憎しみを抱きませんよ。持つのは十人十色の愛だけ……………ゲームは始まるまでもなく決まっていたんです。」

……………だからこそその茶番。

「相手が僕で日向朝良かったですね。そうじゃ無ければ今ここに花村輝々は無く、ただの絶望

の端末が蘇っていたことでしょうか。」

——故にツマラナイ。



「あれ？そういうえば何か忘れてる様な……………」

謎の鬼化した樹木のこともあるて気を緩めることができずにいたフォレスガロとのギフトゲームも曜さんが怪我をしましたがなんとか終わりジン坊ちゃんが囚われていた傘下のコミュニティに旗を返しているところであつた。ふとなにか足りない感じが致しました。

「あら？日向くんは私たちの応援もよそに何処に行っているのかしら？」

「日向さんですか？」

そう言えば確かにいないような……………そもそもギフトゲームが始まった時点で居

なかったような………最後に見たのは………ギアスクロール確認の前!?

「い、一体どこに!」

急いで黒ウサギ自慢のウサ耳で周囲を探ると何やら謎の力が働いている空間が付近に存在しました。ものすごく気味の悪いその空間、なぜ気づかなかったのかと思えるほど存在感を放つその空間に日向さんはいらっしゃいました。

ですが放つ雰囲気は何時ものモノではありません。

目の前に立つクマさんのようなヌイグルミと料理人姿の男性と対峙する姿は何処か鋭くにか空恐ろしいモノを感じました。

しかし謎の空間のせいか会話までは聞き取れません。

それでも無理やり会話を探ったのは日向さんと向かい合う二つの影の“イケナイ”空気です。

それにしてもウサ耳の干渉をふせぐことができるのは余程特殊なギフトゲームの時位しかありません。

黒ウサギはウサ耳を使って急いで確認とってみました。分かったことは行われているゲームが魔王のものであるという事。

思わず背筋が泡立ち顔から血の引くのがわかりました。

「い、一体何が!」

黒ウサギの尋常ならぬ様子に詰め寄る飛鳥さんに反応することすらせず必死に空間への介入を続けます。

そうしてようやく聞こえてきた会話は何やら物騒でよく日向さんが口にする“絶望”と言った言葉。おそらく当事者でなければ理解が難しいその会話の中でひときわ異色を放つ今の鋭い日向さんを指すであろう……………

「……………世界の破壊者？」

「どうしたよ黒ウサギ。いきなり随分と物騒な事つぶやくじゃねえか。」

「いえ……………その、なんといいですか……………」

いつの間に旗を返し終えたのか戻ってきていた十六夜さんが話に加わります。

「先程から随分と焦っているけれど日向君がどうかしたの？」

そうでした！あまりな表現に驚いて一瞬我を忘れましたが今日向さんは魔王のゲームの真つ最中。何とかして助けに行かねばなりません。

「お聞きくださいお二方——」

「何だもうゲームが終わったのか？早かったな。」

連戦の飛鳥さんはキツイかもしれませんが急いで救助に向かつてもらおうとそうお二人に呼びかけようとしたところでそれは予想外の人物に遮られます。



「あら、日向くん。今まで何処に居たのかしら？コミュニティの仲間が死ぬ思いで猛獣に立ち向かっていたというのに。」

「悪かったよ。それにしても久遠から死ぬ思いって言葉が聞けたあたり少しは俺達にも気を許してくれたのか？」

「なにを——」

「だってお嬢様出会った頃なら絶対俺らに弱音見せなかったよな、なあ日向？」

「ああ。いやようやく仲良くなれたみたいで嬉しいぞ。」

「くくくッ!!?春日部さん怪我までしたのに友達として余裕だった言うのはどうかと思っただけで別にそんな他意があつたわけでは……そう、そうよ社交辞令みたいなもの——」

「……………社交辞令なの？」

焦って色々と残念なことになっている久遠へ春日部が追撃をかけて見事に撃沈させる。

「それにしても久遠の言う通り怪我してるな。結構大きいけど動いて大丈夫なのか？」

「あまり大丈夫じゃないけど………治癒能力とか体力とかも軒並み上がってるし見た目程深くないから大丈夫。」

「そういうふうになんか安心していると案外危なかったりするんだぞ?」

「むう——大丈夫と言ったら大丈夫。」

「こっちはまだ心を開いてくれないみたいだな。諦めろ日向。友達じゃない俺らには無理だ。」

「……………お前まだそのこと引きずってんのか?」

「うるせえ!」

一連の流れもようやくオチがついたところで会話に入ってこない黒ウサギの事になった。

視線をそちらへ向けてみれば当の黒ウサギはまるで幽霊でも見るかのような目でこちらを見続けている。

「どうしたんだこれ?」

「知らね。俺が来た時には世界の破壊者がどーのーのーの。」

「世界の破壊者? 私は黒ウサギと日向くんがどこにいるのかの話をしていただけだぞ

……………」

「……………俺の?」

意識が戻った頃には既に花村の姿はなくなっていたが………世界の破壊者というのはまず間違いなく絶望の端末だった花村のことだよな？あの場にいた端末だったやつは花村しか………

——いやカムクラもそうなのか。むしろそっちの方が自然だ。俺が絶望に落ちたのならばカムクラが出てくるのが当然………でもそれじゃなんて俺が今ここにいる？ゲームはどうなった？

………わからないことは置いておこう。

今は黒ウサギがああ場をどこまで見たのかが問題だ。

「それで結局日向はどこに行ってたんだよ？」

「ん、ちよつと熊に追いかけてた」

「……………それはジョークかしら、なにも面白くないわよ。」

「全くだ。流石にそれは俺も庇えねえ。でもとりあえず興味あるから俺を案内しろ。」

「……………みた……………い。」

「無茶いうなつての。特に怪我人は大人しくしてろつて。」

正直気が臭いじゃないから。

それにしても問題は山積みだな。

ジンが黒ウサギを現実に引き戻すのを横目にオレはまたもや夜空を見上げる。

やはり夜空は………どこでも変わらない。



以前日向が黒ウサギを手伝うと決めるときは世界を救うと言っていた。

日向の世界を聞いた時は俺の世界と似た世界だったと言っていた。

白夜又は日向の抱えているものが星ですら抱えられない物だと称した

そして黒ウサギは日向に関する何かを知った。キーワードは『世界の破壊者』。

………おもしれえよ。

やっぱりこの世界は非常に愉快だ。

「世界を救うだの破壊するだの………実は身内が一番面白いんじゃないか？」
時々自分の世界にトリップする今の仲間を見ながらかつて感じたことのない昂りを
俺は感じていた。

——
だからオモシロイ。

日向くんモード別設定

モード別日向君

ノーマルモード

何ら特徴のない一般ピーポー日向くん。普段のひなた君で戦闘力はほぼ皆無。怒りっぽい性格は少し改善された………というか周りが問題児過ぎてなかなか機会が無いだけか？

基本ジゴロだが異世界の人達は日向を友人としか見ない。ロンパの世界のアイテムは基本持つている。出番があるかは不明。髪型の安定感と体力だけは超人クラス。

なお話すことが増えてきたので関係が修復しつつあるが飛鳥とは未だに微妙な距離感。

基本苗字呼び呼ばれ。ジンと白夜叉、黒ウサギ、ガルドは名前。というか通称、フアー
ストネーム系は名前。

ロマン日向くん

基本希望でも絶望でもないがその時の環境、状況によって多少左右される。

このモードの間はおぼろげながらも記憶が保持されしかも仲間一人の才能に限りほぼ完璧にトレース可能。でもロマン発動のキーとなったことに一直線になりまたそれが終われば後は緩やかに元へと戻る。

なおロマンがあることではなく「ロマン」というワードに強く反応する。日向の意識の持ちよう如何によつては発動しない。

弱絶望モード日向くん

カムクラの影響が始めて若干性格的に黒くなった日向くん。主に絶望を感じさせる存在や自身の絶望を思い出させる存在に会うと発動しやすくなる。何一つとして才能を使いこなせないがその片鱗を操る程度の力は持ち一つ一つをとつてもギフトとぶつかり合うことは可能。この間は記憶も何も絶望的思考の日向くんそのもの。

マイルドカムクラ

日向ちゃんと相互に干渉しあつた結果生まれた非常にマイルドなカムクラ。想像するなら「人格感情記憶趣味等のモノを自分で持つようになったカムクラ」。ただし見た目は日向くん。……………完璧じゃねとか言っちゃダメ！

なおこの際の記憶は日向くんに無い。

なおこの状態のカムクラはまだ不安定なので才能が使えるが使う事に希望方向にメーターが偏りノーマル日向くんへと戻っていく。ちなみに結構日向に協力的。

誕生したてなので口癖はまだツマラナイのまま。人はフルネーム呼び

微希望日向くん

希望を軽く意識し始めた日向くん。

仲間の才能を百パーセント再現できる。そして他人の絶望にはめっぼう強い。ただし自分の希望を揺るがすようなことには打たれ弱い。

カムクラ

希望に追いやられて眠っているが既に目覚めの兆候あり。日向や苗木のもつ超高校級の希望以外の全ての才能を持つが完全に絶望よりの人格なためまともに使ってくれ
るかは不明。口癖はツマラナイ。人のことは多分呼ばない

超高校級の希望モード

容姿は石丸二世。白髪赤目。ただしエフェクトは両目から炎ではなく体から雷。

絶望系統のあらゆることを無効化する。

絶望が絡んだだけで物理現象すら否定する。

絶望以外の全ての才能も持つており基本スペックまで軒並み上がる。要は希望と絶望が反転して主人格が日向君になったカムクラ。

ただし今はカムクラちゃんと拮抗中、手が離せない。

超高校級のナンパ師モード

プレゼントと巧みな話術で相手の心を解き辛い過去だろうが秘密だろうがペラペラ喋らせ挙句には相手のパンツとスキルを奪って………自主的に差し出させる最強モード。なお対象の性別や人種は関係ない。

絶望にも通用する。しかも………天然。何よりもひどいのはその秘密を個人別に生徒手帳に丁寧にかつ上手く纏めるていること。

chapter 3 ギリシヤ風鬼ヶ島アフタームービー オーガとヴァンパイアの芸術、鬼の石像再び!

オーガとヴァンパイアの芸術、鬼の石像再び!

フォレスガロとのギフトゲームを終え館へと帰ってきた日向たち。

ぶっちゃけ無事とは言えないがそれにしたって厳しい条件と不確定要素の多かった虎のゲームと絶望そのものとの対峙を経て死者が出なかっただけで十分無事だと言っておきたい。

さて、そんなわけでギフトゲームに疲れて、春日部は療養だが自室で落ち着いている二人と子供たちと共にいるジンを除いた三人が今宵この談話室には集まっていた。「ゲームが延期? どういう事だよ。」

「先程申請に行った時に知ったのですがどうやら巨額の買い手がついてしまったらしく、ギフトゲームは延期………悪ければ中止になってしまうかもしれないとの事です。」

「何だそりや、エンターテイナーとしては三流以下だな。」

「それ以前に何の話だよそれ。なんかゲームに出る予定だったのか？」

十六夜と黒ウサギが進める会話にそう割って入ったのは日向だ。

何やら事前に場を設けて情報を共有していた二人とは違い日向は今の会話について何も聞かされていなかった。

「そう言えば日向はいなかったな。……簡単に言えばコミュニケーション復興の第二步目。元コミュニケーションメンバー奪還の話だ。」

「……………なるほど。どっかのギフトゲームの商品になってたってことか。なにやら時代逆行した気分だな、そういうの。」

「奴隷のいた時代へと……………てか？別に今の時代でもない話じゃないんだろうぜ。まあ俺らみたいな日本の一市民にや耳の遠い話だけだな。」

「まあその話は置いておいても中止か……………。事前に告知があつたんだ。文句をつけたりとかその耳の繋がっている中枢的な所に異議申し立てができたりはしないのか？」

「出来なくも無いでしょうが結局はそのコミュニケーション……………『ペルセウス』の裁量しだいですので。そして聞く噂からすればおそらく彼のコミュニケーションがこちらの異議を聞き入れて下さる可能性は限りなく低いでしょう」

そう耳を垂らす黒ウサギの姿は見慣れたものだがその身に絶望を纏っているのはま

た別……………それほどまでに期待していたということなのだろうけど……………確かに手の出しようもない。

相手が法に則って動いている以上こちらの言葉は全てイチャモン。それを気にしない胆力、規模があるのならばこんな弱小コミュニティのことなんぞ歯牙にかける必要はない。

個人というなら別にしても組織規模で上位のものに逆らうというのは滅多にあるものではない。

またノーネームのように力が無いコミュニティは脱法の危険も犯せない。弱みを作れば瞬間に潰されてしまうからだ。

「確かに取れる手はそう多くないな……………ってペルセウス?あのゴルゴンの?」

「派生は多々あるが蛇の髪をした石化の瞳を持つ女っていうならまず間違いはねえよ。ペルセウス……………空飛ぶ靴とその盾が有名だな。最も盾はそのゴルゴンの首をとったあとの話だが。それにその後は知恵の神アテナに盾を渡してる。」

「よくご存知ですね十六夜さん。こちらのペルセウスはハデスの兜であったりハルパーという鎌を持っていたりしますがそのとおりです。そして一番厄介なのはそのゴーゴンと同じ特性を持つ隷属させられた魔王にあります」

「……………魔王まで持つてるのか。直接戦闘はしたくないな。」

「何言ってるんだよ。そんなこと聞かされたら戦うしかないだろ？……ただ戦うまでが問題だな。サウザンドアイズにはプライドがねえってか？」

「なんで戦う方向に話が進んでるのか知らないけど……サウザンドアイズ？何でそこでサウザンドアイズが出てくるんだ？」

「サウザンドアイズは群体コミュニケーションなんです。特にペルセウスは傘下の幹部、だから直轄の幹部白夜叉とは違い双女神の看板に傷がつくことも気にならないほどのお金やギフトがあれば……こういつたギフトゲームの撤回ぐらいやるでしょう。」

「……なるほど。信用と言ったことを考慮しないでいいほどの大手ならばやりかねないな。」

それでも普通はやるもんじゃないが……あくまで実力主義がすぎるこの世界。元の世界とは市場の様子も違うだろうし可能性としてはありすぎるくらいだ。

「でも隷属させられた魔王……ねえ。」

確かに信用を失うことを気にしない暴挙に出れるだけの実力はある……それならばその実力を否定されればどうだろう？

例えば名前も無い、旗もない。そんな連中に負けたとしたらどうだろう？

戦うのは嫌だけど……

「十六夜は魔王と戦ってみたいよな？」

「ん?もちろんだ。戦える物なら是非とも。戦えないものでもこちらから迎えに行くぜ。」

「魔王と言つてもあくまで元がつきますがね……………つてお待ちください何を考えているですか日向さん?」

「いや……………別に。あとやめとけよ十六夜。白夜又の時とは状況が違う。」

でもこの方法だと逃げられることもある。強者が弱者に構う必要がないからだ。

つまり少なくとも周りから見ても食いつかなければおかしな程度の餌を用意しなくちゃいけない。

まあ餌なら既にあるか。あまり使いたくない手だからあくまでこれは最終手段にするにしても……………

「正攻法……………が欲しいよなあ。」

それにしても花村に言われた通り俺も考え方が狛枝に似てきたのかもしれない。もつともその根幹は全く逆だが。

「まともに考えてあるようには思えねえけどな。」

……………本当にそうなのか?

確かにあるようには思えないけど……………正攻法無しにそこまでコミュニケーションを大きく出来る程器量のいい存在に聞こえないんだよなペルセウス。

答えの出ない問題にため息をつきながらもはや癖のように窓の外の空へと視線をやつて……………ん？

「次回に期待するしかねえな。どんなやつなんだよその仲間つてのは。」

「そうですね……………一言でいえば、スーパープラチナブロンドの超美人さんです。加えて思慮深く、黒ウサギより先輩でとても可愛がってくれました。近くに居るのならせめて一度お話ししたかったですけど……………」

……………スーパープラチナブロンドの美人さん……………いや美人ていうか……………

「あれは美少女の部類じゃないか？」

「あん？」

「はい？」

俺の言葉に疑問符を浮かべながら二人が窓の外へと視線を移すとちようどその件の美少女が眼前へと降りてきた。

長く伸ばされたスーパープラチナブロンドの流れる髪に小さい体躯に合わぬ人を魅せる淫美な魔色の双眸。白き肌は闇夜でも幻想的に浮かび上がり背中に生えた一對の黒き羽と背景の赤い月もあってまるで吸血鬼のよう……………そう言えばつい最近その吸血鬼を思い浮かべる出来事があつたような？

脈動というもはや木じゃないだろうと思えるような植生を見ている時に鬼化という謎現象を聞かされて……………。

「随分とうれしいことを言ってくれるじゃないか黒ウサギ。」

「れ、レテイシア様!？」

「……………レテイシア……………ねえ。」

黒ウサギの先輩があんなことをしたのだとしたらその理由は……………親心か？

「この世界はみんながみんな年を偽り過ぎているせいかな違和感が凄い——」

「何やらその白髪頭から失礼な気配を感じるな。ひよつとしてお前とその金髪が黒ウサギが呼んだという新しい仲間か？」

……………気配ってなんだよ。気配で心がわかるとか聞いたことがないぞ。

「そうだけ吸血口リ。昼間は丁寧なもてなしありがとよ。うちの女子ども泣いて感謝してたぜ？」

「お前って何でそんなに嘯み付くわけ？ステイってわかるか狼。」

「……………お前もお前でなんでこのタイムミングでその話を引っ張ってくるわけ？なに？」

お前だってポッチだろうが。」

「仲間はいたからポッチではないぞ。どこぞの誰と違ってな。」

「その法則で言ったら俺だって今はぼっちじゃねえだろ！」

「……………私は糾弾されていたんじゃないやなかったのか？ええと……………こいつらは仲間同士なんだよな黒ウサギ？」

「ええ……………残念なことにこの十六夜さんと日向さん、それに飛鳥さんと曜さんがわたし達の新しい仲間ということになります。」

「なに？そういう言い方をするなら俺は抜けるぞ。」

「そしたら今度こそ真正銘ぼっちだな。」

「だからお前は一言多いんだよ!!」

十六夜をなだめるのも一苦労だ。いまはまだこの弄りのネタがあるからいいが無かったらあちこち食いつくコイツを止めるのも……………いや想像したくない。

「それでレティシア様は一体なんの御用でこちらに？とかどうして……………」

「何、大したようではない。ただ黒ウサギ達の新しい仲間がどんなものかと……………見に来ただけさ。結果的にはお前たちの仲間を傷つけることになってしまったが……………」

黒ウサギの言葉の後半を遮って堂々と語られる真実。

「どうしてここに来たのか」というよりは「どうして此処に来られたのか」の意味の方が正しいか……………それを喋りたがらない理由は……………流星にそこまではわからないか。

「実は黒ウサギたちがノーネームをノーネームのままコミニティとして復活させると聞いたとき、その愚行に憤っていた……………。それが如何に無茶で、茨の道を進むことなのかわかっていたからな。」

「茨の道というか道が無いよなもはや。」

「崖に茨が道を作ってくれてるってことかもしれないぜ?」

「……………俺なら絶対に渡らないぞそんな道。」

「……………そんな言葉遊びでどうこうなる話じゃない。」

……………まあそれも確かにそうだ。でもまあその反応で良くわかった。

「あ……………つまりこういう事か? 何らかの方法でレティシアは俺たちのことを知り、その茨の道とやらを切り開く力があるのか……………もとい黒ウサギたちと共に歩いていける存在なのかを知りたいと。」

「そういう事なら言葉遊びよりも確実な方法があるじゃねえか。なあ日向?」

「その暴力的な発想があたかも俺との合作で済みたいなふり方やめてもらえるか?」

「とか言いつつ俺の考えていることが良くわかってるじゃねえか。というわけで吸血口り、そんなに俺たちが魔王と戦うことが心配なら……………自分で測りやいい。そうだから? 元魔王さま。」

「……………なるほどそのとおりで。ガルドとのギフトゲームには出ていなかったからと

慎重派だと偏見を持っていたが案外好戦的なのだな。」

「主義主張は尊重するタイプだな。安心しろよ、お前が心配したやつに負けた時の主義主張もちやあんと聞き届けてやる。なあ日向。」

「だからいかにも俺とお前の考えが一緒ですみたいな振り方はやめろ。」

それにしても元魔王は否定しないのか。

確かに大した自信だとも、コミュニケーション崩壊経験者というだけではないもつと深い経験談のように語る物だとも思っていたけど……………魔王のバーゲンセールし過ぎじゃないか？箱庭に来て二日目にして元魔王二人と魔王らしき存在一人、そして今度戦うかもしれない元魔王一人とは……………意外とありふれていたりするのか？

……………そんなわけないか。

思わず溢れる溜息は自身が老け込んだかのように錯覚させてくる。

そんな抜けた気を引き締めるようにしたのは十六夜の言葉を受けたレイシアが戦う気になったからだろう。

少しピリピリと肌を刺すように空気が震えている。

「訂正は一つだけじゃないな。好戦的のただけではなく自信家でもある。その自信が身を滅ぼさなければいいんだがな。」

「身を滅ぼすのは自信じゃなくて過信だろ。意味を混同するなよ吸血ロリ。」

それに呼応するかのようにまた十六夜も闘気を高めて……………それに挟まれた俺は嫌になつてくる。

「……………とりあえず外に出るか。」

まさか屋敷の中で力をぶつけ合うわけにもいかずそれとなく二人を外へと出す。

二人の合同で決まった力試しと言う名の軽い殺し合いのルールはそれぞれが交互に一撃を繰り出しそれを受けきれずにダウンした方の負けという激しく野蛮でかつレティシアの容姿的にまずい絵面になること請け合い無しのものになった。

知らんぞ、俺は児童虐待で都が動き出しても何も知らんからな。

そんな風に黒ウサギと下がって対峙する二人を見守っているとレティシアが黒と金のギフトカードから何やら巨大な騎乗槍のような物を取り出した。

身の丈程もあるそれをくると手だけで器用に回し構える。

……………でもあれってそういう用途じゃないよな?あれ明らかに投げられるかまえだけど普通そういう槍って突進するやつだよな?

とあまりに異常な光景に内心でつつこんでいるウチにどうやら槍が放たれたらしくレティシアと十六夜の間を赤黒い閃光が貫いた。空気摩擦のせいかな槍自体も赤く発熱している。

……………てか早くて目が追いつかない

「ハンツ、しやらくせえええつ!!」

だが対する十六夜も普通ではなかった。

あろう事かもはやビームとしか形容できない槍の穂先に生身の拳を合わせて気合の一言ともに砕いたのだ。

破片はその勢いのままに散らばってレティシアへと向かつて——よけない？

やけに遅く流れる視界には目を閉じ何かを受け入れるような顔で飛んでくる破片を自身の肉体へと迎えるレティシアが………なんでなんだ。

そう思ったところで自分の体は思うように動いてくれない。

異常に気が付いた十六夜もようやく怪訝な顔を浮かべるがそれでも助けるにはまだ遠い。

破片がレティシアへと直撃する——その瞬間辛うじて黒ウサギがレティシアをその空間から拾い出し最悪の状況を防いでみせた。

本当に危機一髪、黒ウサギがレティシアのギフトカードを見て神格やその他のギフトがないことを騒いでいる間俺は安堵の息を漏らしていた。

——助けられた。助かってくれた。

何よりもそれが嬉しく……レティシアがなぜここに來れたのかとずっと考えていたことも忘れ氣を抜いてしまった。

だからこそ空から迫る褐色の光とレティシアの離れろと言う言葉に反応できなかったのだろう。

俺がそのことによく反応したのは胸をなにか小さい手に押された時だった。

目の前でよかれたはずのそれに俺を助けたばかりに飲まれて灰色の彫刻へと姿を変えていくレティシア。

「——え？」

突き飛ばされた時の力が予想以上に強く尻元をついた俺の第一声はそんな氣の抜けた言葉だった。

「いたぞ！石化した吸血鬼を捕縛しろ！」

「例のノーネームもいるがどうする!？」

「構わん、邪魔だてするのならば斬れ!!」

空から羽をはやした靴を履いて幾人かの男が急降下してくる。

急いでレティシアへ手を伸ばすもそれ以上の速度で降りてきた男に蹴りとばはれ距離が離れる。

「おい日向!？」

「日向さん!!」

レティシアの指示通り離れることができた二人がこちらへと意識を割く。その隙に降りて来た奴等はレティシアの捕縛を完了していた。

そして男たちが話すレティシアの商品としての価値、そして行き先。

「箱庭の外!? そんな、箱庭の騎士とまで言われる彼らヴァンパイアは箱庭の中でしか陽光を受けられないのですよ!? それを外なんて……………!?」

しかしペルセウスはそれを「ノーネーム風情が」と切り捨てる。

不法侵入にこの領地内での暴挙と非礼、黒ウサギが激怒する理由はいくらでもあった。

「いでよ——《インドラの槍》!!」

そう叫んだ黒ウサギの手に握られるのは極光。

激しい雷鳴を轟かせながらもその力を先端へと収束させているその光の正体は雷を纏った黄金の槍。

まさに怒髪天を衝くを再現した黒ウサギがそれを先ほどのレティシア同様投擲のために構えた——だがそれはペルセウスと敵対するということ。

箱庭の法律の詳しいところはわからないがここで感情に乗っ取られて攻撃するのがまずいことであることはわかる。

「——ダメだ黒ウサギ！相手を考えろ!!」

とつさに叫んだその声が届いたのか黒ウサギの放った槍は大きく軌道をそれて月を隠し始めた雲を貫いて拡散した。

その様子に危機感を感じたのか先程までの罵詈雑言の類も鳴りを潜めそれぞれが自身を透明にしながらも遠くへと去っていく。

黒ウサギはそれを見送り十六夜は何かめんどくさそうに頭をかいていた。

レテイシアが奪われた。

むしろ奪わせたと言っても過言ではない。

俺は出来ることをしようと思つて頑張つていたつもりだった。

だがそれがレテイシアをここから失わせた。

頭の中では希望をもつて死んでいった仲間のことガリフレインする。

十神白夜は立派にリーダーを勤め、殺人を犯そうとしていた狼杖を助けて死んだ。

辺古山はただ一心に九頭竜を思つて希望をもつて絶望へと落ちた。

田中は自身の信じる正しさの為に絶望へと沈んだし、武代はどこまでも真つ直ぐに、

確かな力をもつて俺たちを元気づけてくれた。

粕枝は今もやり方が気に食わないし許す気にもなれないがそれでもあいつなりに希望を持って世界へ挑んでいたのは確かだ。その結果七海とウサミがあんな最期を迎えたのは……………忘れることもできない。

殺す方も殺される方もみんながみんな自分に希望を持っていた。それは花村だってそうだし絶望病にかかっていた罪木以外の全員がそうなのだろう。

それでも世界にはこうして軽い絶望で希望をいとも簡単に捨てる人間がいる。

希望のために絶望に染まる……………そんな光景を見てきたからこそ……………絶望に染まってもなお希望を持ち続けていたみんなを知っているからこそ俺は……………本当の意味で希望になりたいと思つた。

自分に胸が張れるだろうと……………七海に見られても恥ずかしくない自分になろうと希望を追いかけてきた。

——それでも世界は絶望に溢れている。

そして俺はそれに抗うことができずにいる。

花村とのギフトゲームでは終了を待たずに意識を落とし、レティシアの不安を払うのも十六夜任せ、しまいには目の前で絶望に沈むことをよしとした仲間を救うこともでき

ずにただ立ち尽くすのみ、そればかりか余裕もない仲間の足を引っ張るばかり。果ては仲間を取り返すという本来の目的を果たそうとする黒ウサギを止めるなどという愚行。

こんな有様で誰に胸が張れるというのか?

どうやって自信が持てるのか?

「……………何をしてるんだ俺は。」

今まで他者にしか絶望したことのない自分が、希望としての俺はこの時初めて……………
自分に絶望した。

回想・高校級の希望が絶望した二つの理由

超高校級の希望が絶望した二つの理由

レティシアを連れ去られた。

黒ウサギを止めた

間違えた？

いや間違えてない

でもそれは正しい？

——タダシクハナイ

今まで俺は仲間を見捨ててきた

自分が生き残るためだと自分に言い聞かせて何人もの仲間を処刑台へと送って来た
それじゃあさつき見捨てた理由はなんだ？

他にいくらかでも対抗策は考え付いていたじゃないか

あの程度の絶望なんてわけないとあれだけ悔っていたじゃないか

それがこのザマか？

……………俺は希望として……………希望として？違う、それは希望じゃない

俺は粕枝を見て知ったじゃないか

希望は名乗るものじゃないと……………

俺は苗木誠に見たじゃないか

真に希望と呼ばれるその理由を……………

俺は知っていたはずじゃないか

そこに存在するだけで絶望になる存在を……………

俺ってなんだ？日向創はそもそもなんなんだ？

外に出たことは正しかったのか？

箱庭に残ったことは正しかったのか？

——わからない……………わからないよ七海

お前は俺に色んなことを教えてくれたけれど……………俺は……………頭が良くないんだ……………一度じゃわからない

もう一度……………もう一度だけ……………教えてくれよ



——死んだ

オイラは——死んだ

ミサイルが幾つも飛んできて島の上空を縛られたままヘリで振り回されてしまいは火口にドボンっだ。

下味も無し、工夫もなし。誰に食べられるでもない醜悪で最低な料理。

今まで散々料理をしてきて色んな人の料理を評価してきて……最後の最後で調理道具を殺人に使って……人を殺したそれを料理に隠して……最高の料理人と言われた僕の最後にある意味ふさわしいのかな。

カアチャン……どうしてんだろう。

みんなは大丈夫かな……

粕枝に惑わされてないかな……

いやだよ……何もわからず死んだ……そんなの……無
いよ。

あの修学旅行は何だったのさ何が目的なのさモノクマとかあのモノミっていうのは

何なのさ！僕らが………オイラが何をしたっていうんだ！！

「知りたいの〜う？」

「えっ？」

……………気の所為？

声が聞こえたような……………いやそんなわけが……………

「コラコラ！気のせいじゃないよう！」

「へ？……………ってうわあっ！！」

モ、モノクマ！！なんでここに……………てモノクマがいるってことは僕生きてるってこと？

「ええ？そんなわけじゃない。命は一人一個。取り返しのつくなんて安い物じゃないんだよ！たとえスーパーのタイムセールでも値段が変わったりしないんだからな！！……………売れ残ったら変わるけどね。」

「じゃ、じゃあ！なんで僕はこうしてお前と話してるんだよ！これは僕が生きることの何よりもの証明だろ！」

「ザナドゥ！！……………とかいうと思った？甘い……………甘いよ甘すぎるよ！梅……………を使った何かよりも甘いよ！」

「それ梅干と梅ジュースでだいぶ変わるよね!？」

「ヤマザナドゥツ!!……………なんて言わないからな!いくら花村君の言葉が辛辣だったからって弱音を吐いたりなんかしないんだからな!具体的にはわさびかまぼこぐらい辛かったです」

「意味が違うし辛さの方向も違うよ!!?しかもそんなにツンつとこないよね!!」

何だこれは……………僕はこんな漫才をしている暇なんてないのに……………!

「いい加減にしてよ!いいからオイラをここから出せ!はやく……………早く出せよ!」

「それは無理だよお。だって僕も死んでるんだもん。」

——へ?——

「だから僕も死んでるの!此処はいわゆる所のあの世って訳。ドゥーユーアundersタン?はい復唱!」

「……………ふざけるのはよせよ……………そうやってまた僕を……………みんなして僕を……………そうだ。そうだそうであれはみんなして僕をはめたに違いなんだ!そうじゃなければバレる筈がないんだ!完璧だったんだ!!出せよ……………ここから出せよお!!」

「……………あらあら、はじめの方の殊勝な花村くんはどこに行っちゃったのかな?」

「うるさい!!僕は殺してなんていない!!大体あんなところに暗視スコープなんて持つてくるわけが無いじゃないか!机の下の粕枝助ける必要もないしそんな偶然で犯人が分かったりなんかするものか!全部仕組まれていたに違いないんだア!!」

そうだ……………僕は悪くない悪くない悪くない!!

「そうだね確かにこの発端までたどれば仕組まれていたと言えなくもない。あの修学旅行はね……………未来機関と呼ばれる組織が執り行ったものなんだよ。そしてそこに君が憎む日向クンたちも所属している。」

「……………!!……………やっぱりあいつらが……………!!」

「でも君にはもう関係ないよね!君はもう死んじやってるし君が気にしていた外の世界なんてもうないんだからさ」

……………?外の世界がない?

「な、何言ってるのさ。そんなわけないじゃないか。」

「嘘じゃないよお。あのジャバウオツク島の外は日向クンによって既に壊されたあとさ。全ては彼から始まったんだ」

そんな……………すべて?

……………すべて!!?

「ま、まってよ!!それじゃあかあちゃんは!!?花村定食は!!?」
「さあね。でも外の世界は絶望に包まれた……………君も知っているはずだよおく?ほら
レッツインスピレーション!」

……………

……………

……………

.....超高校級の希望。

史上最悪の絶望的事件.....殺し合い生活
未来機関.....希望化.....修学旅行

「そうか.....日向君が元凶だったんだ」

「そうだよ。すべてはあいつから始まったんだ！花村くんは何も悪くない.....でもあいつのせいで誰も信じてくれない。だったら——」

「だったら？」

「殺っちゃっても.....しようがないよねえ？」

ああうん。.....しようがないよ。

「……………とつてもデンジャラスなひと時になりそうだ」

日向創……………そう、全てはお前が絶望に落ちたから……………お前が悪いんだ
……………お前が……………オマエがアツ!!



「花村輝々は初めから僕を憎んでなんかいませんから。」

……………何を言ってるんだお前は？

絶望していない？そんなわけが無いだろう

僕はお前が憎くて憎くて憎くて……………

「……………何言っちゃってるの？花村くんの絶望の根底は君だよ」

「ええ、だからあなたは彼を初めに僕に当てたのでしょ？でも当の花村輝々は僕の言葉
を否定できない。」

……………なんで？否定しろよ僕。あれほど許せないと言ったんじゃないか。僕の世
界を壊した張本人を！定食屋を!!かあちゃんを!!——壊したのはコイツなんだ

!!!

「……………なんで？」

「さあ？ただ……………彼にも思うところがあつた。それだけですよ。」

思う所？そんなのある訳が無い!!僕の料理を美味しいって言ったから!?それがどうしたっていうんだよ!!そんなのみんなが言ってくれたじゃないか!!そんなのもつと舌の肥えた奴らが言つてたさ!もつと言葉を凝らしているんな奴らがそういつてた!!

それを比べあいつらはただ美味しいって一言だけだぞ!!何を甘つたれたことを言つているんだよ!!

「……………そうだとしてみんなでそんなことが分かつたのさ。花村くんの絶望は本物だつたはずだよ?」

「そうだそうさ本物だつたよ本物だつた!」

「この際絶望が本物かどうかは関係ないんですよ。問題なのはその絶望の原因を目の前にして彼の態度が何も変わらなかつたこと。そしてついでにいうならば彼の絶望は本物じゃなかつたということですよ。」

「……………ツ!!そんなわけがない!!おいらは!!オイラはア!!!……………おいらは……………絶望を……………絶望を……………」

「お、オイラは確かに絶望して……………」

「絶望した人間は絶望なんかに憎しみを抱きませんよ。持つのは十人十色の愛だけ……ゲームは始まるまでもなく決まっていたんです。」

……愛せないよ……かあちゃんを奪った世界なんて……愛せる訳が無いじゃないか……

「相手が僕日向朝で良かったですね。そうじゃ無ければ今ここに花村輝々は無く、ただの絶望の端末が蘇っていたことでしょうから。」

……ごめんよ、みんな。

疑うような真似をしてごめん……そして嘘をついて……みんなが美味しいって言ってくれた料理を裏切って……ごめん。

「——ゴメンよ……日向君。」

「僕が言うことではありませんが謝る必要はありませんよ。君がそうであったように僕も君を憎んでなんかいない。『仲間だからこそ疑う』……あの絶望の中で僕日向朝が学んだ真実ですよ。」

「仲間を疑うの？」

「無償の信用は無価値にしかありません。でも懐疑の先に成り立つ信用は確かな価値がある。だからこそ信頼になり得る。意外と理にかなった言葉ですよ」

……仲間だからこそ疑うのは当たり前。仲間だと思いたいから……だから

疑う。

でもそれは多分……………僕のやってた”疑う”とは別のことなんだろう。

……………でも……………

「……………仲間……………だからね！」

……………もう僕は疑わない。だって僕は裏切った側なんだから。

皆に疑われなくなるまで誠意を見せ続けるさ。

「……………だからまた僕の料理を食べてよ！目が覚めたら飛びつきり美味しいのを作るからさー！」

薄れる自分の体を見て僕は仲間にもそう約束した。

「生ぬるい希望ごっこはいつ見ても胸くそ悪いですなあ」

「中途半端な絶望ごっこをしたからそんなものをみることになるんですよ。」

「何をお!!……………まあいいさ。君の顔を歪められただけで満足満足う♪」

そう、モノクマの言う通り日向君……………いやカムクラの表情は歪められている

「わかつていたコトですよ。彼らは僕らの世界で眠っている……………ここにいます。ここにいます。答がないんです。ならばどうやってここに顕現しているのか？あなたの仕業以外に有り得ないでしょう。ならば希望になった彼をここにとどめておく必要は無い。醜悪でとつても絶望的であなたらしい僕への当てつけですね。」

「う。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。君ってほおんと残念だね。まるで彼女みたいだ。」

心底嫌そうな顔でモノクマと対峙したあと彼はこちらへと向き直る。

「大丈夫、約束のためにも僕達^{希望}が必ず君達を起こします。……………だからしばらくの間待っていて下さい。」

「……………うん。じゃあね。」

……………よかった。

……………本当に良かった。

……………憎まずにいられて……………もう一度仲間にあえて……………救
われた。

▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽

ギフトゲーム《絶望の味覚》

勝者 《ノーネーム》日向創

△△△△△△△△△△△△△△△△



「……………チエ、つまらないなあ。」

「今度は僕の真似事ですか？」

「う。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ、どうだろうね。なんにせよ楽しみにしておいてよ。花村君は四天王の中でも最弱……………時期に第二第三の絶望が君を絶望させに来るだろうからね」

「色々混ざっていますが好きにすればいい。僕は全ての仲間を貴女の絶望から開放してみせますよ。」

「……………みんなが君を仲間だと思ってるかは別だけどね！また会おうよカムクラ君。そして——」

“ 今度こそ世界を絶望に染め上げようね ”

彼女は最後にそう言っ**て**爆発をした。

……………最後まで落ち着きのない人だ。

「……………今回はサービスですよ。やはり僕に絶望の相手は無理のようですから。」

内より浮上するもう一人の意識を感じながら僕は最後の約束を忘れぬ様に思い浮かべ続けていた。

仮に僕が目覚めたとき……………道を見失わぬことを祈って……………。

番外 異世界より名無しへ幸運の贈り物

プロローグ

——全身が熱い。

四肢は縄や怪我のせいで自由に動かないし脚はナイフによる裂傷で血を流し続ける。腹部といえば使い方の良く分からない独特な形の長槍で貫かれまるで虫かなにかのように僕を地面へと縫い止めているし足元では何かが激しく燃えているのか熱が空気を伝わって僕を焼く。

意識が遠くなるのは燃焼による排出ガスとは匂いの異なる気体状の毒のせいか………何にせよかつてこれほどまでに壮絶な殺され方をした人間がいただろうか？

………ダメだ、考える事も出来ない。

でも………

『僕は希望になれたはずだ』

そう思うだけで不思議と怖くはなかった。

やがて瞳の焦点すら合わなくなつてあちこちへと視線が跳ねる中極度に低下した脳が一つの疑問を浮かび上がらせる。

それは僕の計画が成功したかどうかではなく………なぜさつきまで無かつたはずの手紙がこんな所に落ちているのかというとても些細な事だった。



「え？」

僕が手紙を認識した次の瞬間。僕は何故か強い風を感じていた。

先程の大の字の姿勢のせい空気抵抗が激しく目まぐるしく変わる視界の中で僕は

必死に思考を巡らせる。

(な、何が？またモノクマの思いつき？いや、そんな訳が無い。モノクマは確かにテキストウな性格だけどあの生活を根本的に覆すような事はしなかった。)

じゃあなんで僕は突然自由落下を開始しているのか？

その答えはついで出ることなく僕は思考をぶつた斬られるように着水した。

「ゲホッ、ゲホッ！な……………なんで……………」

突然水面に叩きつけられたことよりも自分で自分がこうして無傷で居られるのかということの方がよほど疑問だった。

考えても考えても答えは出ない。

周りの少年少女に見覚えはないし周りの木々や湖もジャバウオツク島で見覚えのある景色ではない。

「最後にその優男さんはなんていうのかしら？」

「え？」

一緒に落ちてきたであろう気の強そうな女の子に突然そう問いかけられた。

「え、じゃないわよ。聞いてなかったのかしら？」

どうやら思考に耽りすぎてこの子の話を無視してしまっていたらしい。

「ごめんね、ちよつとぼんやりしてたみたい。」

「ぼんやりって……まあ気持ちはわからないでもないけど。」

「いや突然スカイダイビングからの着水させられてぼんやりできるってすげえぞ?」

「……天然?」

「天然……なのかな?あまりそういうことは言われたことないけど」

なにせみんな近寄ってこなかったからね。

「まあいいわ。それであなたはなんていうのかしら?」

「僕?僕は狛枝風斗。ここに来る前は希望ヶ峰学園っていうところに通っていたんだ」

いやここに来る前はジャバウオック島だったけど……それじゃあ何もわからないしね。

「随分とすごい名前の学校だな」

「そうかしら?名前自体は珍しいけど凄いと云うほどでもない気がするけど。」

「……個性的」

……ふむ、やっぱり希望ヶ峰を知っている人はいないみたいだね。全員日本人みたいだし世界でも有名なそれをまさか知らないわけでもないだろうから。

……理屈はわからないけどまさか異世界にまで飛ばされるだなんてなあ。自分の幸運を疑うわけじゃないけどこれは不幸だと思っただよね。さすがに……。

「私は久遠飛鳥。その猫を抱えた子が春日部耀さん。そして……」

「俺が逆廻十六夜だ。よろしくな。」

「ああ、うんよろしく。……それにしてもここどこなんだろうね。あの高さから叩きつけられ他にも関わらず体がバラバラにならないだなんて不思議すぎるよ。」

「……私的にはテレポートの方が不思議で一杯なのだけれど……だつて下は水だったし。」

「なんだ知らねえのかお嬢様。水の硬さつてのは速度によつて変わるんだぜ？ 早ければ早いほど固く……スカイダイビングでも直地に失敗するなら海より陸の方がいいって言われるぐらいだ。」

「それはまあ受けたダメージで泳げないとか陸地になら茂みとか林とかの緩衝材がある場所もあるからということもあるんだけどね。……でもここにはそういったものもない筈なのに随分と衝撃が弱かったから。」

「なんでもありの世界つてことだろ。愉快結構！ 奇想天外大歓迎だ。……と、言うわけでそろそろそんな世界を案内して欲しいんだが？ そこに隠れてるやつ、出てこいよ」

「あらあなたも気づいていたの？」

「当たり前だ。お前らも気づいてたんだろ？」

「風上に立たれれば嫌でもわかる」

「気づくというか……あんな風にウサ耳が飛び出ててピコピコと動いていたら誰でも気

になるよ」

隠れているというのかなあれ？

「いい、イヤですねー皆様。ウサギは臆病な生き物、そんな恐ろしい目で見られたら死んでしまいます」

「安心しろ山の中で高タンパク質の肉は貴重だから余す所無く食ってやる」

「もはや死後の話ですか!?!先に生前の話を挟みませんか!？」

「あん？だって死ぬんだろ？」

「死にません生きます！」

「……それよりこれ本物？」

「ひゃあああああつ!!」

ウサギが逆廻君と戯れている間に後ろに回った春日部さんが「ほんもの？」と聞きながらウサ耳を鷲掴みに……つてまじめに解説するような光景じゃないね。

それにしてもみんなウサ耳を掴みにいつちやっただけどこれは僕も行ったほうがいいのかな？



「話を始めるのに小一時間も要すとは……これが学級崩壊と言う奴なのですか……。」
「いやいや、本物の学級崩壊は辺鄙だけど環境だけは整えられた島に閉じ込められて生徒同士で殺しあわなければならぬ状況のことだよ」

「そんなデンジャラスな学級崩壊があつてたまりますか!!」

……あれを学級崩壊と呼ばないのならまあ確かにないかもね

「それではいいですか、皆様。定例文で言いますよ? ようこそ、〃箱庭の世界〃へ! 我々は皆様にギフトを与えられた者達だけが参加できる『ギフトゲーム』への参加資格をプレゼントさせていただこうかと召喚いたしました!」

「ギフトゲーム?」

「そうです。既に気づいていらしゃるでしょうが皆様は、普通の人間ではありません! その特異な力は様々な修羅神仏から、悪魔から、精霊から、星から与えられた恩恵でございます。『ギフトゲーム』はその〃恩恵〃を用いて競い合う為のゲーム。そしてこの箱庭の世界には強力な力を持つギフト保持者がオモシロオカシク生活できる為に造られたステージなのでございますよ!」

「……皆?」

みんなって逆廻君とか久遠さんとか春日部さんのことかな? ……なるほど。彼らも彼らの希望を持っている……というわけか。

恩恵というのはまた妙な言い方だけだ。

「まず初歩的な質問からしていい？ 貴女の言う『我々』とは貴女を含めた誰かなの？」

「YES！ 異世界に呼び出されたギフト保持者は箱庭で生活するにあたって、数多ある

『コミュニティ』に必ず属していただきます♪」

「嫌だね」

「属していただきます！ そして『ギフトゲーム』の勝者はゲームの『主催者《ホスト》』

が提示した商品を手でゲットできるというシンプルな構造になっております」

「……………『主催者』って誰？」

「様々ですね。暇を持て余した修羅神仏が人を試す為の試練を称して開催されるゲーム

もあれば、コミュニティの力を誇示する為に独自開催するグループもあります。」

「結構俗物ね。……………チップには何を？」

「それも様々ですね。金品、土地、利権、名誉、人間……………そしてギフトを賭けあう事も可

能です。新たな才能を他人から奪えばより高度なギフトゲームに挑むこともできるで

しょう。ただし、ギフトを賭けた戦いに負ければ当然——ご自身の才能を失われるので

あしからず」

「ゲームそのものはどうやったら始められるの？」

「コミュニティ同士のゲームを除けば、それぞれの期間内に登録していただけたらOK

！商店街でも商店が小規模のゲームを開催しているのでよかったら参加していただくいな」

「……つまり『ギフトゲーム』はこの世界の法そのもの、と考えてもいいのかしら？」
「ふふん？中々鋭いですね。しかしそれは八割正解の二割間違いです。『ギフトゲーム』の本質は一方の勝者だけが全てを手にするシステムです。」

「そう。中々野蛮ね」

「ごもつとも。しかし主催者は全て自己責任でゲームを開催しております。つまり奪われるのが嫌な腰抜けは初めからゲームに参加しなければいいだけの話でございます」

「……なるほどね。全てを得るか全てを失うか……常にオールベツトの世界というわけか。なかなかどうして粋じゃないか」

「……どうしてそういう結論に至ったのかは少し気になりますが、話した所で分からないことも多いでしょうから、ここで黒ウサギと一つゲームをしませんか？」

「ゲームだつて？」

そういつて黒ウサギが指を鳴らすと虚空から大きなテーブルとランプが落ちて来た

「ルールは簡単でございます。皆様には一人ずつカードを選んでいただきます。それが絵札ならば皆様の勝ち……黒ウサギは皆様のお願いを聞いて差し上げます。」

「私達が負けたら?」

態度には出していないが少し臆したようなそんな質問が久遠さんから出された

「初めてのゲームという事ですし皆さんはノーベットで……ですがまあ強いていうならば皆様のプライド……と言ったところででしょうか?」

「あはは、確かに。いくら屑みたいな僕でもプライドぐらいはあるからね。」

「……屑って……。あと十六夜さん、性的なことはダメですよ。」

僕の発言と十六夜くんの視線に零された黒ウサギの呆れたような言葉と共にゲームが開始される。

だがその前に逆廻君達のカードのチェックが入った。

なんでも黒ウサギがイカサマをしていないかのチェックらしいが……。

まあ僕も混じっておこう。

……………よし。

「ではそろそろゲームを開始してもよろしいですか?お好きな方から一枚ずつどうぞ。」
「んじゃ俺が行くぜ。」

そう名乗りを上げたのは逆廻くんだ。

……さてさて、彼らの希望がどんなものなのか……是非とも僕に見せて欲しいな！

「さつきは素敵な挑発ありがとよ」

台の前に立つなり顔を引き曇らせる黒ウサギに獰猛な笑みを見せる逆廻くん。右手を天高く掲げて……？

「これはその礼だ!!」

——台に叩きつけた。

衝撃でカードが舞い上がり何枚かが表になる。

それにしてもすごいね！あれほどの筋力はなかなか見れないよ。しかもそれがあの細腕から……これが異世界の希望……か。

「やっぱり希望はあるんだね。」

思わずつぶやいたセリフは誰に拾われることもなく消えていく。

「な——ま、まだです！まだ十六夜さんが!!」

表になった絵札を取っていく二人に続いて僕も表になったカードを拾い当の逆廻くんの勝敗を見守る。

黒ウサギは耳をアンテナのごとく使い今の行為が正当なのかと何処かに問いかけていたようだが逆に正当であると帰ってきたせいで打ちひしがれている。

黒ウサギの言う通り逆廻くんはその手に収めたカードを返していない。

「おいおい、見くびつてもらっちゃ困るぜ黒ウサギ。ほらよ。」

そうやって逆廻が裏返したカードは絵札……つまりは僕たち四人とも絵札で無事全員勝利したということになる。

「これで僕たちのプライドは守られた……っていうことでいいのかな？」

「あれはプライドを守れているのかしら？」

「……他人の成果を横取り……寄生？」

「……言い方が悪すぎないかなそれ。」

まあ確かに考えてみればプライドもへったくれない結果だったが。

「それにしてもすごいね逆廻くん。なんで絵札を当てられたの？」

「覚えてんだよ。この場にあるカードの並びを全部。」

……強靱な肉体に異常な記憶力……なるほど、やはり僕の世界とは随分法則が違うんだね。……いやそうでもないのか。あの醜悪な研究の成果たる彼ならば……むしろできないと思うことの方が不思議だね

「それはすごいや。」

「おう、ありがとよ。お前らのびつくり人間ショーも楽しみにしてるぜ？」

「……それは期待されても困るかな？」

僕の力は確かにある……でもそれは僕が制御しているわけじゃないからね。

魅せるということに関して言えばすごく怪しい。

「……まあ黒ウサギ的にはあまり納得のいかない結果でしたが良しとします。とりあえず皆様のお願いはできる限り全力でこの黒ウサギが叶えますのでなんでも申してください……ただし性的な事以外で。」

黒ウサギと久遠さんたちの冷たい目が逆廻くんに向けられる中逆廻くんはその目に一人真剣な色を浮かべながら先程から一度もなりを顰めないその獰猛な笑顔で問いかける

「黒ウサギ。俺が聞きたいのはただ一つ。この世界は面白いかな？」

そう聞かれた黒ウサギは先程までの定例文のような決められたものとは違う自分の言葉で答えた。

「Yes。『ギフトゲーム』は人を超えた者たちだけが参加できる神魔の遊戯。箱庭の世界は外界より格段に面白い、と黒ウサギは保証いたします♪」



結局そのあとやる事もなく黒ウサギのコミュニテイとやらに向かっていると気がつ

けば逆廻くんが消え、それを追いかけるために黒ウサギも消え、残された僕ら三人と黒ウサギのコミュニティのリーダーらしい十一歳の少年ジン・ラッセルは適当に休むために街の中の喫茶店に入っていた。

美味しい紅茶も運ばれてきてさらには二人の持つ希望の話も聞くことができて結局自分の中で方針が定まらないこと以外は個人的に素晴らしい一時を過そうとした時に何やら大きな影が一つジンくんの後ろに現れた。

どこか猛獣を思わせる顔立ちに二mに迫ろうという巨体を白いピチピチのタキシードに包んで立っている

「おんやあ〜? 誰かと思えば東区画の最底辺コミュ名無しの権兵衛のリーダー、ジン君じゃないですか」

「僕らのコミュニティはノーネームです。フォレス・ガロのガルド・ガスパー」

……黒ウサギが妙に話を進めたがるから何かと思えば……最底辺……か。

それが彼女とジンくんの持つ希望につながるのかな?

何やらいきなり嫌悪な空気だけでも

「黙れ、この名無しめ。用があるのはお前じゃねえ。ここにいるお嬢様方だ」

「私達?」

「ええそうです。単刀直入に言います。よろしければ黒ウサギ共々、私のコミュニティ

「入りませんか？」

「な、なにを言い出すんですガルドⅡガスパー!?」

「……それはスカウト……っていうことでいいのかな？」

「もちろんそのとおりです。私はあなた方三人と黒ウサギを私のギルドにぜひ迎えたいと。」

……ふーん。

「黙れ、ジンⅡラッセル。この過去の栄華に縋る亡霊が。自分のコミュニティがどういう状況に置かれてるのか理解出来てんのか？」

「そ、それは……」

「壊滅状態なんですよ？そういうどうでもいい話はいいから本題を進めてくれないかな？」

……あれ？空気が固まっちゃったよ。

「あれ？また僕変なこと言っちゃったのかな？」

「な、なんで壊滅状態だと？」

ジンくんの震えた声は聞き取るのに辛いが言っていることは簡単だったので何とか理解できた。

「そりやまあわざわざ異世界から人を呼ぶ理由があるとしたらよほど人材に飢えてるか

らでしょ。そしてそのガルドさんが言つてたようにこのあたりで底辺らしいジンクンのコミュニケーションと黒ウサギのやたら性急な話の進め方を考えれば自然と見えてくるや。」

「……結論を言わないあたりが少し気になるけどよくわかったわ。それにしてもどうでもいいとは酷い言い方ね。」

「……久遠さんはそういう話があったの？それなら僕は黙つて待つてるけど？」

「……いえ、いいわ。それでガルドさん……だったかしら？なんで実力もわからない、この世界でのことも何も知らない私たちみたいな存在を仲間に引き入れようとしたのかしら？」

「それはジンクンのコミュニケーションが力をつけるのが気に食わなかったからだよ」

「解説ありがとう狛枝くん。でもまた理由が欠けてるわ」

「理由も何も辺境とはいえ一番力を持つているコミュニケーションがわざわざ一番下の些細な行動に目くじらを立てるのなんてその行動が看過できないものか、はたまた気に食わないかの二択しかないじゃない。そして久遠さんの言う通り看過出来ないものにも僕らのことをガルドさんは知らないんだから答えはひとつだよね！」

「万が一の可能性を潰しに来たとかじゃないのかしら？」

「ああそつかさつかさつさという事もあるよね。僕としたことがそんな大事な事を見落して

いただなんて……すごいよ永遠さん！」

「……ありがとう。でもどちらにせよ最大のコミュニティが最底辺のコミュニティを気にするのは不自然よね。それはどうして？」

「そ、それはですね——」

「それはさっきのガルドさんも言つてた様にジンくんのコミュニティは過去の栄光があるからだよ。多分昔はここらで一番……いや、下手をすればそれよりも大きな勢力だったのかもしれないよ？」

「……そのとおりです。で、ですがそれも過去のもの！」

「でも嘸み付かれるのは痛いからその前に引き込んだじゃえと……そういう訳ね。それにしても狛枝くん。あなたもう少し静かにできないかしら？私が言うのも何だけれどそうセリフを奪われてはガルドさんが可哀相よ。」

「いやごめんごめん。話を早く進めたいって思いが強かったみたいだ。次からは気を付けるよ。」

確かに希望に対して余計なお節介だったね。

「まあ理由はどうあれジンくんのコミュニティの事情はよくわかったわ。何でか最底辺に落ち込んだ元最大のコミュニティ……そういうことね。」

「その解釈で概ね間違えてないかとマドモアゼル。わたし達のコミュニティは連戦連勝

を重ね今やここらの地域を治める程になっています。その上でもう一度問いませんが……黒ウサギとともに私のコミュニティへ来ませんか？」

「その上でお断りするわ。そもそも黒ウサギのことに關しては私が決めることではないし。」

……あれ、意外だな。見た感じ名家の出みたいだからそっちに行くのかと思つてたけど……。

「な、なぜ!？」

「当たり前じゃない。あらゆる私は恵まれた環境を捨ててまで異世界に来たのよ?今更そんな捨てたものをやるからこちらに付けだなんていうガサツな誘い文句にときめく訳が無いじゃない。春日部さんはどうかしら?」

「……私はどつちでも……ここには友達を作りに来ただけだから。」

「あら、なら私が立候補してもいいかしら?」

「……うん。飛鳥は……私の知つてる子とは違ふみたいだから。」

そんな春日部さんの言葉に反応する三毛猫くん。僕には何を言っているかわからなけれど春日部さんはどうも動物と会話する力があるらしくあの三毛猫とも友達らしい。

「粕枝くんはどうなの?」

「僕？いや僕が春日部さんの友達だなんて畏れ多くて務まらないよ。」

「そつちの話ではなくてスカウトの方よ。どうなの？」

「……ああそつちか。」

……あまり興味がないんだよねえ。確かにこの世界は才能という面では希望に溢れているかもしれない……でも本当の意味で希望を持っているのはどれくらいなのだろう。

僕が求める希望は文字通りの希望……人々の先に立つ存在なんだ。その像とガルドさんは……僕なんかがいうのもおこがましくて身の程知らずだけど……あまりにも違いすぎるんだよねえ。

「僕も春日部さんと同じだよ。自分の目的があつてここに来た。それに別にガルドさんは必要ないかな。」

「お、お言葉ですが——」「それよりもさあ？」

耳障りな声を遮つて話を続ける。

勧誘の話はいい……でも少し気になることがあるのだ。

「どうも納得がいけないことがあるんだよねえ……いやほら別に文句とかじゃないんだよ？でもやっぱりこういうことはつきりさせとかないと。」

「いいから早く言いなさいよ。回りくどいわね。」

「ごめんごめん、怒らせちゃったかな？あまりもつたいぶるのは僕も本望じゃないから言うけどガルドさんのコミュニティはどうして最大のコミュニティになれたのかな？」

「……………どういう事だ？」

少し険のある声で返されてしまった。うーん。怒らせるつもりはなかったんだけどなあ？

「まあ見てわかるけどガルドさんのコミュニティは最大っていう名前の通りにあちこちに旗が登ってるよね。これ程までに圧倒的に勢力を伸ばすのって黒ウサギの話だと難しそうなんだよねえ。」

「確かにそうね……………。ギフトゲームは両者合意の勝負……………普通ならここまで大きな勢力との勝負は避けるものだと思うのだけれど……………連戦連勝を重ね？『どういうことか話してくださる？』」

久遠さんの言葉に不思議な重みが宿ると共にガルドさんが話ちやいけないような事を平気で話始める。顔だけは自分がなぜこんなことを喋っているのかわからないと言わんばかりに動き続けているのだがそれでも彼の口は止まらない。

「……………人質……………か。確かに有用な手だね。」

人質を取って相手に無理やりギフトゲームを承諾させ全てを奪いまたそれを足にし

て人質を手に入れ次のギフトゲームに臨む……たしかに成功すれば確実に勝利を手にできる。……何よりも凄いのはその人質を殺したというところだ。

「そして何よりも下衆な手よ。呆れた……無法な世界なのだろうとは思っていたけれどここまでとは……箱庭とはこんな輩ばかりなのかしら？」

「いえ……箱庭でもここまでの下郎はそういません。」

僕たちを騙していたという罪悪感からかずっと黙っていたジンくんがここで初めて口を開いた。

「ッ——この女アアアアッ!!」

理由はわからないが喋るつもりはなかったことを喋らされた原因が久遠さんにあることを悟ってかガルドさんが机を跨いで久遠さんに迫る。

「——ガッ!く、クソ!離せえ!!」

——がそれも横から割って入った春日部さんの細腕に組み伏せられることで阻止された。

とういか違和感がすごいね。春日部が実は柔術の達人だったと言われても思わず納得しちやいそうな光景だ。

「離してもいいよ春日部さん。」

僕の言葉に全員が全員目を剥く……って当たり前か。よく常識を疑われる僕でもそ

のくらいはわかる。

「……どういうつもりだ？」

「いやガルドさん……僕は悲しんでいるんだよ。」

「「「——ハア？」」」

みんなに揃って疑問系で返された。まあ端から理解されようだなんて思っていないけどね。

「ガルドさんが殺した人質の中には将来花咲かせる存在もいたかもしれない……そう思うと僕は悲しみとか、悔しさとか！そういった感情に押しつぶされそうなんだ……僕は怒っているんだよガルドさん！」

「ちよ、狛枝くん!?何を言っているのかしら——」

「久遠さん、悪いけど口を出さないでもらえるかな。いや僕みたいなのが久遠さんに指図するなんてと思うかもしれないけど」

「い、いやそうじゃなくてね?——あなた何をするつもりなのかしら?」

「……ああそれはもちろん——」

「——ガルドさんにこの場でギフトゲームを挑もうかなって」

.....。

.....。

.....。

「何を言ってるんですか!？」

長い沈黙を破ってジンくんがそう言った。

「ギフトゲームを挑もうかなっていったんだけど……おかしいことかな？」

「おかしいも何もこの場で!？みなさんは召喚されたばかりですよね!？」

「ああ大丈夫。やるのは僕だけだから。皆をこんなどうでもいいことに巻き込めないよ。」

「これはいわば僕の私怨みたいな物だからね。」

「正気か小僧？なんでそんなことを……」

「ハア？だから言ったじゃないか……僕は怒ってるんだよ。そんなくだらな希望で沢

山の人の希望を奪ったことが。」

「希望……? なんの話だ。」

「ゲームのルールは……コイントスにしよう。」

「だからなんの……? ……つコイントスだど?！」

何をそんなに驚いているのさ?

「賭けるものは君の全てと僕の命でどうかな? まあ僕の命で釣り合うとも思えないんだけどさ。」

……でもこのゲームから彼は降りられない。

彼がやってきたように今回は彼が自分という人質を取られたから。

「このゲームで勝てば少なくとも一人の口は封じられる……。」

「なんなら僕は君の擁護をしてもいい。この場に証人なんていない。いるのは当事者だけだからね。意見が別ればまだ君の口封じもしやすいだろう?。」

「だから何を言っているのよ狛枝くん!!」

「何度も同じことを言わせないでよ。ギフトゲーム……さつき黒ウサギともやったじゃないか。……そうだね。イカサマを疑われるのも嫌だしコインはガルドさんの方がいいよ。ついでに交互に投げるとしよう。更に僕は連続100回正解……きみは一回でも当てれば勝ちだ。」

「馬鹿なのあなた!!?」

ひどいなあ……結構真面目なんだけど

「……いいだろう。こんなに舐められたのは初めてだ!!」

「舐めてなんかないんだけど……まあいいや。それじゃあ……ゲームスタート。」

▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽

ゲーム名『勝率2の100乗分の1』

・プレイヤー 粕枝風斗

・クリア条件 コイントス100回連続勝利

・敗北条件 プレイヤーの一度のミス

宣誓 上記を尊重し、誇りと御旗とホストマスターの名の下、ギフトゲームを開催します。〃フォレスガロ〃印

△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△

……みんなが絶句するのもわかる内容だ。

何せ本来コイントスは確率1/2……だがそれを連続でとなると単純な確率論でも十回の時点で当たる確率は1/1000を下回る。

そもそもこんなゲームはイカサマや超常の力でもない限り成り立たない。

でも僕はささやかな力を持っている。いうことを聞かせる力も並外れた身体能力も動物と会話する力もないが……それでも僕は幸運だ。だからこそ僕は自信を持って言う。おう。

「お先どうぞ、ガルドさん。でも僕は先に言っておくよ。これ以降君が投げるコインは全部表だ。」

——勝率100%だって。



世界の果て、トリトニスの滝からの帰り。

相変わらず人外の速度で十六夜は黒ウサギと駆けていた。

「それにしても聞けば聞くほど悲惨だな。水もなかったとか洒落にならねえよ。」

「だからこそ十六夜さんには感謝してます。水樹の苗はその洒落にならない状況を大きく改善してくれますから——つと見えて参りました。あそこです。」

走りながらも黒ウサギが示した方向へ十六夜が顔を向ける。

普通にいうならばはるか先ともいうべき距離を跨いで石造りのドームが見える。先に行つたのか途中まで一緒だった他の仲間の姿は入口にも見えない。

……もつともその距離をあつという間に無かつた事にしてしまえる二人にとつてそれははるか先という言葉を使つて表す距離にない

「随分と陰気そうなところだな。お日様の光を浴びねえと頭が苔むすぞ黒ウサギ。」

「大丈夫でございませよ。あのドームは日光を直接浴びることのできない種族のためにあるもの……中は普通に外と同じ環境でお日様も青空も見えちゃうのです」

「そりやすげえな……つと！」

言っている間に早くも入口までやつて来た二人は会話もそこそこに中へと入つていく。

黒ウサギはコミュニテイのリーダーとはいえ十一歳の少年に問題児三人を預けたことが不安で。

十六夜は黒ウサギのいう日光を遮断しない謎素材の天井の真偽を確かめるために。

もつとも入ったところで外と対して変わらぬ光景にある意味期待を裏切られ昂った気持ちを持って余すことになるのだが……結果被害は全て黒ウサギが受けるので特に問題は無いのが周りにとつての幸이었다。

「それで？ あいつらどこにいるんだよ？」

「さあそこまではわかりかねますが……」

「……その耳で聞こえねえのか？」

「まあハイテクなのは認めますが街中だとよほど目立つ音がギフトゲーム関連しか——
——え？？」

十六夜の指摘に非常に分かりにくいながらも実演を交えて説明しようとしたところでハイテクな耳がハイテクらしく異常を捉えてしまった

「……狛枝さんが……フォレスガロとギフトゲーム!!？」

「へえ、早速か。よし、行こうぜ黒ウサギ。案内しろ！」

「もちろんです！ あのおバカ様方はああ！」

そうして二人はそう遠くない喫茶店のテラスへと駆けていく。

もちろんスピードは先程の何十分の一にも抑えているが、その代わりに黒ウサギの危機迫る表情といえればそれ以上の迫力だ。

「何をしていますか皆様!!」

いち早くその現場へと飛び込んだ黒ウサギは到着早々そう怒鳴り声を上げる。先程十六夜の八つ当たりをくらったぶんも含めガマンの限界だったということもある……が何よりも自分の不安が的中したこと、そしてそれが十六夜のような力の確認出来てない狛枝だったからこそだ。

「く、黒ウサギ……。」

「ジン坊ちゃん！ちゃんと説明してください！」

「……いや説明よりも見たほうがはやい……って何だこりや？」

そこには滅多なことでは動じない十六夜を驚かせるものが確かにあった。

「コイントス百連勝？おいおい無茶だろいくらなんでも」

「というか賭けているものが命ってなんですか!?!ちよ、狛枝さんは何を!!」

二人が視線を向けた先では狛枝が欠伸をしながらガルドが開く手を見もせずしばらくとしている。

……結果は表。

当然のことのようにそれを眺めながらコインを受け取った狛枝の横でカウンターが数字をひとつ上げる。

それを見て驚愕する二人へ飛鳥が言葉を添えた。

「……始まってからずっとあの調子よ。開始直後に自分のする選択を全部表だって言い

切ってから自分の番でさえ適当に弾いて終わり。」

「……それでも当たってるんだろ？」

「春日部さんが自分のギフトで試せるだけ試したらしいわ。結果は白。」

「……イカサマの痕跡はない。」

「そんな……それがどんな確率なのか分かってますか？」

「わかるも何もギフトゲームの名前がご丁寧にそう書かれてるんだもの。それでも現在の99連勝を運以外で説明する要素が見つからない。」

「コインに直接ギフトを働かせるのか……はたまた俺たちに夢幻でも見せてるのか……何にせよいくらそんなチカラを持つているにしてもやりすぎだぜこれは。」

広がる疑念の中で正真正銘最後のコイントスが始まる。

狛枝の爪で弾き上げられたコインが狛枝の手へと帰った。

……正解は二つに一つ、表か裏か。

「Which？」

今までとは違う。あたれば勝ちの勝負……ただし負ければここで終わり……後はもうない。

「……くつ、……う………表………だっ!!」

そうやって言い知れぬ恐怖を払うように声を上げるようになってからもうずいぶん

とたつが未だに足元からなにかが這い上がってくるかのような感覚は拭えない。

そして周りが緊張の眼差しで見つめるなか、狼の手がどけられる。

キラリと輝くコインは裏……またしてもガルドの予想と外れた結果を見せつける。

「何故だっ!!?」

ガルドが拳をテーブルへと叩きつける。

カウンターの数字は無情にもまた一つ数をあげてついに上限へと達した。

同時に腰掛けていた椅子から立ち上がった狼がガルドへと振り返る

「何故? 何故ってそりゃ——」

「やっぱり僕の運が良かったからじゃないかな?」

少年日向は未来を見る

少年日向は未来を見る

こういう言い方はおかしいが日向創と言う人間は普通だ。

容姿とか性格とかそういった話ではなくその中身がどうしようもなく普通なのだ。

成績はかなり良い方だったし体格も運動神経も良い。容姿だって悪くなかったし性格だって忌避されるようなものではなかったと思う。どちらかといえば真面目だったしノリも悪いというわけではなかったはずだ。

一般的に言えば十分満たされていると呼べる存在だっただろう。

でも事実俺は満たされていなかった。

周りからの視線は鋭く俺に突き刺さったし俺はそんな自分に納得がいかなかった。

テレビで踊るアイドルがいた。有名な球児がいた。すごい料理人が、写真家が、舞踊家が、ミュージシャンが、マネージャーがいた。

俺がなんでそう思ったのかなんてわからない。ひよっとすればそれは向上心だったのかもしれないしそうでなければならぬという強迫観念だったのかもしれない。

はたまた自分にはそれが無いという虚無感だったかもしれない。

『俺は自分に胸が張れるようになりたかった』

今となつては理由すらわからない。そう思ったからただひたすらにそれを追い求めた。

自分に胸の張れる要素を求めて悩んで追つて希望ヶ峰にすぎた。

強いて言うならば唯一普通じゃなかったその一点が希望ヶ峰の目にとまったのだろう……才能を作り出すには才能を持たないものを用意しなければならぬ。縋りついたその先で俺はその計画の被験者として白羽の矢が立てられ……俺は気がつけば自分を捨ててその実験に領いていた。

カムクライズルプロジェクト……希望ヶ峰学園創設者の名前を付けられたその計画は希望ヶ峰学園の本気を伺わせた。

何せ希望ヶ峰の本来の存在理由は人工的に希望と呼ばれる存在を作り出すこと……この計画がなればその目的に確実に近づくというもの……そうして希望ヶ峰の誇る技

術、才人を駆使して行われたロボットミ―手術の先に完成したものは超高校級の希望と呼ばれた。

俺は全てを捨てた

心も

意思も

記憶も

感情も——その人間性の全てを捨てた

その末に希望は誕生した

でもその選択こそが……悪夢の始まりだった。



——暗い。

光がないんじゃない……何かが光を遮って……髪？

長い髪が垂れ幕の如く光を遮る。除けようと手を伸ばそうと脳が働きかけるがまるで自分の腕ではないかのように力なく下がったまま動きやしない。

ただただ虚ろな瞳で垂れ幕越しに光を見つめるのみ。

「……ツマラナイ。」

自分の口が自然とそう口ずさんだ事に心の中で目を見開いて精一杯に驚く。

まるで自分が自分じゃないかのように……

——光の奥に見えるのは連れ去られる少女の石像。それを前にして打ちひしがれる黒ウサギの姿。

あの光景を作ったのは俺だ。

どうにかできたのも俺だった。わかかって放置したのもまた自分なのだ。

光が暗闇に飲まれていく。黒ウサギは一人闇の中に取り残されていた。

「……ツマラナイ。」

ああつまらない。そんな状況を俺は作った。自分の味わった絶望程ではないからと

絶望を過小評価し絶望に付け込む隙を与えた

「……ツマラナイですが……絶望程じゃない。」

……何を言っ——

「——絶望に染まれ」

自分の声に俺の意識は暗転した。

「——君……。」



「——うわあああつ!!」

かかっていた布団を跳ね除け飛び起きる。

汗を拭うように顔に手を当てる……そこに鬱陶しい前髪は存在しない。

「……夢……なのか？」

自分で言っておきながらそれは違うとわかってしまふ。

カムクラが希望を捨てかけた俺を絶望に飲み込もうとして来たのだ。……なるほど、これが真の超高校級の絶望が言っていた『希望だの才能だのあこがれにしがみつくとやつほど脆い』ってことか。

でも……

「……取り戻せばいい。失ったのなら……取り戻すまでだ!」

それが俺の希望……砕かせない。誰が来ようが何があろうが……俺は未来を見失わない!

その為にもまずは考えなくちゃならない。今回のことで間違いなく俺たちは不利になつた。

相手に意図を悟られていようが実際行動に起こすのと起こさないのでは相手の対

応も変わる。

何よりも今回のことはノーネームの弱みになり兼ねない。

こうなれば相手が食いつかなければおかしい餌を用意するという手は使えない。

出来れば白夜叉にでもペルセウスの状況を聞きに行きたいところだが……あいにくと空はまだ暗い。

「レティシアを取り返すにはまず何があってもギフトゲームしかないよな。それ以外の方法だと少なくとも俺たちは何かを対価として失う羽目になるだろうしそれは今後のノーネームに手痛いでは済まないものだ。」

……かといってペルセウスが俺たちのギフトゲームを飲まなければならぬ状況というのもまた無い。周りの目を気にする状況に追い込むにはさっきのレティシアの脱走があるし真正面からならば雑魚を相手にするまでもないと逃げられる。

黒ウサギへの対応を見るに向こうからこちらに激昂して向かってくることもないだろう。

「……ゲームだからこそ取れる手は少ない……か。なら探すべきは……」裏ワザ」。

真正面から挑むのを変えることはできなくとも挑むことができるように変えることはできるはず。

大きな商談ではあるのだろうがこんな対応を取るようなコミュニケーションが英雄の名を冠することも、また生き残ることもできる筈がない。

そこには必ず何かがある……付け入るのならばそこしかなない。

……待てよ？ 神話に則しているのならそこに何か情報が……つてダメだ俺はそんなに詳しくない。いや、図書室があつたか……

「よし、行こう。」

俺はいつもの制服に着替え月明かり以外照らすもののない廊下を歩いて図書室へと向かった。

これほどでかい館だけあつて蔵書量はジャバウオック島の図書館に引けを取らないかもしれない……とは流石に言い過ぎだがかなりの量の本があることは確かだ。

その中にはもちろん歴史や神話の本もある。多過ぎて逆に見つけるのには苦労したがその分の価値があるのだと自分に納得してようやく見つけた一冊目を開く。

この本に書いてあるのは英雄ペルセウスの最もポピュラーな話……祖父に捨てられ流れ着いた先で領主に命じられた化物、『メデューサ』の討伐のお話。

もともとこの話はペルセウスの祖父が神託で「娘の息子が貴様を殺す」と言われたことが始まり……恐れた祖父はそれでも娘や孫を殺すことはできず川に流すことで自身から遠ざける事にした。

その先で二人を拾った漁師とともに過ごした数年後、その漁師の兄で領主の男がペルセウスの母に恋をしてしまった。

領主はその恋次に邪魔なペルセウスに無謀な『メデューサ』の討伐を命じ間接的に邪魔者を排除しようとした。

これが英雄ペルセウスの始まり……

「出てくる道具は主に三つ……ヘルメスの靴、ハデスの兜、アテナの盾……か。」

ヘルメスの靴は空を飛ぶ羽のついた靴……ハデスの兜は通称隠れ兜、文字通り被った者の気配を消す。

アテナの盾は……いろいろと話があるのか。他の本を見れば青銅鏡の盾だのアイギスだのと書いてある。あと黒ウサギというにはハルパーだったか？ 鎌だかを持っていくとも言うてたな。

「ヘルメスとアテナの力を借りその三つの武器を持ったペルセウスはまずメデューサの場所を知るためにあるところへと向かった……」

それがグランアイと呼ばれる化物。三人の老婆の化物で三人で一つの歯と一つの目しか持たない……つてさすが神話だな。

グランアイはメデューサの姉妹らしくペルセウスはその瞳と歯を奪い脅して居場所を聞き出したらしい。

……必死だったのかもしれないが意外と英雄っぽくないな。いや、相手が化物だからある意味英雄らしいといえればいいのか……何にせよペルセウスは無事メデューサの位置を突き止めたわけだ。

「……ここから先は俺でも知ってるな。首を切つて帰りがけに女の子を助けて領主を石にして道具と頭をアテナに返した……つと最後には星座になつたのか。」

と言うことは俺が見ていた星空の中にもペルセウス座があつたのかもしれないな

………つてそんなこと考えてる場合じゃ無い。

連中は間違いないくヘルメスの靴、ハデスの兜……そしてゴルゴンの瞳を持つてる、この目で確認したしそれは間違いない。他の装備がどうかは知らないがこれだけでも十分な脅威だ。

ペルセウスというコミュニティが仮に神話のコミュニティならばひよつとしたらこのグランアイヤペガサス、クラーケンなんていうのも出てくるのかもしれない。

ヘルメスの靴は単に移動能力が優れるだけで身体能力の高い二人や移動の必要のない久遠には問題がないはずだ。だがほかの二つ……特にゴルゴンの瞳はどうしようもない。対処は神話の中でもただ見ないこととされていた。……いやでもそれなら俺は今頃石像か。

レテイシアを石に変えたのはあの赤褐色の光だ。当たらなければどうということはない。いう事ならばやっぱ頼みの綱は十六夜と春日部……

となるとハデスの兜の気配を消すというものの度合いも気になる。

ただ見えなくなるのかはたまた見えないう上に文字通り気配がないのか……こういう本だけじゃわからない。

先日見たのだって透明になって消える様子だけだ。

動物の五感をもつ春日部で捉えられるのならば……ってそう考えると春日部のギフトってかなり便利だな。

「……対処法は見えず新しい発見は特になし……厳しいな。」

だが気になることがないわけじゃない。

ヘルメスの靴は確かに靴だったしハデスの兜は確かに兜だった。……だが石化に関しては盾こそあったものの生首なんて持っていなかった。

そもそも首を盾につけたのはアテナであってペルセウスとは何の関係もない。

……ひよつとしてあの石化はゴルゴンの瞳じゃないのか？

なんにせよ時間的にそろそろみんなが起き始める頃だ。調べものもいいがこれ以上はあまり効率的とは言えない……一回やめることにしよう。

ずっと座りっぱなしだった椅子から体を話して少し伸びれば体の凝り固まった部分が小気味よくパキパキと音を響かせる。

箱庭三日目の朝がやってきた。俺たちの箱庭入りを出迎えるかのような怒涛の日々最後の演目が……始まろうとしている。

老婆は姉妹ではなく英雄を見る。それが現実、それが史実

老婆は姉妹ではなく英雄を見る。それが現実、それが史実。

……早くほろばないかなこんな世界。

若干カムクラすらも飛び越えて黒く染まった思考にドン引きしながらそれでも現実を見たたくない俺は顔に手を当て目を覆い隠すようにして目の前の集団から一人離れていた。

「ひよつとして君たち芸人のコミュニティなわけ？ならホントまじでうちのコミュニティに来いよ！」

そうバカにするわけでもなく大真面目にうちの主戦力三人……十六夜、久遠、黒ウサギをスカウトするのは俺が朝必死に調べたペルセウスのリーダー、ルイオスだ。

つまり今の俺達は“敵”だと見られていない……それだけならば何も問題はない。その隙をつけばいいはなし何だから。

だが問題は確かにあって……十六夜たちがなぜ相手に舐められるのをよしとしているのか……それがわからない。

……まあ個人的には白夜叉がセツティングしてくれたこの緊張感漂うべきである状況においてルイオスに勧誘させるほどネタに走る十六夜たちに目を背けているわけだが……。いやまじでどんなくだらない理由で絶望させられてるんだよ俺。なんかこつちに来てから情緒不安定か!?

「……マジで滅びろこんな世界」

「——世界の破壊者ツ!」

「どうした、日向と黒ウサギ揃って中二病か?」

「ふざけるなよ十六夜。いやまじで睡眠時間足りてなくてこのテンションは辛いんだよ。」

「おやおやなんだい? 眠れなくなるようなことでもあったわけ?」

何やら付け入る隙を見つけたと言わんばかりに嫌味つたらしくルイオスなる外見チャラ男が問いかけてきた。

「……まあ、うちのコミュニティどうも規模だけは大きいみたいだから、不法侵入が絶えないんだよな。昨日と一昨日だけでも三回だぜ? まったく礼儀も知らない奴らが蔓延ってるんだな箱庭ってのは」

だが返しには言外にレティシアの行動は独断であると言う事を滲ませて返す。ご丁寧なそれに少しいらついた様子ながらもルイオスは余裕を崩さない。

むしろ黒ウサギが俺の発言に食ってかかろうとするのを十六夜が止めるといふ構図がとなりで完成した。

「新参者がでかい顔してるからじゃないの？厚顔無恥つてのはすごいねえ、箱庭のルールも知らずにそんなことが言えちゃうんだから。」

「英雄様には敵わないけどな。神話の中でも現実でもやってることはただのヤンキーじゃないか。弱肉強食はルールとは言わないんだよ、何処ぞの虎じゃあるまいし。」

「……ひ、日向くん？」

「う、うむ、どうした小僧。睡眠が足りぬのなら隣で寝るか？布団を用意させるぞ？」
「別に必要ない。」

久遠と白夜叉の珍しく狼狽した声が俺を落ち着かせようとしてくるが昨日のこと……そして十六夜達の呆れる会話のせいで少し暗い思考にとらわれた俺は止まらない。

「親の七光りの坊ちゃんが先輩ヅラするなよ。そのポジションだつて神話みたいに親を殺して座つたもんじゃないのか？」

「——お、お前えっ!!」

「おい日向、質がわりいぞ。」

「うむ、やはりおぬしはとなりで休んだ方がいい。」

今度変な形の剣を取り出したルイオスに割り込むように俺をたしなめたのは十六夜だ。

そしてそれに白夜叉が続く。

「必要ない——ここは『白夜叉』が用意した『対話』の席だ。いくら無礼があろうと俺には関係ないけど……剣まで持ち出すのはどうなんだ？それは白夜叉を軽く見ているのか……はたまた俺たちとギフトゲームでもしたいのか？」

どの口が言うのか……まさに厚顔無恥だがそれでも俺は態度を変えない。

白夜叉は俺一人の見る目を変えたところで仲間に向ける目は変えないだろうし味方の目は今更だ。

言葉の上での厚顔無恥はどこまで行こうが俺に捨てるものは少ない。ただし対するルイオスは違う。あくまでもあいつは白夜叉との関わりを持つコミュニケーションの長でありここは何を言われようが手さえ出され無ければふんぞり返っているべきなのだ。

「——ッ、の……ッ！」

振り上げた剣を俺の言葉に止められルイオスは振り下ろすことができないでいる。当たり前だ。この場で俺に剣を振り下ろすということは……

「ギフトゲーム……ってことでもいいんだな？」

……そう言う事である。

そしてその一線を超える事が出来ないのならば……あるいはできたのならば……

「——振り下ろせばいいじゃないか」

「誰も責めたりなんかしない」

「それが当たり前だろう？」

「そしてそれがルールだ」

「弱気は淘汰され強者が永遠に君臨し続ける」

「それがルールだと言ったのはお前だろう？」

「ならハッキリさせてやろうじゃないか……」

“ —— お前のそのチンケな希望なんか絶望の前では塵芥に等しいということ

俺の言葉が場を支配する。

絶望は伝播する……かつてあらゆる絶望を知り尽くした少女は言った……希望であれば希望であるほど絶望しやすい……と。

「——ウワアアアアアアッ!!」

ルイオスが構えた剣に力を込めて振り下ろす。

この瞬間確かにあったルイオスの希望は完璧に砕かれた。ノーネームとの勝負を避けるつもりだったなら初めから関わらなければよかった、耳を貸さなければ良かった、無駄な挑発行為は控えるべきだった……だが振り下ろされた剣は止まらない。

勝負の必要があるのならばそれは何もこちらから挑む必要はないのだ……相手に挑ませればいい。

夜に思っていた経過とは少し違うがそれもまた俺らしい……だが伝播したそれを断ち切る事ができるものも確かに存在する。

「なるほど、今は黒日向モードか？」

「黒日向？随分な素敵ネームをつけてくれるじゃないか。黒ウサギでも意識したのか？」

十六夜が風の如く動き振り下ろされた剣先に指を合わせることで無理やり剣を止めていた。

……一応言っておくが真剣白刃取りのように左右から挟み込むではなく刃に対して人差し指をまっすぐ当てるとような形で進路を塞いでいるのだ。皮膚なのか肉なのかは知らないが硬度が人間じゃない。

「我ながらいいネーミングだろう?……それにしてもお前……なんで動かなかった?」「なんで?なんで動く必要があるんだよ?」

「そのなんでは俺が動く確信があったからじゃないだろ。振り下ろされて自分が切られたとしても問題がないと……そう考えてるんだよな?」

「実際そんなに問題じゃないだろう?現にお前だって切られてるじゃないか」

刃すら通さないやつに言われるのはなんとも違和感を感じる

俺の言葉に指を弾くようにして刃を押し返した十六夜はレイオスがよろめくのにも目を向けずこちらへと向き直った

「馬鹿言え、俺とお前は違うだろ。」

「似たようなもんさ。」

「嫌味かこの野郎……つとあまりお客様をほっておくのも悪いか。話はまたあとだな。」
「俺たちもお客様のカテゴリじゃないか?どちらかといえば。」

……というかほっておくも何も……

「憤慨して帰っちゃってるけどな。ガキかよ英雄様は」

まあおかげでレティシアの件が有耶無耶になった訳だけど……ああくそっ!カムクラが絡むと計画が崩れる!

「別の計画が必要だな……。」

「……あのう、日向さん？また何か無茶をしようとしていませんか？」

「うむ、割と肝が冷えたぞさっきのは。」

「心不全を起こさないでくれよご老人方。」

「「若いのがそんなに正義かつ!!」」

「当たり前だ。若さは正義で、正義は若さだ。」

冗談はさておきペルセウスをギフトゲームへ引つ張り出すのは失敗した。

どうも思考が黒くなると歯止めが効かないな……全くままならない。

……というか仮にギフトゲームが成立したとしたら俺が狙われるんじゃないか？

……ロクなことが無いな。



「グランアイ？」

話し合いと言う名のガキの喧嘩も終わり特に収穫もないまま帰路に着いたそのすが

ら、十六夜が俺に口を寄せてきた。

「それにクラーケン。白夜叉が言ってたんだよ、ペルセウス攻略の鍵になるだろうってな。」

「グランアイは一つ目の老婆だろ？クラーケンはイカだ。何が攻略に繋がるって言うんだ？」

「お前も疑問に思っちゃいたんだろ？ペルセウスと言う名前とその実情のギャップを。」

確かに十六夜の言う通り……俺はそこに状況をひっくり返す芽があるんじゃないかと踏んでいた……

「その二体の試練を突破すればペルセウスへの挑戦権が得られる……それならある程度神話にも沿うし、英雄らしくもあるな。」

「つーわけでちやつちやつと取ってくるからお前留守番な。」

……おい。

「ならなんでそのことを俺に言ったんだよ？言わなきゃいいだろ言わなきゃ。」

まあ元から付いていって何ができるわけでもないけどさ。

「だってお前伝えとかねえと一人でペルセウスに突っ込みそうだったからよ。念のためってやつだな。」

「ねえよ！お前じゃあるまいし！」

カムクラの影響があるのならば……まあ確かにやるかもしれないけど……。

「俺とお前は似たようなもんなんだろう？自分で言ってたじゃねえか。」

……それは俺じゃない、カムクラだ。

「……わかったから行ってこい。あんまり時間もかけてられないだろう？」

いつまで経っても動かない十六夜に発破のつもりでそう言葉をかける。

ようやく動く気になったか一歩分俺との距離を離して体の向きを変えた。

「わかってねえな日向。」

………？

「エンターテイナーに時間の説教は無用だぜ？」

政治家は政治に殺され、貴族は金に殺される

政治家は政治に殺され、貴族は金に殺される。

十六夜が何処かへと消えてから特に何かあるわけでもなく俺たちは春日部の待つ
ノーネームの居住区へと無事に帰ってきていた。

俺の勝手な暴走を咎めるような視線を黒ウサギから受けながらレティシアの話を持
ける。

黒ウサギにとってそう簡単に諦められる事では無い筈なのに当の本人が諦観モード
に入っているのが気に入らないけど……まあ無理もないといえば無理もない。

なにせつい最近こちらに来たばかりの俺たちよりも余程、この世界の理不尽を経験し
てきたんだろうしな。

「——だからって仲間を見捨てる理由にはならない。」

黒ウサギは……もう少し強欲になるべきだ。

久遠も春日部も遠慮をするところが違う。どうせ自由に振る舞うのならば十六夜のように突き抜けてこそだ。

「……だったら——どうすればいいんですか!？」

だがそんな思いだつて言葉にしなくちゃ伝わらない。しかもそれが知り合つてからそう日も長くない奴ならばなおさらだ。

「助けたいですよ! ええ、私だつて見捨てたいだなんて思つてないです、思うわけが無いです! でも!!……どうしようも、無いんでございますよ……。」

左右から久遠と春日部の視線が突き刺さる。それほどまでに今の黒ウサギは脆く……弱い。

原因は確実に俺だ。白夜叉のところから帰つて以来どこか責め立てるような口調になつてしまつている。……これは純粋に学級裁判の弊害だと思つが……。

「……それでも打てる手はあつた。ペルセウス伝統のギフトゲームならば真つ向からだつて挑めた。……お前がそれを知らない筈がないだろ黒ウサギ?俺らは信頼できないか?」

「——できませんよ!!日向さん!あなたは……信頼することができません!!」

「ちよつと黒ウサギ、感情的になりすぎよ。それに日向君までさつきからなんなのその態度は?」

「……頭……冷やすべき。」

信頼出来ない……か。自分で聞いておいてなんだけど結構来るな。

「悪い……でももう少しだけ話させてくれ。なんで俺は信頼できない？何をすれば信頼に足るんだ。」

「……日向さんはいいました。私が皆さんに隠しごとをしていると……それがあろうちはコミュニケーションに入ることとはできないと！でも日向さんは……隠し事をしているじゃないですか。」

「……確かに気になることはいくつかあるわね。あまりプライベートに口を出したくはないけれど……でも確かに貴方は話すべきだわ。信頼とか……そういう話を出すのであればなおさらね。」

「……時々怖い。」

「私達のギフトゲームの時もどこかへ行っていたようだし？」

「……あとロンゲの不審者って何？」

……なるほど。確かにフェアじゃない。要求しておいて自分はその要求を拒むような奴を信頼できるわけがないか……でも——

「——話せないな。」

「な、なんでですか!!そんなに黒ウサギ達が信用出来ないのですか？だって日向さんは

「黒ウサギ……やめましょう。」

「ですが！」

「あなたの秘密は話す義務があつた。彼がどんな言い方をしたにせよ、彼がどんな秘密を抱えているにせよそれが彼のことであるならば……話す義務はないわ。それがわたし達の信用よりも大事なものだというのは……少し意外だけれど。」

……嫌な言い方をするなよ。最近は不安定過ぎてそういう言葉ですらきついんだから。

「……創は……なんでわたし達に言えないの？……信用してないから？」

「違う、そうじゃない。でも……こればかりは譲れない。十六夜の言葉で言うならこれは俺の喧嘩だ。」

「……身勝手ね。私あなたのそういうところ嫌いよ。」

「……知ってるさ。」

「——お話中失礼！」

だんだんと収まりがつかなくなってきた会話を断ち切るように扉を蹴つ飛ばして部屋に入ってきたのは十六夜だ。

その手には麻袋に入れられた大きな球状のものが2つ。

「——なんだ辛気臭い空気だな？日向よくわかってんじやねえか。こういうのは話したら面白くねえ。」

「……？十六夜くんは知っているの？」

「アアン？当たり前だろ、俺が聞いたんだから。」

「——待てお前らは盛大に勘違いしてる。」

久遠は多分俺の話だろう、そして十六夜のはペルセウスへとギフトゲームを挑むためのギフトの話。たぶん自分が取りに行っていることを話すと面白くないから自分が帰ってきて驚かすまでいくなつてことだったんだろう。

「あ、そうか？んじやまあこれお土産。」

「……スイカ？」

「スイカ……ってどこに行ってたのよ。」

「——まさか……。」

十六夜が持ってきた麻袋を重い音と共に机に置くと他の三人が各々の想像をしながら袋へと寄った。

たぶん黒ウサギの反応は中身の想像がついたからだろう。

「……珠？」

「……これはただの珠じゃありません……ペルセウスにギフトゲームを挑むためのギフ

ト……でもこれはそんな一朝一夕で手に入れられるような物じゃ……!!」

「あー、まあいいじゃねえか手に入ったんだから。素直に喜べよ、な？」

「……はいー」

……まあ暗い空気が晴れて何より。コミユニテイのなかだと余計立場が悪くなった気もするけど……どう考えても非はこつちにあるし……とりあえずペルセウスのことさえ乗り切れればしばらくはそう忙しいこともないだろう。その間に信用してもらえるようにすればいいさ……。

俺はそう自己完結して大きいテーブルの反対側で騒ぐ四人の姿を……一人眺めていた。



その後二つの珠を黒ウサギがペルセウスへと持ち込み正式にノーネームとペルセウスとのギフトゲームが決まった。

ルールはペルセウス側が用意したペルセウス伝統のゲーム……要はペルセウスの城

を隠れんぼしながらルイオスを探して倒せば勝ち。ただし道中でペルセウスメンバーに発見されたものはルイオスへの挑戦権を失ってしまう。

俺たちはギフトゲーム開始直前にペルセウスの城の前で最後の打ち合わせをしていた。

「さてギフトゲームも決まって内容も決まったところでそれぞれの役割を決めようか。」

「……役割って?」

「ゲームの内容からして全員が全員ルイオスに挑むのは効率が悪い。初めから何人かがペルセウスメンバーの目を引いてその間に本命がルイオスを倒するのが効率的なんだよ。」

「そーいうこと。というわけでお嬢はとりあえず陽動な。」

「……わかったわよ。今回は譲ってあげる。」

しぶしぶ引き下がった風を出しているがたぶん自分の実力的に厳しいと察したんだろうな。なんだかんだ言ってもルイオスは魔王を従属させていて巨大コミュニティサウザンドアイズの傘下の幹部でもある。本人だって生半可な力じゃないだろう。

「へーへー、ありがたき幸せつと。そんで?ゲームに参加できない黒ウサギはおいて春日部と日向はどうするんだ?」

「十六夜はどうせ意地でも本命だろ?」

「もちろん。」

だったら道中で十六夜は使えないと思った方がいい。かと言って道中は見つかるだけでアウト……筋力とかはあまり関係がない以上十六夜一人じゃルイオスまではたどり着けないか……。

「……私が護衛する。」

「……それがいいな。相手は不可視のギフトを持つてる。熱、匂い、音までどうなってるかはわからないけど感知能力もあり戦闘力もある春日部がベストだ。」

「それじゃ日向はどうするんだよ？ちなみにジン坊ちゃんは俺のお付だ。」

「俺もそうしたいところだけど……俺も陽動でいい。俺がいつでも何もできそうにないしな。」

走り回ってれば何とかなるだろう、幸い体力には自信があるほうだしな。

「消極的だなおまえ……まあいいや、それじゃあ——」

話を終えて十六夜が足をあげて扉へと体を向ける。

上げた以上下ろされるのは必然——振り下ろされた足は巨大な門を吹き飛ばし入口付近を舞い上がった煙で多い隠した。

「素敵に名無しの城落としを始めようじゃねえか!!」

だが英雄を殺すのはただの人、人を殺させるのは絶望だ。

だが英雄を殺すのはただの人、人を殺させるのは絶望だ。

かくしてギフトゲームが始まった。

黒ウサギは審判として十六夜たちと最奥へと向かい残された久遠は入口付近で水樹を操りながら敵を集めている。

俺はといえば……。

「……………だ(っ)っ?」

……………絶賛迷子中だった。

入口付近は久遠で事足りてるしそもそも俺に戦闘能力はない。見つかって逃げて見つかって逃げてをするのならば広いところよりも狭い通路の方がいいと考えてきた訳だが……………地理がわからん俺じゃすぐ捕まるなこれ。

「……………どうしたもんか——ツ!!?」

あちこちから聞こえていたはずの轟音、怒声が一気に静まり返って嫌な静寂が訪れる。早くも決着がついた訳ではない……この飲み込まれるような、たっているだけで足が震え自分そのものが不安になるようなこの寒気は……酷く既視感を覚える。

冴え渡って引き伸ばされた感覚が静寂の中で一つの異音を捉えた。

自分が歩いてきた廊下の奥の奥……カッン、カッンと革の靴が硬質な地面を叩く音……ゆつくりとこちらへ近づいてくる。

ペルセウス……なわけが無い、彼らの音はもつと重い。

歩幅も、歩速も全然違う。

「久しいな——元気そうで何よりだ、日向。」

——近い！

産毛立つような囁きに咄嗟に前へ転がるようにして距離を取る。

目に入るのは長身。銀髪に赤目というあまりお目にかかることのない配色をきちんと着こなした制服と眼鏡で凜としたイメージにまとめ肩からかけた竹刀袋が現代に蘇った侍をイメージさせる。

力強く落ちついた声もそれを思わせる一端だろう。

その姿は俺がこの世界に来て初めて初めて違和感に気付くきつかけとなった才能を持つ俺の仲間……“超高校級の剣道家”の姿に相違なかった。

「辺古山……おまえがここにいてってことは!!」

「お察しの通りだ日向。花村の次は私……というわけだ。お前達を殺そうとした私が言うのもなんだが……生きていてくれて良かった。あの時は坊ちゃんのためだと無心で動いていたが……それでもやはりあの南国生活であれほど仲良くなれたお前を殺すのは……正直辛かった。それから坊ちゃんと仲良くしてくれて……本当に感謝している。」

「……辺古山、お前は絶望していないのか?」

「フム、最もな質問だな。しているかしていないかと言えばしているのだろうよ。お前だつて感じるのだろうか? 私から……”絶望”を。」

「……ああ。でも——」

「絶望は理屈じゃない……いくら私とお前の間に絆があろうとそれは坊ちゃんと私の絆には及ばない物だしこの私はお前を絶望させるためにある……現実を見る日向。縊るな。私はお前の敵だ。」

そう言つて辺古山は掛けていた二つの竹刀袋から竹刀を取り出した。

「花村は弁でお前に挑んだらしいな。だが私は大して口が回る方でもない……故にこれで決着をつけてもらう。」

渡された竹刀は予想以上に重い……つてちよつと待て!

「俺は剣道なんてできないぞ!」

「ああ安心しろ。これは剣道じゃないし私の勝利条件はお前の絶望……殺すつもりは毛頭ない。何よりも私がお前を殺したくない。私はお前が立てなくなるまで、折れるまでただ死なない程度に叩きのめすだけだっ!」

瞬間俺の腹部に衝撃が走り水平方向にメートル単位で体が飛んだ。

いつの間にか廊下は床から天井までびっしりと黒いギアスロールに埋め尽くされており既に絶望との戦いが始まっていることに気づく。

「竹刀というものはとても靱やかで強い。纏めてある分硬さもある。そして衝撃もとても通しやすいということもあつて生身の人間に使うものではないのだ。下手をしなくとも一打で人命を奪う事もある。」

「……殺す気はないんじゃないのか?」

腹部が訴える痛みは確かに生半可なものではない。出した声も震えるし竹刀を杖にしてもまともに立ち上がることもすらできない。

ただの一撃でこの有様だ。

「もちろん。衝撃の通りやすさは衝撃の逃がしやすさだ。私にとって体に一切の傷害を残さずに打ち込むことなどさして難しいことではない。だが、体表で爆発する痛みは――

――その分凄まじい」

振るって振るって振るって振るって染み込ませろ！

上から袈裟斬りに振るわれた——合わせる

「……何故だ」

反転して横なぎ——合わせる

「……何故？」

少し戻して再び横なぎ——合わせる

「おかしい……」

ひねりを変えて上下の連撃——合わせる！！

「なぜ追いつく!?!」

「ウリヤアツ!!」

振るわれた全てに竹刀を合わせて……力で押し切る！

それでも押さえ込んで耐えるというのはさすがとしか言い様がない。

少し置かれた距離はギリギリ竹刀の射程外。詰めようと思えばすぐにでも詰めることはできるが……俺の目的も痛めつける事じゃない。

「グウツ！何故だ！」

先程までの余裕も消え疲労からから肩の動きも激しい。

それでもなお剣先がぶれない様に構えられているのはやはり超高校級の剣道家としての姿だろう。

「……単純な話。仮に刃古山の技術を使える存在が他にいたとしたら……体格の違いとかで多少技に差が出るだろうけど何よりも打ち合った際の力の入りに差が出るだろう」
「私は力を逃がすことだって——」

「刃古山の技術で力を逃がせるってことは刃古山の技術で力を逃がさないこともできるってことだ。刃古山が逃がそうとした力をそのまま捕まえておくのは……簡単だったよ。」

もつともはじめの段階から刃古山が俺の体にダメージを与えに来ていたのなら別だが刃古山はそうはしなかった。細かい裂傷や引き攣りそうなところもないではないが体の駆動においてはほぼ万全だ。

「刃古山……なんでそんなことになった？九頭龍は生きてる。みんながみんな無事とは言えなかったけど誰一人死んでない！九頭龍だって別にお前のことを忘れたわけじゃないぞ？」

「……関係ない。私にとって他の奴らなどどうでもいいんだ。坊ちゃんがいれば……坊ちゃんが生きてくれれば……そう思ってた。だがその後も前に進むお前を見て思った。倒れる仲間を見て思った。なんで私もあそこに立てないのだろうと。なんで私はあそ

ここで力になれないのだろうと!! 私は今! あそこに立ちたい!! 私の力は守るためのもの……守られるための力じゃない!!」

「だからってなんで!!」

「……お前が絶望に落ちればモノクマは……彼女は必ず向こうのみんなも絶望に染める。そうすればまたみんなで頑張れる!! 今! 力になれる!!」

……絶望に染まれば人は変わる。世界が変えられてしまう。歪んでいることに気づきながらもそれを望んでしまう、それしか望めなくなる。絶望に落ちれば自分で戻ることとは不可能になる。

——だからこそそれを止めるのが……希望の役目だ。

「さっきの言葉の間違えた、もう一度いうぞ辺古山……みんなお前のことを忘れたわけじゃない。戻ってこい辺古山!」

「私は……私はアアアアアア!!」

正眼に構えられた竹刀が真つ直ぐに眼前へと迫る。

込められた剣気がその一瞬だけ辺古山をとてつもなく大きな存在に見せる。

……それだけ立派な芯があつて……なんで歪んじやうんだよ。

同じように正眼の構えから全く同じ軌道で剣を振り下ろす。

確かにいくら力が強くとも反応よりも早く決まれば辺古山が勝つ。技術は共有でき

ても体が共有できないというのは……剣道で鍛えた視神経などの神経系の強さもまた共有できないということ……だけど俺は……俺の体はカムクラの物だ。普段の俺には発揮できない超人的な筋力があるなら……神経だって超人的なんだよ——

「目を……覚ませえ!!」

結果再び正面から辺古山の竹刀と衝突した俺の竹刀は激しい音と共に辺古山の竹刀をへし折りその手から弾き飛ばした。

それでも止まらぬ斬撃は吹き飛ばされた辺古山の横を直進し————ペルセウスの城ごと両断した。



「なんだなんだ!?!」

既にレイオスとの決闘も佳境を迎え、出現した魔王アルゴールの城全体を石化してしまふような赤褐色の光を消すのも既に何度目かという時、突如両断されて足場が傾いた。

これほどの揺れに不安定な壇上で石像となったままのレイシアは無事かと視線をやれば案の定ガタガタと揺れて硬質な床にその体を衝突させようとしており——

「——黒ウサギ!!」

「無理です!間に合いま——」

アルゴールに足止めされ支えに行けない自分の代わりにと黒ウサギが走り出す距離的に間に合うかどうかは絶望的である。

しかし時は待つてはくれない。ついに動きに耐えられなくなりバランスを崩したレティシアが地面に叩き付けられる……そんな最悪をその場の全員が確信した瞬間城の切れ目から飛び出した何かがレティシアを支えた。

「今度こそ助けたぞ……かなり間一髪だったけどな。」

「日向?」

普段より一段……以上に鋭くなった気配と全体的に白っぽくなった体躯、さらにそれと反比例するように赤い色を深めた瞳を携えて日向が決着の場へと登場した。

「おいおいなんだそりゃ、おまえどつかの戦闘民族の出身だったりするのか?」

「お前は俺に尻尾が付いているように見えんのか?」

「んじゃ切れたんだな。」

「余裕みただし手伝いはいらないうな?」

「むしろ手を出したらためえから……って一回お前とはやってみたかったから是非是非手を出せ。」

日向は「おまえのほうが脳みそ戦闘民族じゃねえか。」と吐き出しかけた言葉を飲み込んで皮肉替わりにわざとキザったらしい言葉を選んで言った

「悪いけど今ばかりは両手がお姫様で塞がってるよ。お前はその蛇女とダンスしてな。」

「後で殺す。」

割とマジな仲間の殺気に当てられながら日向は噛み締める……今度こそ助けられたその両手の重みを。

希望もするし絶望もする、それが人間だ

希望もするし絶望もする、それが人間だ

無事ペルセウスとのギフトゲームも終わ……無事かどうかはさておきギフトゲームが終わったところでレティシアも開放された。

被害はペルセウス拠点、ルイオスの精神、ペルセウスの信用と言ったところか。まあ一部に自分が関与しているというのが少し納得できないがやったものは仕方が無い。ルイオスの精神に関しては十六夜の遊び心という笑えない冗談が原因だ。

なにせあいつアルゴールを圧倒してゲーム終了間際というところで「このゲームに勝ったらレティシアとかよりもまず旗と名前貰うから！んでそれ賭けてまたゲームしようぜ！」なんていうもんだから完全にルイオスもやけになって……そりやまあニュアンスこそ違うが内容は同じだ。そこまでゲスイ考え方ができるのがすごいと素直に思う。

だがコミュニケーションの話は別としてまた今回のことではつきりしたことがある。

まず一つは俺の体のこと……今でこそギフトゲームの時から多少は劣化したもの、それにしたつて人外な身体能力を誇るこの体のことだ。

自分なりに推測を立ててみたがキーは恐らくカムクラと俺ヒナタにある。元々俺とカムクラは複雑な関係だ。多重人格でもなくかと言ってそれより近いでも遠いでもない。完全な同一存在でありながら真逆の背反存在でもある。

数学では無いが本当の真逆というのは結局は同一存在に落ち着く……説明するとしたらそれしかない。だがここで問題なのはその同一存在たる俺たちが両者ともに希望であり、絶望であるということ。もちろんながら希望と絶望は相容れない……だがどちらも簡単にその立場を変えてしまう、それ故のアンバランスさなのだと思う。

誠に遺憾ながら今までの俺は思考がカムクラよりになっていて、それこそこないだの辺古山のことで初めて自分の中の希望を意識したと言う形になるんだろう。これは正直カムクラのことしか想定してなかった今までよりも数段複雑な話だ。下手をすればカムクラを呼び込みかねないしそうでなくとも希望の俺がまた絶望を呼び込みかねない。

これがちょうど二つ目の話だが何よりも気になるのは一回目の花村の時と違い二回目の辺古山はペルセウスのゲーム中に割り込んできたことだ。そしてそのことに誰も気がついていない……これはおかしい。二回とも俺の合意なく始まったギフトゲーム

であり普段とは様子の違ったスクロールからあれが魔王のゲームであることは想像に難くないが……だとすればあの絶望たちはこの世界において魔王として君臨しているということだ。

……まさに最悪の想像だな。これが想像であるのならばいいんだが……証拠が揃いすぎてるのだから質が悪い。

ついでに今までの傾向からすれば絶望が襲ってくるのは俺が一人の時のみ、島で殺人を犯したものが順番通りに来ている。最もまだ二人目でしかないしこれが役に立つかもわからないもしこの通りに次が起るとすれば次に来るのは……”超高校級の保健委員”にして島の中で唯一絶望に染まって二人もの人間を殺したあの第三の島での犯人、罪木蜜柑……アイツしかない。

今までの二人はそれでもどこか自分を持つてはいたが正直あの罪木があの人と同様に希望を持つてくれるとは思えない。最悪……今度こそ仲間を巻き込まなければならぬかもしれない。それだけは絶対に避けるべきだ。

あの絶望は……希望を墮落させる存在だから……。

「暗い思考はやめよう。これ以上はあまり意味がない。」

レテイシアも無事に取り戻すことができた、素晴らしい事じゃないか。

……黒ウサギたちとの確執は……ある意味このままの方がいいかもしれない。平時ならばもちろん仲良くした方がいいに決まっているが今は少し特殊すぎる。

……そんな風に思考に耽つていても鋭敏すぎる感覚は接近する存在を捉えていた。歩幅、匂い、重さ、布切れの音、吐息の間隔……こんなことを言っていれば変態だと言われそうだがわかつてしまうものは仕方が無い。

「あら、こんなところで一人何しているのかしら？」

……だがあえて言わせてもらおうかな？もつとも一人の場合は噂と言つていいのかも怪しいが……

“噂をすれば” つてやつか。

「……意地悪だな。こんな時に一人でできることなんて限られてるだろ。」

「何を言っているかわからないけどできることなら沢山あるわ。それに今は二人よ？」
「違うな、一人と一人だ。」

「変わらないわよ。それよりもレテイシアが探していたわ、礼を言いたいつてね。」

一度も振り返らずにわざわざひたすらそっぽを向いていたのに久遠とくればいちいち隣に来るのだから本当に意地が悪い。

「もう起きられるのか？」

「無理をしてまで起きてきているの。こういうのは迎えに行つてあげるのが紳士の役目なのではなくて?」

「……いや、いい。」

確かに助けた……助けることはできたが……そこまでして必死に礼を言われることじゃない、機会があつた時に少し言葉に出すくらいで良いのだ。

「呆れた。少しは私たちに心を開いたのかと思えばまだ変わつてないのね。」

……心を開く?何を言つてるんだ。

「俺は別に閉じこもつてなんか——」

「閉じこもつてるわよ。良いかしら日向くん。あなたは私に同じ言葉を言ったことがあるわよね? 忘れたとは言わさないわ。私は一度受けた屈辱は忘れないようにしてるもの、間違いない。」

「……いやあれを屈辱の記憶にカウントされてる方が俺としては驚きで」

「はぐらかさないでもらえるかしら? これでも私貴方達には心を許したいと思つているのよ。」

……だつたらそうすればいい。許したいと思えるのならそれはできることだ。

「……でも貴方だけなのよ、私を受け入れてくれないのは。」

「……ハア?なんでそうなる?俺は別に久遠にどうこう言いたいことがあるわけじゃ無

いざっ。」

「でも……」仲間であるならば話すべきこと」が話せないんでしよう？それって何が違うのかしら？私はあまり知らないけれど物語の中の仲間っていうのは……ただ受け入れているだけじゃないと思うのよ。」

……確かに違う。だけどそれにだって例外はある。

信用するしないの問題じゃない白夜又が言った通りこれは文明がひとつ滅ぶ滅ばないの規模の話なんだ……そんなのどう仕様もないじゃないか……。

「……そうやって黙り込むのも同じ事よ。私はね、日向くん。十六夜くんのあの不敵さが好きよ？春日部さんの優しさも好き。黒ウサギの温かさもジンくんの必死さも好き。もちろん日向くんだって勘違いしていたことがわかったもの……でも私は……私達は誰一人として日向くんのどこが好きなのか答えられないと思う。だって誰も知らないもの。……知っている人が教えてくれないのだから。」

「……それでも俺はみんなが好きだ。だから……話せない。」

話すわけにはいかない……意見は変わらない。

プライドの高い久遠がここまで自分を見せたのは少なからず自分にも責任があると感じるからだろう……それでも俺にはどうしようもできない。

そんな嫌な沈黙を話の終わりと受け取ったのか久遠はついに立ち上がった。

少し離れた先ではまだ夜の星空を見ながらそれこそコミユニティの全員で笑いながら騒いでいる風景がある。

「……わかったわ。さよなら——日向くん。」

久遠は歩いてそこへと戻っていく。

一人その喧騒から離れている俺はあの頃の俺と何が違うのだろう。

いくら身体が希望化していようがいまの俺は間違いなく希望らしくない存在に違いない。

「……寂しい空だな。」

ペルセウス座が消えた空は……やはりいつも見ていた星空とは何か違った。

冴えた感覚は久遠の少し赤くなった目元も暗がりの中で容易に捉えるし、何時もよりもう少し低い春日部の声の違いも明確に理解する。黒ウサギの浮かべる笑顔の僅かなぎこちなさや十六夜の本来ならば気付くほうがおかしいさりげない視線も、レティシアが行く人行く人に俺の行方を尋ねる声も、そんなみんなの代わりに子供をまとめるジンのため息も全て見えてしまうし聞こえてしまう。

こんなにもみんなが近くににいるのに遠い……

「人間関係つてのは才能とは関係ないのか……中学時代の俺は何をやってたんだかなあ。」

俺はそうしてノーネームの祝勝パーティーが終わるまで一人で座り込んでいた。

無駄に鋭いはずの感覚ですら捉えられない絶望の足音が俺たちへ迫るのも知らずに……俺は久遠たちの言葉の本当の意味もわからず、ただイタズラに仲間の命を危険に晒す羽目となったのだった。

chapter 4 北の地より死の風薫る

喧嘩と祭りは異界の華、踏み荒らすは無粋な骨董

喧嘩と祭りは異界の華、踏み荒らすは無粋な骨董

……気まずい。自分で招いた結果ながら非常に気まずいぞこれは。冷や汗混じりに視線を横に逸らせば絶対零度のオーラをまとって微動だにしない久遠と頬をリスのように膨らませて半眼でこちらをチラチラと睨む春日部、十六夜は先ほどチェスをして遊んでいた俺を置いて何処かへと消えたため行方は知らないが何にせよ空気を読んで俺も連れて行って欲しかった。

「……なんなんだろうな。」

ゾクツ！

……あまりの息苦しさにため息とともに漏れた言葉のせいか余計に室内温度が下がった気がする……おいおいまだ肌寒い時期だつてのにこれ以上冷房をかけるのはや

めてくれよ。

そうしてそのまま無言が続きただ虚しく時計の針が時を刻む音を三人で鑑賞していると何処かへと消えた十六夜が帰ってきた。それも何故か傍らにジンを抱えて。

「お前ら、出かける準備をしろ！」

……………。

「「はあ？」」

……まあ意味はよくわからないけど……ナイスだ十六夜。



というわけで時は流れて都合三度目の白夜叉宅……というよりはサウザンドアイズ
の支店。

今回は黒ウサギを伴わず十六夜、久遠、春日部、ジン、俺というメンバーでお邪魔し
ている。

何の話かはよく聴いていないからわからないが何やらこのメンツでどこかのお祭り
へと行くらしい。それに当たって白夜叉に送迎役を頼みたい……そう言う事だろう。
対する白夜叉の口からは何やら不穏な言葉が聞こえてくるが何をそんなに焦っている

のか十六夜はそれを二つ返事で承諾し白夜叉の一拍とともにお祭り会場へと俺たちは送り込まれた……なんでそんなに解説口調なのかって？会話に入ろうにも他二人の視線が冷たすぎては入れないんだ。もはや今の俺は置物に近いな。さりげなく……というか明らかに巻き込まれたジンの help の視線すら応えることはできない

「というか手を叩くだけでテレポートとか……よく聞いてなかったけどノーネーム本拠からはだいたい遠いんだろ？」

「ああ、俺の脚でもそこそこの時間はかかったらうぜ。」

……そこそこ？十六夜のいうそこそこ……多分俺の想像の万倍はかたいそこそこなんだろうな。ますます魔王つてのはチート臭い存在だよ。

なんて一人密かに戦っていたところにそれとはまた別種の寒気が襲って来る。ひたすらに警鐘を鳴らす自分の中の希望に従って上を上げば遥か上空にポツンとひとつの黒点……

「……待て、十六夜。おまえ黒ウサギに何か言ったか？」

「あ？ああ、俺らに今回のこと隠していたみたいだからよ。罰として俺らとの鬼ごっこに負けたら俺ら全員コミュニティを抜けることにしてきた。」

……いっつ！！

良く見れば落下してくる影は確かに髪が赤く既に相当お怒りであることが伺える。

後ろではやはり当の本人達が白夜又と談笑しており上から迫る危機には気づいていない

「おい、お前ら「本当にこの問題児様がたはああああ……」——遅かったか。」

早速春日部が捕まった。

十六夜は既に久遠を連れて脱出しており白夜又は目の前のその惨状を見て呵々と笑っている。

まずは十六夜の素晴らしい危機回避能力と久遠を助けるというさりげないジェントルマンシツプを褒め称えたいところだがそれよりもまず……

「ひいなったサアアン？」

目の前の修羅をどうにかしないとイケないな。

「……捕まえるというよりは殺されそうだ。」

まず俺は話を理解していないわけだがそれにしたって逃げなきゃいけないことはわかる。出来るならば白夜又あたりに事情を聞く時間が欲しかったよ！

高台のようになっていてそこから飛び出し全体的に赤いという印象を受ける石畳の街へと飛び降りる。

後ろから追ってくる気配は確かにある。でも振り返る度胸は俺にはない。

後ろも見ずににやら露店などが立ち並ぶ活気ある街を高速で疾駆して脅威から逃

げ回る。

「いいかげんにしてください！」

何がだよ!? わからねえよ! ってか……

「どう考えても原因は十六夜だろ! そっちにいけよ!!」

叫ぶと同時に思わず向けた視線で紛うことなき羅刹を確認してしまい恐怖に体を震わせる。おかげで壁を蹴り損ねて体から家屋に突っ込むところだった。

……あれはウサギが出せるものじゃない、いつからウサギをやめたんだ黒ウサギ!

「まずは……」

……ヤバイっ!

「——人ずつです!!」

今までのテンポを崩すような溜めのあと俺がよけたその空間をたがわずに赤い閃光が駆け抜けた。

しかもご丁寧に通り間際に腕を伸ばして俺を引っ掛けていくのだからたまったものではない。

今まで以上の速度で流れる景色の中相変わらず揺れ動かない脳は冷静に体に指令を送る。掴まれた袖口から腕を絡ませ姿勢を入れ替えてから黒ウサギの上へと陣取りそのまま跳躍。

相変わらず光線のような勢いで跳ぶ黒ウサギとは真反対に飛ぶことになるので距離は自然と開いた。

「し、死ぬかと思った。」

頭の中は冷静でも意識はそうじゃない。冷静に対処してもこわいものはこわかった。というか接触の時点で意識がブラックアウトしなかったのがむしろおかしいだろう。

既に彼方へと消えた黒ウサギが帰ってこないのを確認してからようやく周りを見渡す余裕ができた。高台からはだいたい離れたが街はとてんも広くちようどこの辺が中心……と言ったところだろうか？

「それにしても……祭りみたいだな。」

あちこちに出ている露店で売られているのは一見なんなのかわからない奇妙な形物が多し。ひとつ近寄ってみれば工芸品……といえはいいのだろうか？緻密な意匠が施された燭台のようなものが並べられている。他にもそれは皿であったりメダルのような物であったり。大きいものではダンスサイズのモノまで存在した。

……なんとなくだが読めてきた。俺はこう言った祭りの話は聞いていない。それは多分団体行動が基本な俺たち全員に言える事だろう。

だがその俺たちが聞いていなかった「おもしろそうな話」を十六夜がどこから聞きつけ……黒ウサギに秘密でやってきた。あの黒ウサギの怒り具合はその際に十六夜が

焚き付けたということだろう。そしてさらにこの祭り……もしくは周辺で白夜叉が俺たちに頼みたいことがあつたと……。うん、これなら辻褃があうけど……肝心の黒ウサギの怒りの詳しい原因と白夜叉の頼みがわからないな。いや黒ウサギの怒りが十六夜のイタズラに関することだけならばいいんだが……あんなものそろそろ慣れてもいいだろうに。

「……やれやれ、何にせよ俺は肝心な場面で意識を飛ばしていたみたいだな。」

全くもつて困つたもんだ。

勝手に動いてもナニかあるとは思えない……がああ黒ウサギの必死さがひよつとしたら白夜叉の頼みになにか関わりがあるのだとしたら大人しく黒ウサギに従うのがいいんだろう。

かと言ってあの状態の黒ウサギに捕まるのもなあ……うん、一度白夜叉のところに戻るか。道中の露店にも興味が無いこともないがいまは命を大事にとってやつた。

そうと決まれば行動は早い。早くも高台の方へと足を向け再び高速で疾駆する。

心なしか行きよりもスピードが速いがそれは別に黒ウサギがまた帰ってくるかもしれないという恐怖からではない。違うと言つたら違うのだ、断じて違う。

長いようで割と一瞬だった道のりだが距離が距離だけあってひよつとしたらもう白夜叉はいないかもしれない……という予想はいい意味で覆されその白き影は春日部

と一緒に何ら変わらぬ様子でそこにいた。

「ちようどよかった。」

そう発したのは説明を求めわざわざ街から戻ってきた俺を待ち構えるようにしてその場にいた白夜叉だった。

「……は？」

「いやなにこの娘にも言っていたことなのだがの。ちようどこの街でギフトを競い合う、いわば大会のような催しが開かれるのじゃ。」

ギフトを競い合う……ということとは必然とギフトを持つことになるわけだが……もちろん俺はギフトなんぞ持っている訳がない。白夜叉の言葉が結論に至る前にその話の流れから終着点を予測したがなんとも要領を得ないが……そんな俺の表情を見て白夜叉は呆れた顔で先に続けた

「そう急ぐでない。ほれ、前にワシがやったラプラスの紙片……出してみると良い。」

貰った方がいいがギフトを持たない俺にはいまいち使いどころがない為ポケットに入ればなしだった灰色のそれを抜き出して見てみると……何だこれ？

「ふむ、やはりのう。」

「……日向、いつの間にギフトを手に入れたの？」

「……いや、わからない。」

白夜叉に促されるがままに取り出したカードは前のようにカード自身の刺繍だけでなく他に2つほど、彩りが増えた状態でそこにあつた……と言つても色は相変わらず黒地にアツシユグレイという地味を極めた色合いなのだ……。

増えた項目は上記の通り二つ『博愛の下町料理』と『献愛・正義執行！』……うん、よくわかつた。何が良くわかつたつてそりやまあ印象に強過ぎるこの名前はどうか考えても原因はアイツらの物だろう。

「この間のペルセウス戦の時、実はワシも店の私室からではあるが見学していたんだがの。その時小僧の体……いや正式にはその中身というべきかの？ 異変が見て取れた訳じゃ。」

「たしかにこの前の戦いの時はすごかつたですけど。」

……結局ペルセウス戦後、辺古山との戦いは外からは感知できなかったという結論に至つた。もちろん誰に聞くわけにも行かなかつた以上確証ではないが誰も何も言つてこない時点でそう言う事のはずだ。ということは白夜叉が言っているのはその後十六夜たちの前に姿を現した時のことか。

「……なるほどな、それでギフトのことがわかつたというわけか。」

「何度もいうがワシはギフトの鑑定に関しては専門外もいところじゃ。気が付いたのは小僧が随分とわかり易く変化していたから……というのが大きい。どうせ前と変わ

らず自分でも何が起きているのか……わからんのじゃろう？」

……確かにそのとおりだ。結局分かったことといえば自身の中のカムクラと何故かこちらの世界で蘇った仲間がいることだけ。詳しいこともなんで俺がここまで力を行使できているのかも未だに良くわかってはいない。

「……だから力試しもかねてその大会に出てみるってことか？」

「……創もでるの？」

「まあ確かにメリットは大きいよ。」

……ただしその大会で俺の身に起きていることが判明するとは思えないがな。

「うむ、では二人ともでるといふ事で話を通しておこう。」

「——いや待て白夜叉。」

春日部が持っていた紙を横から覗いてルールを確認するとこの大会ペアでも出られるらしい。片方は補佐という役目に近いらしいが……うん。

「俺は補佐役でいい。そもそも俺のギフトが創作系かは少し怪しいところもあるしな。」

「む？まあ小僧が良いというのなら止めはせんが……それでは出場する意味が無いのではないか？」

「そんなことはないさ。貴重な経験になるよ。」

……思えば今の今まで本当の意味で仲間として協力したことはない。どこまでやれ

るかにはわからないが……

「そう言う事でいいか、春日部？」

「うん、問題ない。一緒にがんばって黒ウサギと仲直りしよ？」

……忘れてた。

「それはいいんだがその件で一つ、聞きたいことがあるんだ。」

「なんじゃ？ 儂に答えられる範囲でよければ答えよう。」

「……なんで俺たちはここにいるんだ？」

嫌な沈黙が高台に広がった。

「……聞いてなかったんですか？」

恐る恐るというふうにジンが何とか声を絞り出す。

「ああ、祭りに来たということと黒ウサギが俺らを捕まえないと全員もれなく脱退と言う話だけは聞いた。」

「……肝心なところを聞いとらんのか、なるほどのう。続きは夜と言った手前おんしらにだけ話すというのも二度手間だが……今回の儂の——否、北の階層フロアマスター支配者からの依頼は『打倒魔王』を掲げるコミュニティへの依頼……言わずともその内容は知れよう？」

「……それが確実な話なのかもしもを考えての話なのでだいぶ変わると思うけどな。」

「此度の祭りはここの階層支配者が交代したが故のもの。そして新たな階層支配者はま

だまだ若く反対勢力も少なくない。」

「……そこだけ聞けばまだ俺らに依頼をするような段階に思えないけどな。そもそも俺たちは実績も無いし名前も旗もない。影で白夜叉のセールスがあつたとしてもなんだってそんな影もない噂に怯えて……畏か？ いや、白夜叉がかんでる時点でそれは無いはずだ……だつたらなんで？」

「あー、ごちゃごちゃ考えているところ悪いがそれはおんしらのコミュニティと若き階層支配者に親交があつたからじゃ。それよりも——」

と説明の流れのままに白夜叉が市街地に向けた視線の先で派手な爆発が起きる。

「あれは流石にお祭り騒ぎがすぎるでの。止めに行つた方が良いのではないか？」

「……俺には無理だ。」

「な、なんで黒ウサギまで……」

「綺麗な時計塔だったのに……もつたない。」

目の前で爆発したのは街の中央部に鎮座していた建物の中でも頭一つ分以上飛び抜けた時計塔。目を凝らせば散らばつた瓦礫を砕きながら落下する十六夜、黒ウサギとそこに接近する赤い影が見える。

「なあ白夜叉、あの赤いのはなんだ？」

「ん？ ああ、あれは件の階層支配者の兄上殿だよ。面倒くさいことにはなつたが……」

まあ黒ウサギならばなんとかするじやろう。」

……大した信頼だな。でも黒ウサギって年の割には意外とガキっぽい——ツ!!?

時計塔の方角から一瞬すごい殺気が……相変わらず無駄にいい視力が黒ウサギの唇の動きを捉える。

『——あとひとり』

……………。

「悪い春日部、俺大会前に死ぬかもない。」

「創!?!」

「だ、大丈夫ですよーいくらなんでも黒ウサギはそこまでしない筈です!……少し長い説教が待ってるかもしれないですけど……。」

ああ、たぶんその説教とやらも俺の想像の万倍は……長いんだろうなあ

祭り明け、夜空に残る、火の香り。日向心の一句

祭り明け、夜空に残る、火の香り。日向心の一句

「フツ、——セイツ!!」

巨大な何かが石を打つ音が響く中、少女が宙を舞いながら一人踊る。

……と詩的な表現をすれば随分と美しい光景に聞こえなくもないが現実目の前で見るには心臓が強くないといけないうらな。少女が美しいだけにでっかい土塊に追い掛け回されているさまは余計に悲惨な結末を予想させるものだ。

白夜叉の誘いのとおりギフトゲームに参加しているが今のところ俺のサポートが必要そうな場面は特にない。

たまに敵のゴーレムとでもいうべき人形の製作者が地面を変質させたりゴーレムの動きを極端に変化させてこそのもの春日部は危なげなく対処している。

それでも万が一を考えて敵が砕いた地面の破片を投げつけては動きを牽制したり変化した地面をえぐったりしている……だがそれももう終わりのようだ。

ゴーレムのひときわ力の乗った拳をグリフォンの風の恩恵を使って躲しすぎさま返す勢いでその体を粉碎する。

身体、感覚の強化に幻想種の力……更には動物と言葉を交わす事が出来る力というのは語るまでもなく凄まじい力だ。だからこそ大会進行役の白夜叉が春日部の決勝進出を告げたのもある意味必然だろう。

「おつかれ春日部」

俺の横で春日部を応援していた三毛猫を拾い上げながら春日部も俺のねぎらいに答える。

「うん、応援ありがとね。創、三毛猫も」

またそれに答えるように三毛猫も声を上げる。

『気にせんといてーな。それよりもお嬢！ついに決勝やで！』

「うん、ここまで来たらひと頑張りだね」

「相手も決勝まで勝ち上がってきた猛者だ。油断するなよ？」

「しないよ、創もいるし」

……うん、このギフトゲームのパートナーが春日部で本当に良かった。これが仮にほかの二人だったら……想像したくはないが十六夜にあらゆる意味でぶち壊される大会が幻視できる。久遠に至ってはそれよりもひどい。氷河期の再来待ったなしだ。この

世のどこにそんなアイスエイジを経験したいなどという酔狂な男子高校生がいるのか？そんなものどこにだっている訳が無い。

そんな風に心の奥底で穏やかな気持ちになっていると周りのざわめきが少しまた大きくなったように感じた。

「なんだ？」

「創、あそこ」

春日部が指し示す場所へと目をやれば白夜叉に並ぶように豪華な気飾りをした少女が一人。

印象ははたただ「赤い」と言っただころか？

「……階層支配者ってやつか？さっき見たやつと肌色や髪色がそっくりだ」

「……うん、確かジンの友達……だよな？」

春日部が遅まきながらやってきたジンにそう尋ねるがジンはどうも遠慮したように「そ、そんな！僕がサンドラ様のご友人だなんて恐れ多いです！」

……うんまあそれが普通の反応か。俺の仲間にもいたぞ、俺らとは立場からして違う不思議と跪きたくなる存在感の持ち主が。

ジンが慌てふためき春日部が興味津々に追求する中それらのざわめきを割るようにして少女が口を開いた。

「ご紹介にあずかりました、北のマスター・サンドラードルトレイクです。北と東の共同祭典・火竜誕生祭の日程も今日で中日を迎えることができました」

出た言葉は主催者らしい言葉で特に面白味のあるものではなかったがやはりどこか様になっていくというのは彼女の天性の才能というもののおかげなのだろうか？ たしか聞いた話ではジンと同年と言う話だった……つまり年齢一であの堂々たる……とまではいかない迄もはきはきと己の役割をつとめているということだろう。

そのサンドラに促されるがままにジンの持つていた招待状とやらを確認すれば書かれていた文字がバラバラに散らばり形を変えて再び組み合わさっていく。一通りの移動が終わったあとには今回のギフトゲームの決勝戦の詳細へと変化していた。

『ギフトゲーム名』造物主達の決闘』

- ・ゲーム参加コミュニティ
- ・ゲームマスター “ サラマンドラ ”
- ・プレイヤー “ ウイル・オ・ウイスプ ”
- ・プレイヤー “ ラッテンフェンガー ”
- ・プレイヤー “ ノーネーム ”
- ・決勝ゲームルール
- ・お互いのコミュニティが創造したギフトを比べ合う。

・ギフトを十全に扱うため、一人まで補佐が許される。

・ゲームのクリアは登録されたギフト保持者の手で行うこと。

・総当たり戦を行い勝ち星が多いコミュニティが優勝。

・優勝者はゲームマスターと対峙。

・授与される恩恵に関して

・“階層支配者”の火竜にプレイヤーが希望する恩恵を進言できる。

宣誓 上記を尊重し、誇りと御旗の下、両コミュニティはギフトゲームに参加しま

す。

“サウザンドアイズ”印

“サラマンドラ”印

ゲームの詳しい内容はまだ書かれてないようだが対戦する相手コミュニティの名前はかろうじて記載されていた。

「ウイルオウイスプと……ラッテンフェンガー？」

ウイルオウイスプってのは確か墓場とかに出る炎の球のことだったか？

ラッテンフェンガー……というのは聞いたことが。

何にせよこれで今日の日程は終了のようで早くもサンドラのあいさつも終盤に差し掛かっている。

俺は今一度夜の帳に包まれ様相を変えつつある赤く燃える町並みを眺めながら少しの違和感を捉え始めていた。何事にも理由があるというごく当たり前のことを白夜叉の言葉と共にリフレインさせながら、ただただ思考を繰り返してそれでもなお違和感の正体を掴めずにいる。

既に災厄の音色は奏でられているというのに俺といえば……未だにどこかでこの世界のことを甘く見ていたのだった。



所変わってここは先ほどのギフトゲーム運営本陣の謁見の間。名前の通り謁見するための部屋であり常識的に考えて礼を失する行動のその全てを控えるべきこの空間は流石と言うべきか主に十六夜の影響で相も変わらず緩い空気が流れていた。

「随分と派手にやりおったの。おんしら自重と言う言葉を知らんのか？」

「辞書には刻まれてるが使ったことは一度もねえ！」

「自信満々にいうことですかこのおバカ様!!」

……白夜叉が言っているのは街の真ん中の破壊された時計塔のことだが……あれに

は一応黒ウサギもかんでいたはずだよな？

もちろん口には出さない。一応俺は捕まってるし視界の先でその姿よりも赤いオーラを迸らせて憤る例の階層支配者の血縁がいるからだ。

一応白夜叉が体面を気にして作った真面目な顔で叱っているがそれでも男の機嫌は取まらない。フンツ、と力強く鼻で目の前の光景を笑い飛ばしてはその姿に見合った敵つい声で高圧的に言い放った

「ノーネームの分際で我々のゲームに騒ぎを持ち込むとはな！ 相応の厳罰は覚悟しているか!？」

「これマンドラ。それを決めるのはおんしではなからう。」

だよな。かといってあれだけの騒ぎ……いくら親交があるとはいえ……つてそのマンドラとやらの反応からは親交があったように見えななんだが？

と言つてもやはり口には出せない。白夜叉の声に応えるように玉座から立ち上がった小さい体軀から声が発せられたからだ。

「箱庭の貴族」とその盟友の方。此度は火竜誕生祭に足を運んでいただきありがとうございます。今回あなた方が破壊した建造物は白夜叉様のご厚意により修繕がなされ、また人的被害も奇跡的に無かったということなので私からは今回のことは不問にしたいです。」

「え、まじで？」

「へえ？太っ腹なことだなそれは。」

思わずあげた声が十六夜と被った。それくらい衝撃的だ。まるでVIPのような扱いの良さだが……ノーネームである以上はありえないと思っていたことが案外起こるもんなんだな。

「うむ、まあおんしらは儂が直々に協力を要請した身。被害がなかったのが幸いしたのう。」

修繕費と路銀は前報酬と思ってくれとナチュラルに経済力と懐の広さを披露してくれる白夜叉だ。

そしてその会話の流れから今回俺たちがここに来た理由を話し出す。

サンドラの目配せにマンドラを残して配下は下がりこの部屋には俺を含めて7人のみになった。途端にどこか重苦しい空気が一部霧散しかわりにとても華やかな笑顔を浮かべたサンドラがジンへと駆け出した。

「ジン、久しぶり！コミユニティが襲われたときいて心配していた」

「ありがとう、サンドラも元氣そうでよかった」

……やはり地位持ちとはいえ子供は子供、ということか。もつともジンもサンドラも普通の子供に許される生活を送ることはないのだろうか。

「世知辛いもんだな」

「違うね、俺らの世界が甘すぎたんだ。力が全て……わかり易くて辛いも甘いもあつたもんじゃねえのさこっちは」

「……たまにはその捻くれた物言いを何とかできないのかお前は？厚顔不遜にも程があるしな」

「ヤハハツ、俺ほど真つ直ぐな奴もそういねえよ」

だからそう言う事じゃないんだがなあ……まあ「その様に気安く呼ぶな、名無しの小僧!!」——おいおい。

柔らかくなっていた空気をその一喝でぶち壊したのは未だにその苛立ちを隠さぬマンドラだ。久しぶりの再会に話を弾ませる二人に我慢の限界が来た……といったところだろうがなんにしても大人気ない、なにせわざわざ人払いをした意味を分かっているやっっているのだから。

なお、人ごとのようにしている俺の目の前ではマンドラがジンへと振るつた剣を十六夜が蹴り返し、その何を捉えているのかわからぬ双眸で凶刃の元凶を睨みつけている。

「おいおい、知り合いの挨拶にしちや穏やかじゃねえぜ。今の止める気なかつたろ？」

「あたりまえだ！サンドラはもう北のフロアマスターになったのだぞ！誕生祭も兼ねた共同祭典に“名無し”風情を招き入れ——」

「それ以上はやめといった方がいいな、マンドラ」

全く持つてどこへ行つても飛び出すのは罵声の数々。実力が認められる世界と言え
ば聞こえはいいがそれは示せなければ力があろうとも埋もれてしまう世界ということ
だ。だから余計によからぬ事を考える輩も出てくるし視界も狭まる。

「……なんだ貴様は？」

「お前たちが招待した〃名無し〃のメンバーだよ。素性も知らず自分の主の前に立つこ
とを許したのか？」

「なんだ日向、口は慎まなくていいのか？」

「俺たちは客分だ。招待者に払う礼儀と感謝こそあれ下っ端にまで掛ける情けは無い。
自身が招き客人として扱った存在の主を独断で殺そうとするような行動の方が余程自
身の主の名誉に関わるということにも気づかない馬鹿野郎の授業料をもらつてもいい
ぐらいだ」

「客分だと……？随分と大きく出たな田舎者が。一流のコミュニティともなれば客もま
た選ぶもの、お前らのような〃名無し〃など端から論外だというのだ！」

……………。

「仮に——」

「何？」

「仮にお前が北のフロアマスターになったとしたならば、確かについてくるものは多いだろうがそれ以上の進展は無かつただろうな。少なくとも今回の祭りは失敗に終わっただろうよ」

誕生祭という特別な祭り……それ故に持つ意味はとても大きく、俺などが口に出したりすれば怒るのも無理はない。だがそれでも俺は撃ち抜かなければならない。

王としての背中ならば既に見てきている……ならば問題ない。瞼の裏に思い浮かぶ王としての使命を負った少女と最後まで仲間のために死んでいった男を見てこの俺が竦むわけにはいかない

「お前は王として持つべき誇りの在り方を知らない。そんな有様で吠えたところで自分が愚かに見えるだけだぞ？」

「——ここまではつきりと侮辱を受けたのは初めてだ」

そう言つてマンドラは再び剣を構える。

「そこまで吹いたのだ。もちろんその身に刃を受ける覚悟はできていよう」

「覚悟ができていなくとも問答無用で刃を振るうやつが今更形式をならうな。他に迷惑だろ」

俺の言葉を受けて剣が持ち上げられる。視界の端で目尻に涙を浮かばながら笑いをこらえている十六夜は今度こそ割り込むつもりはないようだ。そして俺も振るわれる

刃を止めるつもりはない。もともと二人の子供の前で行われた大人の非道に腹が立つただけのこと……これ以上は過剰でしかないしその当の子供にとつてもいいことではない。

「マンドラッ!!」

重なった二つの幼い声にマンドラの剣は静止する。ずっと見守っていたからか幾分か落ち着きのある声が白夜叉、咄嗟に出したからか少し食い気味な声がサンドラのものだ。

「マンドラ兄様、その方の言う通り今の兄様は余りにも礼儀を失っていますー!」

「………礼儀よりも、………誇りだ。名無し風情と関わるから周りから見下されるのだー!」

マンドラのセリフが少し詰まったのは先ほど俺が打ち抜いた言葉だったからだろう。

それよりも見下される……か。周囲の目を気にするのになんでこんな強硬策に出たのか?……例えばその周りから名無しの始末を頼まれた。だとすれば話は通るがそもそも名無しとは嫌われものである事は否定しないがかと言ってそれを理由に狙われるほど大きな存在でもない。狙う理由が普通のコミュニケーションにはないのだ。

それでも刃を向けて向かってきたのは事実、ならば多少無理があろうと理由がある筈なんだ。

「これ、いい加減にせいマンドラー!」

「サウザンドアイズ」もだ。全く持って余計なことをしてくれる。同じフロアマス
ターといえども越権行為だ、『西の幻獣、北の精霊、東の落ち目』とはよく言ったものだ。
此度の噂も東が北を妬んで仕組んだことではないのか!？」

……噂？

どうやら同じ所に疑問を持ったらしい十六夜が白夜叉へと問いかける

「おい、噂つてのはなんだ？今回のことも何か関係があるのか？」

対する白夜叉もあらかじめその話をするつもりだったのか袖口から一枚の手紙を取
り出した

「うむ、この封書におんしらを呼び出した理由が書かれている。自分の目で確かめるが
よからう」

渡された手紙の封を一気に破り十六夜がその中身を確認して一切の表情を消した。

それを不思議に思った黒ウサギがそれを後ろから覗き込みに行く。

「……なつ、なんですかこれは!!」

たまらず叫び声を漏らした黒ウサギに今度はジンが封書を確認しに走る。

……流石にここまで露骨な反応を見せられれば全てが繋がるといふものだ。

「今回の依頼つてのはあの封書のことについて……つてことでもいいのか？」

「それしかねえだろ。ああ……確かに意外だった、俺はてつきり跡目争いか何かの仲裁

だと思つてたぜ。」

俺に乗つかつて場の和を乱す発言に再びマンドラが反応しようとするがそれよりも早く白夜叉が俺たちの言葉に答えた。

「謝罪はせんぞ？話を聞かずに受けたのはおんしらじやからの」

「違いねえ……それで？俺達にさせたい事、いやそれよりもこの封書はなんなんだ？」

「だいたい予想はついてるけどな、と最後に付け加えて十六夜がこの場の全員を見回す。」

この場にいるのは事情を知っているもののみ、今更怖気ずくものも無いだろうが十六夜としては別の意図があった。

ようやく回ってきた封書に目を落とせば書かれているのはこの世界なりの絶望の形……知らぬ間に過去2回自分が経験したのであろう魔王とのゲーム……その予兆である。

「うむ、では改めて申し込むとしようかの。おんしらにはこの誕生祭の間……サウザンドアイズが予知した魔王の襲来、これを退けて欲しい。」

「……なんのためにその魔王様とやらが誕生祭に襲撃をかけてくるんだ？まさかフロアマスターになれなかったからとかわけわからん理由ではないんだろ？」

「さあの？そこまではわからんが言えることがあるとすればそれは……今回のサンドラのフロアマスター就任、これをよく思わぬ輩は少なくともないということだ」

その理由がサンドラの年齢にあるのか、サンドラの言うとおりノーネームなんかとつるんでいたからなのかは知らないが……なるほどな。こればかりは仕方がない。サンドラが悪いとは言われないが、年端も行かぬ少女が突然自身たちを守り管理する上司になったと言われて納得できるものはそういない。

「それにしたって見当もつかないってことはないだろう？ 魔王なんてそこいらにありふれてるわけじゃないんだ。どの魔王が動いたにせよ関係がありそうなコミュニケーションを辿っていけばそのうち——」

「それは無理ってもんだろ。フォレスガロを見ればわかるが魔王の影響つてのもわりと馬鹿にできねえというほど分散してねえんだ。特に北のフロアマスターのことで動くことはその魔王様とやらも北に随分と縁があるお方なんじゃねえの？」

俺の疑問に十六夜が答えた。確かに十六夜の言う通り噂に聞く自分勝手な魔王という存在ならば影響が少ない所詮は些事に動くことはない筈だ。となれば主な活動拠点は北……つまり支配域もだいたい広がる。探すのは困難……か。

「ふむ、それもあるが、いやそれ以前にだ。今回の予知はサウザンドアイズの者が未来視で捉えたものでな。その者によれば今回の魔王……不思議な事に該当する特徴を持つものがないのだ」

「……それなら端から特定も何もないか」

マンドラの言う「東が仕組んだ事」とはこのことか。

確かに状況的にも心情的にも疑ってしまふのはわかるが流石に先走りすぎだな。

「それ故今回の件……というわけでございませぬ？」

「うむ、といつてもわしがここに居る以上好きにさせる気は無い。おんしらへの依頼も討伐というよりかは護衛、防衛と言った意味合いが強いな。魔王はわしが抑える故ノームは住民を被害から守る事と数がいた場合に備えて取り巻きを抑えて欲しいということだけじゃ」

「そりゃなんとも楽そうではないな」

「楽なわけがありますかこのおバカ様！」

十六夜らしからぬ消極的な一言に黒ウサギがツツコむ。確かに肝心の魔王を白夜叉が抑えてくれたとしても周りに控えるのはその忠臣達だ。弱い筈がない。

……それに気になるのは白夜叉の存在が隠されたものではないということ。

「まあ何にせよひよつとすれば予知が外れて来ない可能性もある。警戒をしなくてもいいとは言わんがそこまで気張らなくても良い。おんしらは魔王の戦いが見れてラツキーでも思っておけ」

白夜叉の言葉にどこか張り詰めていた空気が緩んだ。だが俺はそう簡単に気を抜くとは思えない。

——仮に隠されていてもサラマンドラとは決して繋がりが無いわけではない白夜叉の存在は分かり安いのだ。そんな強者を相手に対策を練らずに来るのか？聞けば白夜叉は箱庭世界の中でも有数の実力者……真っ向から対峙して勝てると思うほどの自信家なのか、はたまた何か手があるのか……考えられる中で一番最悪なのは——

——襲いくる魔王の存在が白夜叉その物であった場合、つまり“サウザンドアイズ”が敵だった場合だ。

燻りはやがて火事とならん

燻りはやがて火事と成らん

サラマンドラを交えた事情説明の後、俺たちはサウザンドアイズの移動店舗へと帰ってきていた。相変わらず太っ腹な事に白夜叉は俺たちをここに泊めてくれるらしい。

「それにしたって久遠のあの姿には驚かされたがな」

「ネズミに噛まれたらしいぞ。なんかちみっこいのも連れてたし面白くなってきたな」

「どこがだよ……まったく。魔王の話にそこまでの食いつきを見せなかつたから大人しくなったのかと期待をしていたらこれだ。」

白夜叉、黒ウサギに久遠と春日部が風呂に入っている間にこうして俺たち男衆三人は毒舌の女性店員さんと共に歓談へと勤しんでいた

「ところでこの店、どうやって移動してきたんだ？」

十六夜が問うたのは最もな質問でジンを含むオレ達全員の疑問だった。もつともそれをふられた店員さんは酷く嫌そうに眉を寄せながら口を開く

「別に移動してきたわけではありません、アストラルゲート境界門アストラルゲートと同じ原理だといえればわかりま

すか?」

「まったく」

「さっぱり」

「……ひどく簡単に言えば初めから全ての入口が一つの出口に繋がっている、そういうことです」

俺らの答えに溜息をつきながらそう補足を加えてくれた。

「あー、つまりなんだ。あの店は支店を兼ねた本店……てことか?」

「違います、この店は間違はなく支店なんですよ。つまり私達の担当している支店はここ外周部……言ってしまうえばサウザンドアイズ外周部支店つてところですよ」

「なるほどな。七桁、六桁、五桁とそれぞれの階層に支店があつてその階層のあちこちに入口があるわけか。随分便利なんだな」

「ど〇でもド——」

「十六夜、それ以上はマジでやめろ」

それにしても便利な仕組みだ。一つの建物でもつて瞬時に様々な場所で同条件で商談、取引ができるっていうのは正直革命的だ。人員も商売道具も土地も気にすることはないのでからどれだけ販売効率が上がることか……

「ちなみに本店の入口は一つしかありませんしここは過去に閉店した土地です故店舗と

私室部をわけておりますので正面入口は開きません、悪しからず」

「マジで何でもありだな」

異世界つてのは便利なんだな……かと思えば車ひとつないつてのはチグハグだが

「あら、そんなところで歓談中？」

そうやって話していたところに声を投げてきたのは浴衣から覗く首元の上気した肌
がどこか官能的な久遠達だ。

「……いい眺めだな、日向、おチビ様」

「……頼むから俺に振らないでくれ」

「首元から覗くまだ露気の残る肌の色合いと白い浴衣のなすコントラスト、膨らみと帯
が意識させるラインもどこか体からほとぼしる熱量で緩くなり薄着ながらも様々な想
像を掻き立てるそれぞれが持つシルエツト！極めつけは肌同様消えきっていない水気
が髪から滴ることによつてそのラインをなぞる様に——」

十六夜の熱弁に思わず視線を逸らしたところでおそらく黒ウサギがもつハリセンの
音が止まらぬ言葉の弾幕を根こそぎ吹き飛ばす。

十六夜の丁寧な説明のせいで気まずさの余り逸らした視線を戻せば案の定先程より
も全体的に赤みを増した女性陣が「変態しかいないのこのコミュニティは!?!」……すい
ませんでした。

ただ久遠までそのお手製のハリセンを持っていたのは予想外です

「白夜叉様も十六夜さんもみんなお馬鹿様です！」

「ふ、二人とも落ち着け」

恥ずかしさ故か憤る二人をなだめるようにレティシアが声をかけるがどうにも効果は今ひとつだ、というか白夜叉も同じことをやっていたのか……俺もなんか嫌になってきた。

抑えに回るレティシアとは対称に早速三毛猫を抱きかかえてはポーツと宙を見つめだす春日部に十六夜と共にケラケラと笑う白夜叉。そんな様子を見て頭を抑えるジンに同情したように肩に手を置き何やら励ましの言葉をかけている店員さん……いつそのこと今魔王とやらの襲撃が来ればこのふざけた空気も状況とともに吹っ飛ぶのだからか？

問題児しかいないこの場に昼間の試合のサポート以上の疲労を覚える。あつていいのかそんなこと？……しまいには握手を شدした十六夜と白夜叉を見て俺達三人は肩を落としたのだった



「さて……そろそろ本題に入ってもらおうか」

その後なんとか沈静化した場をそのまま会場として魔王についての話の続きを促す。

その際に店員さんとレティシアがどこかに消えていたがまあそれはいいだろう

「それでは第一回黒ウサギの衣装をエロ可愛くする会議を——」

「始めません！なんですかそれ!？」

「いや、始めます!!」

……それはいいとして今はこいつらをどうにかしてくれ。

「……始めてくれてもいいんだがそれ最後にしてくれるか？」

「む、そうじゃな。メインは最後というのか」

「わかってんなー、日向。よし、日向の案を採用してその話は最後だ」

なんでそうなる……

「日向くん、あなた……」

「……さいてー」

なんでそうなった!!

「いいからさっさと始めろ!!」

「そうかつかとするでない。言われなくても始めるわ……つとその前に黒ウサギに一つ

頼みたいことがあるのだがの？」

「え、はい。なんででしょう?」

「明日から始まる決勝の審判……あれを黒ウサギに頼みたい」

ああ、そう言えば黒ウサギは審判としての資格みたいなものがあるんだっただか? それにしても工程が半分終わった今日、というか前日になっていきなり審判の依頼ってのはどうなんだ?

「随分と唐突な話なんだな、そんな簡単に決めていいことなのか?」

「いや、もちろん本来ならば前もって頼んでおくべき事だ。だが今回の事は少し予定外での……おんしら街で暴れまわったじゃろう? おかげで月の兎が来ていると噂になっていての。ここまで期待が高まってしまえば出さぬわけにもいかぬでの、黒ウサギには正式に審判・進行役を依頼させて欲しい。別途に報酬もだそう」

あー……黒ウサギってそう言えばすごい珍しい種族なんだっただか? そんなにすごいのか。

「わかりました、明日の審判・進行はこの黒ウサギが承らせて頂きます」

その黒ウサギの承諾を革切りに再び始まる黒ウサギの弄りを横目に俺は一人思考に耽る。

何せこれから対峙するのは魔王そのもの……白夜叉が抑え込まれる所なんて想像が難しいがそれが可能な戦力が来るのは間違いないのだろう。だがそれはどんな戦力だ

？純粋な力か、はたまた何らかの特殊な力なのか……力で白夜叉に勝るだけの魔王の素性が分からないと言うことはないだろう……今回程度のこと、といえば少し失礼になるが箱庭の長い歴史の中でずつと潜伏してきた箱庭最強クラスが一部地域の頭の交代に襲撃をかけてくる意味がわからない。かと言ってある日突然最強クラスの存在が生まれたなんてことも想像できないしそうなれば力とは別に何か白夜叉が行動に出れない要素を持っているということになるのだろう。それが純粋に物理的なものなのか立場のなものなのか……ひよつとすれば弱みなんて物もあるのかもしれない。だが何にしたってそんななにかを持つ相手にどう戦えばいいのか？

……わからない。あらゆる点でこちらに不利なことが多過ぎる。楽観視もできない、対処もできない、意味不明理解不能。現状人間離れし出している俺の頭でわからないならもう俺にできることはないようにも思える。ただ一つ言えることがあるのならそれは——“いやに静かだ”

「これおんし、聞いておるのか？」

「へ？」

白夜叉の声に顔を上げれば既に全員真剣な顔つきへと戻っていた。どうにも集中しすぎて気付かなかつたらしい。

「ああ悪い、なんの話なんだ？」

「春日部さんの明日の対戦相手、ラッテンフェンガーというコミュニティの話よ」

「正式に言えば話をしてるのはハーメルンの笛吹きだけだな」

……ラッテンフェンガー？

「対戦相手……つてたしかウイルオウイスプとラッテンフェンガーだったか？」

「そう言えばアナタは春日部さんのサポーターなんですか？ちゃんと聞いておきなさい、まったく」

「……注意します」

そう、ウイルオウイスプは何となくわかるがラッテンフェンガー……俺はこれを知らない。

「それで、ラッテンフェンガーってなんなんだ？」

「この世界にかつて君臨した悪魔の魔導書のコミュニティ……その下部に属していたコミュニティの名前が“ハーメルンの笛吹き”。ラッテンフェンガーとの繋がりには単純明快、ラッテンフェンガーそのものがドイツ語でハーメルンの笛吹きを指す隠語になっているのさ」

ラッテンフェンガー……ドイツ語か。確かに希望ヶ峰に入るために勉強を続けてきたがドイツ語などは触りだけに留まっていた。

「つまり今度襲撃をかけてくる魔王っていうのはその魔導書のコミュニティの奴らなのか？」

「いや、〃幻想魔道書郡〃は既に滅びたコミュニティだ。残党の可能性こそあれど魔王と呼ばれるほどの力はもうない筈なのじゃが……さて、なんなのかのう？」

「ハーメルンの笛吹き……確か童話だったな」

「グリム童話だ。元となった碑文があつてそれにはこう書かれていた、『一二八四年、ヨハネとパウロの日 六月二六日 あらゆる色で着飾った笛吹き男に一三〇人の子供達が誘い出され、丘の近くの処刑場で姿を消した』——ここから出てくる笛吹き男がハーメルンの笛吹き、つまりはラッテンフォンガーだ」

ラッテンフォンガー……たしかにハーメルンの笛吹きと結び付くといえそうなんだが話を聞く限りは魔書の悪魔とのつながりが見えない。

「何にせよ奴らも〃主催者権限〃を持ち込むことができない以上残党という線が濃厚だかの」

「はあ？何だそれ、聞いてねえぞ俺たち」

「はて、言つてなかったかの？今回の魔王襲撃、予知できていて無防備に待ち構える必要もあるまい。事前にワシの主催者権限を用いて参加ルールに条件を入れておいた。簡単に言えば勝手に大規模なギフトゲームを開くこと、主催者権限の侵入禁止、主催者権

限の発動禁止、参加者以外の侵入禁止じゃ」

参加者であればルールを守らねばならず、参加者でなければもちろん参加はできない……なるほど確かに予防線は張っておくべきだ。だがこれだけ張っていてなお侵入されたとしたら……根本的にどうしようもないな。白夜叉という切り札に加えてルールまで乗り越えて来たのならば打倒の方法は——ん？……なにか、おかしい。なにがおかしい……おかしくはない。白夜叉の手によって守りは万全で——白夜叉の手によって……か。

仮に、もし仮にだが相手が白夜叉を封じる、もしくは正面から打倒する策を秘めていた場合。無理してそれを行うメリットはあるのだろうか？期間を誕生祭に定めたのは誕生祭が特別な日だからということもあるだろうが階層支配者の就任に不満があるというだけなのならば白夜叉がいらない祭典後の方が余計な力を割かずに済むように思える。だとすればなんで魔王は敢えて困難な道を進むのか……目的は階層支配者の地位ではない？白夜叉がいる今だからこそ襲撃をかける価値がある？最強の階層支配者の名か……あるいは白夜叉そのものか。普段は手を出せない位置にいる白夜叉が祭典故に出てくるから狙ったとしたのなら、襲撃者は白夜叉を打倒するほどの力を持っているわけではないという可能性が濃厚だ。条件もなくそれほどの戦力があるのであれば祭典でなくとも正面から戦闘を仕掛ければいいのだから。

つまり襲撃者は力の弱まった魔王、というよりは特徴が一致しないという情報から新参の魔王という線が強い。そして白夜叉を封じる手を持ち北の階層支配者に大して執着がない魔王ということになるのか……そこまで用意周到な魔王がそんな当然の準備に引つかかるのだろうか？

「……絶対に来る」

生憎と思考混じりのぼそつと呟いた程度の声量じゃ誰も拾うことはなかったようだが断言できる。所詮可能性でしかないし期待も多分に混じっているが仮にそうなのであれば間違いなく魔王は来る。

「とりあえずこちらでも監視などの打てる手は打っておく。それでもダメだった場合は……それこそおんしらの出番じゃ」

「任せろ」

そう言つて十六夜を含む皆が首肯して立ち上がる中久遠と俺だけがその場で浮かない顔をして少しの間沈黙を守る。

その後宛てがわれた部屋に戻つてそれ以外の可能性をひたすらに考えるが……どうも一度考えてしまったことに引つ張られて結局考えもまともな形をなすこともできずに朝を迎えることになった

異界の北端で友を思う

異界の北端で友を思う

昨夜の会議と呼べるのかも怪しい集会よりあけて一晩……ここ本戦の会場は異様な空気に包まれ正直な所頭を抱えてしまっただ。原因はステージの上で元気に司会進行を務める黒ウサギ……のファンの皆様。さながらアイドルの追っかけの如き様相で客席にて存在感を放つ彼らにも笑顔で対応する黒ウサギに心の底から畏敬の念が湧いた。

「……なんというか色々凄まじいな」

「ウサギは箱庭のどこでも人気者ですから」

「……そういえばルイオスも黒ウサギには興味を示していたような……うん、問題はあのプロポーションか？」

「まあなんでもいいけどとりあえずは初戦だな、ウィルオウイスプ……白夜叉も言っただけど格上なんだろ？」

「ああ、箱庭の中でも有名にして実力派のコミユニティだ。特に知られているのはかの

コミュニティのリーダーが作りし不死身の幽鬼、ジャックオランタン。文字通り死なない肉体とあらゆるものを焼き払う炎が特徴だ」

現在控え室にて待機しているのはセコンドとして来たジン、レティシアの二人と何故か本戦になってサポーターを不要だと言い出した春日部、それに無理矢理と言う形でついでにきた俺の計四人。

俺の疑問に丁寧に応えたのがレティシアだ。

「まあ流石にジャックオランタンが出てくるとは思えませんが……何にせよ手強いコミュニティであることに変わりはありません。お二人とも十分に注意して——」……私一人でも問題ない」

……何言ってるんだか。

「創の助けは確かに嬉しい、でもやっぱり私は一人でも問題ない」

「だとしてもサポーターとしての仕事を放棄するつもりはないぞ、さつきも言ったけど相手は格上、チャレンジャーはこっちなんだ。全力で当たらない理由がない」

まあどうせ春日部のことだ。怪我させたくないだのいつぞやの白夜叉の言葉を気にして自分ひとりでもやれるだの思っているんだろう。確かに春日部は強いし俺が役に立てることがどれだけあるかもわからない……だからといって一人で行かせるわけにもいかないだろう……というか行かせたら女子陣から多大なる被害を受けるに決まっ

てる

未だに納得の行かないようすの春日部を連れてステージへと向かう。

黒ウサギの進行がだいぶ良いのかステージからまだ離れたここからでもオーディエンスの熱狂具合が伺える。

「そろそろ出番だな」

そう思うと何故か俺が緊張してきた。昨日と違うことはあまりない筈なのに期待値が少し上がっただけでこれだ……どこまでも俺は普通つてことか

少し間を置いて黒ウサギのコールが始まる。通路より飛び出した春日部の眼前を巨大な火の玉が過ぎり迂回して舞台へと着弾する。立ち上った土煙に何が起きたのかを隠され見ることは叶わない

「大丈夫か、春日部?」

「う、うん……」

思わず尻餅をついた春日部に駆け寄り手を差し延べる。

前を向けば煙を吹き飛ばすかのように火の玉が再び急上昇し空中にて太陽のように停止した。

その上に座り込むのが対戦相手だろうか? コールされた名前はアーシャ・イグニファトウス。春日部よりもまださらに小さいツインテールゴスロリの少女だ。

「あつはははははは！見て見て見たあ、ジャック？ノーネームの女が無様に尻もちついてやがるぜ！ははは、さあ、素敵に不敵にオモシロオカシク笑ってやろうぜ！」

聞くに堪えない罵倒。それに追従するかのように火の玉から甲高い声がこだましてまたそれに反応するように客席から罵声が飛んでくる。

栄えある舞台にノーネームがたっていることが不満なのだろう。最もだからといってこの扱いに納得がいくわけでもないが……まあ場違いだからと周りになにか言われるのは慣れっこだ。

春日部も同様だろう。なにせ春日部の視線はその少女ではなく少女の乗る火の玉へ注がれている。

「その火の玉……もしかして」

「はあ？何言つてんのお前。このアーシャ様の作品を火の玉だあ？これは火の玉なんかじゃなくてえ……我らがウィルオウイスプの名物幽鬼！ジャックオランタンだつつの!!」

再び答えるような甲高い声があたりへと響き、火の玉を殻を破るかのようにカボチャ姿の幽鬼が現れる。

闇を照らすのではなくより闇を目立たせる様に輝くランプに存在を薄める様にはためく帳色のマント、一番目立つ頭部は人からすれば規格外のサイズの黄色いカボチャを

顔の形にくり抜いて出来ている。

「……あれがジャックオランタンか」

思わず感心した側からアーシャより再び罵倒が飛んでくる。これが今から対戦する相手への敵愾心ならまだわかるのだが相手は本気でこちらを侮っているのだから笑えない。そしてそれが当たり前というのが何よりも笑えない。

黒ウサギの注意がアーシャへと飛び、白夜叉のパフォーマンスを混ぜたステージ選択により俺たちは再びどこかへと飛ばされる。俺が初めて自分の中の絶望を自覚したあの時のように……世界が変わっていく。

「……でも世界は変わってはくれない」

一人呟いた言葉に思わず笑いながら着地の感触と共に辺りを見回す。

いや見回すまでもなく足の裏より伝わる特徴的な感触と土や木の香り……

「根つこの中……か。これまた広そうなステージだな」

「みたいだね、四方から土の香りがする」

「なるほどお♪」

春日部と俺の会話にもう何度目かと言った具合にアーシャが割り込む。

「わざわざ教えてくれてありがとよ、そっか、ここは木の根の中なのか」

「そうだよ、火の臭いでも嗅ぎすぎて嗅覚が馬鹿になってもなければ普通にわかると

思うけどな」

もちろんそんな事はない。春日部と俺の嗅覚が異常に優れているだけ、あまり言い返さない春日部の代わりに少し言い返し返したくなっただけだ。

とはいえ先程からやけに突っかかってくることから分かる通り俺の言葉は効果的面だったようで明らかにアーシャの苛立った様子が伝わってくる

「そういえばあんたはなんなんだよ？ さっきから当たり前前みたいにそこにいるけどさ？」

「ノーネームだよ、お前の言う通り名無しだし小物に自己紹介する必要もないだろ？」

「……あんたムカつく奴だな。めんどくさそうだし先に落ちるか？」

早くも臨戦態勢になったアーシャに今度は春日部が声をかける

「まだ勝利条件もルールも提起されてない。これはまだゲームとしては成立してない」

「……フンッ」

……俺から仕掛けておいてなんなんだがこの子あまり強者の貫禄がないな。

やっぱり上位のコミュニティとはいえ上から下までピンキリってことか？

なんてど失礼なことを考えているとピシッと眼前に罅のようなものが入り広がっていく。突然のことに後ろに飛び退いたた所でその罅を破って黒ウサギが飛び出してき

た。

その手に持つのは契約書類ギアスロール、今回のルールが書かれているであろうそれを読み上げる『ギフトゲーム名』アンダーウッドの迷路』

・勝利条件

一、プレイヤーが大樹の根の迷路より野外に出る

二、対戦プレイヤーのギフトを破壊

三、対戦プレイヤーが勝利条件をみたせ

なくなった場合（降伏を含む）

・敗北条件

一、対戦プレイヤーが勝利条件を一つでも満たした場合

二、上記の勝利条件を満たせなくなった

場合』

「——」審判権限の名において、以上が両者不可侵であることを御旗の元に契ります。

御二人とも、どうか誇りある戦いを、ここにゲームの開始を宣言します！」

黒ウサギの宣誓とともに正式にゲームが開始された。

とはいえ春日部とアーシャはタイミングを逃したのか睨み合うばかりで動き出す様子はない。

さて、どうしたものか——!?

「ジャック!!?」

「創っ!？」

突然体が炎に包まれ、トラックに轢かれたかのような衝撃を持って吹き飛ばされる。根っこによつて出来た壁を崩し、そして時には身にまとう炎で焼きながら一直線に迷路を通り抜けたところでようやく俺の身体は停止した。

喉の奥が熱い——熱にやられたのか血でも上がってきているのか……なによりも今のはなんだ? いや、やったのはおそらくジャックオランタンか。だめだ考えるのも辛い、余計なことはいい。問題はアーシャという少女の作ったジャックオランタンが予想以上に強く、またそんな状態で春日部が一人という事だ。

「足は……問題ないか。方角も問題はない」

だいぶ吹き飛ばされたみたいだが壁を突き抜けてきたおかげで一直線に戻るだけでいいというの……壁が再生しているのか。なら治りきるまでにできるだけ近づいて残った道は迷路に沿って行くしかない。

全力で地を蹴って徐々に迫ってくる壁に体を滑り込ませながら突き進む。
爆発音が近づいている以上まだ戦闘は続いているはずだ。



「創っ!？」

——創が吹き飛ばされた。ジャックが輝いたと思つたら吹き飛んでいた。

思わすそつちへと向きそうになる足を押え付けてそのまま後ろに全力で駆け出す。

「……アーシャも困惑してた」

それはつまりジャックの行動が彼女にも予想外だったということ。つまりアーシャはあの幽鬼を制御できていないんだ。

後ろから飛んでくる炎を聴覚によつて捉え躲しながら迷路を駆け抜ける。迷路の構造は音の反響で大まかに把握している道がわかつている以上後は私がアーシャにさえ負ければ……!

「逃げんなコラァー!」

怒声と共に一際大きな炎を打ち出してきたアーシャ。

確かにこれはかわせない、かわせ無いからこそ……ギフトを使う。

突如吹き出した風が荒れ狂い炎をそのまま流してしまう……グリフォンのギフト、友達の間証。

未だにあのジャックのことはわからないけれど打ち出される炎のことは良くわかった。あれはジャックのものではなくアーシャのもの。

放たれる瞬間に毎回のように鼻が捉える異臭……あれは可燃性のガスだ。そのガス

に炎を引火させると言う形で炎を飛ばしている。ならばガスを風で流せば炎は私には届かない。

「くっそちよこまかと……だめだ逃げられる」

遙か後方のアーシャの声に応えるようにどこか元気の失せた、しかしそれにしても甲高い声が聞こえる。

『——仕方がありませんね』

動物の鳴き声のように強弱や出し方の違いはあれど到底言葉に聞こえぬその声に突然理性が宿った。

思わず振り返った先に既にその姿はない姿はないが鋭い聴覚がその居場所を伝えた——前。それもすぐ眼前という距離

「——ツ!？」

視線を戻すよりも先に急停止して後ろに飛びずさる。

遅れて戻った視界に確かにそのカボチャの姿を捉える。

「……嘘」

『嘘ではありませんよお嬢さん』

瞬間確かに離れた距離を無かったかのようにジャックが目の前に現れて手を払った……そう払っただけ。それだけで私の体は壁に叩きつけられ意識が揺らめく

『さ、早く行きなさいアーシャ。お嬢さんは私が足止めをしておきましょう』

「悪いねジャックさん。ホントは私の力で優勝したかったんだけど……」

そういうながら繰り広げられる会話を聞き取るのも辛い。何とかして体を起こそうとするもなかなかいいことを聞いてくれないのだ

何とかして立った時には既にアーシャは遙か前方にその姿を霞ませているところだった。速度は普通の人間レベル、追いつくのは傷ついたこの体でも不可能ではないだろう……眼前に浮かぶこの幽鬼さえいなければ。

「貴方は……」

『ええ、きつと貴方の御想像は正しい』

ジャックの持つランタンより漏れた炎が壁となつて周りの根ごと空間を焼き尽くす。

『私はアーシャⅡイグニファトウス作ジャックオランタンではありません……あなた方が警戒していたであろう存在——生と死の境界に存在せし大悪魔!! ウイラⅡザⅡイグニファトウス製作の大傑作。それが私は、世界最古のカボチャのオバケ……ジャック・オー・ランタンでございますよ♪』

ヤホホーと笑うジャックに私の疑問は全て氷解させられていく。疑問に思ったことその全てを先に当てられ、動こうにも一部の隙もないジャックに何をすることもできない。そして何よりも眼前の存在は不死……破壊することが叶わないギフト。間違いな

く勝利への道は全て閉ざされた……

思わず胸元のペンダントへと手が伸びる。

「降き」――」



なんとか戻ってきた、戻ってきたはいいのだが煙の臭いが春日部やアーシャ、ジャックの匂いを阻害して場所がわからない。爆発も既に止み、焼けたであろう痕跡は既に修復され跡をたどることもできない。

「困ったな。ゲームが終わってないってことは春日部はまだ戦ってるって事なんだろうが戦闘の音がないんじゃない……なんだあれ」

困り果てただ立ち尽くしていた所にとんでもない熱が襲う。思わず顔を顰めそちらに顔を向ければとんでもない大きさの炎が柱となって立ち昇り、天井となっている根を焼いていた。

居場所がわからなくなっていたのは確かだけどあそこまで派手だとむしろ近づけない。いや、今の肉体ならひよつとすれば耐えられるのかもしれないがそんな博打じみたことをしたいとは思わない……かと言って中に入る術も……そう言えば天井はあれだ

け焼かれても落ちてきたり穴があいたりしてないな、根が太いからか？

……叩き潰すか。

太い根ならそこらにある。特に立体的な迷路になっただけなら切り倒すだけでもあの炎の柱を上から押さえ込めるはずだ。

迷ってる暇はない。あれほどの火柱ならば中にいるだけで体力が持っていられるに違いない。

ただ……あの火柱を叩きつぶせる程の根を斬るなんて真似到底俺にはできない。それをするには……辺古山の力を借りるしかない。

ポケットからギフトカードを取り出す。そこにある二つの名前……俺は結局自分に余る力を手に入れても仲間を頼る以外に道はない。頼ることではか前に進めない。でも頼りっぱなしになりたくないから……

見つけたのは炎の渦に比較的近い一部が焦げた根。反対側を切断すれば修復よりも早く自重で折れそうなそれにめがけてカードを掲げる

「勝つぞ、春日部」

なにせ超高校級の剣道家には切れないものなんて何もなしだからこそ切ってみせる、なんなら炎ごとでも……

「——切ってみせる」

やがてうねりを上げた業火に洗われる

やがてうねりを上げた業火に洗われる

——質量、それは時にあらゆる能力を凌駕する武器だ。

ひどい喩えにはなるが仮に世界を破壊してしまふようなとても剣とは言えないドリルのような剣があったとしても世界すらも超える質量を持った剣と打ち合わせたら果たして破壊できるのだろうか？

例えばかつて自身と夢をともした同士たちと共にかつて駆けた荒野を再現する超秘術を身に付けたとしてその軍勢を軽く覆うような規模の物体が上から落ちてきた時対処できるのか？

こればかりはいくら力をつけようが、いくら策を練ろうが、いくら人を集めようが意味が無い。それこそまんま数の暴力に近いだろう。言ってしまったえば「質量の暴力」だ。大きい……それはそれだけで武器であり自然に身を任せ落下するだけであらゆるものを粉碎し圧殺する。

当たり前のことだ、当たり前のことだからこそ……落下してきた巨大な根にかの幽鬼

は押し潰された――



カードから取り出されたのは金色の刀……と言ってもこの金色は特別な力があると言おうわけではなくただの金箔だ。強い力を加えるとその金箔だって剥がれてしまう、所詮観賞用の刀に過ぎない。だがどんなものだって剣豪が持てばそれはどんな名刀にだって勝る。木の棒でも竹刀でも斬れたのならばより本来の形に近いこれで斬れないはずがない。

そういつた俺の意識がまた内に眠る何かを刺激し体に力を与える。今ならば十六夜の真似事すらできそうな気分だ。

袈裟気味に軽くひと振りしてから再び目標を捉える。

炎を完璧に潰す形で切り倒そうと思えば切る場所も正確でなければならぬ。そういうことを考えるのは全体を俯瞰できるこの位置の方がいい、渦の大きさからギリギリな感じもするが問題はなさそうだ。

一度地面を強く蹴って一息に距離を詰める。顔を叩く風が内包する熱をそのままぶつけて拒絶するのを無理やり掻き分け見定めた地点へと到達する。ここまで来ると内

部の会話まで聞こえてくるが……相当追い詰められているらしい。早く炎から出してやりたいがこのまま斬れば春日部ごと潰してしまうためその前に春日部の聴覚を信頼して声をかける事にする

「春日部耀の——お仕置きタイムだッ!!」

もはや声かけでも何でもない雄叫びと共に上から下へ真つ直ぐに刃を振り下ろすと、スーッと通った立ち筋から根を通る水分が溢れ、徐々にずれていく。それを上からさらに踏み込むような形で蹴つてやるともはや子気味よさすら遙か彼方を通り越して暴力的な音を持って根が折れた。そのまま少し回転気味に急速に落下を始めた根は炎を割る様にして地面へと接触、風圧でもって出火元の地面ごと炎をあちこちへと吹き飛ばした。

『ヤホホホ♪嫌な予感とは往々にして当たるものですねえ……』

しかしその根はすら叩き割り飛び跳ねるように炎の塊が迫り弾ける。

『どうもジャック・オー・ランタンと申します』

「自己紹介ありがとよ、俺は日向創だ」

炎が割れて現れた幽鬼に合わせて刀の柄をカボチャを叩き割る勢いで叩き込み再び地面へと返すとそのまま所々が焼き焦げた根の上に着地する……それにしても手が痛い。ジャックの頭部を殴ったのはいいがなんで人外の強度というか南瓜外の硬度をし

てるんだよ。

「創……!?!」

「ああ、さっきぶりだな春日部。とりあえず走ってくれ、なんか足止めできるかすら不安になってきた」

ゲームの勝利はサポーターではなくプレイヤー本人が行わなくてはならない。俺がゴールしても意味が無いんだ。

「……ありがとう!」

少し躊躇ったふうな間の後ダメージのせい或少しゆっくり目に駆け出した春日部へと再び炎が迫る。手に持つ刀を突き刺すように投げて炎を弾き炎の発生源と春日部の間に入るように立つ。

「……別に構わないんだけどなあ、春日部のあれは割と病気だな」

『いえいえ、美しいと思いますよ? あなた方の友情も……というわけで提案なのですがお互いパートナーが心配でしょう? 争いなどやめて——』

「純粋なる速度じゃ俺はお前に勝てない。能力もないし技術もない……唯一迫れるスベックを活用した上で一番勝率の高い戦法はこれだけだ」

いくら身体が軽くなったとはいえそれだけで眼前の幽鬼は打倒できるほど軽くない。

この世界に来て発揮できた才能だって今だ辺古山の剣道家のものだけ、本人やカムク

ラならばいざ知らず流石に俺じゃその才能があつても扱いきることが叶わないしむしろ危険だろう。

『ヤホホホ♪アーシャに大見得切つてしまつた故なんとしてもあのお嬢さんを行かせるわけにもいかないのですが……それに——貴方は何かいけない。こんな事を思つたのは初めてですよ。迷い人を導く幽鬼が今迷い人に恐怖を抱いている、貴方は何者なのでしょう?』

「……白夜叉にも聞かれたつけな、それ。まあ俺が何者かなんて俺が一番知りたいよ。希望なのか絶望なのか、俺なのか僕なのか、仲間なのか敵なのか、普通なのか天才なのか……全く持つてわからない、気持ち悪くて仕方が無い」

でも仲間のことを思い出す度に思う……そんなこととは関係無しに……そんなこととは関係なく俺は俺……日向創なんだ

「でもべつに迷つてなんかないさ。気になりはするけどそんなことで道を見失うほど忒がないわけじゃない。今までの経験は確かに俺の中に居着いている。勝手に見くびるなよ」

俺の言葉がそんなに面白かつたのかそれともそんなこととはまた関係がないのかジャックはその笑い声を辺りへと響かせ続ける

『なるほど、そうですね。お若いということになんとも歪で真つ直ぐなコトですね。この

ジャック、度肝を抜かれました……ですがそれとこれとは別、押し通らせてもらいましよう』

「好きにしてくれ。でも不死だからって油断してるなら俺は持つていくぞ？今の俺は食料と剣が通る相手なら割りりと無敵だ」

『ヤホホホ、それはそれは……たのしみですねぇ……』

飛び散った炎も再生する根に潰され今は落下してきた巨大なそれに燃え移り残る数少ない炎のみが熱を持つこの場で俺達は相手の出方を伺う。

俺にしてみればずっとこのままというのが理想だが生憎とジャックはそこまで愚かではない。今は異世界人というこの世界でも特異な存在に戸惑っているだけで初手さえ決めてしまえば戦況は一気に動くことだろう。

『——ふむ、では失礼♪』

——動いた、初手は……炎か！

ジャックの持つランタンが振りかぶる様に持ち上げられ無造作に振るわれると共に炎が波のように溢れ流れてくる。無論その全てがただの炎ではない、鉄すら一瞬で蒸散させられるであろうまさに業火……人体が触ればより悲惨な未来が待つであろうそれに触れることは出来ない……だがまだこの規模であれば対処もできる。なにせ炎というのは料理人にとって恐怖の対象ではなく道具やパートナーのそれに近い。一流の

料理人とは……

『炎すら操りますか……』

再び掲げたカードより取り出したのは調理器具でも食器でもなんでもないただの工
プロン。しかしこのエプロンは超高校級とも呼ばれる料理人がつけていたものだ。そ
れがこの程度に飲まれる訳が無い。炎の波がエプロンを避けるように割れて左右へと
流れていく。

『先程の規模ならば操れない……様ですがよもやあの規模になるまで黙って見ているわ
けがありませんね』

「生憎と俺は遠距離の攻撃手段が物を投げるくらいしかなくてな。いちいち相手に合わ
せてよけていたらあんたそのまま春日部を追いかける気だろ？」

『なるほど、避けては通れないと……厳しいですね、時間をかけてはられないのですが
……』

思案もそのままに再び周囲の風が動く今度現れたのは3つの炎の玉……炎が俺に効
かないと悟った以上無駄な攻撃をするとは思えない。数で攻めるつもりなのかはたま
た……目くらましか。ジャックは登場するとき炎に包まれて現れた。つまり——今打
ち出された3つの玉にジャックが隠れている。

決断を下すが否やあちこちへと打ち出された玉の内の一つ、一番近いものに駆け出し

たエプロンでもって他の人へと弾く。そしてそのまま残った一つへと飛び上がりエプロンを巻いた拳でもって殴りつけた……感覚的には当たりのようだ。やはり南瓜外の硬度……異世界のカボチャはどうなっているんだが。

『ヤホホホ、まさか全て処理をするとは。私本体を当てたのは嗅覚のおかげですか?』

「ああ、炎の玉を無視してまた炎に包まれたら手に負えないしな」

『私の炎を使つて相殺するとは思ひもありませんでした。それにしても弱りましたね、となると純粹なる身体能力頼みになりますが……突破はできなさそうです』

……まったく困った顔をしていないというのが異常に気になる

「……なんか隠してたりするんじゃないのか? あんたウィルオウイスプの最高傑作なんだろう?」

『まあ最高傑作と言われると何かこそばゆいものですが確かにウィルオウイスプのコミュニティリーダーの傑作と言う意味ではその通りです、ですからもちろん全力で言う意味であればこのステージごとどうにかしてしまえないこともないのですが……ギフトゲームとは沢山の子供も楽しみにして見るエンターテイメントのようなもの。特にこの大会はそうでしょう?』

「子供大好きジャック・オー・ランタンはそんな無粋な真似出来ませんってか?」

『まさにそのとおりにございます、ヤホホホ♪』

……なるほど、どおりで俺でも何とか渡り合えていたわけか

『まあそれにお嬢さんの体力を奪っておいたかがありました』

「……………なに？」

『たつた今アーシャがゴールを見つけたようですよ。まもなくこのゲームは終了します。あのお嬢さんも頑張ったようですが流石にあの体であの差を埋めるのは無理がありますよ、仲間に頼らないお嬢さんもお嬢さんですが貴方も貴方で仲間に高いレベルで事を望み過ぎですねぇ』

俺が仲間に期待しすぎだと……………いや、でも俺はそんなこと……………。

『さぞかし優秀で良き仲間に囲まれていたのでしょうね……………ですがそれは今の仲間を見ない理由にはなりません。友を見て差し上げなさい。目を逸らさず、決めつけず、誰かを被せたりせずに“仲間”を見ることですね。友情というのは美しいものですが美しくあろうとする必要は無いのですよ……………泥臭かろうと美しく見えるからこそ友情というのは美しいと言われるのです』

友を見る……………そうなのか？久遠の言葉を俺は聞いてなかったと？前は確かに仲間と戦うことを決めた、でもそれはみんなが希望だったからなのか？そんな俺じゃない誰かがつけた名前を通して仲間を見ていたのか？

「……………ならほど、確かに迷い人だな」

『ヤホホホ♪人とは迷うもの、正確に言えば私が導くのは迷い人ではなく人そのものなのですよ。少年よ、君もあの少女もまだまだ上が望める……迷う人にはなつても人として迷う事はないよう頑張りなさい』

はあ、結局今回も……

「茶番じゃないか」

『ヤホホホ、エンターテイメントですから♪』

そう言ったジャツクの言葉を裏付けるかのように一瞬の静寂のあと地面が揺れる程の歓声が天から聞こえてくる。どうやら本当に決着がついてしまったらしく、黒ウサギのアーシヤの勝利を告げる声と共に世界が逆転していく。土の匂いもそれらが焼ける匂いもどんとどんと遠くなり足が再び石畳の硬い感触を伝えてくる。

突然生じた気配に横を見れば春日部が満身創痍と言った様子で辛うじて立っていた。

あれからもステージを駆け回ったのだろう。

「大丈夫か、春日部？」

身長差から少し屈んで肩を貸してやりながら春日部の様子を見る。

自分でも春日部が限界なことを分かっているがなぜ戦わせたのか不思議でならない。こうなることは消耗具合を見ればわかったはずなのだ……いや、見ていなかったから分からなかったのか。

「う、うん。大丈夫……だよ？」

「無理するなよ、いくら体が丈夫とはいえ休息は必要だろ？」

何故か戸惑ったような春日部の反応に少し不躰ながら視線をあちこちにやって怪我の有無を調べるが特に外傷はなさそうだ……となるとこの反応は何なのか？

『ああやはり美しいですね。少年、そしてお嬢さん……一つお尋ねしても？』

「なんだよ、まだ何かあるのか？」

『僭越ながらどうもそれぞれ聞きたいこと、言いたいことが残ってまして……まずはお嬢さんから。』

そう言っただジャックは視線を下げて春日部へと合わせる

『見事なゲームメイクでした。開始直後にパートナーが吹き飛ばされる不測の事態にもよく対処しました……とりたいところなのですがお嬢さんの場合は少し違いますね。お嬢さんのあの時のためらいはゲームメイクの事ではなくこの少年の安否についてだったように見えます』

「……同じコミュニケーションの仲間を心配した。何もおかしくない」

『ええ、もちろん。ヤホホホ、とても美しいコトですねえ、しかし問題はゲームに関して自分の中で何も問題にならなかつたことです。お嬢さんはなぜ仲間に頼らないのでしょうか？反応を見るに頼りにならない……そう思ってるわけでもないでしょう。お

嬢さんの考えまでは私には分かりませんが助け合わない仲間よりも助け合う仲間の方がより美しい……それは私にもわかるのですよ』

そう言つて何度目かと言うふうにはジャックは笑い声を上げる。

『少年に関してはもう特にいう事もない……予定だったのですがやはり老婆心から一つだけ……力強い意志の秘められた瞳……ですがなんともいい意味でその意志に精神が追いついていないようにも見えます。逆になぜそこまで強力な意志を持つに至ったのか全くわからないほどに精神と意志とのバランスが取れていません。だからこそその素晴らしい意志が君を縛り強迫観念のようになってしまっているのが残念でならないのですよ。何やら厄介なものも背負っているみたいですし早いところコントロールの術を見つけた方が良いと思いますよ』

……白夜叉といいこのカボチャといい箱庭の強い奴はみんなもれなく読心のギフトでも持つてるのか？

「肝に銘じとくよ、守らないと説教好きのカボチャが説教の押し売りに来るつてな」

「……同上」

『ヤホホホ、それは良かった！さて、アーシャも何か言いたいことがあるのでしょうか？』

そう言つてジャックがその巨体をスーツと横へと退かすと対照的に小さいアーシャが一切変わらぬ姿で現れた。

俺達は二人揃って割とボロボロなのだが何ともこれが実力の差と言う奴か。

「おい、オマエ！名前は何なんているの？出身外門は!?」

そんな状態でかつ相変わらぬのかめつ面を口を開くものだからまた何か嘲り混じりの言葉が飛んでくるのかと思つて見れば出てきたのは何とも不器用な質問ばかり……もちろん返す春日部も

「……最初の紹介にあつた通りだけど」

……こんな調子だ。

案の定ムツとしたアーシャに少しフオローをしてやろうと思う。あまり好ましい態度ではなかつたが最後にはこうして歩み寄つてきてくれたのだ、無下にするのは少し心痛い

「こいつは春日部耀、出身は知らん。動物好きで友達が欲しい年頃の負けず嫌いその3だよ」

「創……!?!」

「そうつんけんするなよ。ここには友達を作りに来たんだろ?」

心なしか肩に掛かる負担が増えた気がするがまあ気のせいだろう。

一方アーシャはというと俺の言葉でも納得がいかなかったのか、それともその中身にははじめから興味がなかったのか、あるいは俺のことは未だに眼中にないのかもしれない

いがとにかく未だにしかめつ面を崩さないまま再び口を開き憎まれ口とさらつといれられた自己紹介と次こそは負けない的な宣戦布告をしてドスドスと去っていった。勝者が何よりも勝者らしくないというのはどういう事なのだろうか、不思議なもんだ。

『ヤホホホ、貴方風の言い方をすれば彼女は負けず嫌いその4と言ったところでしょうか？あれでも同年代の子に負けたことがないから悔しいのでしよう。きつとさっきの勝負も自分の力じゃないから負けだ……つと考えているのでしよう』

……ふーん、そんなものか——いやいやそれって

「それこそジャックが言った協調の勝利じゃ……」

俺たちの言葉にカボチャのお化けは一際大きな声で笑い空洞の頭を叩いてはこぎみの良い音を響かせて鳴いたのだった

『ヤホホホーいや全くその通り！』

——そう、試合後の和やかな談笑に励む俺たちにしかし最悪たちは待つ事なく歩を進める。

「あれ……は……」

それはまるでカラスが飛び立つ後に残す数枚の羽毛のように空から落ちてきた舞落

……グリムグリモワール・ハーメルン、魔王のコミュニケーションか。

『魔王のギフトゲーム……なぜ——いえ、今はそれどころではありませんか。お二人とも戦闘は?』

「俺は問題ない。むしろ絶好調なぐらいだが……春日部はきつそうだな」

「……動けるぐらいには回復した。全開には遠いけど」

そう言うので肩に回していた手を抜いてやると本当にある程度回復はしたようだ、流石は動物友達パワーか。

「ジャックさん!」

『アーシャ、無事でよかった。状況はわかりますね?』

目の前で確認を始めた二人から一旦視線を外して仲間の控えるバルコニーへと合わせる……途端にバルコニーから爆発したかの勢いで突風が吹き荒れ何人かの人影がこちらへと飛ばされてきた。空中で体勢を立て直しもう一人の人影までキャッチするその身体能力は……

「十六夜か!」

「よう、元気そうで何よりだぜ」

「皆様ご無事ですか!?!」

十六夜、久遠に黒ウサギ、さらには舞台袖よりジンとレティシア……続々とノーネー
ムのメンバーが舞台へと集まってきた

「サラマンドラの連中は客席まで飛ばされたみたいだな……」

「白夜叉は？」

「上で捕まってるぜ。気味の悪い黒い風に覆われてやがった。出て来れるのかはわから
ん」

……なんてこった。やつぱり封じる手段は持ってきてたか。

「……魔王が現れたってことでいいんだな？」

「はっ」

ひと通り情報の整理が済んだであろう十六夜が黒ウサギに問いかけ黒ウサギもまた
それに肯定で返す。

つまり上でこつちを見下ろしてるあの集団は……

「あれだけの保険のすべてを突破して今ここにきたってことか？グリムグリモワール・
ハーメルンってコミュニティは」

「そのようです。黒ウサギに誤魔化しは効きませんから、彼の魔王はルールに則ってあ
そこに立っているようですよ」

……とんでもないな。方法に全く見当がつかない。知識不足なのか単に裏をかく方

法でもあったのか……なんにせよ最悪な状況だ

「十六夜、笑ってないで行動するぞ。白夜叉もそうだけど案の定さりとこころ一帯の全員が巻き込まれたのが最悪だ」

「だな。それにサラマンドラの連中も気になる。こつからは分担作業だ」

「では黒ウサギがサンドラ様達を探しに行きます。十六夜さんと日向さんは申し訳ありませんがレティシア様と魔王の足止めを、ジン坊ちゃん達は白夜叉をお願いします！」

……申し訳ないもんか、十六夜の顔を見ろよ。すつごいウキウキしてるつての——というかそうじゃなくて

「いや俺はジンの方に行かせてもらおうよ」

「で、でもいくらなんでも十六夜さん達だけにここを任せるわけには——」

「むしろジンと久遠、未だに満身創痍の春日部だけで動かす方が危険だ。あそこにいるので全員かがわからないうちは特にな」

……それにあのバルコニーを覆う黒い風、あれは嫌な感じがする。

『人手が足りないというのであれば僭越ながらカポチャの手を貸させて頂きましょう。アーシャも、いいですね？』

「う、うん。頑張る」

事前の情報もなく巻き込まれたであろうウィルオウイスプの二人まで手伝いをおか

てでてくれた

「……わかりました。お二人は私と一緒にサンドラ様を探して下さい。ジャック様は参加資格を持たれないのでこつちで指示を仰ぐしかありません」

『承知していますよ』

直後それぞれ合わせた視線を合図に目的に向かって駆け出す。

「久遠、ジンも掴まれ！」

「え、ちよっ!？」

白夜叉のところに向かう四人の中で身体能力で劣る二人を担ぎ春日部と共にバルコニーへと駆け上がる。

何やら早速後ろで始まったドンパチの余波に気をつけながら一息に登りきると一気に入口へと飛び上がる。

「……ついで」

「……ついで……ついで……つじやないわよ!もう少し丁寧に——」

「飛鳥、今はそんな余裕ない」

「……わかつてるわよ、もう!」

……すいません。

「ジンも大丈夫か？」

「ええ、それよりもこれは？」

「黒い風か……バルコニーには入れそうにないな」

久遠たちを吹き飛ばした黒い風がここでも行く手を阻む。

先程までのフラストレーションも溜まっていたのか久遠がキレて扉へも叫び出した
「白夜叉！中の状況はどうなっているの!?!」

「わからん！だが行動が制限されている！ギアスロールには何かかいておらんか!?!」

言われて拾ったギアスロールを広げてみれば確かに先程までになかった文面が追加されていた

「ゲームマスターの参戦条件がクリアされていない、参加したければクリアしろ……
だって?！」

「参戦条件は!?!他には何も無いのか!?!」

「何もないな、書いてあるのはこれだけだ!！」

……参戦条件がクリアされていない……でもそれって参戦条件がクリアされてしまえば魔王にとってはゲームオーバーってことだ。簡単にクリアできるものではない……もしくはたどり着けないほどに――

「小僧、聞いておるのか!?!」

「え……あ、ああ。聞いてる!！」

悪い癖か、どうしても思考に耽ってしまふ。

「良いか、今から伝えることを一言一句違えずに黒ウサギへと伝えるのだ。おんしらの不手際はそのまま参加者の死亡へとつながると知れ！」

「わかった！内容は?!」

今は大局を優先すべきだ。何をすることも圧倒的不利な現状からでは行動にも移せない、まずは白夜叉の指示に従おう

「第一にこのゲームはルール作成段階で故意に説明の不備を起こしている可能性がある
！魔王がたまに使う手だ、最悪このゲームにはクリア方法が存在しない場合がある！」
「存在しない……っ!?!」

また面倒なことになってきた。外の戦闘音もどんどん苛烈になっていくし……

「第二にこの魔王は新興のコミュニティの可能性が高い!!」

「わ、わかったわ！」

「そして第三に、ワシを封印した方法は恐らく——」

「はあい、そこまでえ♡」

扉の向こうより甘ったるい声が聞こえてきた。いやに耳につくというわけでもないがわざとらしくそう聞かせようとして作られた声だけに何とも印象に残る

「あつらー?誰と話していたの?」

「久遠、扉から離れろ！」

声の主がこちらへと意識を向けたのを悟りジンを引つ張りこんだが前に出ている久遠まででは下げられ無かった。

扉を吹き飛ばしかねない勢いで突き破ってきたのは赤い蜥蜴……見た目的に言えばまんまそれは俺たちの想像するようなサラマンダーであり決して敵ではないはずの存在が三匹、そして声の主であろう背の高い女性が一人。手に持つのは銀の棒……いや表面の凹凸を見るに笛、フルートか。

「ん？人間かあ、てつきりサラマンドラの頭首だと思つてたのに……まあいいわ」

そう言つて手に持つフルートを指揮棒かなにかのようにこちらに向けると再びサラマンダーが突進の構えを見せる

「全員下がれ！」

現状戦闘能力が一番高いのは俺だ。流石に体格差があろうとも全開の今サラマンダーに遅れを取ることはない……ただ攻めきることもできない。

サラマンダーはおそらく操られている。だからなるべく傷付けたくはないし殺傷なんてもつての外だが……ここに来て上昇した身体能力があだとなった。手加減ができないのだ。よりいうならば細かい調整が効かない故にサラマンダーを傷つけないようにするのが手一杯になってしまっている。

「創っ！」

春日部の俺を呼ぶ声に思わず振り返ると何やら手をこちらに向けて……つてなにか風の流れがおかしい——ッ!!

多少無理な体勢なのもいとわず目一杯足に力を入れてその場から離れる直後先程まで俺がいた空間を風の顎が撫で一直線に吹き飛ばしていく。もちろんサラマンダー達も風に巻き込まれて吹き飛ばされた……のはいいんだけど掛け声だけでチームプレイができるほど実践積んでないからできればもう一声欲しかったというか

「創だつてさっきの試合の時意味不明なことを言いながら木を落としてきた」

……はい、すいませんでした。

「……グリフォンの力かしら、人間が持つてるとは珍しいわね。顔も整っているし……よし決めたわ。あなた気に入ったから私の駒にしてあげる」

「……春日部、久遠とジンを連れて黒ウサギの元へ」

「う、うん——」

「させないわよ」

女がフルートに口をつけると笛より魔性の音が奏でられる……そうかこれがサラマンダーを操っていたギフト!

答えに行き着くと同時に隣で久遠を担ぐうとしていた春日部が急に倒れた

「春日部さん!？」

「そうか、耳がいいから俺達の誰よりも効果がでかいんだ」

「な、ならなんで日向くんは!？」

「わからない!でもとにかく春日部をなんとかしないと……」

「……いいから……逃げて」

そういう声もどこか細く限界なのか体もガクガクと震えている

「バカ言わないで!!ジン君!」

「は、はい!？」

「先に謝っておくわ、ごめんなさい」

……何をやる気なのかな久遠さん?

「コミュニティのリーダーとして春日部さんを連れて黒ウサギの元へ行きなさい!」

……久遠が口にしたのはただの言葉ではない。久遠から出された命令は……ギフトを持つて打ちだされた威光はそのまま形となつて権限する。

現にジンはなんの疑問も抱かぬままに自身の体よりも大きい春日部を抱えてすごい速度で消えていく。

「……軽蔑したかしら?」

「別に?ただ次は絶対お前が後ろの笛女に目をつけられただろうなつて」

「お前じゃないわ、飛鳥よ、日向くん？」

「私も笛女とは失礼ね。まあ、当たってるけど？」

今の状況から久遠の能力を暴けるのはよほどの切れ者だろう。なにせ相手になればジンが俺たちを置いていけるほど合理的な人間でない知らないのだから。だが興味を引くことにはなる。特に目の前から興味のあったものが消えたのだ、その次のターゲットは同じように容姿に優れ、かつ全てを背負い込もうとしている久遠に行くに決まってる。

「坊やは消えてもいいのよ？ 素体は良さそうだけど趣味じゃないし」

「なんだ買ひ物気分か？ 残念だけど相手してやれるほど暇でもないんだ遊び気分なら帰れ」

「だから暇がないのなら消えていいってば……でもそうねえ」

そう言つて再び笛を口へと近づかせる。先程よりも強力な音色でも流すつもりなのか……なんにせよ目線からして今度の狙いは俺か

「お姫様を運ぶのに騎士様の役目ぐらいはやらせてあげてもよくつてよ？」

「結構よ！ 全員——そこを動かすなッ!!」

しかし女が音色を奏でるよりも先に久遠がその威光を發揮した。

対象は口にしたとおりの全員……俺と久遠以外の全員が例外無くガチンツと動きを止

められる

久遠はギフトカードより銀十字の剣を、俺はそのまま素手で持つて女へと迫るがその間にさらに人影が割って入る。

「な……っ！」

操られている人間ならば殴るわけにもいかない。打ち出した拳を止め体も急停止させる。

拳をたどつて割って入った存在へと視線を向けるとどうやら乱入してきたのは女性のようなだった。

「あはっ♡」

長い、しかし不揃いな髪に体の所々にラインを強調するように巻かれた包帯、清潔感の溢れるエプロン付きの衣服しかしそれらのチグハグな特徴のすべてを飲み込むかのように主張をする、見ているだけで頭がグチャグチャに掻き混ぜられているように錯覚させられる澱んだ瞳。

「お久しぶりですう、お迎えに上がりましたよ日向さあん」

向けられるのは害意でも敵意でも殺意でも悪意でもなんでもないどこまでも純粹でおぞましい好意。あの日あの時目の前の彼女が死ぬその時まで盲愛していた彼女に向けるそれと同じものが今度は自分へと向けられている。

殺したのは俺なのに、俺は彼女を拒絶したにも関わらず目の前で少女は俺へと笑う
「来るのが遅いのよ」

「黙れ豚」

仲間であろう笛吹女の言葉にはぎやくに絶対零度の温度で返す。その様子はやはり
かつての彼女とは違う。まるで違ってしまったている。

「だ、誰なのひなたくん。知り合い？」

持っていた剣すら落として後退りしながらそれでも気丈に久遠が俺へと問う

「——罪木蜜柑、俺の世界では超高校級の保健委員……もとい超高校級の絶望って呼ば
れてたよ」

かつての仲間……否、現在の仲間でありながら俺たちの中で一、二を争う狂気を見せ
た少女。俺はあのメンバーの中では罪木に近いほうだと思っているがそれでも今は好
意を向けることができない……だというのにそれでも超高校級の絶望こと罪木蜜柑は

「えへへへ、何ですか日向さあん？」

——笑っていた

黒死よりも美しき死色の鮮やかさよ

黒死よりも美しき死色の鮮やかさよ

いつかそんな時が来るだろうと予測はしていた。この世界で初めて絶望を知ったその時から…… 罪木蜜柑は希望を拗らせた他のメンバーとはその本質を圧倒的に異ならせる。彼女はあの狛枝すら興味を示さないほどにただただ「純粋なる絶望」なのだ。

「超高校級の保健委員…… 罪木蜜柑！」

「はあい、日向さん。そんなに叫ばなくても、私はここにいますよお？」

この場にいるだけでその存在が俺たちの視線がそつちへと持つていかれる。見たくもないのに、視線をやりたくもないのにその嫌悪感が体を縛って精神までもを凝り固まらせる。

現に俺は一瞬、頭の中から笛吹き女の事が吹き飛んでいた。

だがもちろん彼女も無視できる存在ではない。

無論罪木蜜柑を相手にしながら他に意識を裂く余裕はない。

そして笛吹き女の目的はそんな俺ではなく春日部と久遠にある……

「久遠、とにかく逃げろ」

だからこそ戦闘が始まる前に…… 先手を取る。

石畳…… 硬い硬いその床を全力を踏抜く。今必要なのは余裕、そしてそのための距離だ

「させませんけどねえ」

踏み抜かれ俺の足中心に広がっていくはずの罅がしかし伸びていかない…… とい
うよりもこれは……

「繋がっていつている?」

開いたそばから再び何事もなかったかのように接合され床を抜く事が叶わない

「縫合は得意ですからあ、まあわたし的にはそつちの人がどうなろうと知ったことでは
ないんですけどー」

「ほ、縫合? 縫合って…… 保健委員が?」

「久遠、気にするところが違う」

…… 保健委員だから手も触れず、道具も使わず、痕跡すら残さず石畳を縫合するつ
て? いくらなんでも馬鹿げてるだろ

「ラッテンさんはそつちの人おねがいますねえ。日向さんは私がやりますので……」

てかあなたじゃ無理なんで」

「……なんだつてマスターはアンタみたいに胡散臭いやつを招き入れたんだか」

「信用されてないんじゃないですかー？」

……なんか知らんがケンカしてるし

「……久遠、大丈夫か？」

「……身体能力で劣るのは認めるけど馬鹿にされるのは心外ね、楽勝よ」

どう見ても楽勝ではない。先程のようなチャンスはもう巡っては来ないだろうし能力まで確認された。見るからにただの人類ではない彼女はおそらく久遠よりも身体能力に優れているだろう。

「私のことなんてどうでもいいわ、それよりもあなたよ。絶望だかなんだか知らないけれどどう見ても尋常じゃないわ……それに」

続けて言葉を紡ごうとする久遠を遮ってなんとか罪木からそちらと視線を向ける

丈の長いスカートに隠れているが不安定な上半身を見るに震えているのだろう

「大丈夫、今度こそ誰も殺させない」

間違いは繰り返さない、あの絶望を再び起こさせるわけには行かない

「今度こそつて……ひなた君

あなた——」

「そろそろいいですかあー?」

再び久遠の言葉が遮られて俺の意識までそちらへと向けさせられる

向こうも言いあいが終わったのかラッテンと呼ばれた女不満そうに立つだけで罪木はその表情を微笑からピクリとも動かさない

……元の罪木にも失礼ながら俺はその表情を似合わないと……そう思った。

「よくなくても時間切れです、日向さん……さあ、行きましょうか」

罪木がさらにその似合わぬ笑を浮かべると完全に塞がれた罅が今度はなぜか俺と罪木、久遠とラッテンを裂くように現れ俺達は下の階層へと落とされる床をつかもうとした先からその床まで崩され、下の階に足がついたそばからまた崩され……落ちて落ちてさらに落ちて、そしてようやく地下という高さまで来てようやく止まった

分断されたのは痛いが罪木のそばに久遠がいるのも不味かった……どちらかといえ
ば助かったと言うべきか

「ようやく一人きりですね、日向さん——あれれ? 良く見たら怪我してるじゃないですか、全身ボロボロです」

……確かにジャックにやられた傷がまだ残っている。耐久性はあれど回復力はまだ人外と呼べる領域にない俺は割と体にダメージを残していた——過去系だ。こうして話している間にも体に残った細かい傷や体の内側に響いていた痛み、衣服のほつれやら

汚れまでもが綺麗に癒され消えていく

「これでもう大丈夫です」

……花村との戦いはある意味自身の行いを、かつて決めたはずの覚悟を揺さぶる戦いだった。

逆に辺古山との戦いは前を向くことができるか否かだった。その過程として戦いはしたがあの島での辺古山の剣技を思い出せば今更城を切ろうが驚かない……ただしここまで来るともはや別だ

「……ギフト」

……未だ再現に成功したのは辺古山の才能のみだがその才能だってギフトとしては存在していなかった。どれだけ人知を超えた才能であってもそれが才能である限りはギフトではない。

だが罪木のそれは保険委員の延長というレベルですらない

「その通りです、この世界は元の世界の逸話や偉業が形として現れる世界……超高校級の才能ともなればどれもがその業界においては伝説のようなものです。だから私もこうして世界に認められた、受け入れてもらえた！私はもう今までの私じゃない、今までの私をあの人もこの世界までもが受け入れてくれたから……だから次は私が受け入れられます、私を受け入れてくれなかつたみんなを……日向さんを私が受け入れて見せ

るんです！」

「……変わつてないよ罪木。それは何も変わつてない」

受け入れることも、受け入れてもらうことも全部そんな言葉で片付けられることじゃない。

「だから俺も一緒に変わるよ、自分のためにも、みんなのためにも」

少し予想外ではあったが傷も治り全開が出せる。多少力づくでも……

「——押し通るッ！」

不意打ち気味に体を倒して極端な前傾姿勢のまま突撃する。もともと距離もないこの状況であれば一撃いれられ——る？

「なんで……う？」

体が動かない、文字通り全身の血液が鉛にでもなったかのようにかたまってあった全能感すら消え失せ体が持ち上がらない

クラウチングスタートに失敗して地に付したかのような状態で動く気配を見せない体とは違い頭はそれでも回り続ける……でも答えは見つからない——いや、これは体が動かないんじゃない……

「今までが動き過ぎていた……つて事か」

「あの人の言った通りです、今の日向さんを動かしているのは希望。だから日向さんは

希望を取り上げられたら動けなくなる」

……希望を意識すればするほど上昇する身体能力、だからこそ言ってしまうえば絶望を意識すれば俺は無力なニュートラルな状態へと戻される。いやむしろこの状態ならばまだいい、でもこれ以上俺が絶望を受ければ――

「考えるな、考えれば絶望に繋がる」

無理矢理にでも体を動かし立ち上がる。大丈夫、この状態が普通、今まで楽をしすぎて辛く感じているだけだ。

それに不思議なのは確かに絶望を感じたとはいえ辺古山を前にして失わなかった希望をなぜ今失ってしまったかだ。

「あれれ？立ち上がっちゃうんですか……いくら治せるとはいえ日向さんを傷つけたくはないんですが……」

「思い上がるな罪木……俺はまだ希望を捨ててない、負けるつもりはない」

感じた絶望に差はなかった。性質や経緯、原点こそ違えど間違いなく絶望としては前の二人も劣るところはなかったはずだ。じゃあ何が影響した？

「んー、困りました。日向さんのこともそうですがまためんどくさいことを……」

「なんの話だ？」

「いえ、ウサギさんが少し余計なこと……ルールで縛られている以上こればかりはどう

しようもありませんね、また来ますね、日向さん♪」

そう言つて罪木は黒い風に飲まれて消えていく。言葉を聞くに黒ウサギがなにかしたのだろうか？

既に前のような聴覚を失つて様子を伺うことはできない。状況を知るためにも……いや伝えるためにも地下からは一度でなければ。

「罪木が引いた以上ラツテンも同じ状況のはず……いや、今はむしろ俺の方が無力か」

何故……それは未だにわからない。だが考えるのは後だ、動いた状況に適合しなければ死ぬ……俺はそれをよく知っている

ラツテンが引いたあとにしる引く前にしる今の俺には駆けつける力も駆けつけた後にどうこうする力もない……なまじつか合理的な判断ができる分質が悪いな

傷一つないくせに重たくなった体を引きずつて上へ上へと向かつていく

ようやく周りのざわめきが聞こえてくる頃にはまともに歩けるようになったとはいえやはり違和感だけは拭えない。

とはいえいくらそんな状態といえども大声で自身の名前を呼ばれば流石に気づくものだ

「ノーネーム、日向創！日向創はいないか!？」

「……俺か？」

行つては見たもののノーネームでさえ珍しいのにまんま日本名なその名前はさらに珍しいだろう。どうやら俺のことを探しているらしいサラマンドラの彼の元へと急ぐ

「日向創は俺だ、何かあったのか？」

「ああよかった。審議決議の追加メンバーとして魔王のコミュニティが直々に指定してきた。とにかく会議をすすめるためにもついてきてもらおう」

審議決議？追加メンバー？なんの話だ、誰が俺を？というかなぜ？……言いたいことは沢山あるがなににせよさすがはフロアマスターのコミュニティと言うべきかはたまたそれほどもでに急いでいるのか俺が質問を投げる余裕もないほどに早足で向かつていく

やがてたどり着いた部屋の名前は貴賓室……着くなり豪華な扉を開けて中へと押し込まれてしまった。

「日向さん！無事だったんですね!？」

「黒ウサギ？それに十六夜にジン……マンドラとサンドラ様まで——いやそれよりもそつちか」

中では長机にそつて向かい合うようにノーネームやサラマンドラ……つまりは味方陣営五人と敵陣営四人が座っていた

その中には見た事のあるものもいる。ラッテンと言う名の女性と罪木だ。そして追

加でもう二人……白と黒の色が印象的なフリル付きのワンピースに身を包んだ少女、どうにも斑を印象づけさせる柄が危険な匂いを醸し出すそのとなりで軍服姿の男が目を伏せて座っている。

なんだかんだ言つて騒がしかった罪木、またまんま明るそうなラッテン、子供姿の少女に暑苦しそうな見た目の男とうるさそうなメンバーが揃つて恐ろしいほどまでに静かだ

「また会いましたね、日向さあん？」

「ああ、今のお前に会えても何も嬉しくないがまた会つたな、罪木……俺をここに呼んだのもお前だろ」

生死不明の俺の生存を知つてるのはコイツしかいない。そもそも俺に固執しているコイツでもない限りこんな話し合いにまで俺を引っ張り出す酔狂な奴は……まあ十六夜ならやりかねんが

「知り合いなのですか!!？」

そう食い気味に聞いてきたのはサンドラ様だ。まあ確かに正体不明の敵と知り合いだという味方がいたら気にもなるか

「残念ながら俺が知つてるのは罪木蜜柑という少女だけで……他の三人はあまり知らない。ただ久遠はそのラッテンつてやつと戦つていたはずだ」

「あら、さつきの子ね。ありがたくゲットさせてもらったわ」

「ミカン？あなたが欲しかったのはあんな冴えない男なの？」

「日向さんは冴えない男なんかじゃありませんよ？何せ——かつてはあの人と渡り合
い、果ては2度目の敗北を教えた存在ですから」

……やはりあの人か。未だに罪木のなから消えていない……いずれはまた対峙す
ることになるのだろうか？

「……知り合いつてどういうことだ？それともまただんまりか日向？」

別にだんまりじゃないさ、そうだとも。後ろめたいことなんて何も無い。十六夜が
笑っているその裏ではやはり俺らの確執を気にしていることも、さらに言えばやはり例
に漏れず俺の態度にイライラしていたことも知っている

「——日向さん！」

黒ウサギの叫び声が閉じられたこの部屋に響く……俺はさつきも説教をされたばか
りだというのに何を躊躇っているのか……

——ハア、やっぱり俺はバカなんだよ

「俺らはかつて仲間だった。今も仲間だと……俺はそう思ってるよ、詳しい事は今回の
ことが終わってからでいいだろう？」

「絶対だな？」

「絶対だ、嘘はつかない」

……話すと言ってしまった、もう後に引くことはできない

「……黒ウサギに白夜叉の伝言が伝わって今は言わば試合でいうタイムアウトの状態だ。やるのは作戦会議バトルの代わりに和平交渉だけだな」

「どうなった？」

「結局主導権は取られた、今は何とか落としどころをみつけようと条件を聞いたんだが——」

「私たちが求めるのは優秀な人材……ここにいる員面々に白夜叉と言った主力メンバーよ。最もあなただけは私ではなくミカンのところへと送る約束のだけけど……私からすればあなたのどこがいいのかまったくわからないわ」

「それは俺にもわからないな」

人材確保……何をしたいのかわからないが本来なら人材確保というのは何らかの目標があつてのことだ、つまり足がかりにしか過ぎない。その段階でここまで派手なことを仕出かすと言うのだから箱庭の奴らの積極性には全く持って驚かされる

「俺らが提示した要求はゲームの再開を一週間後とすること、そしてその条件は奴らの人材確保の邪魔にならないための自決、同士討ちの禁止、黒ウサギの参戦許可、最後にゲーム開始より24時間後に決着がついていない場合主催者側の勝利が決定するとい

う事」

「なるほど、そこまで決まっただけでいてなんでそのタイミングで呼ばれたのやら……」

「日向さんはこういうの考えるのが好きじゃないですかあ？そ、それとも余計なこと……でしたか？」

……何やら久しぶりに気弱な罪木を見た気がする。だがまあそのとおりだ。好きなわけではないが知らないところで勝手に決められるのは困ることも多い。こういった会議に参加させてもらえるのならそれだけで損はないだろう

「特に俺から言いたいこともない。久遠のことまあゲームが開始したらでいいさ……だから聞くことも言うことも一つだけ……あんたらはこの条件で受けるんだな？」

「ええ、そっちのジंकン、だったかしら？坊やの発破も気に入ったし何よりお互い得じゃない？」

……言葉にいちいち試すような意図が見え隠れするのは少し恐ろしいものがあるが……所詮言葉の上とこと絶望に関してならば俺たち以上に向いている奴らもいないだろう。

罪木と眼前の少女が何故つるんでいるのかは不思議だがそれは終わってからでも構わないだろう。

「それで、言いたいことはなんなのかしら？聞いてあげるから早くいいなさい」

……罪木や久遠、いやそもそもゲームのことすらおいておいて言わなければならぬこと——そんなものはひとつだけに決まってる

「どんな理由があれど絶望なんかに手を出したのならば待つのはそれこそ絶望だけだ。あんたは自分から絶望を呼び込んだ……それだけは忘れるな」

たとえ星であろうとも、異世界であろうとも逆に矮小な人間であろうともそれは変わらない。絶望の前には全て等しく飲まこまれ退廃するのみ……

「忠告ありがとう、一週間後が楽しみね」

そう言って魔王の陣営は黒い風に包まれカラスの羽のように黒いギアスロールを残して消えていった。

その場に落ちることなくこちらへと飛んできたギアスロールには俺らが要求した条件、要求が書き加えられている。

「さて、一段落したところでまた問題が出てきたなあ日向？」

「なに、俺だつて聞きたいこともある。じっくりゆっくり話そうじゃないか」
肩にかかる力が万力のように俺を締めあげる

そしてそれは反対側の肩にもかかり出して……恐る恐る振り返れば本来青みがかつた艶のあるはずの髪を仄かに赤く染めてまさに怒髪天を衝くを再現した黒ウサギが――

「——っ痛い痛い!!」

「ええ、ようやくくじつくりと話せるんですかそれは大変ようございました。いろいろ忙しいこともございますし早速ゆつくりじつくり話し合いましょう」

「文の中で凄い矛盾出てないか!？」

既に先程の殺伐とした空気はどこに行ったのやら……後ろの方で頭を抑えるジンと顔を引きつらせたサラマンドラの二人が止めに入るまで唐突なギャグパートは終わることにはなかった

絶望という病と希望という薬

絶望という病と希望という薬

かつて人類の進化のためと言う名目でひとつの完成された個を生み出すための研究機関があつた。

そのために取られた方法は単純にして明快……この世に輝く超高校級とも呼べる才能を持つ少年少女を集め、研究し、そして研鑽して才能を解析……そうして集めた数多くの才能をたつた一人へと張り付けること。そしてそれは学業機関として形をなし、その計画も学園の創始者の名前をとって「カムクライズルプロジェクト」と名付けられた。

そうして幾年もの月日が流れその計画はようやく一つの結果を出すことに成功する。「ロボトミー手術」……被験者の脳に直接干渉することにより人格、感情、記憶や趣味といったあらゆる不要物を取り除く、そうして取り付けられた才能は無事に機能しまさに人類の進化形、「超高校級の希望」としてプロジェクトの発展に協力したのだった――



「俺たちの元の世界は本質的にはたぶん十六夜たちの世界となんら変わりのない世界だったはずだ

「積み重ねた歴史や文明、言語に至るまで違和感を感じることはほとんどない

「だけどやっぱり違うところもある……それはそんな大きな話じゃなくてただ”超高校級”と言う概念があるかないかの違いだ

「超高校級……ていうのはつまり尋常ならざる才能のこと

「それこそ黒ウサギや十六夜が見たとおり超高校級の剣道家ともなればそこらへんの木の枝でも水塊を断ち切れる

「だからまあ俺がその超高校級の剣道家なのかと言われればまた少し違うんだが……なんにせよ俺らの世界にはギフトみたいな超常の力とは別に人間の機能の延長として人外の結果を生み出すことができる存在がいるわけだ

「そしてそういった奴らを集める学業機関があつたのさ、それが”希望ヶ峰学園”と呼ばれる超高校級の研究機関だ

「この学園も色々裏話はあるんだが長くなるからざっくりと行くがこの学園、研究機関

と言うだけあってただの学校じゃない

「目的は超高校級の育成ではなく創造……人工的に才能を持った人間を作る……よりい
えば才能がなかった人間に後天的に超高校級の技能を付けてしまうというふうな飛んだ
ものだ

「そのために各地から様々な分野の超一流中の超一流が集められ、研究され、そして時に
は協力までしていた……といつても別に非人道的な研究が強制的に行われていたりだ
とか無理矢理従わされていたりとか言ったことはなかったがな

「……ただそんな平和な世界もそう続かなかつた

「当たり前のことだが才能なんてものは良い方向に使われてばかりじゃない……時には
人類という種に牙を剥く事すらある、いやある意味それだけならまだ問題じゃない……
「でもその牙に毒が塗られていたとしたら？ 比喻ではなく本当に人類という種を滅ぼす
力があつたとしたら？」

「……学園は確かに変わったよ、表面上はまだ穏やかな一年、二年が続いたさ……でもそ
の裏では確かに変わっていた

「原因はとある生徒達の入学……そこから学園は……いや、世界は一気に変貌したんだ

……最悪なことにその魔王にすら心当たりがあるのだから本当に笑うことなんてできやしない

ペストの影響にかかったらしくベットに横になったまま話を聞く春日部ですら驚きに身を起こし、黒ウサギやサラマンドラの二人に至っては事の重要性を何よりも理解したのか顔を真っ青に染めて言葉を探していた

「これまた事件の詳細は省くがその事件の大元は間違いなく希望ヶ峰学園であり、事件の後もその学園を中心として壮絶な地獄が広がっていたよ」

……そして

「俺はその被害者でもある」

……そして加害者でもある



「ここでもうやく俺の、そして罪木蜜柑の話に入るわけだ。ザックリを通り越して中身スカスカの説明でもここまでの濃さと長さだ、ビックリだろ？それほどまでに俺の世界

は終わってるんだよ

「……でもってここからもやつぱり大雑把な地獄案内ツアーになる。びっくりしないで聞いて欲しいっていつても無駄なんだろうがまず俺を含めた希望ヶ峰学園の生徒16名、計算上というか事実上一学年まるごとが学園での記憶を失って無人島へと叩き込まれた……そのとおり、全員が全員みんな平等に記憶を失って、とつくの昔に済ませた自己紹介をやり直し、深めたはずの絆をまた深め直すという作業へと勤しむことを強要されたわけだ……そして——ここからが本当の地獄なんだよ

「常夏の島、不足するものなんかなくて脱出できないこと、事情がわからないことを除けば不満なんて何も無いその島に突如嵐が訪れた。揶揄じゃない本当に唐突に黒雲が流されてきたんだよ

「そしてその黒雲にはあの事件の黒幕が潜んでいたわけだ。もちろん俺達は学園での記憶がないから事件のことも忘れていたんだけどな

「まあ……その黒幕によつて罪木を含む俺たち16人は和気あいあいとした南国生活から突如変貌したロシアイ生活を強要されたわけだ



そうして再び小休止、ここからは曖昧なんて事はない、一度たりとも忘れられたこともな

いし忘れることもできないであろう地獄の経験だ。だからその分……俺にも整理する時間が欲しかった

「コロシアイ生活……でございますか？」

「そうだよ黒ウサギ。ギフトゲームのように言えば勝利条件が『誰にもバレずに16人の仲間のうち一人以上を殺すこと』な最悪のサバイバルゲーム生活だ」

「仲間が仲間を殺すんですか!？」

一番最初に声に出した黒ウサギとジンにとっては信じられないことだったのだろう、なにせ二人にとって仲間とは掛け替えのないもの。

「そうだよ、かけがえがないからこそその島でそのゲームは成り立った。より言えば俺たちは仲間であつても仲間じゃなかつたんだ」

なにせ記憶がない、そしてあまりにもお互いを知らなさ過ぎた。却つて中途半端に知っていたからこそ、仲間意識がありまた自身の意志を曲げることができなかつた

「意志……なるほどな。才能を持つてる奴つてのは等しく人格まで常識を超えていた……そういう解釈でいいのか？」

「その言い方だと人間じゃないみたいに聞こえるけどそうだな……お前たちみたいに異常な人格と人間味を特別な環境下でもなく普通の環境の下で両立させて来たと言う意味ではそのとおりだ。別にあいつらは仲間を思う気持ちもあつたし過去に世界に復讐

を誓った亡者だったわけでもないよ」

人間味があつたのさ……あつたから殺さなくてはならなかつた

意志があつたのさ……あつたから殺さなくてはならなかつた

普通だつたとも……だから殺すという道以外に適応方法が見つからなかつた

「結局今まで保ててきたそのバランスが崩れちまつたんだらうな。全部を立てられる優しい世界からどん底に落とされたせいで選ばざるを得なかつたんだらうよ……だから最初の殺人は驚くほど早かつた」

「……殺した人はどうなるの？」

「……殺人が起きて死体が発見されるとしばらくして学級裁判なるものが開かれるのがその生活のルールだつた。そこで見事他の奴に罪を着せることに成功すれば犯人は脱出できたんだよ……真実を知つたあとなら外だつて地獄なことに気付けたのにな」

「……罪を着せられた人はどうなるのですか？」

サンドラ様のは自身も下手をすれば今後断罪する側に回る故の質問だらうか？

「殺した犯人以外の全ての人間が死ぬ。罪を着せられたやつじやなく真犯人を暴けなかつた奴らすべてがだ」

「———つ!!」

「だから地獄なんだ。殺人を犯した本人は覚悟も、事情もあつたんだらうな。でもそれ

以外は殺すつもりなんてないんだ。自身のミスで人が死ぬ……それも仲間だ。まさに極限状態ってやつだな」

「その流れだと真犯人を暴いた場合も……」

……そこがあの生活の最悪なところだった

本性を良くも悪くも明らかにする生活というだけならまだ心が壊れると言う表現は
いらないだろう、でも……

「勝つても負けても……仲間が死ぬ。特に生き残り続けられれば生き残り続けるほど残った仲間との絆は深くなる。それを裏切られ仲間が殺されそれでも前を向いて真実を突き止め仲間の命がかかった必死の腹の探り合いを抜けてようやくたどり着いた先に残るのは『また仲間を処刑台に送った』という事実だけ。惨つたらしい処刑映像を強制的に見させられていくら憔悴しても翌日にはまた人が少なくなつた島で生活を送らなきゃならない」

……まさに生き地獄だ

別に行動を悔やんでいるわけじゃない。罪悪感も……正直あまりない。でも仲間を殺すしかなかったから殺すという行為はそれでも嫌悪感を抱くし実際そうせざるを得なかつたのも、なぜ事件が起こる前に犯人にもその事情があることを気づくことができなかつたのかも悔しいのだ

過酷といえどもこちらの方が過酷だろう、向こうの世界の方が恵まれてはいるの
だろう。少なくとも日本はそうだった。だがあの地獄に関して……事件の後の世界
を見ればこちらの世界の悲劇の殆どは向うに有りふれるだろう。それが悲劇を比べる
という烏澁がましいことをせずとも明確にわかかってしまう真実なのだ

故に俺以外の全員がその壮絶さに口を閉ざす。かける言葉が見つからないでもない、
自身の中で区切りが付かず思考するという当たり前の事がうまくできていないのだ。

それでも少し落ち着いた頃を見計らって言葉は続けた

「……罪木はその生活の中で三番目の事件の犯人だった」

「……？ちよつと待てよ三番目の事件の犯人ってことは死んでなくちゃならない。もし
そうじゃなかったのなら死んでるのはお前だぞ日向」

「無理もないけど別に妄言でもなんでもないしお前の頭がおかしくなったわけでもな
い、罪木蜜柑は一度死に、そしてこちらの世界で蘇った」

……ここからが本当の本当に大事なことだ

「馬鹿な、死者の蘇生など——」

「俺はこつちの世界のことには疎いが……不死身の存在がいるんだ、何らかの条件をク
リアすればその存在を呼び込むこともできるんじゃないのか？ジャックオーランタン
は言ってたぜ、『迷える存在を導くのが役目』だったな」

唸ったマンドラの言葉にそう返して再びひと呼吸、マンドラだって本当ならばわかっている筈なのだ……ありえない事はないと、少なくとも条件さえあればそれに近いことはできるのだと

「本題はここからだ。まずは罪木がここにいる理由から……これは恐らく先程言った事件の黒幕が関係している」

「断言する理由はなんだ？ 結局詳しい話は聞かせてもらえてねーが聞くにやばい存在なんだろそいつ？」

「ふむ、それにその黒幕がこちらに来る手段がない。そっちには超常の力が無いのだから？」

しかし絶え間の無い十六夜とレティシアの絶え間の無い質問がそのひと呼吸すら奪っていく……

「黒幕がこつちにいるのは確かだ、なにせ一度会ってる。間違いなくあいつは本物だよ」

「——つ！ もしやそれはフォレスガロのときの!?」

「そう、俺が居なかったのはその時既に魔王とこれまた死んだはずの仲間と会っていたからだ」

そしてレティシアの質問にも答えはある

「黒幕がこつちにいる理由も幾つかあるだろうけど言ってしまうば一言……事件の黒幕

こと”超高校級の絶望 江ノ島盾子が向こうの世界では軽く神格化されているからだろうな」

正確に言えば神聖視……いや神聖なものは寧ろ好まれないのだから神聖なものとしてみてはいないのだろうかなんてせよ尊いものとして超不特定多数に求められていたのは確かだ

「そんなめちやくちやな!!」

「めちやくちやだよ、なのが江ノ島盾子なんだよ」

「……その超高校級の絶望ってのはなんだ?」

——それは

「……そのままさ、絶望だよ」

絶望に理由はない。存在を形づける言葉もない。

「初めに言った通り超一流の中の超一流の絶望だからこそ……超高校級の絶望なんだ」

でも希望には理由がある、重くなった体が反応するほどの希望がない現状……あの絶望にどう対抗すればいいのか、俺には全くわからない

「事態はまさに絶望的ってやつだよ」

まるで学級裁判が終わったあとかのような疲労感に身を任せて俺はこのまま眠ってしまいたかった

無駄だとわかりつつも少し静かになった空気に任せて俺は少しまぶたを下ろすの
だった

絶海にして第三の戦場、重なる記憶

俺が黙ってから暫くは誰も口を開かなかつた。大半はその凄惨さに満ちた内容に、そしてうち二人はそれでも残る……否、増えた疑問点を考えてだろう

まだ若いジンとサンドラ、前だけを向いてこれ程に大きな絶望を味わつてこなかつたマンドラ、まだ関わりが浅く俺のことをあまり知らないレティシアに对人経験の少なさ故にかける言葉が見つからない春日部を除いた黒ウサギと十六夜だけがこの空間で少し違つた表情を見せている

十六夜はおそらく一度追求されたカムクラのこと……黒ウサギの方もペルセウスの時に彼女が意識していた何かがあるのだろう。一番可能性があるのはギフトゲームを感知することのできる黒ウサギであり当事者である俺の認識外のことでもある花村との一件だ。

「……罪木はギフトを持つてた、そして十六夜が前に俺を黒日向と称したあれの超強化バージョンの様な性質も持つている」

……でもそうか、そう考えれば俺が直接的に絶望を感じなくとも元の状態に戻りそうな条件が一つあるのか。何せ俺は彼女のその影響を受けている。彼女そのものが絶

望ならば何故それに付属するそれが絶望を帯びてないと思つたのか……。

「黒日向に……か？」

「そうだよ、むしろそれこそが世界を滅ぼした一番の原因だ。絶望は伝播する、たつたそれだけで人類は実質壊滅状態に陥つたんだ」

……だからこそ

「罪木の相手は俺がやる。ぶっちゃけ今の俺は大した戦力にもならないしな」

「そ、それだ。創、お前はなんでそこまで弱っている？ 私も直接お前が戦つているところを見たわけではないが前のお前にはもつと鋭さがあつた」

「いえ、それはだいたい予想がつきます」

レティシアの間に俺が口を開くよりも早く黒ウサギが答える

「……日向さん、貴方の力はきつとその絶望とやらの深く関係があるのではないですか？ それはきつとギフトではなくそれこそ超高校級と呼ばれるもの……だから貴方はラプラスの紙片にギフトが出なかつたとき驚きもしなかつた。自身の力に躊躇いもなかつた。なにせ前の世界でそれが明確に示されていたから、それがなければ生き残れな
か——」

「それだけはない」

ギフトの力やラプラスの紙片を気にもとめなかつたのは確かだ、そして今は変な力が

あるのも事実……でも

「生き残るためにその力が必要だったとか……そんなことはなかった」

かつては文字通り自分を殺して手に入れた力だ……でもそれがなければ生き残れなかったか？ そんなことはない。俺を生かしたのは仲間の意志と俺自身の覚悟だ

「……まあいい、時間はまだある。緊急を要する事はもう話しただろうし今からは本格的にグリムグリモワールの対策を練るとするわ、つーわけで暫くはジン坊ちゃんと書庫に泊り込むつてことで」

「でしたら私はサンドラ様達と施設内の采配を見直してきましょう。怪我人も病人も少なくありませんしこの混乱具合です。少なくとも見積もつても後一日はかかるでしょう」

「ならば私は春日部を見ていよう。どうにも今回のことには私が口を出せることもありそうにない」

唐突な解散モードに置いていかれた俺は一人やることも見つからず話においていかれる

「……え、俺は？」

「正直今回のゲームの知識がない日向が攻略で役立つことはなさそうだ」

「ええ、こつちも同じですね。身体能力のない日向さんと少し動きが遅くて……決して迷惑などでは無いのですが」

「春日部の事もあまり人数が多くてもな……特に異性のお前が居ては春日部も気を使うだろう?」

……なぜだ? さつきまで話の中心にいた筈なのにどうしてその一瞬でアウエーになるんだ?

確かに伝記や童話、神話に逸話に関して俺が役立てることは少ないだろう。絶望に關してだって先ほど言ったように元からして曖昧なもので実際は体感してもらおう他説明などできやしない。無論黒ウサギ達にだって医療の知識や設備の把握ができていない俺がついていっても邪魔なだけだといのもわかるし春日部の事だって上に全く等しいだろう……かと言ってだ

「なにか仕事ぐらい無いのか!」

「別に休んでりやいいだろ、なんでそんなに仕事中毒してるんだよ」

む……それは確かにそうだ……そうなんだが……

「人が仕事を求めるってのはたいがい気が紛らわせるためだ。それ以外やることがない、周りがやっているのに自分がやっていないのは居心地が悪い、仕事をしているからほかのことが出来ないのは仕方が無い……ああ、仕事万歳ってな? いきなり謎の復活を遂げた仲間にかまで失ってお嬢さままで消えて……焦るのはわかる」

「いやマジで別に焦ってはねえよ!」

……居心地が悪いのは確かにそうだが

「わかるがまあ休んどけ。ほかが納得しても俺にはまだ聞きたいこともある、どうしてもっていうなら無理矢理にでも春日部のところで雑用でも引き受けてろ」

……なんだ

「十六夜、春日部は病人だぞ?」

「お前ら三人同じコミュニティなのに驚くほどコミュニティケーション不足だろうが。余ってる時間ぐらい今まで使わなかったことに使え、それが今一番の有効活用つてもんだ」

それが本音か!!

「おかしいと思ったんだ! 書庫に籠るなら手を貸す存在くらい欲しいだろうに!」

「決まったことだ諦めろ」

「勝手に決めるな!」

「はい、じゃあひなた君の役割に対する決定に賛成の人?」

言ってますが一番元気に手を挙げたのは十六夜ではなく……まさかの黒ウサギ

「ええ、なんですか日向さんその疑いのこもった眼は、失礼ですね! この公正公平が保証された私の判断ですよ!?! 何を疑うのですか?」

「言って地味に陰険な黒ウサギだからなあ……実はこの前の鬼ごつこの時有耶無耶に

なつたの少し根に持つてるんじや……」

だから眼をそらすな！！

「やつぱりそうなのかよ！」

「違いますとも、ええ違います。この黒ウサギそんな小さな事で怒るはずが」

「おい日向、二百歳オーバーのこの大人過ぎる黒ウサギ様がそんなことで怒るわけが――」

「余計なことをおっしゃるのはどこのどなたですかあ？」

「よっしゃいくぞオチビ！」

「え、ちよ十六夜さん!？」

いつもの様に咄嗟に黒ウサギイジリへと方向転換した十六夜に黒ウサギが髪を逆立ててハリセンを取り出す……がもはや十六夜も手馴れたもので既に有効範囲から脱して電光石火の如く部屋を出ていった。

もはや恒例となつたマンドラの偏頭痛やサンドラの苦笑いもどこかいつもより酷い気がする

「まったく！とにかく日向さんはそこで大人しくお手伝いをすることです！いいですね？」

未だに毛を逆立てたままの黒ウサギの表情は非常に恐ろしくそれこそウサギなどで

はなく悪鬼や修羅のような――

「よろしいですね!？」

「イエス、マム!」

いえ、ウサギでした。ただし雷を帯びただけの……人を殺せるぐらいのやつ。

そんな黒ウサギを含めた三人がまたもこの部屋から消え遂にはなんとも気まずい空気が流れる三人が……正式にはそのペットである三毛猫を含めた十一匹が残された

「……別に少ししたら三毛猫でも連れて出ていくさ」

俺の言葉に非難を向けているのかベッドにしがみつきながらニャーニャーと鳴くその言葉もついに理解が出来なくなつた。

「別に私は気にしないよ?」

「そういうわけにも行かないだろ。それに文字通り俺はいま一般人だ、ペストの影響だつて受けかねない」

ペストというのは主に血液や皮膚の傷、リンパ等に菌が入り込むことによつて発症する病であつて基本的に大気感染はない……あくまで基本的にの話だ。稀ではあるがペスト感染者の咳より肺に入ったペスト菌が体を蝕むということもある。この世界のペストがどうなつているのかわからない以上レティシア達のような体の強さを持たない俺はここにいただけでわりと危険がある

「創つ！仲間は何と言う口を!？」

「俺の中の仲間は別に仲良しこよしをするだけの関係じゃない。事実俺はいまペストに犯されるわけにはいかない」

「だから気を使えと言っているんだ！そんなことだから飛鳥にだって気を使わせて……いや私だってそんなことがいいたいわけじゃないんだ」

……知っているさ。俺はわざとレティシアを避けていた。話したい事かあるというその内容までわかっていて避けていた

「お礼とかなら別にいらぬ。仲間を助けるのは当たり前だからな」

「……お前はその仲間と良い関係を築こうという気はないのか？なぜ拒絶する、なぜ逃げ回る、なぜ視線を逸らすんだ!？」

「……俺はいつだって自分の事で手一杯だ。だからコミュニティのためにできることは多くないし今回みたいに巻き込むことだってある……それはただでさえ崖っぷちのノーネームには致命的だろ?」

それだけじゃない。俺の目的はこの世界ではなく元の世界だ。何があっても必ず戻る……だからこそ十六夜たちとは違いこの世界で生きるつもりはない……なのに仲間面をしろだと？仲間だと思おうからこそそんなことはできない。俺は仲間を失いたくもないし見捨てたくもない。

罪木だってそうだった！花村も！狛枝も！みんなだ！話を聞けば聞くほど……親しくなれば親しくなるほど！どれだけ相手の事をしろようと本当のことはわからない、仲間だと思っても相手は思っていない、そうして誰か仲のいい仲間が殺されるんだ。この世界は優しい……この世界のみんなはきつと仲間を見捨てることはしないだろう、俺とは違う。罪悪感など無くても、後悔がなくてもここまで温かい世界に来てどうして元々のあの心保てる？それであの絶望に勝てるのか？いくらみんながギフトを持っていても絶望を前に何ができるのか？

俺は仲間に見殺されて欲しくない、そして何よりも——もう裏切られるのは嫌なんだ

殺すのも嫌なんだよ

「俺は仲間だとは思ってる。大切だとも思ってる。でもそれは別に一方通行でいい」「……なぜそんな悲しいことを言うんだ？平気な顔をして、なぜ言える？私達は仲間だと……今そう言ったお前がなぜ？」

レティシアに近づかなかったのも何かそれがいけないことのような気がしたからだ。みんなに手に入れた戦果……でも俺が何をしたのか？みんなの心を揺さぶって戸惑わ

せてゲーム本番でも一人コミュニティとは関係ない事をして……俺が同じようにそのお礼を受け取ったらノーネームの努力が霞むような気がしたから離れた。隠していることが後ろめたくて近づけなかった。

そうして今も戸惑わせて初対面のジャックにすら叱咤された

「——それは」

だからそれを踏まえてようやく踏ん切りがついた、今までの中途半端さがいけなかったのだ。

だから次はない。今度こそ熱く自身すらも焼くほど苛烈な弾丸へとなろう、静かに全てを両断する鋭利な刃にもなろう。なにせ今の俺には才能があるのだから……大丈夫、今度は罪木にだって負けやしない。何故なら今の俺はあの時の俺だ。

「——そ《・》《れ》《は》《違》《う》《ぞ》《》」

言葉の弾丸が仲間の心を貫くのを俺は確かに幻視した……

仲間を侮ってそう勝手に決めつけた。ジャックの言葉の本当の意味も未だに理解せずに俺は再び仲間をよく見ずにそう限界を決めた

「それこそ違うよ創」

「……何が違うんだよ？」

今までベッドの上で俺たちのやり取りをずっと見ていた春日部がここに来て唐突に言葉を挟んできた

「創は最初から私たちの横にいたよ？ずっと居た……仲間だよ」

……は？

「確かに箱庭に来た時は一緒だったけどそれは関係ないだろ」

「ううん、関係あるよ。私は創の過去を全部知ったわけじゃない……でも創だって私のこと知らないでしょ？黒ウサギだって知らないよ、私もまだみんなのこと知らないけど……友達だよ、だから頑張りたいって思った」

「いや過去とかそういう事じゃなくて」

「じゃあ創は何を気にしてるの？創は過去じゃなくて現在いまの何を気にしてるの？それとも先のこと？未来の何が不安なの、創の目は何を見てるの？」

未来……そう、俺は皆といえる未来のために決意した。七海のいう通り決まった運命なんてぶち壊して自分の未来を掴み取るためにあの世界を出てきた

「私はジャックに仲間に頼るべきだって言われた……でも肝心の仲間がその時頼られてくれなかったら私はどうしたらいいの？迷えばなしで一人困ればいいの？十六夜も飛鳥もここにはいないよ？三毛猫はなにかに立ち向かう力が無いしレティシアも本当はそんなにあつちこつちに意識を回してる余裕は無いんだよ？」

いつもはあまり喋らないあの春日部がここまで真つ直ぐにこちらを見て言葉を紡いでいる……その言葉だけでなくその姿勢が俺の決意を揺るがせる

そういえば昔漫画で見たことがあったような気がする。どんな事にもまずはやるかやらないかという選択肢があり、その次に光と闇の道のどちらかを選ぶことになるのだと。

光の道はみんなでワイワイパーティープレイ、どんな困難も冒険も絶望も仲間と共有しともに研鑽し乗り越えていく道。

闇の道はそんな仲間を捨てて一人全てを置き去りにひた走る孤独のソロプレイ、いくら汚れようと構わずただ前にだけ進む修羅の道。

……俺は何を考えた？超高校級の力があるから乗り切れる？俺が絶望を越えられたのはみんながいたからだ、そうじゃなかったカムクラは現に絶望に沈んでいたんじゃない

いか

「……創は、友達でしょ？」

……ああ

「もちろん友達だ」

……だけ……

「病人は頼れないだろ」

仕事は見つからなかったがやれることは見つかった気がした。

ゲーム開始までの期間……罪木への対策を意地でも考えなければならぬ、でもいくら体が弱くなろうと頭の中身まではまだ変わってない。

「今回はまだ俺を頼ってもらおうぞ春日部」

「……うん」

動けない春日部のかわりだからこそ……俺だけの問題じゃないなこれは

「……十六夜達にいつも言ってる割にはお前自身も素直じゃないな」

「ばーか、あいつほどじゃねえよ」

本当にそのとおりだ。この展開を予想していたのかまではわからないがよくもまあ置いていってくれたもんだ。

「まあなんだ……今度こそ俺もコミュニティのために戦わせてもらおうとするよ、自分の

戦いじゃなくみんなの戦いとして」

そうだと、今の俺にとつての希望……すなわち未来とは仲間そのものじゃないか。蔑ろにしてその未来が手に入る筈がないんだ

しかしその優しい決意は日向がかつて諦めたもの……絶望に飲まれんがために捨てたその甘さを取り戻した彼に絶望を防ぐ壁はもう存在しないのだった

前を向く、それ即ち絶望の直視なり

長く、長く続く廊下は今もどこか赤い色とは違い身を震わせるような冷気を持つてそこにあつた。

本来ならば人の往来があるはずのそこも期日の前日の今日となつては動きもなく、病床に伏したその規模もあつてどこか人の気配の割には物寂しい空気を出している。その廊下に並ぶ扉の1つに手を掛ける、それは俺の仲間が寝ている部屋につながるものだ。

「邪魔するぜ」

「……十六夜？」

どうやら寝起き……いや俺が起こした形になつちまつたか

いくら体が強かろうが病……それもとびきりのものに侵された体を無理に起こそうとするのを手で留め、引つ張り出した椅子に座る

「容体はどうだ？」

そんな俺の間にも呆れたような視線が返ってくるのはまさに決戦前日……という

ここで隔離部屋にやってくるこの暴挙にたいしてだろうか。そうじゃなくその他の気遣いができてないという睨みであったのならさすがの俺も少し傷つく。

「ゲームクリアの目処はたったの?」

睨むついでに視線を落とし俺が手に持つ本へと今度は固定する。それこそ察して欲しいものだが……

「厳しいところだな。わかるところはさらりと出てくるがやっぱり核心には繋がらない。下手に多く情報を仕入れてもって思いはあるがとにかく今は関連情報や見方を変えて手を広げていってる」

……言ってしまったえばお手上げだ。悪足掻きに近いそれは要するにヒラメキだよりという。それほど状況は芳しくないものだ

「ハーメルンの笛吹きにも様々な説がある……要するに今回のゲームはその伝承の仮説にもならないようなものを選べ……ということなんだろうがこれがまた厄介だな」

仮説を書き記したメモを春日部に渡しながら話を続ける

「メモのとおり敵の戦力は災害ないしとある現象の具現化に近いもんだ、どれもこれもが伝承の130人を満たすのになんら不足ない」

ラッテンとは前言った通りネズミのこと。ネズミと人心を操る悪魔の具現、現象。

ヴェーザーは川の氾濫や地盤沈下等の災害を悪魔のものとしたもの。

シウトロムはまんま嵐の意だしペストもその通りだ。

要は偽りの伝承を砕き真実の伝承を掲げよというゲームの一文は上記のいずれかのうち伝承で実際に起きたことを選べとされる。実際春日部にもそれはわかるようで黒ウサギがかつて言った『立体交差並行世界論』を利用した説明をむしろよりわかり易く変えて俺に返してきた。日向やお嬢さまに説明するときはそれでいこうと思う

「まあ結局どんな考え方をしても上に並ぶもので一番浮く物といえぱペストだ。なにせ本来の伝承では一夜の間に130人が死ななければならぬ。その考えの中でペストだけは今の状況の様に即効性がないわけだ」

だがそう考えると今度は勝利条件が被ってしまう。故に今ある情報ではこれ以上の発展が見込めない

「もう一つの伝承の内容とは関係なく条件を達成するための方法も解明だけは出来てるんだがな」

伝承を砕き掲げる……これはなにかの比喩ではなくそのまま砕くことができ掲げられるもの……そしてそれ自体が物語性をもつ複数あるもの……

「ステンドグラス……これしかないと思う。おそらくだが白夜叉の定めたルールを超えてあいつらがこのゲームにやってきた方法もそれだ。白夜叉のルールには主催者や参加者を縛るものはあっても出品された作品を縛るルールは無かった。実際確認したと

「ころ俺たちとは違うノーネームから100枚以上は登録されていたしな」
「……すごい発想だね」

「ああ、正しくそのとおり。すごい発想過ぎて殺意が湧きそうだ。勢いに任せてかのステンドグラスを全部叩きわりたいぐらいにな、きつとスツキリする」

もちろんやらないが。

「正直それぐらい参ってる。結局ペストでいいのかもわからんしだとしてそれが真実なのかあるいは偽物なのかも曖昧だ。数の暴力つてのはまさにそれだな、把握していても確認して回るにも多すぎる」

「ということは今できる勝利条件は……」

「結局、魔王様を倒す他ねえってことだ」

……それに問題はそれだけじゃない

「……浮かない顔だね」

「今の話で満面の笑顔を浮かべられるのはヤケになった黒ウサギぐらいだろ。あるいは余程の能天気だ」

「なんか普段の十六夜を考えると今の十六夜はみていて愉快だな。普段の分黒ウサギ達にも見せてきてあげたらいい」

……なんで俺が出張サービスをしなきゃならない？

……まあなんにしても元気そうで何よりだ

「……ケツ、その様子じや心配いらなかったか」

俺のその反応が解せなかったか春日部が疑問の表情でこっちを見る。

「一人でこんな部屋に動くこともせずこもってたら気分が落ち込むかと思つて見に来てやつたんだよ」

「ありがとう、でも自分の気晴らしも兼ねてるんでしょ？」

「……そこで素直に感謝が出ないのはなんでだ。本来ならば『ありがとう十六夜様』くらいあつてもいいはずだぜ？」

「感謝はしてるよ、君は本当に優しい人だもん。そんなのはとづくに知つてた」

……ん？

「……望んだ展開ではあるわけだがよくわからねえな？そんなこと思つてたか？」

今度は俺の解せんという空気が伝わつたのかフフと非常に軽い笑みを浮かべてはなにをているのか視線を窓に向けた

「私が見て見ぬ振りをしてた創のために実際動いた……それだけで君は充分優しいよ」

「なるほど、こないだの事か……そう言えば日向はどこに行つたんだ？こないだから一度も見えないわけだが」

「何やら張り切つてどこか行つちやつた」

……大丈夫なのかね。伝承の悪魔達とは別……日向が話した話の中にいた死んだはずの存在。

結局気になることも聞くことが出来ずに日向は消えた。

「めんどくさいことにならなきゃいいんだがな」

「今の日向ならきつと大丈夫だよ」

……本当にそうならばいい。だが現実とはそうじゃない。決意一つでどうにかなるような優しい世界なんて……存在しないのだから

「……だといいがな」

「うん……そう言えば白夜叉は？」

「さあな、接触もできないし解放の目処も立たない。封印の方法も全然わからん——」

そこからは春日部の言葉をヒントに謎が解けた。出来ることはした、唯一の不安な要素があるとすればそれは……日向の口にした不吉な絶望と言う言葉だけだ



遠くから声が聞こえる。ゲームが始まる今日、その戦の前の士気をあげ、自身を鼓舞する声だろう。

そして少しの静寂があつて今度は世界が光に飲まれた。石畳と赤で作られた黄昏の街は消え木によつて作れた街が姿を現す。パステルカラーの家屋が立ち並ぶここはまるで時代を遡つたかのように錯覚させる

状況的に考えてここは伝承、ハーメルンの舞台だろうか？つまりはそのままハーメルンの街ということになるのだろう

「……向こうはきつと十六夜たちが上手くやる。今回は黒ウサギも参加するんだ、心配はいらない」

今回俺がやるべきはただ一つ、自分の戦いではなく俺達の戦いとして絶望を打ち破るということ……

遠くで空気が震え水しぶきが打ち上がっているのは十六夜のせいだろうか？もしくはあそこまで十六夜が荒ぶる敵ならばそれこそ敵の仕業なのかもしれない

開幕からあいつが突っ込んでいったとも考えられるが場所的には先ほどの声が聞こ

えたところから大差無い筈なのできつと向こうから来たのだろう。

「となればこつちも動く必要はなかったな」

「さすが日向さんです」

わざわざ後ろに現れたのはなにかの嫌がらせだろうか？鳥肌どころか血管の中に直接氷をぶち込まれたかのようなおぞましい気配に従って後ろを向けば薄暗い路地に案内の定彼女が姿を現していた

「どうも、一週間と2時間7分32秒ぶりですnee、日向さん？」

……いちいち数えてないっての。

「不気味過ぎてガチで視線そらしちまったよ！一週間と2時間7分37秒ぶりだな、罪木」

今度は各地で上がる旋風に雷鳴、紅焔に黒い風……ここまてくればもはやこれは戦争だ

「……あの時代の日本に生きてて自分が戦争の中に放り出されるとは思ってたよ」

「そんなことはありません。終戦の後たった時間は戦の歴史に比べて刹那的なものです。いつまた何が起きて何かが壊れる時が来る……それを成し遂げたのがあの人なんですよお」

「……そんな記憶にない昔話に付き合う気は無いぞ」

「そんなこと言わず少しぐらい付き合ってください、あの時のように二人でぶつかり合いませんか？今度は邪魔物なんていない、あのゲロブタもあのゲロブタも……私をいじめるものなんて誰もいない！この場には！私と日向さんだけなんですよ、私と日向さんだけなんですう」

……やはりあの時見た罪木の狂気は何も変わっていない。俺は罪木島での彼女は知っていても罪木現実での彼女蜜柑のコトは何も知らない。昔何をされていたのかも断片的にしか知らないし、彼女が何を抱えて、絶望するほどの現実^に何を思^って医療の道を進んだのかも知らない。自身を治療していて上達したその技術に何を思^ったのかもわからない。けど知りた^いとも思^わない。俺の知^ってる罪木蜜柑は絶望なんかじゃない。俺が知り^たいことは彼女の口から聞く。だから話し合^うことなんて何も^ない

「俺には仲間がいる。この場には戦^っている仲間がいる。俺にはお前だけ^なんて^ことは^ないよ」

「……そう、ですか。なら私だけを見てください。私だけを聞いてください。私だけを嗅いで、私だけ味^わつて、私だけを触^れてください。他^なんて^いら^ない。私^だつて^あの^人と日向さん^以外^はい^らな^い！だから^{!!}だから^なん^です^よお^っ!!」

花村の時のように、辺古山の時のように罪木も錯乱し始めた。俺の直感^なん^てあ^てに

はならないが会話は出来なくなってもこれはいい傾向のはずだ。彼女の本音……その理由こそが今、俺が知りたいもの。非力な俺が彼女に勝とうと思えば方法は三つだけ……再びあの力を手に入れるか十六夜たちが勝つまで絶望に飲まれないかもしくは……罪木に希望を取り戻してもらうしかない。辺古山にはできた事なんだ。罪木にだってできないことはない筈なんだ。たとえ彼女が根っこから絶望を信奉していたとしても俺が知る彼女ならば立ち上がってくれる……

「罪木……ッ!？」

これは……黒い風?なんで罪木が?罪木の体からペストが溢れ出てくる?

「私だけを見てもらう、これは私のワガママ、私が悪い?いや、私は悪くない」

体から溢れた黒い風はその量をどんどん増していく。あの時のようにペストの使った黒い風が彼女を包むのではなく、彼女から溢れだした黒い風が彼女を包んでいるのだ

「毒を持つて毒を制す……これはよく悪に対して悪を用いて制すると言う意味で使われますが言葉の通りの意味でもあるんですよ。古くは梅毒の治療に水銀が使われた例もありますし今でも病院で出されるワクチンというなの薬剤は本質的にはウイルスと同じなんです。まあかと言って実際医者か黒死病を用いるのかと言われればそれも違いますがこので大事なのは医者だつて病原菌を使うということですよ」

「病原菌を使う?」

「毒の解毒材を作るには同種の毒が要ります。作るのには医者ではありませんが医学というのとは様々な道に分岐するものでして……薬学だけでなく食や武術、一般的なスポーツでさえ医学に通ずるところがあります。私が今使っているのはそういった広い意味でのいわば超医学。それが私のギフトなんですよ」

……超医学。スポーツ選手の体の調整、それはスポーツにとって通らなければならぬ道であるし武術というのも元は永年益寿という最終目的があるものも多い。東洋を中心にそういった物が多くまた実際に今でも太極拳や武術的要素を含んだヨガまでもが健康法として残っている。食に至っては漢方などの薬膳が既に薬と言う名前だ。そういうった多岐に渡る全てを彼女はギフトとして手に入れた

「この前の縫合とやらも、俺の傷どころか汚れまで消したのもそのギフトか?」

「基本的な治療はもちろん、清潔もが全て病院が管理することですから。私の力が必要とされるものすべてに強制的に押し付けることができるんです! 傷があれば相手が拒否しても治します! その度に私の影響を受ける! ……特に日向さんであればその影響は目に見えて現れるでしょうねえ?」

……この間のタネがそれか。俺が弱体化したのは罪木の超医学ならぬ超医術を受けたい。

「もつとも押し付けるまでもなく綺麗な人や健康な人には発動できないという条件があります……それは今度は病魔を操る事でフォロー出来るわけですよ。特に今はペストさんの影響下にいるおかげで通常物理的な作用を持たないはずのただの病原菌がこうして黒い風と言う形で具現化してくれるので……健康体な人はこうして人為的に不健康にしてしまえばいいのです、怪我がない人は人工的に怪我を作ってしまったばいいんですよお」

「……よく喋ってくれるな？」

「ええー言っただじやないですかあ、私は日向さんに私を知って欲しいんです、聞いて欲しい、味わって欲しい！ですからあ……ちゃんと受け止めてくださいね？」

罪木が持ち上げた腕の先……迸る黒い風が鎌首もたげてこちらへと向く

幸いその尋常じやなく発せられる嫌な感じのお陰で見なくとも軌道がわかる。汚れがついてもダメとのことなので転ぶような回避はできないが前もってわかるのであれば怖くはない、なんとか余裕をもってその黒き嵐を回避する

「あれ？あれあれあれえ？なんでよけるんですか？なんで受けてくれないんですか？拒絶するんですか排斥するんですか？私のことは嫌いですか？絶望するのが嫌なんですか？」

「……ああ、俺は絶望するわけにはいかない。仲間のためにも……だ」

ペストが通りさつて碎かれた路上が舞い上がってくるのを更によけながら罪木の言葉にそう返す

「……日向さんはそんなこと言いません

「くだらない仲間なんて今はいませんし

「あの時みたい^強に人数が多ければ勝つ^がなんてことないんですから日向さんがあえて私を拒絶する理由なんてない筈なんです

「だから日向さんはそんなこと言っちゃいけないし

「むしろ私を受け入れてくれなきゃいけないんです

「おかしいです

「ダメなんです

「なんで

「なんで

「なんで

「なんで

「なんで

「なんで

「なんで

「なんで

「なんで

「なんで

「なんで

「なんで

「なんで

「なんで

「なんで

「なんで

「なんで なんです か！ ！」

罪木が言葉を紡ぐ度にペストが吹き上げ積み上がり重なって天を突くかの様に立ち昇る

明らかにやり過ぎていた、これでは本音を聞くも何も無い……しまった

「落ち着け罪木！」

「ウルサイっ!!」

悲鳴を上げるような声で拒絶された

「日向さんの声で私を呼ぶな！島で言ってくれたんだ！私を仲間だつて！私が仲間だつて!!」

蘇るのは何度か罪木と二人で島で時間を過ごした時の記憶……罪木がああ島を天国のようだと言ったあの次の会話……みんなが自分をいじめないのは関心が無いからだと言った彼女に俺は仲間だと……そういつた。そして罪木は確かに俺に微笑んだのだ『信じたい』

……そういつて確かに笑つたのだ

「日向さんは私の味方だった！いじめないと言つた！仲間だつて言つてくれたんです!!」

「私はほかの仲間なんて知らない！日向さんの言うほかの仲間なんて私は知らない！私のはあの人と日向さんだけです!!二人だけが私を受け入れてくれる!!これは二人のための力だ！だから喜んでもらえるように治療に加えて絶望を付加するようにした、そうなつたんです!!それを!!」

あのおどおどとした罪木が叫ぶ、肺の中のものが無くなって途切れ途切れになりながらもそれでも言葉絶やさぬようにと

「今更否定するな、絶望にならないと受け入れられないのなら絶望絶望になつて私を受け入

れることを受け入れろおツ!!」

罪木の周りを覆い隠していたもはや瘴気のようなそれがフツと消え天より嫌な感じではなくもはや形となつて現れた嫌なモノが俺目掛けて落ちてくる

「罪木ツ!!」

違う!俺はただ!!

「みんなで——」

声が届いたかはわからない。おそらく届かなかつたのだらうと思う。

なにせ俺の声はもはや俺にすら届かず、ただただ深い闇の底から残響するように発せられた「絶望しろ」という彼の者の声にかき消されたからだ

◆◆◆◆◆

—— 黒い影が蠢く

ただ少年を求めた少女より発せられ、希望を求める少年を飲み込んだそれはどちらの思惑とも外れるように少女が望んだ少年を消し、少年が望んだそれを潰して絶望として誕生した。だからそれも彼にとっては瑣末ごと

「ツマラナイ」

さあ既に舞台の幕が上がった。後はそれを絶望彼らしく台無しにするのみ

あらゆる物は既に手の中に

立ち昇る黒い風の塔……それはハーメルンの街のどこからでも目視することができ、
そして平等に恐怖を与えた。

中でも鋭い者たちはその恐怖の元が塔そのものではなく何故か塔が向けられる比べ
てしまえば圧倒的に小さな少年のものだと気づいていた。

「なんなのよ……あれ」

既にヴェーザー川の化身は倒され一対三という状態に持ち込まれながらもそれでも
戦力的には押してさえている黒死斑ブラックパーチャーの魔王が一番激しいその戦場とておもわず動きを止
めてしまうほど……その視線先に佇む黒髪の少年は異常だったのだ

ただ恐ろしいのではなく、ただおぞましいでもなく、悪とも混沌とも闇とも影とも似
つかないその在り方……それこそ正しく絶望と呼ぶのが正しいのだろうか？ ああ、だと
すればこの場にいる全ての人間が勘違いをしていたのだ。絶望と言う言葉はそんな軽
いものではなくもつと取り返しのできないものだとも早くに気がつくべきだった。

少なくともこんな状況下であろうとも一番頭が回るであろう逆廻少年はそう考えて

いた



吹き荒ぶ黒い死が余波だけで周囲を破壊していくなか件の少年はまるで一人静かな波一つ無い湖畔に佇むが如く全くそれらを気にせずただただそこにいた。いくら破壊が向けられようがよけることも無くなにか動作を見せるわけでもない。ただ一瞬で向けられた牙が散り少年のその長い髪を揺らすことなく消えていく

「あ、あなたは日向さんじゃない。日向さんは私を見てくれる！あなたは誰だ!! 誰何ですかっ!!」

慟哭の度にぶつけられる黒い瘴気がいい加減鬱陶しくなったのかその声にようやく反応したのか、今まで興味深そうにあたりを見わますただだった少年がついに少女へと視線を向ける

それが果たしていい事なのかはわからない。

「絶望しろ絶望しろ絶望しろ絶望しろ絶望しろ絶望しろ絶望しろ絶望しろオツ!!」

「その程度ならば既に持っている」

少女の渾身の一撃すらその少年の一刀の元に切り捨てられ立ち昇っていた塔すら霞

んで消える。

驚愕する少女をよそにそれでもなんら表情を変化させない少年はようやく自身の意思の元に口を開いた

「てつきり目が覚めれば彼女がいるものだとばかり思っていたので待つていたのですが……どうやら本当にいないみたいですね」

「あ、当たり前です、あの人は来ません!!」

フム、とそれを良しとしたのか満足しなかったのか……踵を返してその破壊痕残る路地をあとにしようとする

「どこに行くんですか!!」

そんな少年に少女は再び黒い風を出し、放とうとして——吹き飛ばされた。

少年が少女よりも早く、鋭く打ち出したものはやビームの様なその黒い風を受けて家屋をぶち抜きどこまでも吹き飛ばされていく。

今までにない明らかな惨状……これがこの舞台にとってよかったのは件のステンドグラスが一切巻き込まれなかったことだろうか？しかし破壊の先で子供に弄ばれ壊された人形のように関節すらひっつちやめつちやかにされ赤い華を開いた少女を見ればそれは安心とは程遠い

「知識としても外見としてもこれはただの黒死病の筈なのですが……さて物理的な破壊

力まで伴うのはなんなのでしょいか」

しかし少年は自身の作り出したその光景に戸惑うでもなく、少女を氣遣うでもなく歩き出す。彼のそれこそ神の領域に迫らんとする頭脳が現状を正しく理解させその原因を先程まで遠くにいた黒いフリルを付けた服をきて黒死を操る少女だと断定したのだ。今は……月だろうか？優れた聴覚でちようど舞台の真上に位置するであろう月を眺めそう判断する。彼にとってはそんな離れ技すら瑣末事ではない。

いざ月に向かわんと思考したところで横合いの攻撃にふと意識を割かれた

「……完璧に壊れていたと思うのですが……治るのですか」

攻撃してきたのは先程までの少女、もはや黒い風ではなくそのか細い肢体を駆使しての近接攻撃にカムクラは少し興味を覚えた

「日向さんを……返してください」

先程の叫びとは一転変わってか弱い女の声……だが込められた意思はより強い。自分よりも弱い存在を助けることで満足感を得ていた彼女が今ここで自身よりも弱い少年を助けたいと心から願った。手に入れたいでも崇拜する彼女に捧げたいでもなくただただ眼前の絶望より救いたいと前を向いた。

たとえば黒死病の扱いで負けたとしても自分には超医学がある……ならば救って見せると拳を握り再び振るう。その顔は既に涙に汚れ、元のそれなりには端正だったはずの

顔すら歪めて必死に彼へと挑む——が現実はやはり無情である。

彼女が彼にその異能を見せた時点で全てにとつての希望であれと作られて少年にとつてそれは既知の事象へと変化する。彼女が希望を持った超格闘と超回復による持久戦すら彼には遠く及ばない。格闘技術は勿論その身体能力や明確化されていない殺人術、本来彼女の分野である体の構造の把握まで全てに渡つて彼は彼女の前を行く。

結果彼女の拳は空を切り彼の攻撃の尽くは一撃で彼女の肉体を粉碎していった

とはいえ彼女にとつて幸運だったのは超医学の及ばない範囲……つまり古今東西あらゆる技術を駆使してもなお至らぬ領域、死者の蘇生というそれを必要とすることにはならなかつた事だろう。即死でさえ無ければ、連続で殴られようが即死でなければ彼女は生き続ける。例え連続回復のせいで体にダメージが残り動けなくなつたとしても無事生きていられるのだから。生きていれば再び彼のために拳を振るえるのだから。

強者に立ち向かうその優しさを取り戻した彼女にとつてそれはやはり大きな希望であつた。

本来であれば自分を即死させることなど容易いはずの彼がなぜこうして自分を生かしているのか彼女は疑問に思うことなく、また少年自体も特にそれについて考えることなく舞台は次へと移る。

彼が求めるのはあの絶対的絶望のみ。それが憎しみなのか崇拜なのか怒りなのかは

らままならぬほどに雷を迸らせたそれをたつた一人の少年が少女を担ぐ片手間に止めて見せてしまった。

「……あつ」

果たしてそれは誰の声だっただろうか？なんにせよ既に魔王討伐の舞台は既に終わっている

「なるほど、帝釈天の槍……実物が見れるとは思いませんでした」

口を開けば流麗な、聞き惚れそうな声が響き渡る。存在そのものが禁忌だと訴えかける本能すら差し置いて手を伸ばしたくなるような……そんな危険な魅力がかの少年にはあつた。

しかしその顔は自分たちが一番良く知る彼のもの

「日向くん……？」

飛鳥の疑問はこの場共通の疑問だった。それベストでさえも同じ……否、むしろ誰よりもあの少年のことを知らなかった彼女こそが一番驚いていた

「日向————忌々しい名だ……僕に感情があつたのならばそういうのでしょうか。どうもはじめましてカムクライズルです。生後三年程のただの若輩ですよ」

彼はそのまま月の表面へと緩やかに降りて担いでいた少女と槍を地面へと下ろす

「さて、はじめましての挨拶はしたわけですが返しは結構ですよ。興味もない。ただ――

「この場のすべてを飲み込んでなお興味がないの一言で済ましてしまうその傲岸ぶり……その上で彼はそれらの視線を振り切つて高速でベストと呼ばれた少女の前へと移動する

「あなたには聞きたいことがあります」

意識を向けられた八〇〇〇万もの悪霊の軍勢が揃つて恐怖しそれが少女の体を通して表面化する。先程までの強者としての風格も今の彼女には存在しない、ただ震えるだけの少女に成り下がった彼女に出来ることはない。ただ荒くなる呼吸を必死に抑え、震える脚でそれでも機嫌を損なわぬように立ち、涙を溜めた瞳でそれでも絶望を直視する「どうやって彼女を知ったのですか？」

そう問われただけで少女は今まで必死にこらえてきたものを吐き出した。もはやまともな呼吸はできない、体は崩れとうに涙腺は決壊している

答えなければまずいとわかつていながら答えることができない。そんな状態でも異常なほどに眼前の少年は視線を惹き付け続けた。視線を離したいのに、耳を塞ぎたいのに、それでも自然と意識がそちらへと向けられる。それに恐怖しそしてさらに意識する……ただの悪循環だ

「……………」の程度で彼女と接触できるはずもないか……まあいいでしょう」

そう言つて少年の関心が自分から離れた。それだけでどこか狭くなつていた少女の世界が開放され少年以外の世界が目に入ってくるようになる

だがそれも一瞬、次の瞬間には少女は全身を打ち据えられ轟音とともに地面へと叩きつけられる

「ならば貴方はいらない、興味もない」

そういう少年の声に全員が身震いした

「離れる黒ウサギっ!」

それでもその少年が声を出したのは仲間のためだ。無論その恐怖の一番近くにいる黒ウサギの為でもあるがなにより先程から異様な空気発し続ける自身の仲間であろう男のために少年は声を上げたのだ

「……ああ、黒ウサギ……これまた初めての体験ですね。生まれたて故に初体験というのは多いのですが未知というのは少ないもので……で?あなたは彼女を知っているのですか?」

「彼女つてのは江ノ島盾子つて言う奴のことか?」

完全に意識が少年へと向けられた

「……どこにいる?今彼女はどこに?」

「知らねえよ、お前のほうが——ッ!」

次の瞬間には再び全員の視線を切るように十六夜の眼前へと移動していた
「ど……に……？」

身の毛もよだつおぞましき……十六夜が反射的に負傷していない左の拳を前に突き出すもカムクラはそれを一切触れずに捌き月面の遺跡へと投げ飛ばす。

超高校級の武道家……その技術を用いた完全なる空気投げ。

いくら力があるうが意味をなさない領域というものが武術には存在する。

「……ブラフですかね。それに引つかかるなんて僕も衰えた物だ」

「ディーン！ 取り押さえなさい！」

ついに仲間に手を出した少年に危険を感じ飛鳥が赤の巨人へと命令を下す。

その巨体と重量に見合わぬ跳躍を見せた神珍鉄の自動人形が迫るのをカムクラは冷めた目で眺めて一言つぶやいた

「そこをどけ」

コトダマを込めたわけでもない。ただ眼前の少女を真似ただけ……それだけでディーンは命令の更新に着地点をずらし静かに大地へと降り立った

「そんなんっ!？」

「あ、ありません！ 他者のギフトに介入……いえ、他者のギフトそのものを完璧に模倣した?」

カムクラにとってできないことは存在しない。江ノ島盾子がその性質から絶望と呼ばれたのであればカムクラはその性質以外の全てに置いて彼女を凌駕する存在だ。人類にとっての希望であれと願われ生み出された彼にとって異世界の法則であろうと彼は全てを役するだけの地力を持つている筈なのだ

「この世界風にいえばこれが僕、カムクラ日向のギフトという事になるんでしょうね」突然変異や進化の結果、特別な境遇等その全てを無視して人類、もしくはそれに値する存在が持つ力をカムクラ自身の洞察力でもって読み取り自身の中でその経験を模倣しその力を完全に読み取る。前の世界において全ての才能を持つ。持っていない才能なぞないとされた彼だけの力

「未知と人類に相当しない物の力でなければ僕には通用しません」

「ありえませんか！他者と同種のギフトを持つのならばまだしもその場で全く同一のギフトを模倣しあたかも本来の担い手のように扱うなど！」

「だが現にその人形は僕と彼女の命令を同一のものだと把握している。彼にとつていま主は二人いるのですよ、残念ながら巨大ロボットならば一度操縦したことがあるのであまり新鮮味は感じませんが」

そう軽々言つてのける彼の話を信じるのであればこの場で彼に勝てる存在は居なくなつたに等しい。

黒ウサギの持つ神より賜った幾つかの神具ならまだしもそれには回数制限がある。横からとはいえ帝釈天の勝利の加護を持つ槍を平然と受け止めた彼の動きを止め、確実に手札のギフトを当てたところで一撃で倒せるものなのか？

「なら俺の攻撃は既知かア!？」

「未知であろうとそもそもその攻撃が当たらないのですから」

遺跡から飛ぶようにして復帰とともに攻撃をしてきた十六夜へ再びカウンターを決め動きを止めたところに蹴りを見舞い吹き飛ばす

「意味が無い」

今度はなんとか受身をとって踏みとどまったもののカムクラのそこを見せぬ身体能力と同程度の十六夜の身体能力がぶつかったところで技量という面で圧倒的に劣る十六夜が勝つことは絶対にならない。勝つ方法がないのかと言われればまた違うがそれで勝てるかはまた怪しい

「クソっ!どうなってんだ日向の奴!やっぱ大事なこと隠してんじやねえか!!」

「というかあれ本当に日向君なの!?!」

「何度も言わせないでください、僕は日向などと言う名前ではなくカムクライズルです」
そう言つて一歩進んだカムクラへ今度は黒い風が迫る——しかし魔王の力を持ったそれも適当に振るわれた彼の腕にかき消された。

「あら、それ元人類の技にも有効なのかしら？」

「さて、どうにも今のは僕ではなく別の力が働いたような……ああこれですね」

そう言つてポケットから取り出したのは日向創のもつアツシユグレイのギフトカード。

輝くのは正義執行の文字。

「数の無効化……まあ多分無数の病原菌によつて作られた黒死の風を病原菌の数を一つという扱いにして弾いた……ということでしょうね。ひとまとまりであるのならば散らばること無く大した力もいらずに弾けるでしょう」

「おいおいさつきからなんなんだそりゃ、どんな由来があつたらそうなんだよ」

絶望時代の記憶があるとはいえあまり他者との絡みを見せなかつた彼には凛々しくも常にとある少年を支えていた彼女の記憶はあまりない。

「さて……しかしとりあえず八〇〇〇万の悪霊とやら……一つに纏めてしまひましょうか」

「え？」

起き上がったばかりの少女に再び絶望が迫り手を伸ばす

「ゲームを終わらせなくては彼女を探しに行くこともできない、死んでもらいます」

赤い瞳に囚われ再び動きを止めた少女の顔を大きな手が掴んだ

あくまでも悪霊の集合体意識の代表でしかない彼女のが完全に他の存在と溶けていく。

自我の喪失、怒りの共有、絶望の再臨……そうしていざ少女が自壊すると同時に同じく寝転がったまま動きを見せなかった少女がカムクラへと飛びついた

「元の日向さんを……返してください」

「なに？」

振り向いた時には既に遅く少女の体が消えるように輝き眼前の少女と同じように今度カムクラへと溶けていく

「きつと皆さん待ってますから……絶望に落ちても変わらない日向さんを……待ってます」

「だから何を——ツ!？」

同様にポケットへと仕舞ったギフトカードが再び輝いてカムクラを光が包む

誓いが蘇ったように流れていく。交わした記憶のない約束が、カムクラにはないはずの感情の波が流れて流れて自身すらも流されて……消えていく

「これは……なぜ彼の記憶が？」

「……やっぱりみなさん呼んでるんです。私一人で戻せないのなら、みんなで呼びます。私はやっぱり日向さんがいいです。私を受け入れてくれなくても……受け入れられる

ように私が頑張れる日向さんが好きです、戻ってきて……ください！」

あれほど長く、外界と自分を隔てていた壁が消えていく

「……ああ、そう言えばそうでした。僕は彼女の為ではなく、仲間のために戦っていたんだったな」

思い出した、溶けてなくなる前に一言謝りたかったこと

「君が間違える前に気づいてあげられなくて……ごめん」

光がやんだ時、その場にペストも罪木と呼ばれた少女も無く……ただ何時もの姿に戻った日向という少年が倒れていた。

月面での戦いは何を生むわけでもなく

しかし少年たちは絶望という理不尽を初めての体感し、かつて絶望と呼ばれた少年は

ようやく異世界での一步を踏み出すことができた

ギフトには希望も絶望もなく、しかし絶望という側面もあれば希望という側面もある
今回はそれが少年を救ったのだった

黒き嵐の過ぎし空

俺はかつての行いを後悔した事は無い、だが悔いたことが無いわけじゃない。毎度毎度何かがある度に起きた悲劇を嘆き、なんでそんなことになったのかとただ黒幕を恨んだ……だがその中でも彼女の一件だけは正直に言えば自分を責めた。他の事件とは違いいその事件だけは……俺になら気づけたはずだったから。

絶望病と呼ばれる正体不明の病にかかった仲間達の看病を罪木が一人で請け負った時、彼女が俺のベッドへと上がり込んだ時……彼女がその病に感染していた兆候はあったのだ。無論モノクマの事だ、事件が起こるまで病が治ることはなく、被害だけが増えていった可能性もある。でもそんなこととは無関係にあの時気づけていればあの気弱な少女が道を誤る事はなかったかもしれない。代わりに誰かが誰かを殺すことになったとしても、それが防げなかったとしてもその時罪木を止めたことを間違いだとは思わなかっただろう。

……だから彼女が裁判のあの場で独り泣き叫んだ時、彼女の信用を裏切った時、俺はその罪悪感に蓋をしきる事が出来なかった。その感じなくてもいいいつもわかつて

いる感情を抑えきることもできず後悔にも無力感にも似た、しかし確実にそれらとは違う中途半端なそれを抱えたままここまで来た。

俺がある意味彼女を特別扱いしているとすればそれは彼女が絶望として俺たちの前に立ちはだかったからとか彼女に同情してとかかそう言う事ではなく……その消しきれなかったたつた一つの名もない感情故だろう。

事件の後眺めるいつもの星空もどこか重かったのを今も覚えている。



知らない天井……と言う言葉は前の世界のテンプレというものらしい。ふと目が覚めた時に見覚えのない景色広がった時に使うまさにそのままな言葉だがこの場合はむしろ知らない天蓋だともいうべきだろうか……なんにせよここまで頭がスツキリとした目覚めは何時ぶりだろうか？夢から体を持ち上げられ、そのまま目を開いたかのよう……まるで寝ている間も精神だけはどこかで活動を続けていて瞬きと同時に景色が元の肉体に戻ったかのような感覚だ

「随分と静かなお目覚めじゃな。静かすぎていつや逝くかもとハラハラしたわ」

「……白夜叉か、ということとはゲームは終わったんだな」

カツ、と些か荒んだ様子の白夜叉が眉をひそめて返す

「5日も前にの。なに、結局何もできなかった儂にとつては掘り返して欲しくもない話題じゃが……そうもいかな。ここは普段の東側の支店より繋がる客間の一つじゃ。和室に合わせぬ豪華な寝具はサラマンドラから渡されたものでの、向こうで寝かせていた時のをそのままちよいとの？」

……5日……というかそれ以前にベットごとというのはどうなんだろうか。畳も傷まないのか？

「……それで？俺がここに居る理由は？」

「まず一にあの三毛猫を連れた嬢が看病すると言って聞かなかつたからじゃ。いくら丈夫とはいえ病み上がりの女子が寝ずにじーつと男の看病をしようのは無理があるでな。こつちに帰ってからはノーネームではなくこつちに置くことになった。愛されとるの？」

「無理な誤魔化しは結構だ……本当の理由を早く言え、だいたいわかつてるから」

飯に春日部の話が真実だとしても彼女のそれは俺を焼き付けたという勝手な自分への責任転嫁だ。俺はあの言葉があつたから頑張れた……頑張った結果がアレだったと

いうのは不甲斐ないがな

「……儂は前に言ったな？それは身に余ると、百害しか無いぞ……と。それは訂正しよう、おんしのは千すら軽く飛び越えて億以上の害を招く。黒ウサギの話聞いて、遠くよりあの気配を感じてもなお半信半疑だとも。だが常識さえとつぱらえば疑う要素は無い」

「やつぱりそうだったか……予感はしてたさ。実は前にも似たような事があつてな。その間の記憶がないんだ」

「記憶がないで済むだけでも異常だ。あれだけの存在をどうやって押さえ込んでいる？何故あんなものが出てきた？」

最もな疑問だ、隠す理由ももうなく隠すことすらできない……でも理屈付けての説明は出来ない。俺の予想が正しかったとして、仮に俺の中でカムクラと脱出するときのあの力がせめぎあつてるのだとしたら俺はそれをなんと説明すればいい？

「……十六夜達から話は聞いたか？」

「無論、関係者総出で話は聞いたとも。だがやはりあの話は全く事実と噛み合わない」

「別に嘘は無いさ、ただ話さなかつたことが多かつただけ……今度こそ話させてもらおうよ」

「奴らと呼ぶことはできんぞ？」

……信用が無いな。まさかそれを辛いと思うとは思わなかったが……春日部との約束が予想以上に効いてるのか……それともあの島での約束をまともに守れたことが無かったのが俺にそう思わせているのか

「そんな顔をするな、全員おんしを心配していたとも。だがやはり儂の立場としてはこれ以上あのコミュニティを苦境に追い込むわけにもいかん、仮におんしが先の状態になったとして儂も他を庇いながら貴様を完璧に押さえ込む自信はないでな」

「……賢明な判断だと思うよ、純粹なる実力はさておいても本当に厄介なのはそこじゃないからな。とはいえ俺も二度話せる様な話をするつもりはないんだ、何とか出来ないのか？」

そういう俺の間に白夜又は拍で応えた。乾いた音が日本らしさを多々含んだ庭へと響き白夜又の横の畳が湖面のように揺れ動く。まるで畳から生えるかのように姿を現したのは一枚の姿見

「言われると思つての。流石に準備はしておいた。最もおんしがいつ起きるともわからぬ故に向こうも直ぐには「創っ!」——この様子じゃと姿見の前で寝食をとっていたようじゃの、うちで引き取った意味が半減したわ」

畳の揺れが収めると同時に今度は鏡が揺れだんだんとその中に覚えのある景色が……横から飛び出した春日部によって遮られて見えなくなつた

「久しぶりだな春日部。それで、これもギフトか?」

「当然、割と高級品故貸出のみだぞ? ほれ、小娘も離れんか、早く黒ウサギ達を呼んでこい」

「う、うん!」

鏡の前でずつと大丈夫かと声をかけてくれるのは嬉しいが俺の最後の記憶では彼女こそ病人だ。何とも複雑な気分だよ本当に

「さて小僧、話したくないことがあれば先に言っておけよ。後でフォロー位はしてやれるぞ?」

「言いたくない事しかねえよ」

……でも残念ながらそれこそが一番話さなければいけないことだ。隠すことなんてできやしない、なにせみんながそれを目の当たりにしたのだから

「そうか、なんにしてもそんな戦場に臨むかのように決死の覚悟を決める必要はなからう?」

「……え?」

「空気が張り詰めておる。まるでそれこそこれから殺し殺されをするかの様な……戦士の空気がじゃ。それも前の世界のせいか? 仲間と向き合う事がそこまでの覚悟を必要とするものか?」

……それもそうだ。ここは前の世界じゃない。ならばただ仲間と話すことに命が絡むものなのか？ 仮に彼らが俺を排斥しようとしたとしても殺すということはないだろう。ならば俺は何を緊張している？

「いや、その通りだ。これはただの癖みたいなもんだよ」

「違う世界のこととはいえ滅びと退廃の話に面白い物があつた試しがない、だがそこそペストのように滅ぼされた物ならまだしも滅んだ世界で生きたものの話は聞いたことがないでの。その感覚は僕にはわからん」

だが、とそこで白夜又は区切りを入れて自身も何かを振り返るように続ける

「だが黒ウサギもジンも自身の寄りべを滅ぼされることを知っておる。あの小僧どもとて自ら捨てたとはいえ世界を失うということは理解しているはずだ……理屈があつてもまだ納得できんか？」

「いや、そんなことはないさ。はじめから俺は仲間を疑うものだとしてきた。仲間だからこそ疑つて、そうやって生きてきた」

だから俺は仲間のことを良く知っている。知ることも疑うこともその分仲間にしてもらった方がむしろバランスがいいというものだ

「ふむ、要らぬ気遣いだつたか」

鏡の向こう側が騒がしくなつて来た。どうやら春日部たちが戻つてきたようだ

「ああ、全くそのとおりだな」

さあ、今度こそこの身に余る大いなる絶望を語らせてもらおうとしよう



「よお、元氣そうだな白雪姫様？」

「一体俺はどうやって起こされたんだよ、アホか」

開口一番軽口とは魔王と戦っても十六夜は変わらないな

「それに久遠も……元氣そうでよかった」

「当たり前じゃない。やられっぱなしで終わる私じゃないわ」

それもそうだ。そんなに殊勝な性格をしていないことはよくわかっている

「言ってくれるわね、後でデインで潰してあげるわ」

……デイン？

「まあ何にしても無事ゲームが終わったらしいな、安心したよ」

「安心ついでに弁明と今度こそ本当の真実を話してもらおうか、現人神……カムクライズルについて」

——現人神？

「今更とぼける理由はないだろ、カムクライズル……神の座へと流れ出る……いや、むしろ神の座にて流れ出るか？世界を自身の法則へと書き換える一種のシステム、それがカムクライズルでお前はその依代……そんなところじゃないのか？」

「面白い考え方だがカムクラ自体は別に神に至ろうだとか世界を変えるために生み出された存在じゃない、ただ人類の夢として生み出され、あらゆる可能性を秘めていたが故に絶望という性質を手に入れてしまったただの人間だよ」

……依代……そこだけはある意味間違っちゃいけないし向こうの世界で何が一番神に近いかでいえばカムクラか江ノ島ではあるだろうが

「生み出された……それじゃまるで作られた存在みたいな……」

……

「前も言ったんだが話は割と複雑でな、俺自身全部を知ってるわけじゃない、だから気になることがあるならそっちから聞いてくれ」

「じゃあまず手始めにカムクライズルってのはなんなんだ」

……まあそう来るよな、直球ド本命で大変十六夜らしいチョイスだ

「カムクラ……は前に言った学園の研究成果……というべきか。とある人間を依代に記憶や感情、人格を形成するその全てを消して才能を扱う為だけに作られた存在。現存するあらゆる才能を体现し、人類の希望になる予定だった存在で俺達の言い方で言えば超

高校級の希望……と呼ばれてた」

「改造人間……いやニュアンス的には少し違うか？」

「そうだな、その通り改造人間とは全然違う」

変わったのでも造られたのでもなくアイツはただ生まれてきたのだから

「じゃあなんでそれが急に出てきた？最悪の想像をしたところで矛盾が出てくるぜ？それともお前はそのカムクラと一緒にイリユージョンマジックでもやってたつていうのか？」

「……その最悪の想像の通りだ。前の世界でカムクラを生み出すために体を差し出したのが俺……だからカムクラが出てくるのは当たり前だろ」

……あまり言いたくは無かったんだがな

「な、なぜそんなことを」

「ちよつと待つてろレティシア。まだ俺が欲しかった答えは貰えてねえ、答えろよ日向。なんでカムクラとお前が同じ体に存在してる？おかしいじゃねえか」

「……どういこと十六夜君？ひなた君が依代になったのだからひなた君の体にあの男がいるのは当たり前じゃないの？」

「……お嬢様のギフトとは訳が違う、日向のあれは何かには操られてるとか二重人格とかそういうレベルじゃなく存在が……いや具体的にいえばもはや脳味噌からして全く別

のものなんだよ。そんなに都合よく人間の脳は治ったり書き換えたりできるもんじゃねえ、あいつの言う通り本当に人格を消して作ったのならその瞬間日向という人間は死んでなきやならないっ！」

その通りだ。俺の体は本来は俺のものではない

「それにそれだと順番がおかしいんだよ、全部出鱈目のごちやませだ。お前が前回言ったコロシアイってのがカムクラとして経験したことならば罪木の最後の言動はおかしい、その生活を抜けてまでカムクラになる理由がねえ」

「落ち着けよ、いま説明するさ」

糾弾される側……というのは辛いな。とはいえそれを受けると決めたのも、それほど事態を招いたのも俺だ

「俺がカムクラになった時、確かに俺は消えたんだろうな。間違いなく消えたさ、何せそれ以降の事は記憶がない、コロシアイ生活のその最後に資料として見たぐらいだ」

「カムクラになったのはコロシアイの前……？それなら小僧の言う通り少しおかしなことになるぞ？」

「おかしな事なんて何もないさ、カムクラが生まれ僅か数年……カムクラを除いては勝てないと思われた江ノ島盾子が敗北して死に、そのまた後にカムクラは存在がリセットされたんだ」

自らその状況に飛び込み甘んじて受け入れた……というのは江ノ島盾子とかぶるのだが

「——ツ!? そうか、無人島に入る時は記憶が消されて……いやそれでもカムクラが初期化されるだけで日向に戻ることはねえしお前が言った黒幕は既に死んだあとなつて事になる。それじゃ殺し合いは起きない」——「ゲームなんだ」……「はあ?」

途端に事情が飲み込めず困惑する一同におれはだから、と前置きして再び繰り返した
「その島はゲームなんだよ」

「……それは遊びや試合……そういう意味の?」

「——『脳世界』という意味でのゲームさ」

そう、ゲームなんだ。殺し合いも物もあの生活も仲間ですらも……

「全部が全部入力された世界、子供がやるような仮想世界で俺達はその登場人物だったってことさ」

「ちよ、ちよつと待って? ゲームに試合以外の意味があるの? 脳世界って何!?!」

……そうか、久遠はゲームが誕生するよりも前の時代の人間だったな

「電気を使った遊戯だ。あらかじめ設定しておいた世界をこの鏡みたいな物に映し出してアバターと呼ばれる人形を操ってその世界で遊ぶのさ」

「俺たちの十六夜の言ったのとは少し違って直接その世界を体感するというものだっ

たけどな。仕組みをいえば納得するんじゃないか？本人の脳を機械に接続、そこから学園に入る直前の姿と記憶を読み取ってアバターを作成、そのままそれをプレイするだけさ、それだけでこの前言った状況が完成する。ゲームの中じゃどうやっても真実にはたどり着けず、死んだら終わりの現実そのままのゲームが完成するんだ」

記憶がないのも魔法みたいなことが起きるのもそもそもあんなことができたのだって

「全部、ゲームだから」の一言で済んじゃうんだよ」

「だが江ノ島盾子は死んでそれができる筈がない、誰がなんのために—————そうか、そう言う事か！」

相変わらず頭の回転が早い、今の話と今までのことだけで既にほぼ答えにたどり着いているのだろうか

「何が『そうか』なのですか？」

「黒幕がゲームにいた理由、日向や罪木蜜柑と言ったひと学年がまるごと記憶を失ってまで……いや消されてまでゲームに入れられた理由わけが良くわかった。そうか、だから日向がそこに……なるほどな、確かに大した地獄だよな、なにせそこまでしてもなおこれなんだから」

「わかってくれて何よりだよ。寝ても覚めても地獄つてのがまさに言葉通りに起きたわ

けだ」

「だから一体全体どういう事なんですか!？」

「どういふことも何も……」

「俺達が失った記憶は都合よく学園時代のもののみ。都合よくひと学年だけがまるで幸せに暮らせと言わんばかりの環境を整えられ学園生活をやり直せと言わんばかりの状況に追い込まれたわけだ」

「幸せに暮らすもなにも殺し合いが起きてるじゃない」

「それは黒幕が来たからだ。本来の目的は違ったんだよ、余程の甘ちゃんかよほど先を見通す力があるやつか企画したんだろうな。文字通りやり直させる為の世界か、発想がぶっ飛んでる。詰めめ甘さも相手がそのカムクライズルだったってんならしようがないってか?それも最終的には無事に終わらせたんだから大したもんだ」

「……マジでよく理解したな。そこまでわかるならあまり説明もいらなかったんじゃないや流石にそれはダメか」

「一言で言えば俺らをそのゲームに繋げた理由は江ノ島の死後の世界でそれでも江ノ島の意思をついで絶望を振りまいていた俺達の学年そのものの浄化……江ノ島と出会う前まで時を遡ってそこから新たな記憶を自分達で作ること、絶望としての自分を上書きしようとしたんだ。俺がゲームの中で死んだ奴を死んだっていうのもそこにある。」

上書きするべきデータが消えた以上その人間は空っぽになるんだから」

「……それはつまり日向さん達こそが世界を破壊した要因であると——」世界の破壊者である?!」

「……その世界で超高校級とまで呼ばれた絶望は合計17人、うち二人は俺たちがゲームの世界に入る前に死んだ。そのうちの一人が江ノ島でありもう一人はその江ノ島の姉だ」

名前は確か戦刃とかいったか？

「ゲームの目的は絶望からの更生、殺し合いになったのは江ノ島の電脳体がカムクラの手で持ち込まれたから。江ノ島の目的はゲームの中の記憶で絶望を上書きする際に紛れ込み自身の肉体を現実で手に入れるため……ゲームの目的とかそういうのは全部それだけだ」

「ゲームが作られたのなら外からその江ノ島を排除すればいいんじゃない？」

「電脳……ってのはそんな簡単じゃないんだよ。発展前から来たお嬢さまや箱庭の連中には馴染みないかもしれないがな」

「そこらへんのこととは良く分からないが想定外の混入で対処ができなかったのは事実……介入も結局出来たのはゲームの終盤も終盤だ」

最終決戦のあの場所で、あの演出過多悪趣味全開の戦いは絶対に忘れない

「……まあその話はどういいさ、理解しておくべきことはわかった……後はその絶望連中のスペックだ」

「……おそらく今後出てくる可能性があるとするれば2人か3人だろうな。今まで俺があつたのは3人、その3人もゲームの中で事件を起こした順番通りに出てきた」

「つまり事件は5回、そしてそれに加えて江ノ島本人を加えた6人か」

……いや、そうではなく

「江ノ島が来るのはおそらく当然だろうな。俺が言いたいのはそいつじゃない」

——言うとしたら、だからこそ口に出すべきだ

「5回目の事件は……いや、事故の犯人の事だよ」

おそらく彼女が本当に絶望として出てきたとき……向き合うべきは俺で、最も向き合っちゃいけないのが俺なのだから

「事故じゃと?……まさかその時も」

「当たり前だ、犯人探しは起きたよ」

「そ、そんな!? 事故でしょう? それじゃ最後の最後で死んだ人が報われないじゃない!」

「……いや飛鳥、多分それは違うと思う」

「……春日部さん?」

そう、それは違うのだと思う。もちろん彼女だって生きたがついていたはずだ。最後まで

で一緒に戦うと決めていたはずだ

「創はさつき絶望と呼ばれた人数を15人って言った。それは創の学年の数より一人足りない」

「……一人足りない？」

「……少なくとも創の学年の誰か……その時死んだ人は創達のためにゲームの中に入った人……違う？」

「……ああ、そうだよ。何と言っても七海は超高校級のゲーマーだからな」

……彼女は誰よりも俺たちみんなで帰る未来を願っていた。だから俺は帰らなきゃならない。今度こそ後腐れなく絶望を乗り越えて

「……超高校級のゲーマーね、随分と多彩……いや、多才だな。お前の同級生の才能はなんなんだ？」

「犠牲者が詐欺師に写真家、軽音部に舞踊家、マネージャーと幸運。犯人とされたのが料理人と剣道家、保健委員に飼育委員、ゲーマーだ。生き残ってまだ向こうに居るのがメカニックに女王と体操部、極道」

「……少なくともそれらのスキルをカムクラは持ってんのか……江ノ島って奴はどうやってそんな化物を抑えたんだ？」

そうだな、残念ながら俺の記憶にその時のことはないわけだが……

「調べた過去の資料には江ノ島について書いてあったことがある。彼女は超高校級のギャルとして希望ヶ峰に入学してその後プログラマー、メカニック、神経学と言った多才なジャンルも収めたってな」

「「「……ギャル!?!」」」

……気にするところはそこじゃない

「俺も詳しくは知らないが江ノ島には超高校級レベルの分析力なるものがあつたらしい。未来予知の紛いごとや他人の才能を自分の物にするその力があれば環境さえ整えばカムクラをどうこうすることもできる。なにせ江ノ島にとってカムクラが完成することは何年も前からわかっていたことなんだから」

「……なるほど、いくらカムクラが凄まじくとも生まれる前ならカムクラは何もできないってことか。スペックの差を自身のその才能と時間で埋めたわけだ」

「後は絶望を何よりも理解した江ノ島とやらがその筋書きにカムクラ当て嵌めれば……お手軽に極上の悲劇が完成するわけだの」

……残念ながらその通り……というわけだ

「……じゃあなんでその未来がわかる上化け物で問答無用の絶望なんて力まで持つ江ノ島盾子は死んだ？」

「確かにの、未来予知だけに留まらん高スペックは確かに強力じゃ。無敵とは言わんが

凄まじくもある。聞く限りそれを攻略するのは並大抵の才能とやらではなからう?」

「あー、だから俺の記憶がない時の話はわからないことも多いんだよ」

……事実彼女を倒した彼について知ってることは余り多くない

「倒したのは苗木誠って言う名前の俺たちの後輩だ。確か……確かだけど才能は毎年全国からただ一人無条件に希望ヶ峰に入学する事を許される超高校級の幸運という枠で入ってきた。何故か知らないけど江ノ島にとって同じ思考力を持つカムクラ以外唯一自身の計算から外れた存在で江ノ島をもつてして主人公と言わしめるカムクラとはまた違った超高校級の希望らしい……本当に話せることはもう無いぞ。俺もゲームの中で知ったこと以外は知らないから疑問だつて多い」

後言えることがあるとすれば……仲間の詳しいプロフィールぐらいなのではないだろうか?

それ程にその実俺が知ることは少ない。記憶も消され資料として江ノ島が用意した飛び飛びのもの。もっとたくさんを知っているであろう苗木誠とは話す機会も無く気がつけばこの世界

「じゃあ俺の疑問はこんなもんだな。白夜叉も満足したんじゃねえか?『どうして』とか聞きたいことがあるならそれはまた個人で聞けばいいことだしな」

フム、と頷く白夜叉もどうやら納得はしてくれたようだ

「とにかく小僧も起き抜けに長々と済まなかつたな」

「いや、当然の事だし俺も話せてスッキリした」

「とにかく一度話しは終いにしよう。小僧はもう暫くこちらで休ませる。話があるならこちらに来るといい、小僧もひとまずは腹ごしらえじやろう」

そう言つた白夜叉の拍で呼び出された店員に連れられて俺は部屋を後にする

きつと不満タラタラな久遠や未だに前回のことを気にしているレティシア、そしてついでに何やら途中から罪悪感なのか何なのか前半よりも顔を蒼白にし歪めていつた黒ウサギ辺りは白夜叉の言葉通り飛んでくるだろう。

十六夜はおもしろがつて見に来るだろうしジンもそれらを止めるために同行するはずだ。となればあれでいて寂しがりやな春日部も絶対に来てついでとばかりにイヤミを言つてくるに違いない。それもぼそつとすごく突き刺さる事をだ

「あれ、おかしいな。話が終わった後の方が大変そうだ」

白夜叉の店の居住区、庭園のついた縁側からいつものように空を見上げる。

いつぞや来た時のように桜が舞い散る景色より打つて変わつて緑が強くその生命を主張するその季節の空はどこまでも晴れやかに澄んでいる

何も気にすることなどないと言わんばかりの好気候……

「はあ……腹が減っては戦は出来ぬってな」

前に行くいつもの毒舌の店員さんが急かすように咳払いするのを受けて俺は空から視線外す

……そうだともこの空の下には左右田達はいない……でも新しい仲間たちが居る。個性において何ら彼らに引けを取らない仲間だ

だったら気合を入れねばやってられないだろう

部屋を離れても聞こえてくる騒ぎ声に思わず笑いながら俺は遂に店員さん怒られたのだった

少女は瞳の雫を通して神へと懺悔する

大変美味しく頂いたとも。ああ腹も膨らんだしいくらでもんでもかかって来いと、そう意気込んだ記憶もあるさ。だがしかし何なのだろうかこの喜怒哀楽をそれぞれ顔へ浮かべた仲間の総攻撃は？

「創！元気になったんだね、三毛猫も心配しててね！」

「ああ、ありがとう、むしろ三毛猫は大丈夫かそれ」

興奮ゆえかはたまたお預けでもくらった動物の性質でも受け取ってしまったのか抱えた三毛猫を締め上げながら元気良く振るわれる尻尾が幻視できそうなほど笑顔を振りまく春日部

「聞いているの日向くん？」

「ああもちろん聞いてるとも、そうだな、久遠のいうことは正しい」

怒りをその見惚れそうな笑顔の奥に隠し引き攣りそうなほど……というか事実引き攣っている口角からは普段からそのプライドのよって秘められている激情が見え隠れする久遠

「いや、そのなんだ。この間はお前の過去のことを知りながらも少し無責任だったと

思つてな。いや元から御主人達には感謝の念でいっぱいだったのだがそれ故というか「気にしないでくれ、俺が全面的に悪かった」

結局まともな会話もできず未だにお互いの距離感に困るレティシアは道中誰かに何かを吹き込まれたのか鏡で最後に見た顔よりよほど悲壮感に満ちた表情でいつもの凜々しさはどうしたと言わんばかりにゴニョゴニョと何かを繰り返す

「大変だな、まあ俺らに苦勞をかけた報いだとも——」

「オツケー、今すぐ死んでくれ」

絶対に予想よりもひどい現状はこの男のせいだと断言できるほどかえって清々しい程に俺の苦勞を笑う十六夜。

何をどうしたらおれが起きただけでこうも反応が変わるのか……そして何よりも

「……黒ウサギはなんであんなった？」

「いやー、暇だから道中他の奴らを弄り倒してたら勝手に頭にキノコまで生やしだしてな」

……なんか前に江ノ島の飽きっぽいキャラという謎の設定の中に出てきた見るからに卑屈そうなキャラのように自然と頭からキノコを生やした黒ウサギが入店と同時に隅つこと陣取つて何やら室内の温度を下げながら同時にジメジメとした空気を広げている

天然の冷房&加湿器の如く様相をだす黒ウサギにもはやどう触れていいのかもわからない

……というか未だに誰も口を閉じやしない。どれだけプラスチックが溜まっているというのか

「いい加減に静かにせんか!!」

しまいには白夜叉に怒鳴られた

「……とりあえず奥に行こうか、な?」

黒ウサギは……ああついてくるんだ。うんその方が助かるけども。黒ウサギにも比較的冷たくあたる毒舌店員さんですら対処に困る程だったからな、うん。



「さてみんな久しぶり……ってことになるのか?」

あのギフトゲームの準備期間を含めるとほぼ二週間まともに顔をあわせてなかった計算だ

「うん、大事無いみたいでよかった」

「むしろ体の調子はいいぐらいだからな」

ようやく春日部もいつもの調子を取り戻したようでよかった。ほかの二人にしたつてそれぞれ言いたいことを言ったらある程度スッキリしたようだ。おかげでジンも少しほっとしている

ただ問題は未だに腐っている……あの箱庭の貴族様だ

「……なあ白夜叉」

「何故そこでわしに振る!？」

「ねえ白夜叉?」

「おい白夜叉」

「……白夜叉」

「だからおんしらのそのチームワークはなんじゃと……まあいいわい。小僧、貸一じゃぞ?」

そうため息をついて黒ウサギへと白夜叉が向かっていき……胸に手を突っ込んだ

「「おおおおおおおーっ!!!」」

「な、何をしますですかアアアっ!!!」

怒号と共にハリセンが一閃振るわれ白夜叉が障子を突き破って庭園へと突き刺さり同様に「その手があつたか」と言わんばかりの表情をした十六夜にハリセンが飛んできた

何事もなかったかのように十六夜はそれを受け止め胸を抑えて肌を赤らめながら肩を激しく上下させながら呼吸をしようと云うまさにイケナイ感じの絵面を見ながら一言

「白夜叉、あんたの夢は俺が継ぐぜ！」

「継がなくてもよろしいですそんな腐った夢っ!!」

ああうん、いつもの黒ウサギだ

「ネガっていたのは認めますがもう少し何かあったでしょう！」

「めんどくさいことは基本しない主義だ」

「力不足ね、ごめんなさい黒ウサギ」

「非力な自分が恨めしい」

「最近誰かを励ますのはそろそろやめた方がいいんじゃないかと思つて」

「だからなんなのですかそのチームワークは——いや日向さんのはなんです?!」

……いや、島で暇なときは手当たり次第に仲間にも声をかけまくつては話を聞いていた

ら恐ろしい事に部屋に帰つたとき何故かベッドの上にパンツが置いてあることが——

——いや忘れる。忘れるんだ日向創。俺の仲間がまさかそんな同級生の部屋に侵

入しては下着を置いていく変態だなんてそんなバカな事がッ!!!

「急に壁に頭を打ち出してどうしたの彼?」

「触れてやるなお嬢様。人間誰しも触れて欲しくないことはあるもんだ」

「……さっきの話よりも触れて欲しくないことってあるんだね」

——ふう

「いやなんでもない。もう大丈夫だ」

「いやおんしらさつきからナチュラルにロリが吹き飛ばされたことはスルーか!」

いやだって白夜叉だしな

「さて、そろそろ黒ウサギがなんでウジウジしてたのか……吐いてもらおうか」

「ついでに今日の下着の色についても」

「話しません!!十六夜さんは少し黙っててください」

……あいつはブレないな。

「まあバカな十六夜君は置いておくにしてもなにか言いたいことがあるのなら行ったほうがいいわよ?空気を読んで近寄ってきたり距離を保ってくれたりする十六夜くんとは違ってそのひなた君は気が効かないのだから」

「随分ないようだな、おい。俺は十六夜以下か?」

「むしろなんでお前の中の俺の評価はそんなに低いのか?」

直前の自分の言動を振り返ってわからなきやお前には一理解できん

俺らの細々とした言葉を置いて黒ウサギがなにやら口を開いては閉じを繰り返す

「……俺らがいない方が話しやすかったりするの?」

「いえ、そんなことは……無いのですが……いえ、話します。皆さんにもお話ししなければならぬお話なのだと思えます」

甘えは許されない、そういう黒ウサギの決意の表情がどうしようもなく痛々しい。自身の感情の中でさえ板挟みにあい、そこに加えて義務と言った外的要因がさらに選択肢を狭めていつている。きつとギフトゲームの始まる前までは俺もあんな顔をしていたのだろう

「……皆さんは本当にこの世界こに来て……良かったのですか？」

「「もちろん」」

間髪入れずに声を揃えて応えた3人のように俺は言葉をかえすことができない。そ

それはそうだ、俺のこの躊躇いこそがきつと黒ウサギの思考をそこへと繋げたのだから「やっぱり、日向さんはそうでございますよね」

「いや良いか悪いかで言えばよかつたんだと思うさ。この世界に来れたから十六夜たちに会えたんだし黒ウサギ達の目的に協力するのだから俺が決めたことだ。そして何よりもこつちの世界でも俺にはやらなきやいけないことがあることがわかつた」

「でもそれでも私がみなさんをこちらの世界へと呼ばなければ知らずに済んだ、日向さんのように向こうでやるべき事が残つてるといふ方ならあの手紙の内容を理解した時点で拒否した事でしょう。でも有無を言わさずこちらへと送られてきてしまった」

言つてしまえば俺がこちらへ来て良かったと、そう思っているのは結果論だ。俺にとつての第一優先だつた事への回り道でしかない。危険しかないしノーネームの復興までに死ぬ可能性の方が高いだろう

記憶にすらないその手紙を俺が仮に読んでいて、そして読んだ後に選ぶことができるのであれば俺は絶対にこちらへは来なかつた

黒ウサギは今まで俺のことを知らなかつた。だか知つてしまえば過去の自分の行いを責めずにはいられない。何せ自分が呼んだのノーネームの復興。仲間を助け自身の居場所を取り戻す為の戦力……俺の目的とそれは何ら変わらない。同じ境遇の人間を呼びつけ自身のそれを放棄してでもこつちを手伝え……乱暴な言い方をすればそう

なってしまう。何よりも黒ウサギは初めこちらを騙そうとしていたという引け目もある。

……そういった始まりを後悔してしまえば後の全てが全部後悔へと変わるんだ。ひよつとすれば俺の力を借りずとも何とかなつたではないかとそう思つてしまえばそれはもう二度と拭えいだらう。可能性の話を論じる事がいかに愚かだと知つていても感情がある限りそれは避けられない

———
だとしても間違いは間違いだ。人間は間違いを避けることができ
ない……間違わないのが人間ならば江ノ島なんて怖くなかつた。俺に仲間なんていら
なかつた。仲間が必要だつたのは間違えても戻してくれるからだ。だつたら俺が今直
してやらなくてどうするというのか？

いいだろう、箱庭に来てから使う機会もめつぽう減り、春日部に反論されることすら
あつたそれで

「それは違うぞ、黒ウサギ」

何度でも撃ち抜いてやる。

コトダメなんかなくともこの程度のこと……その程度の間違いならば壊すのは容易いさ。

「……………え？」

「……………そう言えば前にも黒ウサギに言ったことがあったな、このセリフ」

前はそれこそ黒ウサギの嘘を暴くためだったが……あれから随分と時間がたったもんだ

「俺は過去の話で一つ大事なことを言わなかった」

今の言葉で一瞬で場が張り詰める……そこまできつい話じゃないから身がまえられてもって感じなんだが……

「俺の夢の話だ。夢とかこうでありたい、そんな願望みたいなもんだが……俺は自分に胸が張れる人間になりたかった。別に本当に才能が欲しかったわけじゃない、ただ才能を持っているような奴らがみんな俺の理想の通りに輝いて……だから才能を持てれば俺も自分に胸が貼れるってそう勘違いした。だから俺はカムクラなんてものに縋った。それが目的になってた」

「……………それとなんの関係が？」

「まあ最後まで聞けよ」

せつかちになってもしょうがない。そこまで長くもないからもう少し聴いて欲しい

と……そう思う

「……まあそれで結局最後にはその自分の歪さを女の子に怒られてな……スゲエ怒られた。普段はポヤーツとしてる子が『しっかりしろ!』なんて言って……だから俺は自分に胸が張れるようになるうじゃなくて自分に胸を張ろうって……そう考え直したんだ。そいつが言う通りに胸を張っていられているのかって言われれば自分とそうは思えないけど……でも後悔は絶対にしたくない。何があっても俺は”何とかする、未来は捨てる”この思いを捨てるつもりはない」

そうだと。俺は仲間を取り戻すのが目的じゃない。自分の思った未^{ハッピーエンド}来を実現することこそが目的なんだ

「そんな他人みたいになよ黒ウサギ。ノーネームの復興は俺の理想の一部だ」

だから気にすることなんてない……なんで外野が泣いてるんだよ

「……おい、レティシア?というかその二人もなんで泣いてる——」

「泣いてない!」

……いや泣いてるだろ聞こえてきたぞ息子が成長したときの親の気分ってどういことだ

「そうか創……私は未だにお前のことを誤解していたよ。思えばあの時だって十六夜達と共にコミュニティのために必死に頑張ってくれていたのだもの……なぜ私今まで

……クッ！」

いやクッ！じゃないから。十六夜は肩に手を置くな、わかっているわかってるみたいなき感じを出すオグツ!!

「日向さん！頑張りましょう、頑張つてノーネームを取り戻しましょう!!」

あれ？ジン、お前はもうちよつと常識人だと思つてたんだが……人の腹に頭突きをしますように飛んでくるなんて……ああもう最後までいいきれんかったから黒ウサギなんてもう呆然としてるじゃないか

「大変じゃのう小僧。ま、自分で後悔をしないと啖呵をきつたのじゃから甘んじて受け止めることじゃの」

「……お、おい白夜又ちよつと待て」

そんな俺の言葉すら無視して白夜又は黒ウサギを連れてどこかへと消えてしまふ。

この状況を脱するのに一番手早いのが黒ウサギがオチをつけてくれることだったのにあの和服口リがあ……

その後しばらくしてようやく酔っ払いの集団を相手するかのような苦勞を持つて全員が落ち着いた。

ロマンや臭い展開に少し弱い十六夜のことまで考えられなかったというのもあるがまさか全員が全員自分の世界に入つて勝手に話を飛躍させるとは思わなかった

飯にも病み上がり……いくら調子がよくともあそこまで体力を削られれば限界が来るのは必至……俺はなんとか正氣に戻つたジンに他の全員を押し付けてベッドへと倒れ込んだ。

今の俺にもはや空を見上げる余裕すらない、ふわふわと体を受け止める寝具に身を委ね、意識を深く落ち着かせて……そんなことをしているうちに俺は自然と眠りについていた

遠くで黒ウサギを含めたみんなの笑う声が俺の頬を緩ませたのがその日の最後の記憶だ

一歩進んで一寸先の闇を見る

今日も良い天気、良い気候……本来こんな日ならばコミュニティのホームの日当たりのいいところに座って本でも読んで一日を過ごしたいものだがそうもいかないのが俺達ノーネームクオリティだと言えよう。というか毎回毎話を大きくする十六夜クオリティとそれに賛同する女子二人クオリティだ。そもそも俺は不戦敗でも良かったくらいだというのに……全く持って迷惑な話だ

「とはいえせっつかくやる気を出してるのに水を差すのもな……特に最近の久遠は何か目覚めてるし」

ノーネームの荒廃し、作物が育たなくなつた畑のその土壌を何やら赤い巨人に不眠不休で耕させて元の状態へと戻そうとしているらしい。

いくら人形とはいえなんとも人使いの荒いことだと聞いたときは思わず言葉を失つた

そこまで活気に満ちた彼らに「俺はいい」なんて言えるほど強いメンタルもなく、彼らの誘いにまんまと乗って一人トポトポと歩いてるのが俺だ。

事情を説明しようと思うと激しく面倒臭いがようは何時もの競走……かけっこみた

いなもので十六夜が提案したそれに乗っかることになったわけだ。景品は南側の連盟、龍角ドラコングを持つ鷲獅子主催の収穫祭への連日参加権。距離が遠いだけに黒ウサギが主戦力を常に一人は置いておきたいと言ったものだからこうなったわけだがいい加減黒ウサギも俺らの性格を把握して欲しい。丸く収まるはずもない。まあ身内でここまで頻繁に競い合つてれば成長もするだろうがそれにしたつてだ

「……まで大規模にしなくともいいだろうに……」

ルールは期間内に最も大きな戦果を挙げたもの……無論そんなに簡単にチャンスがやってくるわけもなく俺はこうして一人で何もない道を歩いてそう積極的でもなくギフトゲームを探している訳だ。……とはいえ適当なゲームでは受ける意味もない。確かに南側の祭りには興味があるが行けるのならば別に毎日じゃなくてもいい。俺が燃えているのはつい先日コミユニティの仲間に見得を切ったばかりだからだ。

黒ウサギのために言った言葉とはいえあれは紛れもない俺の本心……ならばその言葉の通り俺はコミユニティのために誰よりも動かなくてはならない。だからこそ景品とは別に全力で望むべきなのだが……平和すぎるぜ東側。そりゃ魔王にかかってこいなんて言うつもりはないがだからといってそこいらで開催されるありふれたゲームじゃみんなが持つてくる結果の万分の一にも満たない筈だ……となれば俺が狙うべき大物を探さなくてはならないが本当に何も無い。

いつぞや会った蛇神ならばどうだとそちらに歩を向ければ頭上を黒ウサギと共に十六夜が高速で駆け抜け何やらゲームを始めてしまったようだしコミュニティ内部のことは久遠が既に手をつけている。春日部も恐らく自身の力をフルに使って何らかのゲームを見つけていることだろう……となれば自然と余り物な俺の取れる手は――

「ちよいとそこな坊や」

――前には劣るもののそれにしたって高まっている身体能力から使える……というよりは使えているはずの幸運の力に頼る他ない。

道の端で岩に座りこちらを見る妙齢の女性へと迷わず歩を進めた

「俺に何か用か？」

「私が坊やに……？バカを言っちゃいけないよ、用があるのは坊やだろう？」

……これはギフトゲームを求めるものに反応して発生したギフトゲーム……つてことではないのか？

いいのかい、と手に持って紙をそのまま懐としまおうとするのを慌てて止めて相手の言葉に乗る

「ああわかったよ。用があつたのは俺だ、認めるさー！」

「それでいいんだよ、素直なのはいいことだ。さて、前置きは良さそうだね。坊やが望む

のなら私は確実にそれに見合ったものを提供しよう。その代わり坊やはそれを絶対にクリアしなければならぬ、出来なければずっとそのまま私のゲームの中をさまようことになる」

……とたんに物騒になったな。クリアできなければ終わることのないゲーム……言いかえれば無理難題でもなんでもない絶対にクリアができるゲーム

「……悩むことはないな。いいよ、受けるとも。ルールはなんだ？」

俺の問いかけに女性は何も答えずにその手に持つ紙をこちらへ向ける

俺がそれを読もうと視線を凝らした段階で世界がその一枚の紙へと集約されていく

「——ッー」

突然のことに声すら上げられず息を呑むだけの俺気がついた頃には周囲の色という色が抜け落ち、あらゆる存在がその形を霞ませる世界へと変貌していた

「ルールは簡単。このゲームに勝利する事が勝利条件。時間制限も何もないがある意味時間をかければかけるほど勝利から遠のいていく。質問は自由だ、最もあたしがそれにも同時に答えるかは別だけどね」

「……何だそれ」

勝つことが勝利条件？何故それがゲームに繋がる。どうすれば勝てるかを提示せずゲームは成立しない。それはルールがないも一緒……いや、今の口ぶりは何かおかし

い……ならばそこを突き詰めていけば自然と勝利に繋がるゲーム？ 周りの景色とは何の関係がある？

「……質問は自由、だったな。ならこのゲームに勝利条件は他にないのか？」

「さあ、そう考えた時点でもうダメだとも言えるかな」

この考えがダメ……？ 考え方が違うのか、はたまた考えすぎ？ 思考を単純にすれば解けるのかはたまた焦点が違うのか……いやそんなことはないこれが何かを求める物ならばそれを提起しなければゲームではない。ならばこのゲームが求めるのは本当に勝利という事だ

ほかのゲームを受けてきて勝利しろということか？ なら時間をかければかけるほど勝利が遠のく理由がない。

「……この景色はなんだ？」

「気になるなら散歩でもしてくればいい。こんなピンボケした世界目がおかしくなりそうだがね。この世界で一生を過ごすことになる場合はこれにもなれなきやならんだらう？」

時間制限もなく競う相手もない、状況は何ら変わらないのに勝利だけが遠のく？ 例えばそれはどんな状況だ？ 勝利Xの座標は動かないのに俺との距離だけは開く、ならばそれは俺が勝利からかけ離れていることにほかなら無い。思考すればするほど遠くなる

のならば思考を止めればいいのか？だが思考の停止に答えがあるのでなければ……Xの座標が0じゃないのならばそれはなんの意味もない。

まず間違いなくこのギフトゲームは何かを求めるものではなく俺の行動を必要とするものなんだろうがその行動がわからない！

自分から離れていつてるのだとしたら、このゲームを受けたときまず何をするかを考えればいいのか？それが勝利につながると？

「悩むといい坊や。悩む事は悪いことじゃないさ」

……言ってくれる。考えれば考えるほど泥沼に嵌っていくと言ったのはどこのどいつだ

「坊やが何もできないならあたしは暇潰しにここで寝てるから答えが決まったら呼んでちよーだい」

「なんでそんな投げやりなんだよ……」

意味不明すぎる———なんだあれ？

透明でヒラヒラした……ビニール？

「ああ、忘れてたわ」

そう言つて腰掛けた岩に溶けている雪だるまのごとくベターつと張り付いていく女は一言付け加えた

最もそんなことはどうでもよく俺の視線はその女の背後の木の後ろ、何やらヒラヒラヒラヒラとどんどん増えていく半透明な何かに吸い寄せられて離れない。時々見える紙のような腕には何故か長く鋭い本爪が見え隠れし、その凶刃木をひしつと握り締めながら出された半顔は頭部の半分を裂くようにしてつけられた口と明らかにその頭部のサイズに合わない瞳が備え付けられていて……目が合った。それも十匹程が同時に。

「——制限時間はないけど幽霊が出るから気をつけてね？」

「遅すぎるだろっ!!？」

俺の叫びに反応したのかケタケタと笑い声だか鳴き声だか良く分からない声でアンサンプルしながらその手に力を込めて木をへし折って……そうそう、そうだな。それを振りかぶって……いやそんな幽霊がいてたまるか!!？

背後は同様に森が広がっている。挙句全体がぼやけているため認識と現実の違いで転んだりぶつかったりするかもしれない以上森へと逃げることはできない——
ならば障害物の無い道沿いにと走り出そうとした瞬間その木が連続して打ち出された
一瞬で視界が白い葉の波に覆われ枝に引つかかれながら無理やり森の方へと飛ばされる

こんな状態でも音は拾えるもので間近の木の葉の擦れる音や木が着弾する音と共に幽霊達のキイイイイ!!なんて叫び声が四方から聞こえてくる。いや多過ぎだろうと

口を開くことすらできず体へのしかかる木をそのまま持ち上げてなんとか起き上がる。これが生身の俺だったらダンブかなんかが起こした事故現場みたいになってたところだ。むしろあちこちへ飛び出した枝が体を貫通してその先端に俺の肉体のいろいろなものを実らせて余計スプラッタになっていたまでである。

「勝利しろってのはこいつらを倒せってことか!？」

……いやないな

徐々に包围を縮めるなんてことはせず各々が自信の持てる全速力でこちらへと走ってきているであろう気合の入った叫び声を聞きながら余裕のない頭で下した結論は幽霊はこのゲームとは無関係であるということ。こんなに分かり易い奴らが勝利に関わるのならゲームの勝利条件があんなに不明瞭なのはおかしいからだ。

俺が一番最初に目があった二足歩行でダバダバと全力疾走してくる紙のような体を持った幽霊が視界に飛び込んで来るのに振りかぶった木を合わせながら思考を続ける……いや走る姿が衝撃的過ぎて実は少し考えが飛んだ。トラウマなんてものじゃないトラペガサスレベルのショック具合……落ち着こう少し頭がおかしくなってるみたいだ

「てかやつぱり木は使いづらいな」

とはいえ素手で触る勇氣もありませんまず触れるのかもわからない。木で触れて素手で

無理なんてことだったらそれはそれで意味がわからないけれどそれでも試したくない。

木を振り回し引っかかる木をへし折りながら周囲を無理やり開拓する。超高校級の土木業者が名乗れそうだ

「……やっぱり微塵も落ち着けてない」

こんな状況下でゲーム攻略法に頭を回すことなんてできやしない。あの意味不明のゲームにこの精神的にも物理的にも激しすぎる超難易度の幽霊の相手とかそりゃ投げ出したくもなるわ

……遂にはギリギリ開拓されていない更地と森の境界線に目玉を乗せた人型の紙がペラペラと風に靡きながら並んでしまった

……心臓が弱ければもうこれだけでポツクリ逝つてもおかしくない。

「「KiiiiiiiiiyAAAAaaaaaa」」

目の焦点があつちこつち跳び跳ねてるんだけどそのままだつか飛んでいつてくれな
いかな？

「ハロウインに全員まとめて出直してこい！」

「「MaaaaaaA!!!」」

……頼むから鳴き声ぐらい統一してくれ、バリエーション豊富過ぎてこつちが泣きたくなつてくる

足元に転がるさつき投げられたそれを足で蹴り上げ真横のまま蹴っ飛ばす。素晴らしいことに弾だけなら沢山ある。ここならしばらくは——風に乗って来んじやねええええ!!!

蹴飛ばした木によつて起こされた風圧にその紙のような体に乗せて正面の幽霊が全員空へと舞い上がった。ああ、きつと空に色があつても美しさはないだろうこの光景……絶景かな

「なんてそんな気持ち悪さを突き詰めてるんだよ……」

体から想像できなかつた自分が恨めしいがそれでも道は開けた。ジャイアントスイングの要領で周りに寄つて来ていた幽霊を吹き飛ばしそのまま役に立ちそうにない木を捨て空いた道を駆け抜ける

「時間をかければかけるほど勝利が遠のく……考え方じゃなくて幽霊のことをさしてたのか？」

それでも話は通る。そもそもなぜ幽霊がいるのかも気になる。女のところに戻ろうにも幽霊たちのせいとその余裕もない。だが逆に考えればこの状況下でもクリア出来ることがこのゲームの勝利条件なのだ。

物理攻撃にたいして風圧に乗ることでよける様などう仕様もない存在をあの無尽蔵と言える数相手にしてそれでも解決できる事の筈なのだ。

……箱庭において出されたゲームではクリアできなければそれはクリアできなかつた側の力不足というののもう耳にタコができるほどに聞かされた話だが逆に言えばクリア方法がないギフトゲームなんてない筈なのだ。たとえそれが誰にも実現不可能なことだとしても、理論場可能ならば、机上の空論であろうと天文学的な回数 of 試行の元に達成できるのであればそれが勝利条件なのだ。だがそれならば時間が経てば経つほど難しくなるなんてことはない。だからこそ考えられるのはやはりはじめの考え……誰でも達成可能なことだが幽霊のせい、もしくは自分が考え過ぎているが故に答えにたどり着かない、通り過ぎている場合が考えられる。だが勝利条件に幽霊が絡むにしてはいやに女の言動やギフトゲームの情報があやふやだ。幽霊なんて少なくともこの世界では木よりもはつきりとした物なのだからギフトゲームに絡めるのならばもつと明確にその存在を明らかにするはず……え？

「こつこつて……あの蛇神の？」

脇目も振らず走っていたからかいつの間にか世界の端まで来てしまったらしい、トリトニスの滝……といっただろうか？ いやだがそれはどうでもいい。問題は……痕跡がないことだ

「俺が湖を斬った痕が見当たらない」

白夜叉が直したのか？ わざわざ？ たかだか岩についた切断痕を消しにここまで？

……幽霊……クリアしなければ脱出ができない世界……消えた痕跡——頭
の中で謎で作られた回廊を通り抜けていく。痕が消えたのは白夜叉のせいじゃない、そ
もそもあの痕はきつとそのまま残っている、幽霊もこの状況もきつと全部答えがある。
このぼやけた世界だつてやはり理由があるんだ。

だが思考の海を超えて答えが出てもまだ確証にはいたらない
「とにかく今は確かめる為にもアイツのところに戻らないと」

さきほど逃げてきた道を少し迂回しながら再び駆け出す。この世界で一生を過ごす
のもあの幽霊にあうのもゴメンだ。だがそんな俺の慎ましやかな願いも虚しくぼやけ
た木々の先に幽霊達の瞳の輝きが見えるとはいえこれ以上迂回したら一生たどり着
きもしない。蹴散らす勢いでむしる踏み込む力を強めて根っこを吹き飛ばしながら正
面へと体を打ち出した。そのまま空中で姿勢を制御して足を前へと出しながら——
——自身の軽率な行動を後悔する。

前方にあるのは白い壁……否、紙のような体を重ね木と木のあいだに壁を作るように
幹へと巻き付いた無数の幽霊達。着弾と共に触れるだけで不安を感じるような触つて
いるのか触っていないのかも良く分からない感触と何故かそれでいながら確実に冷氣
を伝えてくるそれに足が沈みパチンコの様に、二本の木をしならせながら体を引き絞つ
て行く。

マズイツ——と足を地面に突き立てようとしても一方の足を地面へと突き出したところでそちらの足も幽霊達に絡め取られて……限界へと達した幽霊達が体を弾けさせるのと同時に打ち出した力のままに俺は通つて来た道を再び吹き飛びながら戻つて行く。木をへし折り巻き込み巻き上げながら向かう先は世界の果て——この体ならば空中でも跳ねて戻つてこれるのだろうかあいにくと俺にはその技術が無い——冗談じゃない。制御の効かない体では足を地に付けることもできない。全くなんで幽霊のあいつらが二足歩行で俺は空中浮遊させられているのだから……

「——クソツ!!」

ギフトカードから再び金箔の模擬刀を取り出しさらに花村のエプロンで手と刀を固定しながら辺古山の技術で今度はうまい事切らないように調整しながら地面へと刀を突き刺し、折れないようにあの後増えていた罪木のものであろうギフトをかけて今にも壊れそうなそれをギリギリで使用可能な状態へと引き戻し続ける。

それでもまだまだ勢いは減らず遂には世界の果てのその先……どこへ続くともしれない奈落が見えてくる

「うおおおおおおツ!!」

もはや刃のことなど考えている余裕はない、少しでも勢いを殺すために刃を傾け一気に減速をする……だが遅かった。

急減速のせいではねるように浮き上がった体は無情にもその淵の奥へと進んでいく
突き出した左手もその滝を別ける一つの岩を滑り完全にその身は虚空へと投げ出さ
れた

負けているのに負けられぬその理由

昔些細なことで争った男女がいた。

もはや日課のように顔を合わせては毎日毎日くだらぬ事でぶつかる二人を周りの人間が呆れたように見る……広い世界の端の端の平和な幸せの一幕だった。

ある日、いつものようにどうでもいいコトで喧嘩を始めた二人は解決に一つのゲームを使う事にした。どちらが正しいのかを証明するためのゲーム……どんなものだったかなんて覚えてはいない。ただ男の言うことが正しかったことだけは覚えている。正しかったからそれを間違いだと思っていた私は危険も知らず森の奥へと進み死んでしまった。私が死ぬだけならばまだ良かった、だが男は遅れながらも私のことに気づき、助ける為に危険へと飛び込んできた……ゲームは男の勝利だ。これは間違えようもない、だが男は死んだ。勝者がいないのにゲームは終わらない。女のゲームは女が死んでもなお終わってなどいかなかった。女はそのゲームの終わりを望んでいた。ただの人間に過ぎない女の記憶がその悠久の果てに褪せてきてもそれだけは変わらない——

——これは何百年と前の話。
とある白蛇が神の力を賜るそのさらに昔のことだった



「これは坊やもダメだったか？」

遠くで鳴く自分の犠牲者達の声にあきらめの言葉を吐き出す

亡者達は私が真の意味で死なない限りこの世界から消えることすらできない……だが彼らには私ほどの強い後悔も意思もなかった、ただ外に出たい、解放されたいという思いのみを持ってこの世界で朽ちて行ったモノたちなのだから当たり前だ。ならばこの永劫廃れて行くのみの変化のささやかな世界でどうして自分を保てようか、どうして正常な判断が出来るようか

いくら足掻いたところで死んだ身はもう蘇ることはない、だが彼らはそれを理解せず自分がゲームをクリアするために”同じ目的を持つ他者を排斥しようとしている。

とはいえこの世界のことを最も知っているのはただ座っているだけの自分でもさきほど来たばかりの挑戦者でもなくきつと脱出のためにただたださまよい続けている彼らのはずだ

ならばどうやってその彼らを退けることができよう？最も簡単であり故に難題であ

る。なにせ私は負けたことがない

「また次の人間を待つ……か」

後自分の記憶がどれだけ持つのかもわからない。この調子で行けば次の人間に出会えるまでにこの世界を維持できるだけの最低限のものすら自分の中から消えてしまうのかもしれない。みんなに忘れ去られて、みんなを忘れて。自分の都合で無関係の人間まで巻き込んで結果自分の些細な願いすら叶えられない。

一体私とはなんなのか？

……………？

亡者の声が聞こえない？

「————ようやく戻って来れた。いやスクラムとかピラミッドとか芸達者なのはいいけど一々先回りされていきなりあんなもん見せられて堪えないな」

声に弾かれるように振り返れば亡者達に追いかけて回されていた坊やがそこに立って

いた。右腕こそ何やらひどい有様だがそれ以外はほぼ無傷と言ってもいい……あの亡者を相手にして生還出来る力の持ち主がなぜこんな世界の端に来ていたのか？

否、それよりも亡者達は一体どうしたと言うのか？

「……こりやたまげた。やるんだね坊や」

「どちらかと言えばやられたよ。世界の端から突き落とされるとは思わなかった」

むしろそこまでされて生きて帰ってこれるなんて思わなかった

「ちようど杭になりそうな物に手繰るものまで持ってたからな。落ちる瞬間に打ち込んで這い上がってきた。幽霊達は殴つても切つても水をかけても意味がなかったから土に埋めてきた」

「……大した人外つぶりだよ、前のプレイヤーが来てから数十年たったわけだがいつの間にか外の世界はそんなにインフレが進んでいたわけか」

「いや、数十年前を知らないけどこんななんでもできる体を持つてる奴がそこいらに居てたまるか」

まさに同じ気分だ、悪い夢かと思っってしまうぐらいに

「じゃあそのなんでもできるあんたはこのゲームを終わらせられるのかい？幽霊どもなんか何匹倒したって意味ないよ？」

そりやそうだ、と肩をすくめた坊やはどうも言葉とは裏腹に余裕が見て取れる

「質問……いいんだよな？なら聞かせてくれ——このゲームの名前はなんだ？」

……たどり着いたのか？理解したと？まともなヒントなんて何も無いこの世界で？

「そんなの聞いてどうするのさ？」

「おいおい、ゲームっていうのは勝利条件だけじゃないだろ？名前だつてなくちゃダメなはずだ。プレイヤーとして当然の質問だろ」

……なるほど、確かにこんなのがあちこちにいる世界なんて息が詰まる

「この世界といい勝負だ」

「ゲームの名前は『敗者の心残り』……どんな頭をしてるんだか一回覗いてみたいね、全く」

「その気持ちは良く分かるぞ。俺の仲間にもそう思わせてくれる奴がいるからな」

そういう少年はその視線を先程までいた世界の果てへと真っ直ぐに向けて力強く宣言した

「俺の”勝ち”だ」



先程までの横にかかっていた力が嘘のように体を下に引く力へと変化し俺の体を奈落の底へと叩き込もうとしてくる。既に陸は手の届かない範囲に出てしまった

文字通り手も足も出やしない。何よりも最後の無理なブレーキで右腕がズタボロだ。だが打つ手はある。

右腕に巻いたエプロンを解き左腕でしっかりと端を持って未だに刀に巻かれたままのもう一端を右手で打ち出す。さながらアンカーの如く岸へと突き刺さったそれを便りにすれば上がることはできる

「割と本当に危なかった……」

ゾツとしない。シヤレにならないけれどそれでもやはり体験するぐらいならシヤレの方が良かったと思える。さすがのカムクラとて紐なしバンジーはやったことがないだろうに

やつとのことで這い上がった先に幽霊共はいない。おそらく仕留めたと勘違いをしているのだろうこつちとしてもさっきの蹴りの感触的に攻撃が効いてない事はなんとなくわかつている、ならばこんな不安定なところで囲まれているなんて状況になつていないのは嬉しいことなのだがその実状況は何ら変わっていない

いくら速度で優つていても先回りされたんじゃ意味が無い。着地点が見えない以上木の上を走つて行くのも無しだ。

紙のような肉体……となれば切る、燃やす、濡らすというのが効果的にも思えるがどうなのだろう？ 正直無駄な感じもするがこの際そんなことも言つてられない。とりあえず一体でもまともに除去する方法がわかれば真正面から突つ込むことだつてできるのだから……だがそれがわからないのだからどうすればいいのか？

簡単な話だ、成功するまで試行を繰り返せばいい。素晴らしいことに時間制限も敗北もないこのゲーム。試す時間なら腐るほどにある

ただ遮二無二突つ込んででもクリアできるほどのイージーゲーム、せつかくなのだからいろいろとやらせてもらおうじゃないか

「まずは斬撃」

森の奥に見える瞳の輝きへと先ほど同様に飛び出し襲いかかる、違うのはその手に獲物を狩る牙を持っているか否かのみ

死んだと思つた存在に反応すらすることができずその紙の如き肉体は金箔が剥がれてほぼ鉄色の刀身を受けいれる……がこれではダメだ、通り抜けると言うよりは刃が抜けた先から再生している。ならば再生よりも早く切り刻めばというわけにもいかない

程に早い再生に純粋な物理攻撃は効かないとみえる。

「次は濁流」

先ほど刀を突き立て地面に引いた一文字に流れ込んだ水を巻き上げ宛ら逆巻く滝の如く幽霊ごと天へと打ち上げる……がどうも紙は紙でも水を弾ける類の紙らしい

「なら業火だ」

落下に差し掛かった幽霊の体から着地点を割り出し円を作るようにそこらの木を切り付けまくる。表面が凸凹とした金箔剥がれかけの刀と辺古山の技量から火種を作り花村のエプロンで一気に煽る。一瞬で雨のように落ちてくる水を気化させるほどの塊へと成長したそこに読み通りに落ちてくるが……さて、やはり見た目が紙見たいというだけで別に本当に紙つてわけでもないか。そりやそうだ

……さて、熱でも湿気でも物理でもダメとなれば後俺に出せるものはなさそうだ。雷でも出せれば違ったかもしれないが流星に静電気なんかで何千ボルトも貯められる気がしない

もうお手上げだ、できることも何もない。倒せないんだからしょうがない

「じゃあ生き埋めだな」

大炎上するその一角へと自ら飛び込み気持ちの悪い幽霊の頭部を掴む。

お生憎とここらの地盤は木を引っこ抜いたり切り刻んだり水を流し込んだり燃やし

てみたりとですごく崩れやすい状態にある。

「そらっつー！」

全力でそのまま地面へと叩き込む。そりやもう全力も全力だ。自分の腕すら肘を超えて付け根に近いところまで土に埋めてしまうぐらいに全力だ。そうして相手の体は置き去りに腕だけを抜きさりエプロンで辺りの炎を一気に飛ばせば黒く炭化しながらもなおぼやけ続ける不思議愉快な景観の完成だ。これぞ正しく劇的にビフォーアフターしたと言う奴だろう。ただし幽霊のいわく付きな上に地盤はゆるゆる、街からも遠いし何よりも常時モザイクという……誰が買うのかそんな土地。

流石に激しい戦闘音からか沢山の存在がこちらへと集まってくる。ならば俺も最後の仕上げに取り掛かろう。森林破壊は良くない、したのであれば再生にもそれなりに責任を持たなくてはならない……故に

「燃やしたら植える、当たり前のことだ」

着地点に幽霊がいて再びスクラムなんて組まれていたら困るので飛べなかった訳だが着地点が拓けているという条件であれば幽霊の手の届かないところで行動するのは何ら問題ではない。つまりはある意味の原点回帰。はじめの戦闘地域へとひとつ飛びに戻る。そこには結局へし折られてから使われないまま中心から円形に放射状に倒れる木々があつた。

まあつまりはそう言う事だ。燃やしたのなら植える。今頃は幽霊たちが勢ぞろいして囲んでいるであろうそこへと……投げ植える。ああもちろんいるだろうとも。なにせあいつらはここいらの地形に詳しくそして必ず囲む様にして集まるのだから。

蹴り上げ打ち出し、持ち上げ投げ出し、かち上げ吹き飛ばし、叩き上げて叩き落とす。世界の端の方で何やら土が連続して巻き上がるのを無視して都合16本。それだけの木を匠の技で植え直したのだ、さぞ素晴らしいことになっているだろう……もつとも現実に何ら影響がない世界だとわかったから出来ることだが冷静になって自身の行動を振り返れば何か溜まっていたのだろうかと言わんばかりの荒れようだ。心当たりが多過ぎて困るといふのが悲しいことだがトドメは絶対にあの幽霊達のビジュアルと動きなので特に気にしないで進むことにする。ここまで来れば自身が吹き飛ばされた事で道が出来ているのでまっすぐ進むだけであの女のところへとたどり着く

「——ようやく戻つて来れた。いやスクラムとかピラミッドとか芸達者なのはいいけど一々先回りされていきなりあんなもん見せられて堪えないな」

一直線に木すらへし折りながら飛ばされたとはいえそれでも鬱蒼とした道を抜けた先で女は初めと変わらず岩の上に腰掛けて動いていない

「……………」りやたまげた。やるんだね坊や」

本当に驚いたという顔でこちらを見る女にどこか達成感が浮かぶがいやしかし素直に喜ぼうにも苦しい出が多過ぎる

「どちらかと言えばやられたよ。世界の端から突き落とされるとは思わなかった」

途端に化物でも見るかのような顔になったその反応が気に食わず子細を話す

「ちようど杭になりそうな物に手繰るものまで持ってたからな。落ちる瞬間に打ち込んで這い上がってきた。幽霊達は殴つても切つても水をかけても意味がなかったから土に埋めてきた」

「……大した人外つぶりだよ、前のプレイヤーが来てから数十年たったわけだがいつの間にか外の世界はそんなにインフレが進んでいたわけか」

「いや、数十年前を知らないけどこんななんでもできる体を持つてる奴がそこいらに居てたまるか」

冗談じゃない、そんな世界ならきつと十六夜のテンションがうなぎ上り間違いなしだ
「じゃあそのなんでもできるあんたはこのゲームを終わらせられるのかい？ 幽霊どもなんか何匹倒したって意味ないよ？」

……それもそうだ。終わらせられるのならば早く終わらせてしまおう、お互いのためにも

「質問……いいんだよな？ なら聞かせてくれ——このゲームの名前はなんだ？」

「そんなの聞いてどうするのさ？」

「おいおい、ゲームっていうのは勝利条件だけじゃないだろ？名前だつてなくちやダメなはずだ。プレイヤーとして当然の質問だろ」

ゲームの名前というのはそれはそれは重要な情報だ。何せそれは一番わかり易くそのゲームを表す言葉なのだから。

「ゲームの名前は『敗者の心残り』……どんな頭をしてるんだか一回覗いてみたいね、全く」

敗者の心残り……なるほどなら多分予想は間違えてない。だからこそここまで言われるのが心外だ。ただ気持ちだけならわかる

「その気持ちは良く分かるぞ。俺の仲間にもそう思わせてくれる奴がいるからな」

……そう気持ちだけなら良く分かるとも、だから早く終わらせてしまおう。初めから終わっているゲームなんて……面白くもなんともない

「俺の”勝ち”だ」

「ああ、坊やの勝ちだよ。おめでどう」

世界が女の手からこぼれ落ちた紙から広がっていく。ぼやけた木も折れた木も全部が全部元の形へと戻っていく……派手だからこそよく見なければわからないが理解し

た上で見れば確かにあの世界とこの世界は違うのだろう。過去の世界とはいえ記憶が摩耗するほどの時を過ごすとなればそれは木も道も世界の果てすらその形が変わっても何らおかしくない

このゲームははじめから自身が勝利しているという前提で始まるゲーム、誰かがかつて勝利し、最後その義務を果たさぬまま消えたそのゲームを終わらせるためにただ一言紡ぐためのゲーム。

ゲームとは勝者が決まって初めて初めて終わる。だからこそ勝者が決まったことを周りへと伝えなければならぬ。どんな形であろうと自分が勝ったことを主張し、相手がそれを讃えてようやくクリアなのだ

「ハハッ、これでようやく終わったか」

「終わってくれなきや困る。一生あの幽霊達と一緒にいるのが特に」

割と本気の話だ。それほどまでにあれは衝撃的過ぎた

同じ幽霊とはいえ幽霊らしく満足な顔をして今まさに成仏しようとしてる眼前の女とどうしてあそこまで違うのか

「……とどこでどれくらいここにいたんだアンタ？」

ふとした疑問だった。結局正確な年代はわからなかったが景色があそこまで変わるというのは相応の時間がたっているはずだ

「おいおい、女に年齢を聞くもんじやない。今の子はそんなことも知らないのかい？」
「……それもそうだな、忘れてくれ」

確かに失礼というものだ。

「まあ何だ……今度こそ有意義な時間を」

そうでなくちや報われぬ。何があつたか知らないがあそこまで負けに固執したからには理由があつた筈なのだから

「……最近の坊やは生意気だね、問題ないよ。今度こそ勝つてやるんだから」

そう言つて女は宙に解けるように消えていった……ん？待て待て待て待て待て!!ギフトは!?!クリアした特典は!!?

……まあ、満足してもらえたのならいいか。将来というか来世への先行投資だと思つておけば

いつの間にか空も赤く染まっている。時間もあまりないが最低限の悪あがきぐらいさせてもらわねばあの三人の笑いダネにされることうけあいだ。

「さて、まずは右腕なんとかしないとな」

そうして今日もまた日は沈む。

止まつていた時は動き出し囚われていた1236人分の魂は開放された

祓われたその土地はとても清く、また怨霊になるでも神霊になるでもなくただ長き時

自分を貫き続けた女の加護として少年へと宿る

少年がその予想外の贈り物に顔を綻ばせるのは少し先の話だ

chapter 5 乃ぞ乃ぞ『頭は鳥、顔は熊、変身する
と巨人になる生き物』

無くしものは隠されもの、帰つて来ぬ限りは見つからん

さて端的に結論を述べよう。案の定負けた。

とうかほかの三人が異常すぎる。ちよつとバイトしてきたと言つた感覚で何をし
でかしてくれているのやら。十六夜に至つては神格持ちを隷属させ更には門の所有権
まで持つてきた。とことん規格外というべきか……ついでにいうならば十六夜が連れ
てきたあの蛇神こと白雪が俺に一言感謝を述べてきた。聞く暇もなく白夜叉のところ
を出て来たので理由がわからず凄くモヤモヤする。

「それはそうとして何をしてるんだ？」

俺の眼前でニヤツ?!とやたら人間らしい反応を見せてくれる三毛猫……普段ならば
春日部の元を離れることもなく、また猫が嫌う風呂場にも近づかぬ彼が珍しく一匹で必
要以上に足音を潜めながら浴場から廊下を伺つていた。一応言っておくが今は十六夜
がレティシア、そしてジンと共に子供の中でも年長に当たる狐の獣人の少女と一緒に風

呂に入っていたりする。これだけを聞くと十六夜がロリコンのようにも聞こえるが白夜叉の扱いや黒ウサギの胸に対する執着から分かる通りアイツにその手の趣味はない。そうなると今度は大人の姿になれるレティシアが危険だがまあそこは子供もいる手前何かが起きるということもない。何よりレティシアの凜とした空気に自身を従者と割り切った考えとなんだかんだ言つて行動には移さない変態のエリート十六夜がお互いにその手の話題を本気にするとは思えない

……まあ長々と考えていると元の話を忘れそうになるが要は三毛猫がここでその存在を潜めるかのようにコソコソと行動する理由がないわけだ。

『な、あんちゃんこそなんでここにおんねん!』

「黒ウサギにタオルを届けるように頼まれてな」

さもなければ俺だつてここまで来たりしない。あらぬ疑いをかけられるのはゴメンだ……そう、島の中で左右田とやったことはなにかの間違いに違いないのだから。

『そ、それはええな、さぞかし爪の立てがいがありそうな……』

「それでなんでここにいるんだ?」

『ニヤワツ!』

……怪しすぎる。様子を見るに目的があつてここに来たのは間違いない。誤魔化しにタオルの事を使ったということから本当に爪を砥に來たわけでもないだろうしい

くらオスとはいえ浴場の中に興味があるわけでもないだろう

思わず疑いの眼差しを向けてしまい三毛猫が焦ったように後ずさる

……ん？三毛猫の後ろに何かあるような？

見えづらいが何やら三毛猫は体を使って何かを隠しているようだ。入口の向こう側に大部分があることもあいまってかそれが何なのかまではわからない

気になって一步を踏み出したところで三毛猫は意を決した様に飛び上がり入口の横に積んであった籠の山を崩し自身もまた籠を被りながら一目散に何処かへと駆けていく

『堪忍やあ〜!!』

どこか気の抜ける悲鳴のような言葉を残してその七不思議廊下を爆走する逆さの籠は一瞬で視界から消えていった。さつきまで何かが隠れていたように見えた場所にも何も無い……

「なんだったんだ……というかこれ俺が片付けるのか？」

……災難だ。



「アンダーウッドに行かない!」

まさに同音。口調も抑揚もテンションすらも違う三人が思わず全く言葉を被せてしまふほどに驚くべき言葉が十六夜から伝えられた。

考えても見て欲しい。あのお祭り好き、故に全力で今回も勝ちを拾いにきた十六夜が自主的に!それも無くしものと言う理由で!その権利を放棄したのだ

「そんなにあのヘッドホン大事だったのか?」

「別にそういうわけじゃねえけどな、締まらねえってだけだ。まあそういう訳で今回は譲ってやるからせいぜい頑張って成果を上げてきてくれ」

……まあそういうのなら俺にとつても嬉しいことだ。メンバーが珍しいにも程がある面子になってしまったが。

「それにしてもあんなものを無くすなんて随分器用ね。それも一日探してもないだなんて」

「そうですね、話を聞く限りは浴場にあると思うのですが……」

「ですがジン坊ちゃん、浴場なんてそんなに探すところもないですよ?」

「でもヘッドホンが勝手に歩くなんてこともないよ、黒ウサギ?」

取り敢えず行方不明のヘッドホンのために残る十六夜、元から残ることが決まっていたレティシアにジンを除いた年少組が本拠地にて待機。十六夜が合流するのかわか

らないが収穫祭へ向かうのがジン、黒ウサギ、久遠に春日部、そして十六夜の代わりに俺だ

というか……

「……ヘッドホンが勝手に歩く事はない……ね」

無論小声だ。心当たりこそあるがこんなタイミングで打ち上げたって十六夜本人ですら困るだろう。何よりもこの聡い少年がこの可能性に至っていない筈がない。それでいて残るといふことは……今回はその犯人の考えに乗ってあげるといふことだ。無論その正体と意図に気がついているかは別として……

小声とはいったが思わず向かう視線ばかりは仕方がない。吸い寄せられるように固定されたそこは春日部の腕の中、ぶら下がるように抱かれた三毛猫の元だ。

無論向こうのその視線に気付いているのか執拗に視線を合わせようとするしない。

「……日向君、あなたどこを見ているのかしら」

は？

「あのねえ、そんな不躰に女性を眺めるだなんて失礼だと思わないの？そ、それも胸の辺りをジツと」

「誤解だ、久遠。別に胸を見ていたわけじゃなくて——」

「ほーお、そうかそうか。俺と白夜叉の話に入ってこないと思つたら日向はそっち派か」

そして壁を意識させるようジェスチャーをして十六夜までもが乗ってくる。

こいつら……！

「創……」

「とうか十六夜君も十六夜君よ。あなたもだいぶ失礼だわ、デリカシーって物がないのかしら」

俺は白昼堂々お空の元であけっぴろげに胸の話に持っていくお前ら全員に聞きたい位だ。

そんな俺の内心とは別にさり気なくこちらを睨んで体を隠すように逸らす春日部の姿に少しシヨックを受けた

「な、なあご主人達よ。この話は不毛にしかならんと思うのだが……」

「そ、そうでございますよ！日向さんも男性ですからまあ……た、たまにはそういうこともございます。ええ、仕方が無いことです！」

……フオローが辛い！

「jeeっ……」

「あ、あのう……春日部さん？」

……そしてなんとも居た堪れない。春日部の視線があっちへこっちへ見比べる様に飛ぶ様を直視出来ない！

「……皆はいいね」

「ち、ちがつそういうつもりじゃ！」

「……いや私は乏しい方だろうか？」

……レティシアは確かに普段は子供の姿をしているが……大人の姿があるからな。

「ジン……ごめん」

「……いえ、もう慣れました」

またいつものように場が一瞬で混沌とするノーネームのお家芸を前にしていつもいつも割を食うジンに俺はそれしか言えなかった。

……とはいえ頭を押さえながら、その体の小ささである状況を抑えるその手腕はまさに見事の一言と言える。

最も今から出発すると言うのに何やらまた俺が白い目で見られ始めた気がするのはいは懐かしむべきか、はたまた頭を抱えるべきか

「さいてー」

うんだよな。その結論にしかないのは知ってた！知っていたけどちよつと理不尽じゃないか!?

三毛猫の事を話すわけにもいかず、かと言って無視するにもイマイチ意図が読めない。十中八九犯人は彼で絶対によからぬ事をしたのではあるが……理由も無く彼は

そんなことをしないでらう。話を聞こうにも春日部に悟られればそこまでして三毛猫がしたかったことは達成される前に十六夜の前へと突き出されるに違いない。

春日部は三毛猫が大切ではあるがそのために仲間を蔑ろにする事はしない。理由を聞いて納得はしても間違ったやり方をしている以上は謝らせるだろう。三毛猫だつて俺達以上にそのことを知っているのだから後でバレることが前提で動いているに違い無い。

……そうなるとあまり手を出す気になれないのだ。これで十六夜がヘッドホンを本当の本当に全力を持って探し続けていたり萎びれていたり話が別だが……いくら見直してもいつもと変わった様子は見られない。

……弱味を見せまいとしているのか盗んだであろう誰かの都合を考えて黙っているのか本当に気にしていないのか……或いはここまで計算づくだったりするのかも知らない。何かまた見越してここに残ることを選んだのかも知れない。だがそれはわからない。十六夜の顔からは驚く程に表情が読み取れるのにそれ故にその顔の裏に隠した真意がわからない。

「まあいいか」

「よくないです！春日部さんがすっかりいじけちゃったじゃないですか！」

「それは確実に黒ウサギが止めをさしたせいだ」

格差社会とはひどい物である。まさにそれを体現した世界ではあるもののそれに加えて前の世界でも多発していたそのことを知っているのだから格差まで適応するとは誠に神様は残酷だ。

因みに個人的には大きい方が好み——あまり考えていると色々なやつに殺されそうなのでやめておこう。いいじゃないか千差万別個性があつて大変素晴らしい……と語つたら語つたでただの変態だ。今日も変わらず世間は男性に優しくない。同じように女性にも優しくないのだからまさにこれこそ男女平等だろう。

まあ何も格差は性差のみによつて起こるわけではないが。その代表例が眼前の光景とも言える。境界門……今回十六夜の功績として晴れてノーネームの管理下に置かれることとなつた周辺領域民にとつてなくてはならない交通手段。

元はガルドガスパー率いるフォレスガ口の所有物だつたこれは今もその名残を残し門柱に巨大な虎の彫像が立っている。

「帰つてきたら真つ先にあれを取り除きましょう」

久遠が強く、もはや何かの宣誓のように言い切つてしまふ程にそれは見事だつた。見事ゆえにイラつきも倍増と言つたところなのだろう。俺は結局本人とはあつてすらないわけだがあの久遠をして死者にこの扱いなのだから余程救いようがない意味での傑物だつたのだろう。ゲスや外道と一括りには言つても驚くほど人気が出るよう

なクズも中に入るものだ。無論それは相対する人間からすればめんどくさいにもほどがあるわけだが見ている分にはその人間のある意味での真つ直ぐさが、あるいは時折のぞかせる人間味やその艱難辛苦乗り越えてきた物語がきつと人目を引くのか……ただし何度もうかが相対する人間からすればそれは何ら美点にはなり得ないのだが

「なんで黒ウサギを売りに出すのですかアアアアアつ!!」

「恥ずかしいからやめてくれるか!」

少し意識が逸れているあいだに何があつたのやら……恐るべきことにこいつら衆人環視の下でどんな会話をしてくれているのやら。こんなのがこの境界門の管理者だなんて思われたら……あ、いや今更だなうん。

「日向さんも何か言ってください!」

「売るのは構わないがその時はそういう用途でしか売れないと思うから覚悟の上でな」

「セクハラですかっ?!」

「なんだ、食用が良かったか? マニアックだな」

ついに疲れ果てたか無言のハリセンが飛んでくる。まあ見えたからと言って洗練されたそれをかわすことはできないわけで再び間拔けな音が広場へと広がった

「……今からが旅行だつてのにそんなんじや持たないぞ、黒ウサギ」

「……そう思うのでしたら素直にこちらの肩を持つてください」

「苦勞サイドに回るのは俺も嫌だからな」

誰が好き好んでそんな大変な目に合わなくてはならないのか……理解に苦しむとはまさにこのことだ

そんな空気を感じ取ったのか諦めるように頭を振り流れを切る様に黒ウサギが懐から二枚の招待状を覗かせながら真面目な話を始める。内容は招待主である収穫祭を実行する二つのコミュニティ、主催たる龍角を持つ鷲獅子とその舞台を提供したアンダーウッドへの挨拶回りとやらだ。無論そういった礼節を軽んじる気は他の二人にも無いらしくここは素直な返事を返している。

そんなやりとりをしているとついに門が開く時間なのか広場に集まっていた無数の人影が規則的に動き始めた。

黒ウサギのナンバープレートを確認する声に続き春日部の十六夜を心配する言葉が聞こえる。

……俺はこの秘密をかかえていいのだろうか？大事に繋がらないか？十六夜が黙認していたとしても俺がそれを教えない理由にはならないのではないか？……いや、ここまで来ている時点でそれらを考えるのは嘘だ。わかった上で判断を下しここにいろ。どうなったから今更考えだけを変えて動かないのは卑怯だろう

「それで何か起きたら起きたで今度は問題なんだけどなあ」

ままならないものである。親も世間も神様も困った人には手を差し延べろ等という割に手が足りてない現状はなんなのか。人には手がふたつある。ならば全員が誠にならなければひとりひとりは二倍ハッピーな筈なのだが……残念ながら今の社会はそういう救いの手を率先して手折りに行く傾向がある。優しいやつが馬鹿を見るというのはそう言う事だ。そういう面でいえば俺たちのコミュニティはきつと……馬鹿しか見ないのだろう



今までの浮遊感を伴った移動とは違う、一步踏み出したらパツと景色が変わったかのような瞬間移動。そのわずか一步で箱庭世界を渡れるというのだから境界門の便利さは異常だろう

しかし南の景色もまた随分と東や北のそれとは異なる。建造物に溢れた冷たき石と灼熱の炎が見事なまでのコントラストを演出した北と違いこちらは一言で言えば世界樹。超巨大な大木を中心に様々な光景が広がっているのか特徴だ。

空を見上げても春日部が喜びそうな生き物たちがあつちこつちへと忙しそうに移動

しているのが見えるので退屈しない

「早速挨拶に行くのか？」

「そうですね、その前に荷物を置いてからになります。それがそれ道中ですので未すぐ向かうことになります」

収穫祭はまだ始まってすらいらない。そんな状態です。この賑わい……正直俺もこの祭りを楽しみたい欲求がある。黒ウサギの言葉と今回の目的を思い出してなんとか足を止めはしたが視線ばかりは外れそうにない。

そして同じように何時にないテンションで饒舌に口を動かして景色を説明しているのが春日部だ。ヤレ水晶の回廊だ。大木だ。空を飛ぶあの生き物はその興味は留まるどころを知らない。

そんな彼女を見ていると急にあたりが暗くなった……というよりは俺にだけ影が差しているようだ。自然上へ向けられた俺の視界にはいつてくるのは巨大な足——
——おい。

急いでそこを飛び退くと同時にその巨体は風を使って衝撃を感じさせぬ柔らかな着地を見せた

「久しいな我が友よ」

そう言ったのは何時ぞやのグリフォン。白夜叉が連れていた奴であることはその同

種の中でも立派な姿と言葉の内から把握できた。挨拶に他のノーネームのメンバーもお辞儀で返しているのだが……俺は納得できない

「なんで俺の上に降りてきたんだよ」

「たまたまだ気にするな」

「……気にするなつて無理だろ」

グリフォンと言葉を交わした俺に他のメンバーがお辞儀から直つてギョツと目を剥く

「ひ、日向くん言葉がわかるの?」

「まあな。言つとくけど前の時はわからなかつたぞ、ペルセウスの時辺りから三毛猫の言葉がわかるようになった」

「三毛猫とも喋れるの!?!」

「……日向さんも大概不思議存在ですよね」

……テンシヨンの高い女性二人とは対称にどんよりとした空気を漂わせながらジーンが呟いたのが耳に痛い

「さて、瑣末事は置いておいて一つ提案なのだが……ここから街までは少し遠い。道中も野生区画と呼ばれるものがあるから危険もある。そこでよければだが私の背で送つて行こう」

「……本当か？」

「嘘は言わん」

……何だいいやつじゃないか

「ぜひ御好意に預からせていただきます！」

「ありがたい、良かったら名前聞いてもいい？」

「無論だとも、私は騎手よりグリーと呼ばれている。友もそう呼んでくれ」

「うん、私は耀で、こつちが飛鳥とジン、そして創だよ」

「なるほど、友は耀。友の友が飛鳥とジン……そしてその創か」

食い気味の黒ウサギに少し引きながらなんとも微笑ましい友人の様子に頬を緩めるという器用な事をしながら久遠とジンへ話しかける

この二人はグリーの言葉を理解できない故空気がらすごく穏やかな感じを感じる
ことこそ出来ても内容がいまいちわからないのだろう

「グリフォンの名前がグリー、春日部も初めの目的を徐々に達成できてるみたいで良かったよ」

「……ずるいわ、日向くん達だけでわかったように話すんですもの」

「しかしこればかりは仕方ないですよ。他種族と絆を結ぶのは難しい事ですから……その分言葉を交わすことが出来るというのは本当にすごいことなんです」

春日部はグリーに先程から空を飛ぶ生物の事を聞いている。なにやら物騒な言葉が聞こえてくるのは俺の翻訳ミスだと思いたい

「なんで日向くんは彼らの言葉がわかるの？話を聞く限りグリフォンだけというわけではないのでしょうか？」

「……多分だけどここれも仲間の力だよ。俺の世界にはグリフォンとかはいなかったけど俺の仲間は動物の言葉を理解する事ができるなんて言われてたやつがいたんだ」

果たしてあれは真実だったのか……それはさすがにわからないが彼と彼が連れていた破壊神暗黒四天王との絆は確かだった

「さて、待たせるのも悪い。御好意に預らせてもらおうぜ」

「そうですね、行きましょう」

……数分後絶叫マシーンもなくやと言った具合の乗り心地に数名が昇天しかけたのは御愛嬌

いや本当に身体能力的に難のある2名と一匹は命の危機だった

まあ途中で減速してもらったので何とか全員が生きて地に足をつけられたわけだが。ひとまず送ってもらえたことは事実なので感謝をして仕事へと戻る彼を見送った。

さて、一息置いていざ挨拶へと思ったところでこれまた頭上から声が聞こえる。

テンションの高い、子供の少女の声にそれをたしなめるような個人的に殴り割りたい奴ナンバーワンの声が掛けられたのだ。思わず殺気立つのもしようがないだろう

「アーシャ、君も来てたんだ」

「……世話焼きお化けもな」

「これまた随分な言われようですねえ」

自業自得だということを是非とも教えて差し上げたい。いくら正しい解であろうともそれだけを教えられて過程を間違えればどうなるか……俺らがあの後一体どれだけ苦労したことか

「ヤホホー、清々しいまでの責任転嫁！ここまで来ればもはやこのジャック笑うほかありません」

「ニヤニヤとだろ、表情に出ないからって声色からは読み取れるからな」

これまた一本と乾いた音をたてて頭を小突く、その愛嬌のある動作は子供には受けるだろう。俺は絶対誤魔化されてやらないが……コイツわかっていてあそこで止めやがったなという答えに行き着いた俺の怒りはこんなものじゃない。いつか目に物を見

せてやる

何せ元々俺は我慢強い人間ではない

「さて、話は変わりますが御注文の品は収穫祭が終わり次第お届けさせていただきますよ、是非ともこれから御贖罪にしていただきたいものです」

それは素晴らしい、ただ貧乏なうちにそんな余裕は無い。

ノーネームは考えることが同じだ、皆して思わず苦い笑いが浮かぶ

「飛鳥嬢もご健勝のようで何よりです、前回のゲームではディーンに不覚を取りました
が——」

「え？」

前回のゲーム？ディーン？

「そ、そんなことよりもジャック！貴方はゲームに参加しないの？」

……ほお、いやなるほど。そういう手で来たか。

ウィルオウイスプと行ったギフトゲームは春日部の戦果……そこでディーンが出てくるのは随分と不思議な話だ

「ゲームの参加者として活動するのは苦手です……今回も招待状が来たので参加しましたが目的は日用品の卸売りです」

「あら、それじゃ今回参加するのはアーシャだけなの？楽勝じゃない」

「うん」

そんな二人に黒ウサギほどの見事さはないもののそれでも漫画チックな怒髪天を見せられるアーシャ。

そんな光景をみてまたもや喉を転がしてカボチャの幽鬼は笑っている。子供が好きというのは真実だろうがそれにしてもジャックの笑顔以外の表情が想像つかないほど笑いつばなしの彼は人間だったら大した表情筋の持ち主だろう

雑談もそこそこに宿舎に入り荷物を置いて当初の予定のままに挨拶へと向かう。道中は行動を共にすることになったウイルオウイスプの二人から、というよりもジャックから南側への魔王襲撃とその復興の話聞きながら地道に歩みを勧めていく。春日部が歩き食いをしたりアーシャをからかったり井戸から水を組み上げるさまを想像させるエレベーターにつく迄に色々愉快な事を量産しながら俺達は本当に旅行気分です再開を楽しんだ。平和というのは素晴らしい。こんな光景がひどく新鮮なのはこちらで生きるこの大変さ故かまたはまた元の世界の殺伐さ故か……さて、長いエレベーターが終わり受付では連盟についての説明を聞きながら時間を潰してようやく入場かというところで本陣の奥より人影が現れた

どこか艶めかしい褐色の肌に立体的な凹凸の激しい肢体、激しく熱と風を叩きつける様に羽ばたく二翼の炎羽と冠の如く存在の強さを主張する角、流れる赤い髪……その特

徴はどこかでみたことがある。幼かったり性別の違いこそあれどその容姿はサラマン
ドラの二人に瓜二つだ

「さ、サラ様！」

声を上げたのは面識があるであろうジン、名前を見るにやはりこの人物はサラマンド
ラの……

そのまま俺達は奥へと案内され大樹の中へと進んでいく

それこそ見上げててもその頂点が伺えないほどの大樹の中と言えに入ってしまったばな
んてことのない普通の部屋……確かにログハウスに近い見た目ではある、ただもつと
フアンタジーにまんま木をくりぬいた形であったりするのかと思っていたものだから
なんといか失礼な話拍子抜けした。さて、とはいえこちらは招かれる側の人間、状況
がいまいち把握出来ていなかったり目の前で飛び交う盗み出した技術だの北側最強の
ウイラだのといういまいち理解の及ばぬ会話に口を挟むものでもない。部屋を見回し
ても面白くないのだから暇潰しすら出来ないのは残念だがそれならばそれで意識を彼
方へと飛ばしてゆるりとするでしょう。なんとも平和な今だからこそ出来ることだ
……なんて風に気を抜けば直後に黒ウサギが身を乗り出してその艶のある髪を仄かに
怒気から赤らめながら何かの紙を握りつぶしている。涙を流しながら怒り大河に向
かって叫ぶという相変わらず器用な怒り方をする黒ウサギだが毎度毎度ちよつと気を

抜いただけでここまで状況が一変するのはなんなのか。幼年期の子供の会話でもあるまいにもう少し段階をおって会話を楽しんで欲しいものだ——

「……え？」

突然首元をガシツ！と掴まれたことに驚き零しかけたお茶をなんとかソーつと机に置く、ほぼ同時に黒ウサギが驚くほどの早口で何かをまくしたてた

「サラ様、収穫祭への御招待誠に感謝致します。ただ我々は今すぐ向かうところが出来たのでこれで失礼いたします」

「そ、そうか？ラビットイーターなら最下層の展示会に——」

「ありがとうございますわそれではまた後日!!」

なーんの話だこれは、と横を見れば反対の手にはジン、久遠、春日部がまとめて同じように首根っこを掴まれているのが見える。講義の声をあげているのを見るにこれは黒ウサギの暴走か……引き気味のサラ様とやりに礼を言うが否や今度は体を急な加速の感覚が包む……つてオイ洒落じや済まないぞ

案の定十六夜にも並ぶその健脚で大樹を飛び出した黒ウサギはピョンピョンと跳ねながら言われたとおり最下層へと向かつてるようだ……話を聞くにラビットイーターとやらを蹴散らしに行くのだろうかそんな悪事に付き合ってもらえない。

「後で宿舎で合流でいいよな？」

「お好きになさってください!!」

……あ、はい。

なんとも恐ろしい表情だ。思わず食われるかと思った。誰だ黒ウサギをヒナタイターに改造した奴は……江ノ島か、暇潰し感覚でやりかねんな。

冗談にしても恐ろしい事を考えながら身を捻って黒ウサギの拘束から抜け出すと今度は落下中故の身を叩く風に任せて黒ウサギ達から離れていく……とはいえ特に見たい展示物もない俺はと言えば結局パラシユート無しスカイダイビングを決めた事で悪目立ちし、どちらにせよ恥ずかしい思いをするのであった



一方その頃なんて使い古された表現で今度はアンダーウッドの地下都市、最下層の展示保管庫。そこで連続して嘶く稲妻が貫くは狂気の人工植物、ラビットイーター。日向がいればどんなB級映画だと、十六夜がいれば手を叩いて喜んだであろうその全長5メートルの怪植物対ウサギの戦いは名前の割には一方的過ぎる状況で進んでいる。伸ばした触手は尽く独鈷杵に断ち切られ、吹き出た樹液はその怒りをあらわすかのごとく激しく瞬く稲光に蒸散し、大きく開いた花卉はもはや光など受け取りたくないと言わん

ばかりにその黄金に照らされ苦悶しながら焼かれている

斯くして対ウサギ用植物は他でもないウサギの手によつて永遠に葬られた。黒ウサギはまだ見ぬ同族を知らぬ間に守つた達成感と自身の貞操を守りきつたという安堵に包まれながらその髪から緋色を薄めていく。

その横をスルリと抜けて茶髪の少女、春日部耀がその残骸手にとつた

「勿体無い」

そう、彼女は慈愛に満ちた少女。エコロジー精神の塊とも言えるその彼女にとつて眼前で行われる非人道……否、非兎道的行いに自身の体を打たれるよりも強く心を痛めていたのだ

「お馬鹿なことを言わないでください！こんな自然の摂理に反した怪植物は燃えて肥やしになつてしまえば良いのです！」

強く言い切つてもはや残骸すら目に入れてくれないと言わんばかりに顔を逸らした黒ウサギにそのすつかり広くなつた保管庫で唯一の人格者であるジンは頭を抱えた。

目的は達したと言わんばかりに保管庫を出た一同は今度は収穫祭を見学するために活気溢れる通りに出るため歩き出す。アンダーウッドの地下都市ではバザーや市場が開かれており今回の目的であつた農園に植えるための苗や種、他にはない毛皮製の商品に一々大きく反応を残して見て回る。民族衣装などの衣服の方によく目が行くのは男

女比率のせいだろうか……しかし先程までの迷惑千万な楽しみ方に比べればとてもま
しなそれにむしろジンは率先してそれらの方に姦しく騒ぐ仲間を誘導していく。

商品の購入はギフトゲームに出て手に入った賞品を見てからにするとして一先ず幾
つかのギフトゲームへの参加登録を終えた一同は日が暮れて茜に染まる大樹を見上げ
ながら頃合いかと宿舎へと引き上げるように歩き始める。

そんな折春日部の足元へ一匹のハムスターが掛け出てきた

「わっ！」

危うく踏みそうになったのをなんとか踏み止まりそれまでの勢いはなんだったのか
というほどにピタツと止まってしまったそれを手のひらに乗せて持ち上げる

「春日部さん、その子は？」

「……迷子……かな？」

ハムスターはネズミの一種、無論連れの三毛猫は何の理由もなく襲いかかったりしな
いがそれにしてもネズミが進んで近づいてくる事は滅多にない

「うぬ、われのこえきこえるか？」

「……え？」

……聞き間違いだろうか？愛くるしく、小さいその体軀からは考えられぬ尊大な口調
で話しかけられた気がする

「きこえておるな、よしよしこれはひろいものだ」

「貴方名前はなんて言うの？迷子？」

「まいごなどではないわ！いいかよくきけ、われこそはこのよにあんこくをもたらず……えーつと……はかいし？いや、はがいじめだったか？」

何やらたどたどしい口調がむしろ愛くるしく見えてきた春日部と黒ウサギであったがこんな所に野生のハムスターがいるはずもない。この人混みのなかはぐれた飼い主は今頃必死になっていることだろう

「あ、おもいだした！われこそはこのよにあんこくをもたらずはかいしんがいつチュウ！じゃんびーだ!!いちどどうずがたかーい！」

……とはいえこの様子では話を聞くことは叶いそうにない。もう暫く帰ることが出来なさそうという事を悟った久遠やジンも含めて春日部は高笑いを続けるハムスターをただ呆然と眺めるしかなかった

三歩進めば忘却の虜なり

「よいぞー！よいぞー！そのちょうしぞー！」

なぜこんなことになっているのか？

振り返ってみても未だに原因がわからない。

「ねえじゃんびー、あなたのご主人様はどんな人なの？」

「じゃんびーではない！じゃんびーだ！」

……違いがわからない。黒ウサギでさえそういつたのだから違いなどないはずだけ
ど……

「そしてなんともいわせるでない！わがあるじはさいこうにいけてるまさにおんりーわ
んなおかただ」

「最高にオンリーワン……」

何やら聞いてると悲しくなる。それは一つ間違えなくてもロンリーワンなのではな
いだろうか？

何度聞いてもまともな答えが帰ってこないことに嘆息する。言葉が通じるのに会話が
通じない事は初めての経験だ。怒りに震える群狼とて会話はしてくれた

「む？おるとろすのことか!?むかしあるじさまとともにあつたぞ!いやはややつはなかなかすさまじかつた」

オルトロスって何なんだろう……十六夜か黒ウサギがいたら教えてくれたのだろうか?

結局迷子のこの子の飼い主を探すこと早三十分、いくら走り回ろうと手分けをしようとしてヒントすら掴めない。匂いを辿ろうとしてもあちこちから匂う花や香の香りが邪魔をするうえそもそも何故か匂いの断片すら負えないのだ

先程までの通りいくら聞いても会話は成り立たないし一体どうすればいいのか……宿舎に戻ってジャックや創の手を借りようかとあまりの八方塞がり具合に足を止める直後そんな春日部の耳を涼やかな音が打った

「へ?」

リイン、と辺りに響くような鈴の音。しかし春日部の耳を持つてしてもその音源が掴めない。

それどころかこんなにも綺麗に響く音なのに周りの人は意識すら傾けない……聞こえていないのか?対して肩に乗って未だやかましくいかにご主人が素晴らしいかを足らない語彙を振り絞って伝えてきていたじゃんぴーの声は聞こえなくなった。目をやればこの音に反応してあちこちへと意識を向けているようだ

「どうしたの?」

「ごしゅじんだ。むかえにきてくれた!」

——この珍騒動もこれでようやく終わりらしい。

「……よかった」

本当に良かった。ノーネームで濃い性格にはだいたい耐性がついている春日部ではあったが元からして対人経験の少ない彼女にとってやたら人間味溢れる彼の饒舌っぷりには疲れきってしまった

「あ、ごしゅじん!」

そう言っつて肩を飛びだしたじゃんぴーが飛び込んだのは何やら違和感のある服装の少年だ。

そう、どこか違和感があるのだ。普通であるのにそれがおかしい……そんな違和感。「探したぞジャンP、勝手に離れるな」

先ほどの鈴の音同様耳に心地よい声を響かせる少年が完全にこちらへと向き直る

腕に雑に巻かれた包帯、首元に長く両端を余らせるように巻かれたストール、左右で色の違う瞳に片眼についたイナズマ型の一本傷、黒い毛に交じる数房の白髪は染められているのだろうか? 全体的にワックスで上方方向に昇る形で固められたそれと刈り上げられた側面のおかげで露出している耳にはまたもやアンシンメトリーに片耳にだけピ

アスがつけられていた

そんな少年がじつとこちらを見ている。じゃんぴーと一緒に探していたことに気がついたのだろうか？それとも勘違いされている？私が攫ったと勘違いしているとしたら——!?

「——ち、違くて！」

「感謝するぞ小娘よ、我が友が暗闇にさらわれた時は流石に焦った。普段はこんな不覚は取らんのだがな……俺様もこの空気に当てられたか。俗世に染まったものだな、前世では世界すら手中に収めたものを……」

……うん？

うん勘違いはされてないみたい。それだけはわかった。というかそれしかわからなかった

「なにか困ったことがあれば俺の名を呼べ、一つだけ願いを叶えてやる。なにせ俺はいずれ世界を統べる男……田中眼蛇夢だからだ！」

「よーせかいいいー!」

……ひとりひとりでもきつと対処に負えない存在が二人いた場合はどうすればいいのか。人付き合いを避けてきた今までの自分が憎くて仕方が無い

「と、とりあえず良かったねじゃんぴー。それじゃあ私はこれで——」

「待て!」

「ヒヤア!?!」

精神衛生上のためにも一刻も早く立ち去ろうと踵を返したところですごい速度で音すら出さず歩み寄ってきた田中に肩を掴まれる。ビックリしすぎて思わず情けない声が出た

「貴様、まさか『蜃気楼の金鷹』ジャンPの言葉がわかるのか!?!」

「蜃気楼の金鷹?え、うんわかるけど」

ついでに言えばさつきから時たま動くストールの中で繰り広げられてる会話も聞こえている

「何と言うことだ、まさか貴様も邪神に選ばれしものなのか……いや、判断を下すのはまだ早いかな」

「判断を下すまでもなく違うと思う」

「何やら今度はとてつもない勘違いを生んだ気がする」

東西祭りが嫌いな人間はそういないだろう、故に俺はなかなか帰ってこないほかのノー
ネームの面々に痺れを切らして再び祭りの中へと降りてきていた。

宿舎では一応ご飯も出て来るがどうせならばこの祭りの雰囲気に取り込まれたい。七海で
も居ればきつとあつちこつちに興味を示し、アレは何!?これはこれは!?!とでもはしやぎ
そうな所だ。

まあ残念ながら今は一人のため何やら変な種を加熱して膨張した綿状の中身を砂糖
で揉んで木の棒に巻き付けた謎のお菓子やデカイ球根のようなものの茎をストローの
様にすすってそのまま飲むジュース、食べる気は起きないが一つ目で虫の足のようなも
のが装着された断末魔を上げ続けるお好み焼き等を売る屋台を覗いて食べたり冷やか
したりしながら回っていく。

そうしていよいよ本格的に夜へ突入という時にふと祭りの最中としてはありえない
光景が目にとまる……人の流れがないのだ。というよりはまるでそこを人が避けるか
のように、ポツンと円形に取り残された空間がある。混み合っているのにみんながみん
なわざとそこを避けている。

ほんのちよつとした興味からそこを覗けば何やらそこには赤髪長髪の少女がノート
のようなものを持って立っていた。顔はこの祭りで売っていたのだろうか?白熊の仮
面で隠され何うことは出来ないが何にせよした周囲の人間がわざわざ避けていくよう

な理由があるとは思えない。

とはいえいい加減黒ウサギ達も帰ってくる頃であろうし明らかに濃そう風貌である。何がと言われれば性格がだ。そういった人間と関わるのが良くある俺が言うのだから間違いない。あれは一見普通そうに見えてとんでもない個性の持ち主だ。その上来ているものが何処のものかは分からないが学生服である。そんなものこの世界にはない、俺と十六夜以外が着ているのを見たこともないのだからまず間違いないはずだ。

何がいいたいのかと言われれば一言関わるべきじゃないというだけなのだが……如何せん悪目立ちしている彼女は何と言うか……非常に男好きのする様な肉体をしているというか……

何やらポケーッと突っ立っている所も考えるといろいろ危ないかもしれない。

……そしてそういう人間を放っておくのは……ノーネーム的にはあまり宜しくないだろう

「よう、どうかしたのか？」

だから俺は声をかけてしまっていた。早く帰ろうとすら思っていたのに、考え過ぎであることは分かっているのに無理やり理由を作ってここに残ることを選んだ。

別に顔を隠しているコイツに惚れただとかそういう事ではなく……俺の中の何が

ここで絡まないという選択肢を消していた

ポケーっとしていたのは事実だったのか暫し遅れてようやく少女はあわあわと俺へと向き直る

「わ、私……のこと?どこかで会いましたっけ?」

「いや、多分会ったことは無いしあっても仮面を付けてたらわかんないだろ」

「へ、仮面?」

……本当に大丈夫なのだろうか?

「ほら、今付けてるじゃないか。白熊の仮面」

「わわっ! ホントだナニコレ!」

「うん、大丈夫か本当に!」

そんな存在感のあるものをつけてて忘れるって……

「……あれ?あなた誰です?」

「……OK、これは俺の度量が試されてるんだな」

「あ、ちよつと待ってくださいノート見ますから————やつぱりあなた誰です?」

……なんなんだコイツは?

直後思わず湧いた感情を嫌悪する。何自然とそう思ってしまったのか……この程度の煽りならば慣れっこだらう……いや、慣れているのか?

「……というか本当に煽っているのか？俺は煽られているからこんなにイラついているのか？」

「……なあ、その仮面どうしたんだ？」

「へ、仮面？……わわっ！ホントだナニコレ！」

「……記憶障害？いやいや何がきつかけで？」

「まあいいや、私には関係ない！」

「……ここで何してたんだ？立ち往生してたってことならわかる範囲で案内するぞ？」

「んー？んーっとね」

「今度は別のノートをリュックから取り出すとすごい勢いで捲り出す。どこかのページでピタッと止めると今度は穴が空くんじやないかという真剣さでノートを睨み出した」

「……わかんない！」

「おい!!」

「……言動が本当に記憶障害であることを伺わせるがノートを常備する必要があるって重度のアルツハイマーよりも下手したらひどいぞ」

「うっしし！でもなんか今は気分がいいからいいや、あなた名前はなんていうの？」

「欠片も良くないことをあつさり切り捨てて少女は俺に問いかける」

「……日向創。二回も三回も自己紹介はしたくないから早いところメモってくれ」

「うん、もうした!」

……早いな。

「んじや私の番だね。私は——誰だっけ?」

……俺に聞くなよ。どれだけ重度なんだ?

視線を少し落としてノートの表紙をそのまま口に出す

「音無涼子……それにはそう書いてあるぞ」

「音無涼子……それが私の名前か!」

「……それいつもそうなのか?」

「記憶のことならそうみたい!昔お前の頭は底無しのコップみたいだって言われたよ」

「そのことは忘れてないんだな……」

呆れた俺の声に自信満々にノートに書いてあったと彼女は誇った顔でそう言った。
いやもちろん顔なんて仮面で見えないが

「さてさて、私が何をしたらいいのか……肝心な事は書いてないけどまあそれならそれでいいかな!」

「いや良くないだろ、どうする気なんだよ。祭り中とはいえもつと更けてきたら流石に人気は消えるぞ。流石にそんな時までぼーっとしてるのはまずいんじゃないのか?」

そういう俺の言葉に

「でも覚えてないんだから仕方ないじゃない」

なんて呑気に当たり前のことを答えてくれる。そりやそうだけでも自分の事だろうに

「まあ他の人の事なんて私には関係ない。だから大丈夫」

「その他つてのは他の人が何をしてこようがつて事か？もうちよつと考えたらどうなんだ？ほかのノートは？」

……といくら声をかけてものらりくらり……言つても無駄のようだ

「さてさてえーつと……そうだ日向くん。君にはこの美少女をエスコートする権利を上げよう」

「いらん、返上する」

「そんなことノートには書かれてませーん」

……一瞬で名前を忘れたな。こうして会話してるあいだに俺が数えられる範囲で早三回か？記憶がここまで連続して飛ぶのなら本来ノートでどうこうできるもんじやない。先天性の物なら言葉すら覚えきる前に頭から消し飛ぶ。

でもこうして会話ができ、ノートに文字を書き、ノートを読み、それらが自分にとって必要なことだということは理解できている。

ならばこれはある意味ひどく限定的かつ後天的な障害に違いない

例えば考えられるのこを上げれば知識としてはあるがそれを自分の物だと結び付けられない。単純な物なら常識は残るが経験が吹き飛ぶ……いわゆる所のエピソード記憶のみが欠如するという障害。考えれば考えるだけ可能性は出てくるが脳なんて分野流石に今の俺では手に負えないというのも事実。でもじゃあなんで俺はこんなにもこの少女を放つて置けないのか？

「……まあ祭りを一緒に見て回るくらいはいいけど……仮面のせいで美少女かどうかはわからないだろ」

「へ、仮面？わわっ！」

……もう無理やり剥ぎ取ってやろうか

「ほら行くぞ、流石に見覚えがあるとか無いとかぐらいはわかるだろ？」

「覚えてないよそんなの！」

「……迷子センサーにでも連れてけばいいか」

「最低最悪の絶望的エスコートだね!?……あれなんか息苦しい」

仮面のことだけ忘れるペースが異常じゃないかというツツコミをなんとか飲み込んで予想以上に強い我を持つ少女に手を差し出す

「ほら、いくぞ音無」

「音無？誰それすごく可愛い顔してそんな名前だね、私には関係ないけど」
「もうわざとだろ、ついでに最後のそれもわざとだろ」

ネタに使つてくれるな、対処に困る

終始絡みにくい彼女だが差し出された手をノートとは別の手で掴んだ今は何故かご機嫌だ

「随分機嫌がいいんだな」

「そうだね、なんでもか覚えてないけど確かにスーパーハッピーな気分だよ」

「すごい頭がスカスカな感じがするからその表現はやめとけ」

さっきまでできていた謎のエアポケットを抜けて人混みの中にまずから突っ込んで行く。

正直俺は食べたい物を大まかに食べてしまったしやりたいものと言つてもあたりのものすべてが物珍しく、何をすればいいかもわからない。女子が何をすれば喜ぶのかも良く分からない。

だからただただ連れ回した。数歩歩く度にノートを見直して確かめるように名前を連呼してくる音無にその都度返事をしながら露店を見てパフォーマンスを見て少しだけ公開されている展示を見て景色を見て……見知らぬ少女が相手だというのに気がつけば俺はどこか彼女と気心が知れた親友とでも接するかのようにそこに居た。

だが何故なのだろうか、彼女と過ごすのは楽しいのに……ずっと俺の中で主張が続く。構えと言われたから構ったのにそうじゃない！と何か荒々しく叫んでいる。カムクラだろうか？それとも他の仲間なのだろうか？あるいは今の俺が無意識に発動している誰かの才能なのかも知れない。だが眼前の彼女を相手にどうしてもその気持ちをだす気になれない。

「凄いな、多分こんな経験初めてだよ……ひよつとしたら私にはそういうことを表現する才能がなかっただけかもしれないけど」

「才能なんていらんないさ、なんなら忘れないうちに書いといたらどうだ？」

「そうだね、書いておくよ。仮面のことも日向クンのこともこの事も」

……満足してくれただろうか？当初の目的とは違い本格的にただの遊びになってしまったがそれでもこの記憶を失ってしまう少女に、その一時を楽しんでもらえたのなら価値がある……そんな気がして俺は仄かに抱いた満足感を胸に癖のように空を見上げた——見上げてしまった

「なんだあれ？」

祭りの賑わいもあつてか夜空に輝く星の殆どは姿を隠して目に映らない、尋常じゃない俺の視力はそれでもその変わらぬ夜空を写すが今日ばかりは……少し違う。

夜空に浮かぶいくつかの黒点、形は人形……スカイダイビングかなにかならば遠近法

に従って米粒以下の大きさになるはずのそれはこの距離でもその米粒の十何倍モノ大きさを持っている。物によっては何十倍だ。

そんな物が空に自然浮遊しているのか？ そんなわけはない、現にその影は徐々にその輪郭を広げて迫ってきているようにも見える

「——悪い、ちよつと手荒くなるぞ！」

「え？ いや日向クン？」

何やら一心にノートに向かつていた彼女を担いで足に力を溜める。目指す先は大樹。あそこの付近ならば根っこなどに支えられてあんな巨体の着地でも崩れる事はない筈だ。

「——衝撃に備えろ!!!」

こんな祭りの最中にどれだけの効果があるのかはわからないがそれでもとつきにでも反応してくれればとこの場にいるその全てにそう声を掛けて力を開放する

バツンッ！と黒ウサギとの追いかけっこ以来の超速度の中でようやく祭りの光に照らされる距離まで降りてきた巨躯の正体を悟る……あれはジャイアント、巨人と呼ばれる存在だろう。俺が知る巨人といえはそれはゲームの物がほとんどだが唯一神話で知っているモノがある……北歐神話、オーディンやトールといった有名どころの敵となる地の底に住まう人外……ムスベル炎の巨人と霜の巨人。ただの巨大な人間だと思ふ事なかれ、

巨人と呼ばれる存在は数多の物語に見られるがその多くで絶対強者の役割を演じる程の高次元の存在なのだ。

中でもこの神話の巨人は神と渡り合う程の化け物……実際は巨人といえど原典が拡散する故あれが北欧のそれとは限らないがそうでなくともそうところが穏便に終わらないことは確かだろう。

比較的高めの人気の無い広場へと着地すると同時に連続して地震かと勘違いしてしまいそうな震動が連続して起こる。

人氣が少ないのは単に展示スペースや露店の並ぶ通りから離れたところということだろう、巨人の目的が何であれここに来ることはないはずだ。作品も人も重要施設もないここを襲撃する理由はない。最も彼らがただのお客であるのならば杞憂で済むのだが……あんななど派手な登場をしてくれるお客様など正直願ひ下げだ

「ここで待つてろよ？これは絶対忘れるな、書いとけ」

「え、なにこれなんか凄いことになってるね」

「……聞けよ」

言葉とは裏腹にちゃんと手を動かしてくれてるのできつと彼女は大丈夫だろう。

俺確かな安心感と共に続々と増えていく巨人の影へと疾駆した。

背後の少女が書く文章が伝えた言葉の割に長い事も、仮面の下で本人の言葉の通り端

正な顔とその表情を歪に歪めていたことも、ぼそりと呟かれた言葉にも気がつかず。

案の定崩された平和に心を痛めてただ立ち塞がる巨体へと向かって全力で駆けてしまっただけだ。

「でも大丈夫、私には関係ない」

巨軀すら墮とす破壊の神様

巨人が攻めてきた——それだけでこの場は一瞬の内に混沌に包まれる。

無論それは当たり前の話でそのために龍角を持つ鷲獅子にと迎撃部隊がいたりもする。一体こいつらが何者で何の為に襲撃をかけてきたのかはわからないがこう行く先々でトラブルに巻き込まれていると涙腺が緩んでくる。

そして困ったことに現状判断が仰げないというのが一番痛い。黒ウサギも迎撃を主導している存在もどこにいいのかわからないのだ。

ただ倒せばいいと言われればそこまでだがあの巨体をあそこで無闇に倒せば被害が出る。そういう訳で今一行動に移しきれない

「……いや、わかるか」

確かにこちら側のことはサラが偉い立場にいるということしかわからないが敵のことは案外そうでもない。明らかに豪華な飾りをつけ、一回りも体が大きい個体が3体居る。おそらくあれが敵側の主力——

「——なんであいつがあそこにいる？」

目を凝らしてようやく視認が出来るという距離でその三体とサラと思われる人影が

ぶつかり合うのを眺めて居るとその比較的近場に三人の影が見える。

春日部と移動手段を持たないからかそれに連れられるようにしている久遠——
—そして異世界では珍しいにもほどがある長い学ランにストール、左腕に巻かれた包帯に左目に走る傷型のタトウ、灰色と赤色のオッドアイ……田中眼蛇夢。かつての仲間……そして今も尚変わらず仲間であり敵でもあるはずの人物

その彼が二人を巨人から守るようにそこに立っている——なぜだ？

「——クッ!!」

そんな風に呆けて突っ立っていたのが災いしいつの間にかこちらへと吹き飛ばされていた数匹の巨人が俺に目をつけ拳を振るってきた。

咄嗟のことに躲すのは間に合わない。両手を突き出し踏ん張ることなどでなんとかその一撃を受け止めた……が敵は一体ではない。即座に俺を潰すように放たれた二撃目三撃目が強かに体を打ち鞠かなにかのように吹き飛ばされる。

ダメージジそのものでもないがただでさえ遠かった距離がさらに離された
「……こんな所で時間を食ってる余裕は無いんだ」

こうしている間にも巨人の影は増え続けていく……そしてこれは霧か？どこからか聞こえてくる琴の音色に乗ってどこからか運ばれてきた濃霧が視界を邪魔する。一刻も早く久遠達の元へ駆けねばならないというのに——
チクシヨウ

巨軀立ち向かう彼が仲間の下に駆け付けるにはまだ遠い



少し時は遡りトラブルを乗り越え無事に宿舎への帰還を果たしていた春日部は眼前の光景を前に思考を停止していた。

赤い、炎のエンブレムが彫られたヘッドホン……それは彼女の仲間が常に身につけていたもので今回その彼がいなくてもこれを探すためだったはずだ。それ故に彼女と日向はこちらに来ており、それ故に彼女は一層頑張らねばと気合を入れて今回の事に臨んでいた。

……だからこそ目の前のこれがとてもまずいことだというのが良く分かる

「……なんで？これじゃまるで私が——」

消えたヘッドホンとそれを持つ自分……思考が最悪の所まで進んでいくのを自覚しながらそれでも打開の策は出てこない。否、些か誠実にすぎる彼女にとつて隠蔽という選択肢は無いのだ。ただどうすれば理解してもらえるかを考える程の余裕も経験もない。今の彼女にあるのは今の関係が崩れてしまうという圧倒的恐怖。普段はあらゆる生物の力を有するノーネームの救世主でもその実態はただの友人関係に頭を悩ませる少女である。そんな彼女にしてみれば今回の事は致命的だ

震える手が何をするでもなくそのヘッドホンの輪郭をなぞり床へと垂れる

外から生じる断続的な衝撃が建物ごと床を揺らしていることすら今の彼女は気づけない

「耀さん！緊急事態でございま……す？」

けたたましく開けられた扉から黒ウサギが飛び出してくる。本来ならば気付いたはずのそれにすら彼女は遅れてしか反応することができなかった

「……どうして十六夜さんのヘッドホンが……？」

「ち、ちがつ！これは……ッ!？」

しかし少女の弁明の暇はない。ここはもはや戦地であり、安全地帯など何処にも無いのだから。

故に無慈悲にも人の営みを壊して回る巨人の腕がたまたまノーネームの泊まる宿舎

を打ち抜いた事も、そのタイミングが絶妙に悪くヘッドホンが野晒しのまま瓦礫の中に飲まれていくのも彼女にとってはどうすることもできない現実として伸し掛る

「無事でございませるか耀さん!」

「……巨人?」

顔につけられた二つ穴の仮面……その向こうから除く瞳と視線が交錯するのを感じながら宙を蹴つて二人は巨人の射程の外へと退避する

「Yes、彼らは人類の幻獣……巨人族にございます」

「オオオオオオ———!!!」

各地で上がる雄叫び、金属の音に火の気配、震える空気。間違いなく巨人の仕業。それは眼前の個体も例外ではなく、手に持った身の丈に合った長大な剣が二人めがけて連続で振り下ろされる。その度に地下都市全体が悲鳴を上げ軋むように外壁が溢れたいく。あちこちを走る大樹の根がそれらを引つ張り支えてなければここいら一帯に大穴が空いていたであろう惨状に身が震える

先程聞いた話では今この祭りは昔襲撃してきた魔王の残党によって狙われているらしい、それ故に耀はギフトゲームが始まったのかと黒ウサギに問いかけるが帰ってきた言葉は否定……ルール無用で突然襲いかかってきた無法者だと、彼女はそう断定した。

彼女にしては珍しい罵る様な口調には明確な怒気が含まれている。規律を守りゲー

ムの進行役としての誇りがある彼女にしてみればこういった手合いはその行動より一層怒りを煽るものなのだろう

宿舎よりなんとか脱出したのであろう飛鳥も合流し黒ウサギの言葉の通りに飛鳥とデインが思い切り暴れられる地表を目指して春日部が飛鳥を連れて宙を駆ける。

背後で金剛杵を振るいその怒りを千雷としてぶつける音を背後に昇って昇って昇り続ける。

後ろ髪を引かれるように地表へ飛び出すその直前振り返れば真つ平になった宿舎が春日部の目に止まる。あの有様ではヘッドホンの状態等期待出来ない。より悪化した状況が彼女を追い詰める。冷静な判断ができない

「春日部さん?」

「あ、飛鳥……私どうしよう」

その尋常ならざる様子に飛鳥も緊急事態を察する。とはいえ未だここは戦地、しかも敵は規模からして異なる巨人の群れであり、その上激戦区と言つてもいいほど攻防が激しい位置にいる。一旦落ち着こうにも肝心の機動力たる春日部がこの様子ではどうしようもない。ただ空中での的のようにフワフワ浮いているだけ……そんなことではないことはわかっている

「どうしたの!? ねえ、春日部さん!」

しかしいくら問いかけてもまともな反応は返ってこない。普段ならば叩いてでも正気に戻す所だが姿勢の関係上出来そうもない。最悪巨人がこの手頃な的に気がついたとしてもディーンで多少の足止めはできるであろうが……守りながらの戦いとなればディーンでも完璧は期待できない

絶体絶命——脳裏に過る言葉を頭を振ることで消し飛ばし懸命に声をかけ続ける

だが様子は変わらない、むしろ時間が経つにつれ青ざめていくその様子からは悪化しているようにしか見えない

遠くで赤い瞳がこちらを見た気がした

「春日部さん」

巨大な瞳。それだけで自身の身長にも匹敵しそうなほどただただ大きい瞳

「ねえ、春日部さんったら」

1つ、2つ、3つ……徐々に増えて増えてまるで壁を為すかのごとく燃え盛る炎を踏み分けてその巨軀が迫ってくる。

サブカルチャーに強い二人が見れば声を揃えて巨神兵とでもいいそうな光景にしか

し二人はなんの言葉も出せやしない

自分が飛び降りれば自分は助かる。守るのではなく攻めるのであれば自分のディーンは無敵だ……彼女の心に黒い影が過る。だがそんなものは許されない。他ならない前の世界の久遠飛鳥としても、ノーネームの久遠飛鳥としてもそれだけは取るわけには行かない手法だ

とはいえ……このまま行けば囲まれて捌られるままといいのも事実……周囲の戦場も余裕はない、助けはない。黒ウサギは地下で一人奮闘しているし相も変わらず少年日向といえど肝心な時に姿を眩ましている。どうせまともな事になりはしないのだから離れないでいて欲しい。特にこういう時はその思いも一際だ。一番頼みになりそうなら十六夜も今回に限っては出張り用もない……となればやはり自分が春日部をなんとかするしかない

張り裂けそうな罪悪感と嫌悪感を無理やり押し込めて言葉に重みを乗せる……後は喉を震わせるのみ。そうするだけで自身の嫌いな力は今この現状を打破してくれるだろう

「……いい加減にしなさい、春日部耀」

——慣れたことだ。潰れそうな自身の心を無理やり奮い立たせるために嘘をつく……嘘も嫌いなのに生き残るためにその手段を取るしかない自分が彼女は憎い

正確に効いてくれたのか弾かれたモノの衝撃こそは与えられたのかは知らないがただ空中に立ち尽くすのみだった春日部の瞳に確かな光が宿る

「春日部さん!」

「え……私なに……して——え?」

……だが遅すぎた。正氣に戻るとともに巨人による包围は完成している。こうなればデインンによる一点突破の間にも後ろから攻撃を喰らうだろう。上へ逃げようにも高さが足りない。ここまで距離が詰められては上がり着る前に叩き落とされかねない

「ッ、とにかく上へ!」

「う、うん!!」

たとえ巨人の眼前という絶好の場所で止まることになろうとも、回避すらおぼつかぬ足下でただ蹂躪されるだけよりは余程ましなはずだ。

刹那の間に下された判断から二人は高度を上げる————上げて案の定突然伸びてきた巨人の掌に遮られた

そのまま掴むなんて生ぬるいものではなく、潰す勢いで閉じられる五つの指から辛うじて脱出し再び上を目指す……がここにきて春日部は悟ってしまった。もうここから抜け出すことはできない。

春日部一人ならば問題はなかった。自身の頑丈な体はある程度危険な回避や無理な駆動にも耐えるし何より一人というのは動きやすい

……だがそこに一人を連れながらという条件がつくと途端に動きが制限される。軽いターンですら飛鳥の体は振り回されてしまうし何よりのとしての大きさが単純に倍だ。動きの切り返しも二倍の遅れが出る。掌から抜け出すこの動きだけでいつもの自分の動きとの違いを理解してしまうくらいにその差は大きすぎた。久遠たちは選択を見誤った。

動きが軽快で単独でも戦闘が可能な春日部が陽動をし、飛鳥がその間にデインで持つて壁を崩せばよかったのだ。だが二人は別れるという選択肢を見逃していた、考える余裕がなかった。お互いに離れることは見捨てることだと答えが直結してしまっていたのだ

故に春日部胸中を占める今の感情は後悔——まずい、とただひたすらに黒く、暗く埋め尽くすようにその文字だけがただただ羅列されていく。

対して飛鳥といえは高速移動に思考がつかず未だにそこまで頭が回らない。つまりそれは既にこの速度の段階で限界が来ていることに他ならない。先程この場にいる自分たちで解決しなければならぬと出した結論が破綻した瞬間であった

群がるように巨人、巨軀、巨体、巨漢の腕が空に逃げた姿勢のまま切り替えられてい

ない二人へと迫る

こうなってしまうた一番の原因は思考の切り替えの鈍さでも身体能力の欠如でも運の悪さでもなんでもなく……ただノーネームに置いてこの二人が抱える一番の問題、死線を越えるという経験の少なさである。

極限状態を経験することなくこの世界に来た二人……十六夜少年や日向にいつも思考という面で半歩以上も遅れるのは知識としてそれらを知っている十六夜のようにも、一つの物語を^{ドラマ}実際に越えてきた日向のようにも生きられなかった前の世界の平凡さ故である

それ故に今少女達は四方から伸びてきた手によつて暗い世界へと捕らわれようとしている。

だがそれが真に運の悪さによるもので無いのであれば

——運による救いがあってもおかしくはない。

咄嗟に瞳を閉じた春日部のその網膜に瞼という壁すら崩して膨大光量が届いた

「うわっ!!」

悲鳴と共に思わず仰け反ったその身がボスつと壁へと当る……いや、ボスつという効果音のなる壁とは何だ？

少女が刺激された事でうっすらと雫の乗った瞳を開き背後を伺うとつい先程見た特徴的な姿を捉えることが出来た

「田中……ガンダム？」

戸惑い気味な友人の声に飛鳥も遅れながら反応する。最も彼女にとつては一切面識の無い不審者であり、このピンチを救ってくれた救世主である事しかわからないのだが……

「否！断じて否！我が名は田中眼蛇夢——いずれ世界を手に入れる男だ!!」

それでもフハハハハッ!と強く笑うその男に何となく女性として警戒を強める事は忘れなかった



終わつた——そう思った。自分のせいで飛鳥まで巻き込むことになつてしまつた、そればかりが後悔として思考をそこから進ませない栓となつた。

……でも生きている。手の先からは確かに友人の存在を感じるし背中から伝わる熱は確かに自身の生存を証明していた

だが何故なのだろうか。助けてくれたこの少年はとても彼とは似ても似つかないのに……隠し事が多い、もつと仲良くなりたくとも思う仲間の姿とどこか被る

「フンツ、助けが必要な時は呼べと言つたはずだがな。我と同じ宿命を背負いし者にしては随分とのろまな様だ」

……その失礼かつ大仰な言い方からも違いの数々を感じさせるのに……その実自分が感じているのはどうしようもない安心感なのだから自分の事ながら扱いに困る

「眼蛇夢はなんでここに？」

「愚問だな、借りを返さぬままに死なれては寢覚めが悪かろう。故に目障りな輩を潰すついでに拾い物をしただけの事……何よりも今の奴等からは生への執着が感じられん。そんな存在を許しておくような俺ではない」

「回りくどい言い方に少し戸惑うけど……それでもやはり助けてくれたということにはわかつた。だから」

「ありがとう、眼蛇夢」

「……借りを返したただけだ。礼などいらん」

顔を赤らめて顔を逸らしながら言われた言葉はそれでも今までよりは余程分かり易い。

飛鳥を引き上げて支えてもらっていた背を離す。自然下を向く事になった私の視界には巨人が吹き飛んで行ったであろう跡のみが残っている

「……眼蛇夢さん、だったかしら？何をしたの？」

「ほう、俺に問を投げるか女狐——いや、女よ」

私も密かに気になっていたことなのだが言葉の途中で途端に鋭くなった飛鳥の視線に眼蛇夢は後半を濁してしまう

「飛鳥よ、女でも貴様でも女狐でもないわ」

うん、飛鳥は怖い。でもいきなりそんな言い方をする眼蛇夢も悪いと思う

「別に何をしたわけでもない。生き物の相手が得意というだけの事だ」

「あら、春日部さんと一緒ね。だから同じ宿命を……なんて仰々しい言い方をしたのか

ん？」

「フン、なかなか理解が早いな。そうだと——この霧はなんだ？」

「これ……ダメ、鼻が働かない」

「これが邪魔してるの?」

飛鳥の間に首を縦に振る。視界も悪いし急に出てくるところもおかしい。多分だけどここれも魔王の残党の仕業……のはず。

「あまり離れるなよ小娘ど」「飛鳥よ」——飛鳥と小娘「春日部耀」——耀
……うん、離れるなよ」

心なしかしょんぼりして顔からも覇気を消した彼はやはり創に似ている気がする。それが気になって仕方がない

「とはいえ……ここまで視界が悪いとなると些か行動に移るのが躊躇われるな。我が悪しき力をこんな形で封じ込めるとは……フン、まだまだ現世も捨てたものではない」

「ごめんなさい、あなたの言っていることがいまいちわからないのだけれど」

「理解しようなどと言う方が烏滸がましい。齡十そこらの人間に我がことが理解できるか」

「じゃあ眼蛇夢は何歳なの?」

周囲の警戒すら一瞬忘れて思わずかけた言葉に眼蛇夢が固まった

「……フ、そんなものはとうに忘却の彼方へとやった。俺は田中眼蛇夢。今はそれだけでいい」

「じゃあ人間じゃないの?」

「春日部さんはなんでそこでテンションが上がっているのかしら？」

む、失礼な。別にテンションなんか上がってない。ちよつと気になっただけだ……本当にテンションなんて上がってない

「……わ、我は田中眼蛇夢、いづれ世界を統べる男」

「……じゃあ性別はあるんだね。てことはやっぱり個で繁殖するんじゃないんだ……やっぱり箱庭世界の種なの？元となった伝承とかある？どこのあたりにいるの？どんな種族？色違いの目は種族の特徴か何か!？」

「……うん、落ち着きましよう春日部さん。眼蛇夢くんも困ってるわ」

……ツ!?!——ちよつと取り乱した、飛鳥に軽く叩かれるまで気がつかなかった
「……眼蛇夢……くん？なんだそれは俺の事か？いや待てだとしてなんだ “くん” とは！さつきまでとは呼び方が違う……一瞬で呼称を変えるだど？なんだそれはどんな生き物だ、どこに生息している——いや落ち着け相手のペースに飲まれるな田中眼蛇夢。お前は世界を統べる男……そうだと、マガGも言っているではないか落ち着くん
だ田中眼蛇夢！」

……何故か眼蛇夢まで夢の世界に飛び立っていた

「なんでかわからないけど眼蛇夢君までこんな調子だし……でもちよつとこれ面白いわね」

「飛鳥、趣味悪いよ?」

「わかつてるわよ、ちよつとした冗談、本気にしないで」

……絶対本気だった。今のはノーネームのノリだった。

「ところで春日部さんは何かわからないかしら? 鼻が利かない他に何かない?」

「なにかつて言われても——あ、何か聞こえる……かも?」

「……聞こえる?」

うん、と頷いて希薄なその存在に意識を集中する。逆に視覚と嗅覚が潰されているおかげで集中しやすいというのは何となく皮肉な感じがする

「……琴かな? 多分弦楽器の音だとおもう。余り詳しくないけどなんかそんな感じがする」

「琴……それが原因なのかしら?」

「思い返して見る限りは霧よりも前には聞こえてなかった……と思うんだけど」

「確証はないのね。でもできることもないのだし今やれるとなつたらその音を辿っていいくしかないと思うのだけれど……」

うん……いや、不思議な霧とはいっても霧は霧。それなら……

「飛鳥をお願い」

「ム……いや、ちよつと待ていきなり何を——」

「何が起きてるのかわからないけど……でもこれが霧なら——吹き飛ばせる！」
……はず！」

単独で空中に浮く眼蛇夢に飛鳥を預けて少し上昇したところでグリーから貰った風の力を使って大気をまとめていく。溜めて、溜めて、溜めて……大きな塊にまでなったそれを前方に向けて——

「——えいっ!!」

解き放つ。嵐の夜の様な轟音と共に風は目論見通りに霧を引き裂き吹き飛ばすが……通り過ぎた後から次々と押し寄せてきてすぐに元へ戻ってしまった

「……うん、失敗」

「貴様は馬鹿か!？」

むむ、失礼な

「馬鹿っていった方が馬鹿なんだよ」

「いや……うん、もういい」

一体なんなのだこいつらは、とは眼蛇夢の言。

やはり頭を抑える様まで似ている。

「眼蛇夢はなんかわたし達の仲間に似てるね」

飛鳥からのギョツとした誰に!?という反応を少し愉快に思いながら眼蛇夢からの反

応を待つ……うん？なんか急に雰囲気が変わった……？

「なかなか……興味深い事を言う。我に似ているか……そいつの名は何と言う？」

「……創——日向創だよ」

眼蛇夢が俯かせていた顔を上げたとき、私は思わず飛鳥の手をとって飛び退いた。

その顔があまりにも私の知っている顔とかけ離れていたからだ。その顔だけは彼に似ているとはとても言えないような表情だったからだ。その顔が途轍もなく怖かったからだ。だから飛び退いた。

「そうか……貴様らは奴の仲間か……フン、傑作だな。とんだ茶番を演じたものだ、あの女の悦びそんなことよ」

「……眼蛇夢くん、あなたどうしたの？」

「なに、気にすることは……と言っても素直に聞くような人間ではなさそうだな」

「創の知り合い？」

私の問いは彼に鼻で笑い飛ばされた。

答えるまでもないと言わんばかりの、愚問だなど切り捨てられたかのような……言葉に出さずとも彼の纏う空気が何よりも如実にそう語ってくる

「我が名は田中眼蛇夢……日向は俺の敵だ。故に貴様らも……俺の敵だ」

眼蛇夢のその言葉と共に背筋が思わず粟立つ様な強烈な嫌な感じが私と飛鳥を包む。

どこか私がおじやないかのような、途轍もない不安感に包まれながら飛鳥に声をかけようとして……ほぼ同時に飛鳥の牙が私の首筋へと喰らい付いた

「——飛鳥……？」

優雅——いつもそうだった余裕を崩さなかった彼女の顔に何故か今はその色が無い。全く反対の必死さと凶暴性をその顔に浮かべながら私に噛み付いて暴れるその姿は……紛うことなき『獣』そのものだった

素直な子は良い子、みんながみんな素直なら

血が滴る。遙か遠い地上目掛けて、溢れた命は怪我の存在を教えながら消えていく
なんで怪我をしているの？なんで彼女がこんなに近いの？

自分には似合わないような真つ赤なドレスと同色に喉元を化粧して、彼女は私に抱き着
いている

「飛鳥……？」

——そんな訳はない。これは……これは嘔み付かれているのだ

「ツ!!やめて飛鳥!!」

……力が入らない。力を入れてしまえば彼女は耐えられない、私は彼女を耐えること
ができる。

力を込めてしまえば彼女は落ちてしまう、私は助かることができる。

力を抜けば彼女の牙はもつと深くまで刺さる、彼女なまには私を裁く権利がある。

——でも違う。どれも違う。飛鳥を助けないと、ヘッドホンをなんとかしない
と、創に伝えないと、黒ウサギを呼ばないと……現状を今度こそ打破しなければ、私は

まだ倒れるわけには行かない。私はそのためにここにいる。みんなに報いたいからここに来た。だったらここで膝を折ってどうするの？

「……貴様には効いていないのか？」

「やっぱり飛鳥に何かをしたのは……貴方なんだね」

「フン、小娘にはない。貴様にもしたのだ……がしかしどういう訳だそれは？我が力は如何な存在といえど問答無用、あらゆる抵抗を無視して効果を発動する……例外はない」

……未だにその歯をくい込ませる飛鳥の異常はやはり彼の仕業……でもならば先程巨人を吹き飛ばしたのも同じ技なのか？と考えると何かが違う気がする。

じゃあ話からすれば私も問答無用でこうなっているはずなのに……なんで私はこうならないの？動物と話せるから？そもそも飛鳥はどうしちゃったの？

……わからない。何をすればいいのか、どう動けばいいのかわからない

いや、最善の手ならある。飛鳥を一先ず安全なところへ送ること……これが眼蛇夢の仕業ならひよっとしたら距離を離せば飛鳥ももどに戻るかもしれない。でもダメだ。距離を置いてても飛鳥が戻らなかつたとき、彼女を守る人がいない。未だに巨人との戦闘音は聞こえてくる。もし彼女がこんな状態でそれに巻き込まれるような事があれば

……そんなことはできない。かと言ってこんな状態の飛鳥を抱えたまま戦うことも不可能だと思う。眼蛇夢は簡単に巨人を吹き飛ばしちゃった……その時点で彼は私よりも強い……悔しいけど自分ひとりでの解決は不可能だ

となれば一番頼れるのは黒ウサギ知識もあつて実力もあつて何より頼れる……けど多分眼蛇夢は創の関係者なのだろう。いや関係者というよりは仲間に違いない。ならば創に頼るのが正解なのか—————そうとも限らない。何より居場所がある程度特定できる黒ウサギと違って創の居場所はわからない！

「我慢してね、飛鳥。私頑張るから」

反応はない、今も変わらず彼女は牙を突き立てたままその進まぬ先を無理矢理ねじ込むように微動を繰り返すだけだ。

飛鳥から視線を外してこれからのことを考える。ひとまず地上へと降りるのは確実としてやはり問題はこの霧……巨人こそ眼蛇夢が吹き飛ばしたから居ないもののこの濃霧では既にどちらが地下都市に繋がる方角なのかすらわからない……私一人の力では限界があり過ぎる。

……でもそれなら今と同じだ。誰かを頼ればいい。私が彼に言ったことだとも……だから認めよう。今の私には誰かに頼られるだけの力がない

「だから力を貸して……グリー……イ!!」
「……なんだ？」

甲高い声が辺りから木霊する。眼蛇夢と私にだけわかる言葉……驚獅子達が私の言葉に反応して互いに呼び掛ける……協力意思の表れ。

その証拠に周りの空気が渦巻くように四方へと移動していく。もちろん私も負けじとどンドン流れていくそれを集め一塊へとまとめた

「……ッ！逃げる気か!!」

眼蛇夢もここに来てこの風が攻撃の意図で使われるものではないと察したみたいだ……でも遅い。きつと同じ世界から来た創なら私が思いつくよりも先に妨害に来ていた。

彼の使うギフトの正体は掴めないがこと掛け合いに関して負けてさえ無ければなんとか出来るはず

「——ええい!!」

私が風を解き放ったところは先程と同じ。これだけでは霧を晴らすにしても範囲が狭過ぎる……しかし今回はそれでは終わらない。周囲から同様に、指向性を持つて放れた同様の風が流れを生み、風が風を呼び起こして絶え間なく吹き荒れていく。

さながら天へと昇る龍の如き風の流れはその勢いのままに霧を飲み込んでいく……

後はここを抜けるだけ！

「クツ、正気か小娘！」

もちろん風の外壁は霧を飲み込むように一度私を捉えたら離すことはないだろう。もちろん巨人が居たわけだから巻き上げられた瓦礫や廃材も少なくないはずだ……でも今ここをなんとかできるとすればそれは私しか居ない。

思い切つて風の壁に身体を叩き込む。通常のそれよりも十数倍は頑丈な体となけなしの風の操作で飛鳥を守るが予想以上に進まない。

飛鳥のドレスがたなびいて風を受け止めているせいだろう……なら考え方を変えよう。どうせ進まないのなら、この風に乗つてしまえ。巻き上げられ、放り捨てられようが外にさえ出ればそこから竜巻を迂回してでも黒ウサギの元に行くことが出来る

「行かせるものか!!」

しかし私悲しいかな……ここまでしても状況を脱することはできない。

私と似たような力がどこまでのものなのかはわからないが眼蛇夢もこの風の中、私を追つて飛び込んできている

しかし私と言えばギフトの力も、身体も全て防御に回している。追いつかれても片腕すら外すことはできない……しかし運は私に味方をしたようだ。何やら不自然に私のすぐ横を掠めるようにして飛んでいった瓦礫が眼蛇夢へと飛んでいき直撃こそしな

かったものの本人はその後何かに意識を取られるようにして別の方向へと消えてしまった。

……正しく幸運だった。たまたま風の流れが不規則なところに瓦礫の集団の一部が捕まってそれが器用に大砲から飛び出た砲弾のように眼蛇夢へと向けられたんだ

しかし気を抜けない私はそのまま歯を食いしばって振り回されながら、それでも体に細かい傷を刻みながら嵐から抜けるその瞬間を待つ。

抜けさえすれば助けることが出来る、何とかなる……！

——ただそれだけの淡い希望だった

「いきなり嵐の中とかシャレにならないよね。記憶喪失設定を引き継いでたらほんと絶望的過ぎて別の意味で昇天しちゃうような状況つてやつよ」

「へ？」

……呑気な声。陽気ではなく、寧ろどこか剣呑さすら感じさせるのに表面上はどこまでとつてもただただ状況を本当に理解しているのかと問いたくなる……そんな声。

釣られて制限された中でも無理やり目をそちらへ向けた……飛び込んできたのは黒いクマ。

正式には黒いクマのお面。と言っても可愛げのかけらも感じられないつり上がった口角に今時ここまで悪どい目つきをした悪役もいないだろうというほど邪悪な赤目のそれはどう見ても露店で買いましたという風体ではない。

——あと今時いないとは言ったがおそらく違う時代から来たであろう十六夜は

割とあんな目つきだった。

とはいえひとまずそんなことは置いておく。ここで取り上げるべきはそんなことではなく、ましてや彼女に現在進行系でガスガスと礫が当たっていることでもなく、寧ろそこまですてなお平常を貫くその姿勢である。

言うまでもなく私、春日部耀は普通じゃない。元の病弱さはこの際置いておくにしても元の世界では数多の動物と友好関係を築き、こちらに来てより尋常じゃない友人にも恵まれている。友達の力が私の力と言えばどこの主人公なのかと思ってしまうが誠にそのとおりな私は明らかに見た目にそぐわない身体能力を誇る。

飛鳥に負担を与えないようにしているが故にこうして防御に専念をしているが、本来嵐の中に突っ込もうが私はまず怪我なんてしない。強風だろうが変わることのない俊敏さと動体視力で飛んできたものは躲せるし、そもそも並大抵の物なら躲す必要すらない位体皮は頑丈だ。今は飛鳥の歯を傷つけない様そこまで意識して硬化することはできないものの、それにしても細かい傷しか入らない現状を見て貰えればわかるはず……じゃあそんな私のすぐ横で直立不動のまま綺麗にこちらを見れる角度を維持して無傷で風に流れる彼女はなんなのか？

「あ、何その信じられないものを見たって顔？あ、ひよつとしなくてもあたしってば有名な人？やだもうサインが欲しいなら雑誌とペンよろしくね〜！」

「え、いや——なん——」

風の凄まじさに自分の言葉すら流されるというのに眼前の少女はここでも普通を装う。これはいよいよ無視できる存在ではない、間違いなくこの巨人の襲撃に関わりがあるはずだ。

しかし今の私にそれを問いかけるだけの余力はない。ただ一方的に紡がれる言葉の全てをただただ受ける

「ところでその子何?!? うわ、すごー! 少女としてどうなのその表情! ゾンビ映画じゃねえつつの! 作品間違えてんでしょ!」

人が何もできないのをいいことに言いたい放題……!

「でもまあそれよりも問題は自分の方だよねー、何もできない、為にならない、活躍できない、結果を残せない、たった一つのヘッドホンすら守れない、そして今すら行動に移せない……無い無いづくしの無い無いだらけの無い無いじまい……笑っちゃうよなあッ!」

「えー、何それ笑えないですう。キャー、マジヤバ!……つていうか本当にどう仕様もないですよね……崖つぷちというか既に奈落の底というか」

「私の調べによるとノーネームー要らない子であることは間違いないですね、言つてしまえば典型的な口だけ……フム? いや『友達を作りて異世界にきましたー』等と言うだ

けあつて寧ろ有言実行？友達だけ作りに来たのならばしょうがない、困った時に助け合
わない友達、困っている時に見捨てる友達、困っている時にどん底に突き落とす友達
……アア、素晴らしいよ。それこそ本来友情のあるべき姿だ」

「だからこそ私様が反応したのだろうよ、なんと美しきかな————ぶつ壊したくな
る前に既にぶつ壊れてるなんてどう仕様もないほど絶望的じゃない!？」

「うプププ……笑えないよねえ、作ったものが完成時既に不良品！設計図に欠陥があ
るのか素材に問題があるのかあるいはその両方か……どっちだろうねえ？ああでも人
のものを良かれと思つて盗つてきてくれるような素晴らしい友達も居るんだからきつ
と素材が悪いんだね。言葉一つで人心を操る魔女、強引な合意と言う形で無理やり異世
界に引つ張つてくる愛玩動物、自分の世界すらおもちゃ箱にしか見えない欠陥品、人類
の可能性を束ねても尚たかだか幸運しか持たない彼に及ばない裏切り者……うプププ
プ、確かにこれは素材がいけなかったんだね、ポイしちやおうか？いいんすか？やっ
ちやつても、いいんすかあ？」

——うるさい

言葉が刺さる音が聞こえた。

わかったような口をきく……そんな風に考えて寧ろそんなわかりやすい自分を強く意識させられる

もはや眼前の少女なんて頭にはない。耳に入ってくる言葉は全て良く知る誰かの言葉へと変換されて、それ故深く抉り込むように体へと入ってくる

気持ち悪い何かが体を蝕んで、でも蝕まれた所はそれを快樂だと受け取って……心が安楽を求めて疼くのだ

今一度全てを捨てれば……と考えてしまうのだ

皆が墮落すれば何かを考える必要はないと……そんな風に滲み出てくる膿のように！

……黒い影を纏った私が口元を歪めてそう笑うのだ。私はそんな風に笑わない、そんなことなんて思わない。こんなのはおかしい！おかしいのに……言葉が出てこない。肯定する言葉はあるのに否定する理屈はない。これ考えたのが自分なのだから当たり前だと少女は言うけれど……私は認めたくない。ならば誰が言ったのか？黒いクマの彼女か？影を纏った私か？それらはなんなの？

考えるまでもない、絶望だ

女狐め

「……へ？」

風が止んだ……右も左も上も下も前も後ろもわからぬ世界から飛び出し、再び重力の力を受けて下へと引つ張られる

「え、ちよつと何!？」

「あ、飛鳥!？」

ほぼ同時に胸元に抱いた少女から久しぶりに感じてしまう理性を含んだ声を聞いた慌てて風の操作にまごつきながらも何とか姿勢を直す。

上を見上げれば例のお面の少女と眼蛇夢が向かい合っている。

「あれれー? 邪魔するの? なんでき、君だつて彼女たちを襲つてたじゃない?」

嵐の中で聞こえた声はやはり彼のものだった。

……でもなんで敵対していた私達を助けたの?

飛鳥も元に戻して……何を考えているの?

「春日部さんあなた血が出てるじゃない!」

「落ちていて飛鳥、今そんな場合じゃ——」

「いいから早く何処となり消えんか女共!」

飛鳥が今度は自分の喉元を濡らす血に驚いたり何時までもここにとどまつたままのわたし達に眼蛇夢が怒つたり……欠片もお互いの考えが理解できない。

結局飛鳥はどうなって眼蛇夢なんであそこにいるの?

「おいおい、あいつらを助けようってかあ!? そいつアちよいとひどいんじやねえの?」

「その煩わしいしゃべり方をやめることだな、さもなくてその口……強制的に閉じさせろよ。」

「うわつ、それあんたが言う? ないないないないありえないから!」

眼蛇夢が敵だと思ったら飛鳥がおかしくなって……今度は変な女の子が現れて変なことを言つてしたら眼蛇夢が助けてくれて飛鳥が治つて……なんなの?

「……いまいち状況がつかめないのだけれど……あなたは誰なのかしら? そのお面は何? そして私達に一体何の用?」

「キヤー、質問多過ぎてびっくりですうー。ムリムリあたしには答えられな……というわけでもないのですお答えします。私は——あれ? 誰だっけ?」

「ふざけているのかしら……?」

「……たぶん?」

私に聞かれても私だつてわからない。

巨人のことだつて終わつてないのになんでこうも短時間に色々な事が重なるのか

……

「……早々に消えろ女狐。貴様としてそんな状態で何ができるわけでもあるまい」

「あつら失礼しちゃう。わざわざ応援に来てあげたのにそんな言い方つて超絶望的じゃ

ない、何それご褒美？そういうつもり？ごめん！私はアンタのこと心の底からどうでもいいから！……でもまあそうね。種ならもう植え付けたし……もう十分ね」

……やはり眼蛇夢と彼女は仲間なのだろうか……ならばなんで彼はわたし達を助けるような真似を？ 大体——

「——つて飛鳥!？」

「どういうことか全くわからないけれど……そう簡単に逃すわけがないでしょう？ やりなさいデイン！」

いつの間にか取り出していたギフトカードより赤き伸珍鉄の巨人を呼び出して空中でそのまま飛び掛らせる。支えもなく単純な動きしか出来ないとはいえデイン後からは本物……ましてやその巨大さは巨人にすら引けを取らないものでもちろんそんなものが空から襲いかかってくればひとりの少女にできることなんてない。だけれども

……

「どけ」

彼女は一言聞き覚えのある声でそう命令するだけでその危機を乗り切ってしまった。

デインがその巨軀を高速で小さくし彼女の脇を通ってそのまま地上へと落ちていったのだ

「それはあの時の日向くんの……？ なんであなたが!？」

……そうだ、あれは創の声だ。感情のない、その癖何故か引き込まれるような危うさこそ彼の印象とは似てもつかないが声自体は確かに創のものに似ている

「うプププ……なんで？なんでだつて？ちよつとは自分で考えなさい！これ宿題だからね！次回までにはちゃんと考えとくんだよ？それじゃ今度こそほんとにバイバーイ！」

少女はそして急に目の前から消えてしまった。いつの間に、どのように消えたのかすら理解が及ばない……異常だらけの彼女……その言葉は今の私には痛すぎるほどに突き刺さり明確な傷を残していった

そうして残った眼蛇夢はと言えばこちらを一瞥してそのまま何処かへと消えてしまった

結局何がなんだかわからぬまま。何も出来ず何も残せず……ただ一人勝手に怪我をして巨人のことにすらまともに関わられなかった……私は本当に何をしているのだろうか？

霧が晴れたアンダーウッドからは鮮明にあたりの様子が見渡せる。

無事な所、巨人のせいで大穴があいたところ、いろんな生き物が協力して物をどかしているところ、巨人の死体に怪我人が運ばれているその様子……この営みの中に私たちは協力するためにやってきた……その筈なのに

——
なんでいつも私はその中に入ることができないんだろう

飛鳥が心配そうに見てくるのに笑顔で返しながら私は……自分が少し嫌いになりそうだった

人に生まれたことを嘆いた事はない

白い壁が迫る。右手を合わせ受け止める。

白き鉄槌が落ちる。壁を掴んで投げる。

白さ溢れる。迫るそれらを跳んでよける。

何故か途中から増えた巨人は今や一つの群れのように俺の周りにウジャウジャと集りまるで俺の行動を阻害しているかのような様相を見せる。しかもそれが春日部たちに近づこうとすればするほど強まるのだからこれはもはや何者かの仕込みだと断言せざるを得ない。

いくら身体能力が高かろうが決め手に欠ける俺としてはこの不安定な地形でよりもよつて重さも大きさも数もある敵と戦うというのは予想以上の苦戦を強いられるもので正直徐々に俺の体力も切れてきている。

これが十六夜ならより出力をあげた上で周りに被害が行かないように調整するのであろうが所詮借り物の俺がこれだけの身体能力を器用に制御できるはずもない。黒ウサギよろしく雷は出ないしデーンと言った素晴らしい相棒もない。春日部のように

軽やかに飛ぶことも出来ないから振り切ろうと思えばただ馬鹿みたいに直進するしかない。実際黒ウサギとの追いかけてこでもその通りだった。

要は毎度恒例の手詰まりと言うわけだ。これが祭りでもなく、また退つ引きならぬ状況だというのであれば思い切つてここら一帯が廃墟になるのも構わず我武者羅に拳でも振るつてやると言うのにただ俺が足止めされているだけというむしろここまでの数の巨人を釘付けにできている分上出来とすら言えそうな現状それが認められる訳もない。

不安があるとすれば巨人の海に埋もれる前にチラリと見えた田中の存在だが……俺にはいつもの壮絶な嫌な感じが感じ取れなかった。

普段ならばセンサーでもついているのかと過剰反応するそれが機能していなかったことと春日部と仲間を信頼してあの話をしたという事実がいまいち行動に踏み切れないう理由だ

「——いい加減にしろつての!!」

いくら捌いても殴つても飛ばしても体格通りのタフネスで蘇ってくる巨人……正直こうして余裕そうに振舞つていても限界なのは本当なのだ。言った通りあたりは一面

の白。こんな巨体がひしめき合っていると言うことは自然俺が動くスペースは減っていく。投げたり吹き飛ばす度に微妙に広がったそこに身を投げてこそここまで耐えているが吹き飛んだ仲間や倒れた奴にすら遠慮なく突っ込んでくるコイツラのアクティブさには頭が上かららない。要するに非常に微妙にだが……潰されそうなのだ

流石に密着状態からこれだけの数の巨人をまるごと吹き飛ばして動く程の力を出す
と被害は一帯で済まない故に絶対に選ぶことはできない。

せめて棒状のものでも手に取ることができれば、あるいは炎があれば花村や辺古山のギフトが使えるというのに大概のものは手に取る前に潰れされていく。いつの間にか増えていた罪木のそれもその内容は応急措置の様な戦闘を継続する為だけのギフト……攻撃性は皆無な以上ここまで来るといい加減自分に胸を張れる自分になるという目標が揺らいで力を求めたくなる。

——そして何よりも霧だ。これのせいで巨人の海の外の様子が掴めない。

この霧と積極性溢れる肉食系巨人どもを誰かがどうにかしてくれれば……あるいはと言った感じなのだが。

「……だめかなあ？」

再び迫る拳にいい加減涙が溢れそうだ……もちろん冗談だが——

「——あ」

足が滑って——馬鹿か俺は!?

一瞬で開いた空間が閉じられていく。ポツカリと空いた穴に水がなだれ込むかのよ
うに、中心にいた哀れな俺は一瞬で飲み込まれた

——非常に暑い

人肌というのがなんとも憎いことにサウナなんて目じゃない厚さだ。しかも蒸しつ
気も凄い。

いやそれはまだ花村の力でなんとでもなるのだが……俺と同じようにスクラムを組

んで結局動けなくなっている巨人たちの呻き声が気持ち悪すぎるのだ。身体的には問題がないのに精神的にダメージがデカすぎる

ひしめき合う巨人の中で動くこともできずしばらくそうしていると今度は大きな風の流れを肌を感じ取る。この密集状態の巨人の中すら通り抜けてくるあたり凄まじい規模の風だ。そしてそれと同時に自身の中の何かが勝手に起動し更にまた先程は感じなかった不安感が体の中を過ぎつては何かを伝えていく。

たった一つのアクションに対して引き起こされることが多過ぎやしないかと思ったがまあそんなものだと言われればそうなのだろう。元々誰が決めるわけでもないものだ、ならばそういうこともあるのだろう。

だが見過ごすわけには行かないことにその起きた変化の中に絶望の香りが合つたとなれば俺はいつまでもここで眠っているわけにも行かないのだ。しかし体を動かす余裕もなければ何をできるわけでもない、ミツバチの巣に襲撃をかけたスズメバチでもあるまいに全くままならないもので幸運という才能だけは再現できていない説がいい加減現実味を帯びてくる

「……いや、最終的に都合がいいっていうのは結局幸運つてことなのか？」

俺を潰さんばかりの力で押し寄せてきていた巨人達の意識が急に俺から逸れ、身動きの取れなかった状態からいつきに開放される。

なればもう遠慮は必要ない。潰れてでも俺に向かつてくるあの意志さえないのであれば何処にこいつらを弾き飛ばそうが被害はない。その先でまた誰かが対処するだろう。

ああなんと素晴らしきことか自由というのは——腕を目一杯引きしぼり、体を弓のようにしならせて、槍が一直線に弾けるように、その拳を弾丸の如く打ち出す

火山が噴火したかのような轟音と共に溶岩ではなくその白き巨体達が宙を舞い勢いと吹き荒れる暴風にさらわれて流されていく。

先程までの一心不乱具合はどこへ行ったのか戸惑いという感情を見せた巨人たちにそれでも俺は容赦なく第二撃、三撃、四撃と繰り返し道を切り開くと先程までの鬱陶しい霧の消えた世界を駆け抜けた。

霧が晴れたことでしょうか周りの状況が見える。

風の招待は巨大な渦、恐らく春日部やグリーのギフト。気色悪さの元であったが今は既にその嫌悪感も感じない。なればそこは除外だ。

そのさらに先ではよくわからぬ鎧と仮面の男……いや女がサラの前に陣取り迫り来る一段と強靱そうな巨人達を屠っている。

地面に空く穴からは時折雷鳴が響くので恐らく黒ウサギはあそこ、グリーかどうかまではわからないがあちこちでグリフォンたちが主だつて様々な生物や騎手を率い降り

注ぐ巨人に対応している。どこもかしこも人は足りていて——違う違う違うそこじゃない！この不快な音、頭に來るこの琴の音色は——頭上!!

「そこかアアア!!」

濃霧は消え視覚は戻った。聴覚だけで言えば確かに不思議な音色ゆえに辿ることは出来ないが……こと嫌な感じに置いて俺の知覚能力は普通のそれとは違うのだ。

地面をひと蹴りすると自身の体を急な浮遊感が襲い、重力を割いて上へ上へと昇り詰めていく。上も上……その先が音の発信源、自分で打ち上げた巨人の体を蹴ることで微調整しながら見えてきた目深ロープへとさながらミサイルの如きスピードで迫り蹴りを一発見舞ってその手に持つ琴を奪って行く。あまりの速度に甲高い音が自由落下の音を書き消すほどの状態の中琴を追って降りてきた目深ロープと軽いドッグフアイトを繰り広げて落ちていく。何やら不気味な存在だが今はこの琴を守る事が先決だ。最悪壊すことも視野に入れながら抱え込んで片手でこちらの背後を取ろうと奇妙な軌道での落下を続ける相手への牽制を続けた

その内ようやく地面間近というところで目深ロープは離れてどこかへと消えていく、空中でジャンプなどという器用な真似ができないためそれを目で追うしか無い俺は今回の首謀者、あるいはそれに近いであろう存在を捕まえることは出来なかったがしかしこの琴もただの琴ではあるまい。引いていく巨人の群れと徐々に落ち着きを見せてい

くアンダーウッドを見て確信する。

今回のこれは明らかにわかっていた襲撃だ。アンダーウッドにはそれを確信するだけの何かがあつた……だからこそ俺たち『対魔王』のコミュニティが招待されるに至つたのだ。

……だとすればこれで解決だとは思えないな——つと、音無を放つておくのも良くないか。あいつを拾つてそのままみんなと合流するとするか

流石に耐久戦が堪えたか若干気だるい体に鞭打つて俺は本日何度目か分からぬ跳躍をして暗くなつた空へとその身を投げた



宿舎……要は黒ウサギが戦っていた地下都市にある今日の寝床の事だ。俺が音無を探したあとみんなと合流したのは規模の割には少なかつた被害の中に運悪く入つてしまった倒壊した宿舎跡地であつた。

結局一人で逃げたのか記憶がまた飛んでどっかに行つてのか、しかしあたりに巨人のいた形跡もないことから無事だとは思うが音無涼子はいぞ見つかることはなかつたのだ。諦めて琴をサラへと押し付けてから戻つてきた俺にはどうも眼前のお通夜の様

な空気が理解出来ない

「……どうかしたのか？」

「あ……日向さんですか」

……酷い言いようだ。ジンにしては配慮に欠けたそれはそれほど余裕がないということなのか？

「……ひなた君は確か仲間の才能が使えるのよね？ならその中にモノを直せそうな才能はないかしら!？」

「あ……は、創……」

「え、いやモノを直す？」

すごい剣幕で詰め寄ってきた女子二人が差し出してきたのはどこか見覚えのある炎のエンブレムが特徴のヘッドホン……その残骸である。

なるほど、あの十六夜が屋敷を探しても見つからないわけだ。十六夜は女子の荷物を漁るような事はしないだろうからな。たとえ分かかっていてもそれが必須であると判断しない限りは動くことはない——となると

「ああ、三毛猫のがバレたのか」

「——日向さんは知っていたのでございますか？」

しよぼくれた三毛猫を抱き上げた黒ウサギが洒落にならない目をしてその鋭さのま

まに俺を貰ってきた

「知ってたよ。ちやうど黒ウサギに頼まれてタオルを浴場に運んでた時だったからな。三毛猫がことに至ってたのは」

最も気づいたのは十六夜が騒ぎ出してからだけだな、と続けて残骸を指でつまみ上げる

「確かに俺は仲間の才能が使える……けど原理がわからない。現に使える才能といえば剣と動物との意思疎通位のもんだ」

無論俺のあずかり知らぬところで発動していたのであればその限りではない。発動がわかりづらいもの筆頭で言えば幸運などもある。

「それにメカニックとはいえ無から有は作れない。こっちの世界でヘッドホンの機構を再現する部品を見たことはないし多分だけどこれ元から大分緻密な作りだ」

暗に出来ないと伝えると明らかに肩を落とした春日部とそれでも食って掛かる久遠とで性格の違いが出る

まあ春日部の場合は時たま久遠よりも熱く激しい時があるのでこれが逆だとしても違和感はないのだが

「100パーセント出来ないワケじゃないんでしょう？なら挑戦の価値はあると思うわ」

「俺はないと思う、言つてしまえば元から壊れてたもんだ。形まで壊れたのなら作り直したのではないぞ」ぞしたつてしようがないだろ」

壊れたものを使い続ける酔狂、その根源にあるのは愛着だ。気持ちと言い換えてもいい。それは例えば形見であつたり繋がりであつたり……十六夜にとつてそれが該当するかと言われても俺にはわからないが該当しないのであれば髪を纏められる似た形状のカチューシャを使い続けてもらえばいい。もしあるのであれば一度壊れたものを不器用ながら直しましたなんて言つて渡されても困るだけだ。それならばいっそ残骸をお守り袋にでも入れて首からぶら下げていてもいいくらいに……仲間との絆としてその品を受け取つてくれるのであれば端から不可能な直す努力よりも可能な別の可能性を求めるべきだ……とはいえそれを聞いてくれるほど擦れては居ないだろう。黒ウサギを含めてノーネームは絆の形にこだわる傾向にある。絆に飢えているとも取れる。過去に縋つているとも取れる。無論無理もない話だが……

「今回に限つてはヘッドホンにいつまでも時間を割けないのはわかるだろ？」

「でも日向さんがこのことを言つていたのなら少なくとも壊れるようなことには！」

「確かにそうだな、でもそれは結果論。大体十六夜本人がこういつた可能性を想定してないわけが無いしな」

……そう、十六夜ならばわかつてたはずだ。何を考えてそのまま送り出したのかまで

はわからないが……

「俺なら直せるから直した……別にそれでいいならいい。ただ春日部が用意したいのは誤魔化すための物じゃなく謝意を示すための物なんだろう？ だったら不可能を追求して出来ませんでしたよりも可能を求めた方がいいぞって事だ」

……まあ、嫌な考え方だけだな。

「代換え品でいいのならば用意できないこともありませんよ」

俺の言葉に若干落ち込み気味な空気をまたどこか軽い中身の無いまんま空洞なカボチャの声が吹き飛ばす。完全な逆恨みだがしかしイラつくその声に付随して響く足音は3つ。ジャック本体は宙に浮いているので一人はサーシャだとしても後の二人は誰だろうか……

振り返った先には高めの身長的女性が二人。一人は白い仮面の淑女？ 先程巨人を相手に無双をしていた人だと思われる。そしてもう一人は先程あつたばかりのサラ。今回俺たちが呼ばれた理由の一つとしてアンダーウッドを狙う魔王の眷属、生き残りの巨人の存在を遅れて教えてくれた北のサンドラの姉だ。

「どういふことだ？」

「こちらのフェイストレスの力にございます。彼女の事は詳しくは話せませんがもしかすればその残骸から代換え品を用意できるやもしれませんよ？」

「ほんと!？」

「ええ、カボチャは嘘をつきません。ねえ、フェイスレス」

コクンツ、と静かに彼女は頷いた。

ならばと春日部は頼むことにしたようだ。

本人が決めたのであれば俺が口を挟むことは何も無い。あとは向こうで勝手にやるのだろう。

「黒ウサギにジン＝ラッセル、少しこちらへ」

「へ……あ、はい!」

「yes?なんでございましょう」

通りすがりにさり気なく俺を拉致して黒ウサギとジンはサラの元へと向かう。距離があるわけでもないが自然と二つに場が別れた

「白夜叉からの預かり物だ。魔王撃退の報酬がまだ残っているとのことだな」

「え、まだ残ってたのか……ですか?」

「敬語でなくとも構わないと言っている。君たちは招待された側なのだから」

「あははー、日向さんもまあ変なところ頑固ですのぞ」

失礼な話だ。偉い人と話す時に敬語になるというのは俺の世界なら子供でも常識と
いうのに。

まあ常識が違うと言われればそれまでだがこつちの世界でもそれは普通だとジンを見ていればわかる。おかしいのは白夜叉やサラの方だ。

「そ、それで報酬というのは……？」

「うむ、これだ」

そう言つて渡されたのは小さな白い箱。

本当に小さく前世で見たそのサイズの箱といえはよく男性が肩膝をついて女性に差し出すアレのような……

「……指輪？」

「……yes、しかしただの指輪ではありませんよこれは」

黒ウサギ曰く精霊と呼ばれる存在を封じ込めた指輪なのだとか。そしてジンが持つギフトこそどんな格を持つ精霊だろうが一体に限り完全完璧に制御して所有する精霊使役者。そんな制限付きのジンに使わせるとなればよほどの精霊なのだろうか？

「日向さんは魔王隷属の条件を……存知ですか？」

「……いや知らないけど」

今話題に登るつてことはまさか……

「そのまさかでございませす。あの指輪に居るのはかつて黒死斑の魔王と呼ばれた黒死病八千万の犠牲の代表霊——ペストにございませす」

同時にジンが取ったその指輪から黒い風が吹きすさびあたりのガレキを巻き上げながら子供の癩癩の声を辺へと運ぶ

現れたのはメイド。紛う事無きメイド。完全無欠なメイドである。そう、かつてゴシックでロリータな感じのフリフリを着ていたペストと呼ばれる少女は……魔王からメイドへとジョブチェンジしていたのだった

「してないわよ!!」

……してないらしい。

「とういかなんであんたがここにいるわけ!?!いや近づかないで!離れなさいよこつちに来るな今すぐ死ぬ変質者!」

「……え、なんで俺こんな嫌われてんの?あんま絡んでないはずだよな?」

そう視線を横に向けると黒ウサギはそんな俺の目から逃げるように視線を逸らす

反対に向ければジンが苦笑いのまま困ったように黒ウサギへと何らかのアイコンタクトをとっている

「……え?」

「忘れたとは言わせないわよ!?!あんなことしておいて!」

「なにかしたのか俺?」

ペストと会ったのはあの初日に入った交渉の時だけだった気がするのだが気のせい

だったか？

……とここに来てようやく悟ることができた。俺に記憶がないのであれば何かできるのは一人しかない。カムクラに決まってる。

「あー、うん。悪かったな」

「悪いですむかあああ!!! あんな気色悪い感覚初めてよ! 魂を砕かれる方がまだましだわ!! いえ、いつそ体に異物を混入するとかむしろ体が虫になるとかの方が断然いいわね! いくら代表とはいえ八千万もの存在との同化って単純に考えてもそれ八千万が溶け合う感覚×八千万分味わうのよ!? しかもそれが後半おかしくない、自然なことなんだと無理やり思考が持っていかれることの気味の悪さ!! それが自分だと無理やり納得させられそうになる理不尽!! 個って何よ、何なの!? 殺す気か!? いや寧ろ殺しなさいよ! なんて槍止めちゃったのよ馬鹿なのかしら!? 考えればわかるでしょう何よ一つに纏めちゃいましょうか……って! 髪を束ねるのは訳が違うのよ!? 大体————」

「ごめん長い」

「——殺すわ、あなただけは絶対に殺すわ!! ついでに白夜叉も殺すわ!! そして私も死ぬ! むしろ死んでやるから今すぐ死ぬ!!」

そんなことを言われても俺は警告をした記憶だけはある。むしろ罪木を呼び込んで、カムクラまで起こして舞台そのものが無事に幕を下ろしたただけ奇跡と言える——

——はて、無事に幕を下ろしたただけ奇跡？

あのカムクラが、奇跡程度で？

……何かが違うのか。そもそもじやあ花村や辺古山、罪木とはなんなんだ？よくよく考えればおかしい事だらけだ。あいつらがそこにいる時点でおかしい。そう、ありえないというよりも手間でしかない。大体江ノ島が俺たちを利用したのだから本体を失つて弱つてたと言える状態だったからだ。そうじゃなければ彼女は間違いなく自ら動くに決まってる。

「一々島で倒れた仲間を使う必要もないし、そもそも異世界に呼ぶ仲間をかける必要もない……だとすれば俺は勘違いをしていたことになる。でもそれが本当だとすればなおさらあの花村たちである理由が無くなる」

「——あなた本当に死にたいのかしら?」

耳に飛び込んできた鋭い音に反応して反射的に一步下がった眼前を黒い風が横切っていく。

……メイドが仮にもコミュニケーションの仲間に暴力を振るうとは何事か。

無理やり止められた考えは春日部たちにも聞くことにしよう。向こうも向こうで何やら『ネコミミ!なんでネコミミ!』と騒がしい。その癖先程よりはマシな空気から解決はしたのであろう。

「無視ね!?無視なのね!?仮にも魔王を無視とはどういう見かしら!」

「メイドじゃなくて?」

「魔王よ!あなたも知ってるでしょうが!」

「ジン、お前のメイドがなんか言ってるぞ」

「また僕に振るんですか!?!」

何を言うか。全てリーダーであり、主人であるジンの責任だ。押し付けてるんじゃない、正当な責任の在処へと返してただけだ

もしかしちゃんとは話は進めることができた

「まずいきなり私事で済まないんだが……ヘッドホンはそれでいいのかわ？」

「うん、せっかくフェイストレスに手を貸してもらった物だし……それにたぶん創言う通り物の内容はあくまでも謝意を示す事しか出来ないもん。これがきつかけでもつとみんなど話せたなら……私はたぶんそれが一番だと思っただ」

……感動的な話ではある。抱えてる物がものでなければ素直に感動もしたのだが果たして俺が聞いたかったことはそう言う事ではなく『本当に十六夜に渡すヘッドホンがネコミミバージョンでもいいのか?』と言う意味の質問だったのだが……まあ納得しているのならいいんだろ

「そもそも反対するくらいならあなたが直してくれたら良かったじゃない」

「無茶を言うな無茶を」

いくらヘッドホんに親しみがない世界とはいえ修復の難しさは見ればわかるだろうに。左右田であれば確かに直すことはできるだろうが才能があるというだけで挑むには難易度が高すぎる

「……それでそのフェイストレスというのが『グイーン・ハロウィン』の寵愛者でジャック達のコミュニティの客分さん……なんか色々大掛かりな術を使ったみたいだしノーネームもいい加減ウィルオウイスプには頭が上がりなくなってきたなあ」

「そう思うならば是非とも頭を垂れな」

「こらサーシャー！」

ここまで全く絡みがなかった俺としてはフェイスレスさんとやらとも話したかったわけだが賑やかな二人とは対照的に口元でフツ、と笑うだけで本人が口を開くことはない

とはいえあまり時間を取っては忙しい中まだここにとどまらせているサラにも申し訳ない

「……さて、それじゃここからが本番だな。当然内容はさっきまでご来場いただいていた巨人族、そしてそれを率いていたらしきローブの人影」

「巨人族に関しては私から説明しよう。この場でやれる私の数少ない仕事だ」

耳に飛び込んでくるのはやはり想像にあつた通りの言葉……相手が昔争つた魔王の残党であり狙いがバロールの死眼と呼ばれるペスト同様『死』を恩恵としてそのまま与える最悪のギフトであるということ。協力の暁には今は封印されたそれを扱う資格を持つであろうウィルオウイスプかまた同様に扱えるであろうものをもつノーネームに与えるとのことだった。合間に挟まれていまこの区画に階層支配者が居ないと言うなかなかに驚きな発言も混ざっていたりしたが大まかにはこんなところだろう

「……それで、ジャックさんは何がいたくて俺を見てるんだ？」

「いえいえ、先ほどはバロールの死眼を扱う適性を持つものとしてペストがジン様に隸属されていましたが……果たしてノーネームでその適性を持つものが本当に彼女だけなのかなと」

「フン。その日向少年とやらもバロールを扱うに足ると……ジャックオーランタンはそういうのか？」

「然り、とはいえあくまでもそれは私の私見。ただバロールの背景にある死というものと信仰による人間の神格化……私は北ではその末端しか感じ取れなかったもので断言には至らぬというだけで本人に心当たりはあると思いますよ？」

……なるほど、バロールの死眼。死を与えるギフトにして持ち主にそれなりの資格を求めるギフト。伝承元たるケルト神話では失われたそれは一定の信仰のもとに第二のバロールとなった者の物という仮説らしいが……確かにそういう点ではある意味ペストと同じレベルでの適性はあるだろう。死と退廃溢れる世界の象徴であり、功績と信仰の元に存在していた絶望として確かにこれで適性がなければ嘘だ

だが話には関係ないので無視する。別にジャックが気に入らないからでは断じてない。ないっつらない

「まあそれは置いておいて結局ノーネームとしてもウィルオウイスプとしてもこの収穫祭の間、ただの客では居られなくなっただってコトだ。特に成果を求めるんだったら尚更

だ」

「そうですね、それに気になるのはローブの人物です。巨人族を率いていたというのは日向さんの証言からほぼ間違いないでしょうが未だにその存在が掴めない以上、ただ警戒して待っているというわけにも行かないでしょう」

……とここまでが南の収穫祭、龍角を持つ鷲獅子としての問題。そしてここからが……

「そういった不審人物のことなら私と春日部さんからも言いたいことがひとつあるわ」
……俺にとっての本命である。



「ねえ、春日部さん」

「……うん。言わなきゃいけないこと、聞きたいこともある」

少し勿体ぶつた言い方、そしてそれまでの話題と違いかけらも共有されていなかった全く新しい情報に場の視線が二人に集中する

本来ならば広めるべきか躊躇う内容だ。確実に江ノ島の目的は世界全体にあり所詮言ってしまうえば俺は目的のための通過点に過ぎない。その情報が広まることで江ノ島

に対しての危機感を持つてもらうことは素晴らしい。だがそれは同時に江ノ島に注目するということである。

未だにこの世界の住人に絶望が広まったことはない。少なくとも俺の認識している範囲ではその兆候はない。だがあの江ノ島がそれを出来ないとは思えない。

とはいえここまで直接的に大勢に関わってきた以上、もうノーネームや白夜叉、サラマンドラ上部と言った所にはとどめてられない。話せばウィルオウイスプの属する二人はそのトップに話すだろうし鷲獅子も同盟である以上情報は共有するだろう……それはつまり箱庭に絶望の訪れを本格的に知らせることだ

「……田中の事だな」

だから止まらないことは承知で……進むしかないだろう。いずれは通る道、覚悟を決めるのは俺じゃない。

「やっぱり日向くんの知り合いね。まあ服装がこの世界のものじゃなかったからはじめからこの世界の知り合いだとは思ってなかったけど」

「……まさかまた来たのですか？ 罪木さんのような方が」

「蜜柑と同じ存在ね……て事はやっぱり狙いはその妖怪纏めちやおうなのかしら？」

とことん不名誉なあだ名だ。そもそもそれは俺じゃないと軽く説明した筈なのだが……いやそれよりも訳が分らないと言った風のサラやサーシャ、フェイスレス。前回の

ことから若干の理解を示しているジャックへとちゃんわかるように説明しなければならぬ

「南が魔王の残党っていう問題を抱えてるように俺もまた似たような問題を抱えてるな。まあ行く先々で知り合いが派遣されては場を引つかき回してくれてるんだ……そしてそれは今回も同じってことさ」

「似たような問題ということはその相手もまた魔王……という認識でいいのかな？」

「……ほぼ確実にな。それでまあ今回は接触した相手がその二人ってことだったんだろ。前はペストだった。問題はそいつがまず魔王の残党と結託してるかなんだが――」

現状接触と言える接触をしてない俺は続きを二人へと促す。対する二人もここに臨むにあたってあらかじめある程度考えはまとめてきているようでほぼ間を空けることなく答えを返してきた

「それはないと思う。創の名前を出すまでは巨人からわたし達を守ってくれてたし巨人のことや霧のことはわたし達と同じく戸惑ってた」

「ならばそれが演技という可能性は？」

「本当に田中なら演技ができるほど器用じゃないはずだ……技術というよりも性格的な意味でだけだな」

捻くれている様で、本心を隠している様で、思っていることを出さない様で、その実田中は真つ直ぐな人間だ。手段を選ばないというところはあるが基本的には善性を持つ。「私もそう思うわ。成功したところで日向くんのことを知らなかった時からわたし達を騙すメリットもないしね。私が聞きたいのはそう言う事ではなくて田中眼蛇夢という少年の人物像よ」

一瞬すごく疲れたような表情をしたことは俺の見間違いだということにしておいて、さも何もなかったかのように続けられた言葉にむしろ俺は安心感を覚えることになった

「まず回りくどい、言動が意味不明、レデイに対しての常識の無い物言い。態度の変化もそうだし日向くんから聞いてたのとは全く違う戦闘力もそうよ」

「……戦闘力？そりゃ魔王の眷属や配下なんていったら強いもんだろ？実際前回だってその創つてやつは罪木つてやつにボコられたんだろ？」

サーシャの悪意のない言葉が突き刺さるがしかしやはり田中の言葉は久遠すら惑わせていたようだ。なにか日本語を間違えていたあの少女と何かしら噛み合っていたのはそういう所もあったのだろう。浸っている場合でないことは百も承知だがそれでも少し思い出した光景がやはり俺の疑問を加速させる。それすなわち果たして俺の前に立ちはだかった今までの三人は本物の彼らなのか否か……そういう疑問である。

花村の口ぶりや辺古山の未練とも言うべき絶望の根底からは修学旅行をリタイアした後があるかのように感じられた……だが実際そんなものは無いはずだし仮に存在したとしたならば上書きするべきデータが消えてなかったことになる。そこに超常の力が働いてゲームとは別のところで続いていたのだとすれば辺古山の未練には繋がりようもない。何故ならそこに辺古山ペコの上書きすべきデータが残っている以上辺古山本人が諦めなければまた九頭竜たちと頑張れる未来があるかもしれないからだ。辺古山本人がその努力をしたいと言いながら絶望に落ちて諦めているのは明らかかな矛盾都合のいいところだけ、都合のいいように作られた穴の抜けの台本……

「簡単に説明すれば俺の知り合いも俺もギフトを持ってなかったんだ。そして最近になって手に入れた。だから俺が知ってる田中は戦闘力と呼べるだけのものはなかったはずなのに今の田中や罪木が力を持っていることは実はそう不思議じゃない。そしてそのギフトも必ずその本人の性質や才能を元に発現している」

「なら眼蛇夢がもつ性質や才能って何？」

「春日部たちには前に一度言ったんだけどな。あいつの肩書きは超高校級の飼育委員。知ってるの通り動物と会話したりできる才能の元の持ち主で性質は多分『生死』に関係すること……というか生命とか生存って言葉が鍵だと思う。そうでなければ『獣』かな」

江ノ島の今の目的は俺の絶望だ。わざわざ無駄なことや都合の悪いことはしないだ

ろう。だからそもそもどこかにデータが残っていたとしてもそれを使って俺にぶつける必要性は無いはずだ。現に力技で来た罪木はカムクラを呼び覚ますことが出来た。でも性格がそのままだから最終的に罪木が俺を元に戻すなんて形になったんだ。

つまり存在したとしても辺古山のような形で絶望するのはありえない、意図的にそう見せかけて何らかのギフトであいつらを呼び出したのだとすればそれはありえるがそれなら超高校級の絶望時代の花村たちを呼ぶほうが圧倒的にいい筈だ。カムクラを絶望に落とせるような女が計算ミス？そんな訳が無い、何らかのメリットがある……島での犯人ばかりが来るのもミスリードか？

疑問は答えへと至らないが今までどこか不思議に思っていたところは徐々に氷解しつつあった

「それじゃあ巨人を吹き飛ばしたり人間を獣みたいに出来たりするギフトの正体はそれどっちかが関係してるってこと？」

「他者の獣化ですか？他者に獣という恩恵を後天的に与えるギフトというとレティシアが持つ様な吸血鬼の鬼化のギフトとかが近いのかもしれないが」

「いや、獣になるんじゃないやなくて姿はそのままに獣みたいになると言うか……」

さて、しかしその方が余程納得がいくと言う事も多い。例えばそれはちようどジンたちが話していることで本来は俺たちが持たないはずのギフトの事だったりする。

結局信仰が力になるとはいえ元の世界では超高校級の絶望達も活動時期は短期間、その前は学生であることから才能の知名度や学園の知名度こそあれ個人の知名度は業界で期待される程度のものなのだ。苗木誠のメールに書いてあったことから彼らは潜伏していたりで大々的な活動をそこまで繰り返したわけでもない。要はギフトを得るだけの個人的な成果を望めないのだ。人外でありながら最も人間的という意味不明なカムクラはそれでも希望の象徴であったし江ノ島にとつても特別であったことは想像にかたくない。故に他の14人とは違うだろう。江ノ島本人は言うまでもない。

力を持つて正式に箱庭に現象として誕生できる可能性があるのはカムクラや江ノ島、そしてそれを打倒した苗木誠位に思える。おそらく江ノ島は正規の手段でここにいる。俺はカムクラではないけれどノーネームにこの世界に招かれたいわば例外だ。苗木誠はそもそも俺がいた世界だとまだ生きていたわけだが此処はあらゆる時間軸、並行世界を肯定している。それにも関わらずいないというものは何かが足りなかったのか仮説が間違っているのか……姿を現していないということはないだろう。江ノ島の苗木誠への執着は下手をすればカムクラのそれを上回り兼ねない。ならば当然彼がここにいれば江ノ島は彼の元にも似たようなことをしているはずでそれを受けたあの少年が動かないわけが無いからだ。

故に今いる正式な俺の世界の住人は2人。花村達は江ノ島が何らかの方法で連れて

きたか……やはり俺の仮設通りの方法でここに現したか。どちらにせよギフトを与えたのもまず間違いなく江ノ島だ。だが前者と後者の場合、ギフトの中身が確実に変わる。前者はギフトを得るだけの力を与えることだが後者は江ノ島が作った、あるいは持っていたギフトを与える事になる。恐ろしいのは後者でペストの言う通り「馬鹿じゃないのか」と言いたくなるような内容になることが確定していると言っても過言じゃない。何せ元が各個人ではなく江ノ島だ。

今までのギフトから考えてもやはり俺の仮説の方が近いように思える。田中もそうであった場合今回も例に漏れず馬鹿げたギフトを持っていると考えられるわけで……
「肉体の変化じゃなくて内面の変化って言いたいんだろ？」

「……うん。眼蛇夢は『範囲の中なら例外無く防げない。お前は何故そのままなんだ？』みたいなことも言われた」

「それじゃ春日部には聞かなかったのか……ってことは効果を受けたのは久遠だな」
若干睨まれた気もするけどまあだからなんだと言うのか。

「要するに性格が野蛮になるか理性を失うか。防げないってことを考えると若干本人によるところが多い性格の改変じゃなくて問答無用の理性の剥奪、むしろ攻撃的に考えたら『生存本能の爆発』……か？」

「生存本能の爆発……確かに獣みたいになる可能性はありますがそれでは春日部嬢に効

かなかったことの理由や巨人族を吹き飛ばした理由にはならないかと」

「人間と動物を分けるために理性と本能という言葉がある。もし春日部に効かない理由を付けるとするなら春日部のその動物の力を得る力だろうな。人間は野生で生きることもなく本能に飲まれることも滅多にない……でも動物は違う。三毛猫を見て分かる通り動物は理性を持っている。でも本能にも流される。人間よりもその二つの存在のバランスが保たれている分コントロールに長けていると行っていい」

人間は普段から抑えようとする必要がない分コントロールできてるように見えてそういう力は少ないという事なのか……まあ獣人や意思疎通が測れる生き物も多いこの世界において例外はないと言うことはこの際どちらが上手いかは関係ないのか

「大事なものはそれらの力を春日部が得ているってことなんだろうな。田中のギフトが内面に働きかけるものなのは確実だ。それも働きかけてるのは精神じゃない。精神なら春日部は言ったら悪いが俺たちとそう変わらないと思うからさ」

「Yes、確かに精神感応系ギフトならば人によつては防ぐ事も出来ます。ただ日向さんの言う通りだとすれば確かにそれは鍛えようがありませんしそんなピンポイントに防ぐギフトも普通はありません。対して春日部さんのギフトは動物の力を日常的に得るギフト……普段から実感するようなことも無いでしょうし確かめようもございませんが春日部さん友人の分だけその力が作用しているのであれば田中さんとやらのギフト

トを弾いたのも納得です」

この微妙な嫌らしさが非常にそれらしい。人間性を消す……田中の主張を嫌な方向に歪めた結果だ。田中は生きる事に誠実にならない人間を嫌悪していた。殺人に至った理由も生きる為に出来る事をするという本人のその主張に則った結果だ。そこからすれば確かに生存する事だけしか考えさせないギフトはその主張に合っている……だが田中はそんなギフトを果たして望むのか？生存本能の爆発は他者を蹴落とすと言える。腹が減ったら仲間を食う。危険を感じたら真っ先に逃げる……だが田中の愛した動物は腹が減ったからと仲間を食うか？危険が迫ったからと子供を盾にして逃げるのか？

相変わらず田中のことは分かりづらい。だがあの時の田中は間違えても生きる為に仲間を蹴落とす事を肯定していたようには思えない。

結果的にそうなったといえはそうだが田中は極限までその意志を行動には移さなかった。俺たちの仲間と生き残ろうとするその態度に始めから否定的ではなかったのだ

その理由は大袈裟なあの言い方ですら語られはしなかったがおそらくきつと……田中も人間らしかったという事なのだと思う

人間を嫌ってようが生きる為に手段を選ばないと主張しようがその根底にあるのは

厳しい世界を見てきた故の人間らしい考え方に基づいた優しい主張のはずだった

花村は母親に楽をさせたかった

辺古山は九頭竜を守りたかったただ、誰かを切りたかった訳でもない

罪木は医療行為に歪んでいても価値を感じていただけだ、誰かを弱らせたいだなんて思ってたわけじゃない

田中だって同じだったはずだ、俺はそう信じてる

だから今度こそ救って見せたい。絶望に落ちて知らぬ間に苦しんでた仲間を余計に苦しめたり、半端な希望を仲間押し付けて涙の中消えていくのを見送ったりするんじゃない。

仲間と一緒に今度こそ

番外 新しい力?

清々しい朝、普段は喧騒耐えぬ我らがノーネーム居住区もこの頃ばかりはまだ穏やかな時間が過ぎており

「おい、出てこい日向ア!」

窓から外を覗いてみれば朝日に輝く四季折々の景色が広がり、心に染み渡る様なのかさを演出している

「そうよ、いい加減に観念なさい!!」

それはもちろん日向こと俺も例外ではなく、気分のままに部屋から外を覗いては心のゆとりを再確認して

「……出てこないと、酷いかも」

———いられたら良かったのになあ……。

時は朝と昼のちょうど境、ノーネームはいつもと変わらず今日も騒がしい。しかしその中心がまたいつもの三人か……と言われれば今日に限っては首を振ろう。今日の中心は言うなれば街全体でありそして俺である。自分の迂闊さが恨めしくて仕方が無い

がそんな物は全て終わってから存分に恨んでいればいいのだ。今はそんなことよりも事態の収束を図りたい。

そんなわけでもずは今日の始まりまで遡るとしよう



事の始まりはそれこそ冒頭の俺の理想のように清々しく、喧騒とは程遠い穏やかかつ和やかな朝の陽気に包まれながら目覚めたことだった

ただの目覚めだったのならばそれで良かった。むしろもう普段以上の喧騒に包まれていても構わなかったし屋敷が吹き飛びそうな嵐の中だろうがそちらの方がよかったと断言できる。

俺がそうまでいう理由というのが例の如く輝いていた俺のギフトカードにあった。大きな出来事もつい最近片付いて比較的平和（比較的な理由は主に身内）な今輝く理由もないはずだが、と寝ぼけ眼なままで持ち上げて覗いてみるところ仲間たちのギフトに混じって何やら見覚えの無い文字列が末端に書き加えられている

「超高校級の……相談窓口？」

思わず口に出しながら読んでしまったがそれによつて半分活動していなかった脳が

一気に動き出し、不覚ながらそれこそ子供のようには舞い上がってしまった……それがいけなかった。

少し考えれば何かおかしいということがわかったものを俺とくれば長年憧れていた“超高校級”という肩書きに惑わされてまともな思考力を失っていたのだ。それはもう門外漢だとあれほど言っていた白夜叉のところから駆け込んでこれがどう言つたものなのか聞いてこようなどと考えてしまうほどに……結局誰に告げるでもなく最低限の準備をしたらそのまま街の方へと駆け出して俺はいきなり今の事件の一端を垣間見る事になった。

それは白夜叉の支店に向かう途中にあるカフェのテラスで起こった。いや正式にはそこで働く猫の獣人の娘によつて起こされた。

何やら急ぐ俺を気にした少女は知らぬ長々ではない俺を呼び止め何事かと問いただしてきた。その時まで舞い上がっていた俺は遂に自分が望んでいた物が発現したのだとポロポロと零してしまった。それに対して大層な反応を見せてくれた彼女はお祝いをしたいが今は途中で何かできそうもないと言つて代わりにパンツを渡してきた。

——ああ、そうパンツだ。言いたいこともわかる。だがしかしこれは嘘でも妄想でも公明の罫でも都条例の釣り餌でもなんでもない。事実少女はそれがなんでもないことのようにその場で下着を脱ぎさり俺の手を取つてその上に落とした上でおめ

でとうと言つてのけた。俺はありがとうと返し丁寧に畳んでそつとポケットにしまい
—— いや、これも仕方がなかったんだ。この時の俺は何度もいうが正気ではな
かったし何せ嘗て15回も繰り返した光景なのだ。慣れとは怖い物だというのはノー
ネームに馴染んでしまった今度々思うことだが今回ばかりはもはや怖いを通り超えて
腕を切り落とそうかと思つたぐらいだ。

とはいえ今の俺の心境などその時の俺は知らない、いい笑顔で立ち去つた俺はそのま
ま白夜叉の店へと向かつた。

身体能力の高い俺が自重しながらとはいえ急げば大した時間もかからない。結局落
ち着く間もなく店にまでついてしまった俺はノーネームにやたらと辛く当たる店員さ
んの事を忘れ店へと入つてしまった。

……ああ、お気づきの方もいるかもしれないからもう事実だけをサツとのべるとパン
ツが増えた。別にポケットを叩いたわけではない。店員さんが渡してきたのだ。怒り
ながら、自然な動作で、追いつく草をしながら、丁寧に！しかしそれでも俺の狂気は
収まるところを知らずまた無意識のうちに受け取つて納めながら奥の白夜叉の私室へ
と向かつて進んでいった、この時点で俺はもう何かの影に消されても仕方ないかもしれ

ない。しかし何度もいうが今の俺がどう思おうが当時の俺には関係のないことなのだ。

怖いものなど何も無いと言わんばかりに突き進んだ俺は白夜叉の私室の扉を派手に開け放ち——やはりパンツを貰った。

貰いながらギフトのことを聞き前回と同じく門外漢だという返しを受け、それに少し落ち着きを取り戻して無礼を詫びてから店を出たところでようやくおかしなことに気がついた。

まず一つは右手に握ったパンツのこと……白夜叉のものだ。

次にポケット越しに感じる温もり……店員さんとウェイトレスの物だ。

もはやなんで超高校級の才能がギフトとして出たのかなんてどうでも良かった、と言うよりは真つ先に出たパンツの存在感が強すぎて彼方へと飛んだ。ここに来てやつと危機感を抱いた俺は全力の限りで街を疾駆しノーネーム居住区へと帰還した。静かすぎることを以外はいつもと変わらない、その様相に少し安心しながら俺は起きたことを黒ウサギに相談するために屋敷を走り回り十六夜にエンカウントした

俺が焦りながら黒ウサギの場所を聞くと訝しみながら先ほど子供達の館へと向かったというのを教えてくれた。俺はもう対面なんてこだわっている余裕もなく早口にお礼を言いながら子供の館へと向かった。

そして果たして黒ウサギはそこにいた。子供達が洗濯物を運ぶのを手伝っているよ

うだ。

俺は黒ウサギを呼び止めて事情を説明した。

黒ウサギは俺の言葉にいささか大げさに反応し、ウサ耳を揺らしながらパンツを脱いで俺の手のひらに乗せた。

子供達からのものがさらにその上に積み重ねられた。

ああ、俺はこの時点できちんと察する事ができたよ。
皆がおかしいのではなく俺がおかしくしているのだと

外には同じく持ちうるスペックの限りをを用いて俺を探している問題児達がそれこそ子供を含め百人単位、持ち物はおびただしい数のパンツのみ……いやだつて考えても見ろ。いくら渡されたからとはいえ正気の当人には大事な物のはずだ。そこらに捨てるわけにも行かないし何よりもそれは清潔ではない。ついでにパンツが散乱したコミュニティなんて壊れてしまえとすら思うし十六夜が向こうにいる以上下手な痕跡も残せない。

春日部の嗅覚は花村の能力で匂いを操作してなんとか対応しているがしかしあのフルメンバーを相手にいつまでこの隠れ場が耐えられるものか——

「あら、日向君。全く探したのよ？」

そんなことを考えたのが運のつきか……相変わらず高圧的な声が降るようになら聞こえてきた。

思わずそれに引かれて見上げてみれば案の定扉には久遠が優雅に腰を掛けていて……

どこからはいってきた！？

思いがけぬ襲来にお湯の張られていない浴槽を滑りながら全力で飛び退く。

「ディーンを縦に長く伸ばして辺りを見回してたの。ちようど露天風呂にいてくれて良かったわ」

「ギフトの無駄遣い!!?」

何と言う贅沢な……作ったラツテンフエンガー達もそんな使い方は想定していなかっただろうに

「クツ、なら俺も空から——っておい」

身体能力において圧倒的に劣る久遠が相手ならばまだ逃げやすいと身を翻せば今度は露天の浴場全体に大きな影がかかった。

赤き神珍鉄の巨人が飛び上がる物ならたたき落とすと言わんばかりに立ちふさがっているのだ。

無論正面から打倒しろと言われればきついが逃げるだけならばそう苦はないだろう、だがそれは今も浴場の外を彷徨く連中にこの所在を明かすことになる

何と言う包围網か！

「久遠、ディーンを仕舞わないか？ポロイノーネームの浴場なんかすぐ壊れちまうだろ」
「壊れたらディーンが直すから大丈夫よ日向君」

フワリと軽い音を立てて同じ高さまで久遠が降りてきた。精神的圧力ならば日常的に感じている久遠だが物理的なそれは初めてな気がする。それもティーン無しにだ。何と言う執念……いや執念なのか？良く分からないがしかし……流石に久遠にパンツを渡されると次の日からの接し方に困る!!

まだ島の仲間はよかった。いや未だになぜパンツなのか良く分からないがそれでもムードというか流れがあったからというのとやはり慣れだ。加えていうならそう言った空気もなんだかんだ事件が起こる度に引き締められていったし男からも渡されることが良くあつて俺の意識もあまり傾かなかつた

……だが今はどうだろう？流れなんてないし何よりもノーネームはほとんどが女子だ。この騒動が終わったとしても俺は気まずさを感じずにいられるだろうか!?相手は同年代の女子、しかも凜として久遠だ！無理に決まつてる！

……ああ黒ウサギ？二百歳だから大丈夫。向こうも大人だ、きつと大丈夫

「——つて言ってるそばからパンツに手を掛けるな!!」

もはや猶予はないこうなれば逃げるのはやめて抑える方向に考え方を変える。

電光石火の踏み込みで、しかし音は立てぬよう飛び込み、スカートをたくしあげ差し

込まれていた白磁器の腕を纏めて抑えて頭上に固定した

自然と眼前に来た整った顔は何が起きたのかと理解のためにその臉を二三上下させてそれからようやく口を開いた

「……何をするの日向君？」

「むしろ何をする気だったお前は!？」

「お前ではないわ、私は飛鳥よ日向君。ちょうどいいわ、そろそろその他人行儀な呼び方を変えてみない？ 私も名前で呼ぶから」

いやいやそんなのは今はどうでもいいから！

「とにかく話して頂戴創君、動けないじゃない……何かムズ痒い感じがするわねこの響き」

「どういうもの言い草だよってかだから離れたとしてどうするつもりだよ!」

「そりや貴方に上げるために下着を脱ぐのよ？」

……なんんだよ

「いや本当になんんだよ……あのギフトのせいかな？ いやそうなんだろうけど、ほんとなんなんだよ!」

「そりや脱がないとあげられないじゃない？」

「そこに対するなんじゃねえよ!？」

今思えばまともに突っ込んだのはこれが初めてか……いや人生でこんなことに突っ込むことになることの方がおかしいんだけど……しかしいつまでも固まっているわけにも行かない。浴場とはいえデイーンの巨大さは目立つし小声とはいえ向こうには感覚機器人外レベルが二人もいる。いつまでもここにこうしているわけにもいかないのだがどうにも久遠は説得なんかで止まる様子にない。

これでは他の奴らと同じ有様だろう。早いところ解決方法を見つけなければ……ノーネームが社会的に終わる！

しかし現実は無情にも俺を攻め立てる。すりガラスの引き戸がガラガラと音を立てながらすごい勢いで開ききり、中から影が飛び出してくる。空中に煌めき金光を反射しては流れる様に波打つ髪は——レティシアの物だ。

リボンを解き放った今の姿は普段のチンチクリンな状態からうって変わって一端のレディと言って何ら遜色ない。無論その状態のレティシアの戦闘能力は決して低いものではなく、また彼女固有の竜の顎を形作る剣影は今の俺を持ってしても油断出来ない破壊力だ。そんな彼女が全力の踏み込みを持って跳んで来ているのだから一刻も早く逃げ出したい所だが、ここで久遠を離して避ければ暴走したレティシアに轢かれかねない。そして今のように腕だけを束ねて逃げようものならば久遠の腕が本体と泣き別れるだろう。そんな状態になればもうパンツだなんだでは済まない。

「——ああもう何から何まで面倒な!!」

諦めて両手を使って久遠を担いではそのまま飛び上がる。純粹な速度で俺に追い纏める事ができるのは今現在十六夜と黒ウサギのみ……狭い浴場というのがネックだ。ただ一人ならば現状維持位は——

「ウリヤアアアア——!!!」

——出来た筈なのに神はとことん俺に試練を与えたいらしい。少女の甲高い声で気合一発叫びながら何かを打ち出したペストとその投射物を視界に収める……否、それは投射物ではなく……ペストと似た甲高い声ながらしかしその性質も叫び方も真逆な悲鳴を纏ってまさに直動軌道ミサイルの如き飛翔を見せるノーネームのリーダー、ジンⅡラッセルその人だった。

……両腕は久遠、頭上はディーン、俺空中。さて、我がリーダーをどう受け止めると？

いやもうなるようになれ、ヤケじゃない。臨機応変という素晴らしいお言葉に従うだけだ。

まずは飛んでくるジンを脚で絡め取り勢いのままに空中で回転しながら力を得る。

そのまま久遠をディーンに向かってリリースしディーンの防御に穴が空いたところで壁面へ着地、ジンを2度目の跳躍の構えを取ったレティシアに投げ渡し初動を止めて

そのままディーンの防御の横を抜けて館の上へと飛び上がる。

流れだけをいえば綺麗にまとまった感じはあるが正直ディーンが久遠を優先するか、レティシアの錯乱状態でジンを受け止められるか、いろいろ考えながら動いていると行動がどんどん狭まってきてかえって危険だった。元々が凡人だけにそこら辺弾けないでよかったとは言えるだろう。分かり易い例を出せば粕枝なんかは「希望ならこのくらい何とかできるよね?」とフルスイングしそうなものだ。

とはいえ今かわしたのは計四人、何やら争い声が聞こえてくるが戦線離脱したわけではない……上に残っているメンバーがまた厄介だ。主に十六夜が。

「いつそ収まるまで館の外にでも逃げてみるか?」

世界の果ての方ならば犠牲者がそう増えることもあるまい。流石に見つかるまで活のすべてを犠牲にして探し続けるということも……無いよな? したで喧嘩してるわけだし。

「逃さねえぞ日向ア!!」

怒鳴り声と共に突然足下が吹き飛ぶ。

飛び散る屋根の残骸と一緒に宙へと投げられた体を捻って体を入れ替えるとそこには案の定屋根を蹴り飛ばした姿勢のままこちらを睨む十六夜の姿……ここでエンカウントかよ!!

確かにさっきの囲まれた状態で会うのはアウトだが、どちらにせよお前の場合はどうな状態でもあったらアウトだろうが！

こちらの焦りも何のその、十六夜は好戦的な笑みを浮かべてこちらへと踏み込み一つで跳んでくる。知ってはいたが速さが常識を置いて来てしまったようで正直最早瞬間移動以外の何物でもな――

「……………つてやられるかあ!!」

そのまま突き出された腕を左右から掴み取り勢いのまま上半身をスライドさせて十六夜に足を押し当てながらリリース。風呂場の方へと吹き飛ばして……拳を反対側に打ち込んで反動で止まった!?

「てかおい今ジン達が吹き飛んだぞ!」

「うるせえ、いいから掛かってこいや」

「……………かかってこいや?」

パンツじゃないのか……………つてそう言えばこいつさっきは正気を保ってたよな? それにそもそも十六夜はギフト効かないし……

「……………なあ、お前実は戦いたいだけだろ?」

「さーて、何のことかな?俺はパンツを差し上げるためにまずは逃げられないようのにしてからって考えてるだけだぜ」

絶 対 に 嘘 だ ！ ！

流石十六夜と言うべきかそれとも何故十六夜なんだというべきか……ああ、何故あなたは逆廻十六夜なの？ロミジュリの様に欠片も美しい問ではねえけどな！

「ああ、もう最悪だよ本当に！」

「ああ、最悪だよなー、俺も本当はこんなことしたくねえんだけどなー」

最早嘘のバーゲンセールだなおい。そんなサービスいらねえよ、ついでにパンツのサービスもいらねえよ。返品させろよつてか絵面がひでえな！

十六夜が暴れるせいでいい加減抱えきれなくなつた色とりどりの布地が空から舞落ちてくる。

パンツの降り注ぐ中の対峙……かつてこれほど最悪な場所での決闘があつただろうか？

ともかく俺の目的は逃亡、これ一択。幸い速度だけならば極端に劣るわけではない。ならば隙さえ作ることができればなんとかなるか？

手の中に何時ぞやの金色の刀が顕現し確かな重みを伝えてくる。

臂力の差は武器で補えるだろう、純粹な感覚機器は部分的にはあるが優っているはずだ、ならば明確な差となるのは……とつさの判断——刹那の交錯が勝負を分ける！

「へえ、それどこから出したんだ剣豪様？」

「からかうなよ、いやマジで余裕ねえからこれ以上俺を揺さぶるな」

戯言を一閃、目は一切離さず音に対してより集中する。

微妙な拳動に対してより機敏に反応できるのは音だ。感覚を尖らせて、水面を揺らさず石を投げ込むかの如き鋭さを持って応対しよう

「ハッ、寂しいなおい。そんじゃまあとりあえず……死に晒せエ!!!」

十六夜の行動パターンは主にその自然災害を思わせる四肢による連続攻撃。投擲物を用いることはあれど流石にノーネームの館の上で制御できないそれをぶっばなす程ぶっ飛んではない筈なのでこの場合は拳か脚による攻撃以外考慮しなくていいと考えられる。

そして驚くことに十六夜のスタイルに超至近距離……所詮インファイトというものはない。なぜならば基本的にあいつの拳を受けて踏みとどまれる奴が居ないからだ。ヒットと同時に相手をアウェイさせる常識ハズレのヒットアンドアウェイ……そして正面対峙の第一撃の殆どは拳。脚はそれこそ特定の場面や理由もなく使われることはない。その理由としては十六夜の場合拳だけで十分な威力が出るということがある。ならば技後、足が地面につくまで移動が制限される足技よりも純粹な拳を利用するのは当然と言える。そして先程言った通り居住区を壊す行動が制限される以上上からの攻

撃はない。水平に吹き飛ばされず、浮かされずを保てれば十六夜は全力を出すことは出来ない筈なのだ。

果たしてその考え方は正しかった。

初撃。踏み込みの勢いをままたまに拳がそれこそ壁のように肥大化して見えてしまうほどの正拳突きを体を傾けて避けて姿勢を傾けさせたまま既に振り始めていた刀が十六夜の体に横一文字に線を刻もうと大気を割いて進んでいく。そこに下から俺の体目掛けてそれ以上の速度で打ち出されたのは膝……位置の関係上どうしても十六夜の攻撃が早く決まる。なればと攻撃は一時中断し柄を引く事で膝を相殺し受け止めた。しかし重い一撃はその衝撃で俺の体を揺らしその体勢のままに少し後ろへと後退させられる。

刀を構える余裕はない。間髪入れずに十六夜の接敵の音が耳を打つ。だが姿勢が落ちたままの俺に先程の条件で打ち出せる攻撃は打ち上げ一択……視界に入った足を今度こそ手に持つ模擬刀が打ち払い、若干屋根を削りながら静止する。すぐさまそれを跳ね上げ腹部へ突き込むように腕を伸ばすが一瞬遅い。十六夜はそれを後ろに一步下がりに伸びきるのを見届けてから刀身を掴んだ

「逃さねえぞ、これで詰みだ」

「……？バカ言え、これじゃまだチエツクだ」

確かに十六夜の力を振り切つて刀を引き抜くのはいかなる名刀といえども不可能だろう。担い手の技量を抜いた切れ味だけではこの少年の指を切断するにはまだ遠すぎる……とはいえ俺が持つのは模擬刀だ。別にこの金色は刀が金で出来ているとか金色に輝く名刀とかではない。あくまで観賞用として作られた金箔塗りの鈍なのだ。

よつて如何にしっかりと掴んでいようがこのように少し角度を変えて引いてみれば……

「あん？何だこりゃ……金箔か!？」

表面の金箔が剥がれ、滑るように万力からもスツと抜ける。そしてその隙は致命的だぞ十六夜。

「それじゃあ、久遠とかレティシアの方頼むな」

「は？あ、おい待て——」

聞く耳は持たない。綺麗に抜けたその刀をやつと硬直から抜けた十六夜めがけて容赦無く振るう。狙うのは勿論先ほど十六夜が吹き飛ばした浴場……邪魔物がいれば先にその障害を除けてから俺のところへ来ようとするのは先ほど確認済みだ。よつて十六夜、お前は向こうの四人を止めといてくれ

「頼んだぞ——!」

「だから待てやごらアア!!」

相変わらず悪鬼の如き吠え声で吹き飛んでいった十六夜を見送りなんとかダントツで厄介な存在を抑え込めたことに安堵する。

さて、残る刺客は……春日部のみか。子供達は確かに数こそ多いが数だけでも簡単に逃げられるから問題ではない。これならば——と気を抜いたのがいけなかった。

あれほど派手に暴れたにも関わらず今の今まで感知に優れた彼女が現れなかったのは何故か? そう、伺っていたのだ。自身が現れるタイミングをずっと待っていた。十六夜と共に謀して俺を抑える道を捨てより勝率の高いであろう不意打ちに全てをかけていたのだ。

初めに十六夜が現れたその穴……そこから一瞬ではいでた春日部は音もなく俺へと近づいて後頭部に一撃、そして体から力が抜けた一瞬で俺を合気道の様に抑え込んで動けなくした

「もう、逃げられない………よ?」

言われなくてもわかる。確かにこれは動けない。そのうえ上へ乗る春日部はある程度の自由が利く、パンツを脱げるかと言われたらどうかはわからな——待てよ? 待て待て待て………え、春日部って普段はパンツだよな? ああいやここでのパンツは下着のパンツではなく………そう、ズボンだ。

ズボンの状態でパンツを脱ごうと思えば当然下半身を隠すものは一時とは言えなくなる。島では女子は全員スカートだったし、今までの女子も全員そうだった。子供達は自身の選択してもらった服の中から取り出していたししまでの男子達は確かにノーガードになっていたがそれは男同士、意味こそわからないが気にすることでもなかった……だが春日部は女だ。考えても見ろ、いや考えなくてもわかる——間違いない日向創箱庭史上最大のピンチだ。俺は何とかして春日部を今止めなくてはならない。しかしどうやって止める？止め方がわかるならばじめから俺は苦労していない。要するに今の俺に打てる手は無い。見なければいいのか!?!いやいやその後の関係的に仮に見なかったとしてもやはりいろいろ厳しいモノがあるだろう!

「な、なあ春日部?ひよつとしてパンツをくれようとしているのか?」

「うん、日頃の……お礼」

……どんなお礼だ!?

「乗っかってたら脱ぎにくいだろ?逃げないから退いてくれ」

「大丈夫、ズボンはもう脱いであるから後は簡単」

もちろん本当に逃げないわけなんて——あ?

「……今なんて言った?」

「ズボンは脱いであるから後は簡単」

……違うだろ？百歩譲ってパンツをあらかじめ脱いであつたとしてもズボン履いておけよ。脱ぐまでの事しか考えてないんだ!?

冷や汗が額を流れては屋根の上ではじめていく。猶予はない。既に春日部は俺の背中何やら身じろぎをして衣擦れの音を奏で始めている。

つまりアウト、しのごの言っている場合は過ぎていく。

「ああ、(っ)めんな黒ウサギ……」

子供達が階下にいない事を理性的な意味で聴力を過敏にすることは危険だとわかっていながら探つてから、俺は現状動ける唯一の方法、背筋で頭を持ち上げ……腹筋で振りおろした。

頭突き……文字通り頭でド突く男の技。やる方もやられる方も痛い。打ち方を間違えると額が割れる。とはいえ今の身体能力の場合割れるのは額ではなく俺たちを支える屋根の方だ。十六夜があけた穴の存在もあつてわりかし巨大になった天井の崩落は俺の期待通りの結果を生み出し春日部から離れることに成功する。

とはいえ危険は去っていない、ここからが俺の本当の戦いだ。

「……日向ア!!」「……」

音で勢ぞろいした敵は6人……俺はなんとしてでも生き延びて見せる

「うおおおオオオオッ!!」

俺は——生き残る！



翌日、結局日が変わると共に俺のギフトカードより「超高校級の相談窓口」の文字は消えてその効果もさっぱりと消えてなくなった。

影響下にあった人物からはその記憶も消えてしまっているようで何をしていたかも覚えていないというのはいいことなのか悪いことなのか……少なくともボロボロの本拠と散乱した布地の数々の説明に非常に困ったのは悪いことだろう。

なんとかか大人である黒ウサギや白夜叉に説明して誤魔化してもらったものの被害者でもある二人には少し気まずい思いだった。

とはいええノーネームといえ毎日が毎日こんな感じなのだから正直ため息が止まらない。騒動の中心だった俺が言うのもなんだがお祭り騒ぎは本当に年に一度とかにして欲しいものだ。

とはいえ今回数も数名程度の犠牲で終わったことが奇跡に思えてならない。極たまに思うのだが不幸と引換に幸運というのは超高校級の幸運の能力が発動しているという

ことなのだろうか？

まだ見ぬ同級生の姿を想像し感じた寒気に身を震わせるのと同時に、それでも俺はどこか懐かしい気持ちに少し戸惑っていた。

希望に執着する彼と才能に執着していた俺……記憶にないその時間、俺と彼ではとても相性が良くないと思うのだが……この体は何を覚えているのだろうか？

いや、思い出に拘わるところを見るとやはり俺も高校生ということなのだろう。実年齢的には既に二十歳近いのだが……まあ気持ちは永遠の高校生って事だ。

「おい、さぼんなよ日向。半分はお前がやったんだろうが」

「……お前のせいだな」

「元の原因を辿るなら結局はお前だろ？ほら手を進めろ」

……という現実逃避すらさせてもらえない。そう俺と十六夜は今、先の騒動で壊れた館と浴場の修理に……追われているのであった

カムクラ設定集

名称：神座 出流（カムクライズルの方が正しいかも？）

年齢：20前、精神的には生後2年ほど

性別：男

種族：人間

今作では日向の精神が絶望に傾くと出てくる。便宜上原作での真のカムクラをマイルドカムクラ、日向の想像した絶望としてのカムクラをそのままカムクラとする。

二者の違いはマイルドカムクラが無色かつ江ノ島盾子に復讐心を覚え、心のどこかで日向の影響を受けているのに対しカムクラはそのまま日向のイメージの絶望を映し出す鏡となっていること。扱うギフトやスペックに違いはないが行動原理やかつて仲間に対する意識が明らかに異なる。

日向からの変幻の際には原作の様にスーツ姿の男版貞子の様になる。元々人類の頂点として相応しい身体能力に才能のオンパレードだったが箱庭に来てからはそれが更に進化、絶望やギフトといった物がなくとも十六夜をあしろう程になってしまった。

特に道具系統のギフトは両カムクラに対してなんの意味も持たないことが多く、相手が持っている状態で相手よりも上手く扱うという謎理論でだいたい無力化される。イメージは「自害しろ、ランサー」

ダンロン世界の才能について

一、超常現象 幸運、占い、分析力等の成長とは関係しない生まれできるパラメーターによる才能

二、生まれ 御曹司、女王、極道、多胎児等の個人のパラメーターとは関係なしに出生の環境やその環境によって得られた才能。御曹司ゆえに様々な学を収めさせられた等

三、才能 現実世界でも才能と呼ばれるジャンルのもの。スポーツ芸術学業技能……他とは違い現実でも馴染みのあるもの。

四、行い 石丸君、大和田君のようにその行き過ぎた素行から付けられたその姿勢や肩書きに対する才能。生まれに比べると後天的につけられた名前が才能になっていたりする。三との違いは上記以外に直接的に仕事に繋がらない等もある

以上の4種に大別した場合「一」はそのまま受け継ぎ、「二」は再現不可だが箱庭世界においては部分的に再現可能になり、「三」に関しては才能を持つ人間が行き着いた所までを再現し、「四」は人格などによるところが多いため基本的には再現しませんがその人

格が必要となつた場合はその人格に付随するイメージやカリスマ、迫力が自動で付加される形になります

《ギフト》

通常の日向君の使うものと異なり効果が凶悪な絶望バージョンを利用する

花村：???

辺古山：数の無力化

群体に対する圧倒的耐性。所謂数で攻める、削る戦法の無力化の他に群体を個として扱ったり、個人向けのギフトの効果が拡散したりするようになる。元ネタは辺古山ペコの処刑法

罪木：超医学

古今東西医学に関するあらゆる知識と技術。加えてそれを過程を省いて行使する力。これを使えば即死攻撃以外を即時回復したりドン臭いことに定評のある罪木ですらアスリート顔負けの動きができるようになる……が連続の手術が患者の負担になるように治療の度に体に負担が貯まる

田中：獣化

箱庭にある従来の獣化ではなく範囲内における全ての存在の単純化。あらゆる思考、

判断力を愚鈍にし文字通り単細胞にする。効果を受けている最中は生存本能が爆発しあらゆる行動原理が「自身の生存」へと向けられる。本来の生存本能ならば子孫を残すことに向けられることもあるがこの場合以下に愛情や血がつながるものであると蹴落として自身が生き残ることに向けられる。常時発動型や意識せずに使用可能なギフトはこの状態でも使えるがそれ以外は使用不可。基本的に弾けるのはまずギフトが効かない十六夜や本人の施行を低下させても友達のが自動で補う春日部、人である事をやめられないカムクラといった特定の存在のみである

カムクラ：完成人類

前の世界でカムクラが作られた意味そのもの。人類の完成であるが故に人の類いに可能なことを全て逆説的に可能にするギフト。明確な人でなくとも人の類いで良ければ竜人などの技術も可能にするがあくまでも本質が別なものがただ人型をとっているだけの場合は能力の範囲外となる。ただしそれが人間にも可能な技術であるのであれば使用者が非人類であっても模倣が可能。また明確化されていない十六夜のギフトなどは現状模倣不可。ちなみにこのギフトのおかげで元の世界ではどうしても再現不能であった「超高校級の多胎児」や「超高校級の御曹司」といった生まれが影響するものにまで手が出せるようになった。

箱庭世界という功績の類いは元の世界で成した分しか持たないが人類がかつて成し

たことならばだいたい権利を持つ。ただ実行して居ないためルールで強く縛られると流石に正面から突破は出来なくなる

なお現状箱庭世界での仲間に対して思うところは何もなく、日向の影響を受けたマイルドカムクラでさえ別に特別意識せずあまりにも邪魔なら殺す。

両名が想像しにくい場合は

マイルドカムクラ || fate / zero のバーサーカー（元主への執着とそれ以外は割と落ち着いておる所）

カムクライズル || 黒化英霊（まんまただの害悪）

と想像していてください。基本理性があつても狂人です。マイルドカムクラ君は花村を問答無用でボコさず、日向のことを意識して真つ向から説き伏せたりしていたのでまだまともに見えるかもですが思い出してください。かつての仲間である女子を問答無用でグチャツてしてたことを。まあその後力尽きた罪木を放置せずトドメも刺さず月までお持ち込みしたのは日向君の影響ですが要はそれでもその程度つてことです

感想でまた怪しいところ追求されたり質問されたりすると追記します。やたら複雑になつてわからなくなつたらまた見てみてください

龍使いは人間か否か

——ドラゴン。暴力の象徴、邪悪の権化、神の証明、不死の賢者に世界の尺度。どれだけ贅沢に言葉を並べようとまだ足りない絶対の君臨者。

見た目は巨大な爬虫類。西洋ではトカゲ、東洋では蛇として書かれることが多い。体を覆うのは大抵にして刺々しくも強固な鱗。トカゲには体軀に見合う強靱な翼が対に生えており蛇に至つては謎の力で浮遊する。大抵にして炎や高温のプレス、あるいは毒の吐息を吐き出すというのが外見の説明になるだろう。以上の説明のとおりその肉体は破壊に特化していて邪悪な物が多い。故に宗教や国によつては邪悪なものとして書かれるしその角が妙薬として使われることから神格化している国もある。

纏めれば人間には届かぬ神の領域に居るもの……という認識になるだろう。

中には人の身で有りながら龍殺しを成す等と言う偉業を重ねた者達もいるのだが……しかしそれは数少ない例外と言える。

もう一度言おう。龍とは絶対の尺度だ、例え神が冒瀆された世界であれ機械が天に立つ世界であれ龍だけは変わらない。龍は揺るぎなくそこにいるのだ



巨人を退けペストとの再会やヘッドホンの蘇生(?)を終えた後、結局事が事ゆえにノーネームの発売を早め十六夜とレティシアがこちらへと向かうことになった。フルメンバーの投入……こうも短期間で魔王閔連の依頼が続くと魂胆通りとはいえ呪われているのではないかと疑いたくなるのも事実だ。

それともやはり俺には幸運というパラメータが存在しないのだろうか?まあなんにせよ今度こそ真正銘ひと段落したわけだ。なんだかんだ朝からまともに休む時間もなかったからこそ今ぐらいは落ち着きたい

二人を迎えに行つた黒ウサギが帰ってきたら確実にその平穩は消えるのだからその思いは正しく真に迫つていえる

「ところで日向くん、結局私たちと言えれば貴方のお友達について詳しく聞いていないのよね」

「……藪から棒に、つてわけでもないか。でも何度もいうけど俺のいた世界だと戦闘力つていうほどのものを持ってたやつはそういないからな……なんとも言えないぞ?」

そう返した俺に今度は春日部が首を振って否定する。そうじゃない、とそう続けた彼

女の後ろでは忙しきから姿を消したサラヤフラツと消えてしまったフェイスレス以外のメンバーがこちらを興味深そうに見ている

「……創の友達のこと、創のことを聞きたいんだ。仲間としてじゃなくて友達として……変ないざぎごとか関係なく」

……ふむ、そういえばヘッドホンのひと悶着の時にそういった旨のことを言っていたのは覚えていて。春日部なりの決着の付け方なのだろうそれは無意識に俺たち全員が避けてきた事だ……他の三人がどういう過去を持っているか……今を生きるのに必死な俺は特に興味もなかったし自分の事もある意味特殊な例として考えているため話す気もなかった。必要に駆られなければ求められても話さなかったに違いない。

だが今回のことで春日部の中の何かが触発されたのだろう。ただ気になるのは……ヘッドホンの事は既に終わったはずなのにその表情のどこかに陰りがあること。

いや正直に言おう。春日部は今確実に絶望の影響を受けている。久遠には何らその兆候が見られないので俺のように絶望のギフトの効果を受けることで絶望に傾くというわけではないのだろう。とはいえ田中が言葉を弄して春日部を絶望させる様子は俺には想像出来ない。

「まあ、構わないけど……そうだな。前も聞かれたなんで俺がかつて才能にこだわっていたか、つて言うのもいいけどそれはどうせならレティシアにも話してやりたいし」

さて、自分語りというのは何度やってもなれないものだ。特に今回はその話題を自分で選ばなくてはならない。周りを見てもいるのは殆どが女子。ジンとカボチャを抜いてしまえばもう女子しかいない。口が達者ではない自分にここにいる全員を楽しませるような話が出るのだろうか？正直に言えば才能にこだわらない自分なんて殆どが箱庭での自分……話すこともない。

「まあいいか、レティシアもまた聞きたくなくなったら聞いてくるだろうしな」
「そうでなくとも私が話すから問題ないわ妖怪ロン毛」

……いい加減その口を纏めてやろうか？

一人木に寄りかかってこちらを見下ろしてカツコつけるのはいいがその寂しい身長
のせいで子供が遊んでいるようにしか見えないことは黙っておこう。

「と言っても話すほどのことでもないよ。ただの羨望……空っぽだった自分が認められなくて、才能を持つみんなが輝いているように見えて、その輝きの意味を深く考えずに
ガムシヤラに走ってたってだけの話さ」

「その方向がカムクライズルだったって事？」

「いや、勉強とかスポーツとか芸能とか……あらゆる方面だよ」

そうだと、希望ヶ峰に入る前の俺はその精神状態と周りを見る事をしなかつた所さ
え除けば一般的には優秀と呼ばれる位置にはいたんだ。

予備学科とはいえ入学が可能な学力、超高校級の中に混じっても何から見劣りしないガタイの良さ、憧れゆえに色んな超高校級を調べたり雑学と言えるところにも手を出していた。頭の回転だつて総合的に見れば悪くない。真面目に、ストイックに……ただそれは満足しなかつたんじゃないやなく出来なかつたが故の境地といつてもいい。もし仮にその俺に余裕というものがあり、周りを見やり気を使う余裕があつたのであれば超高校級の風紀委員とまでは行かなくともまた別の超高校級と呼んでも差支えない何かになつていただろう……だかもちろんそんな余裕がある様な人間ならば逆にそこまでのスベックは手に入らない。周りを顧みずただひとり修羅のように走り続けたからこそその当時のスベックだつたわけだ。言うなれば超高校級の羨望……誰よりもそれに焦がれただけの男。

「……正しく馬鹿ね」

「まあな、確かに無駄なことをしてた。でも選択を間違えたとは思わない。結果が一つの世界の崩壊だとしてもな」

相変わらずサーシャは何を言っているのか理解出来ないように眉を潜め訝しげにこちらを見るのみだがその保護者的ポジション足るカボチャと言えば慈愛に満ちた形にその眼を歪め何がおかしいのか口元を僅かに緩ませた

……だから俺はお前が嫌いなんだと再確認しながら話は止めない

「我儂な話だけだからこそ俺は一つの答えにたどり着いた……正確には情けない事に自分よりもボロボロの女の子に答えを示して貰っただけなんだけどな」

「……前に言ってたゲーマーさんね。最後の事件の……」

「そう、俺は別に才能なんていらなかった」

輝いて見えたのはそいつらが全員誇れる何かを持っていたから。

憧れたのはそいつらがみんななかに必死になれていたから。

決定的に違ったのは俺が自身の成した結果に大した感慨を持っていなかったから。

だから俺は自分の生に意味を見いだせなかった。その頂に到達できさえすればいいと思つてすべてを投げ出せた

「俺はただ自分に自信がなかった……それだけなんだ」

「自信が……ない？ 創が？」

「ああ、俺は自信がなかった。世界を主役と脇役に分けて……下手をすれば自分を黒子にまで押し込んで……普通そんなこと考えないだろう？」

む、という顔をしたのは久遠か。確かに彼女は考えないだろう。理解出来ないのも当たり前だ。

——しかし俺はそこでふと不思議に思った。

サーシャは俺の弱音を鼻で笑っているしジャックは変わらずニヤニヤと俺を煽っている。ジンが微妙な反応なのは彼の思いを考えれば納得の行くことだしペストが鳥肌のたった肌を抑えているのはおそらくカムクラじぶんに主役エキストラと脇役を混ぜられたことを思い出したからだ

……ではいつもの自信の塊たる春日部耀といえはどうだ？ 静かな癡奔放にして不敵な十六夜にも、苛烈にして気高い久遠にも負けずその体の内に炎を燃やす彼女は？

なぜ春日部耀は今にも折れそうな表情でこちらを見ている？

「……春日部？」

思わず話を切って存在を確かめてしまった。

自然周りの視線は皆そちらに行く。

「春日部さん……大丈夫よ。十六夜君ならそのヘッドホンで笑って許してくれるわ。」

むしろ許さなかったら私が許さないもの、と豪語する久遠の言葉に一瞬で表情を戻す少女……そこに先程までの答えを求めような色は無い。

見間違いのだろうか……本当にそうなのだろうか？

春日部に潜むあの嫌な感じ……特別俺が敏感なあの感覚……何かがあるのは間違いない。ヘッドホンだとかそうじゃないだとかは関係なく今春日部は……何かに絶望し

かかっている？

だとすれば今それを何とかしなければまずい……断言できるその感覚を信じ俺はたとえ拒絶されようともその話題を出そうと決意したその瞬間のことだ——
星が瞬いた。

星空を見上げていたわけではなかった俺には正確にどうなったかの判別は付かない……だが確かに視界の端で夜空の星が数瞬その光を失っていたのだ

嫌な予感がする。絶望のそれとはまた少し違う……這い寄るような冷たいそれではなくどこまでも熱い強い悪意

……果たしてそれは現実となる。襲撃を乗り越えようやくしぼしの平穩を取り戻したアンダーウッドが揺れている

「——ジン、これはなんだ？」

天を裂き、大地を崩し、山を轟かせ、大気を震わせる。大樹の街アンダーウッドはその巨大な影にすっぽりと覆われていた。

圧倒的な存在……それにジンは声を震わせながら俺と同じようにそれに視線を固定して答えてくれた

「——ドラゴン、最強の幻想種と名高い箱庭の王者」

山というよりは山脈……それがまるで天へと伸びているかのようなかの存在は突如

南の土地へと現れて……俺たちの僅かな平穏すら奪って行った

竜の羽ばたきに人は結束する

竜種——語るまでもない。アレは戦つてはならない類の存在だ。純粹なる脅威でいえば前の世界の江ノ島にも通じるだろう……あれはそれほどの存在だ

「——皆さんかわして下さい」

カボチャの珍しく真剣な声色に反射的に体が動く。天より撃たれし黄金の鎚、稲妻へいつもの模造刀を打ち出し炸裂させる。金箔と金属の棒を垂直に、しかし高速回転させるように投げることで雷を誘導し炸裂させる……がしかし足りない。分散させたところで単純にあの一撃は大地を砕くに足る威力を秘めている。散つたことによりアンダーウッドに豪雨のように降り注ぐそれは用意にその身を地下まで潜り込ませ炸裂させた

結果として宿舎の近くで地盤の変動に俺達は晒される。

ジャック達はそのままだこかへと飛ばされ春日部と三毛猫は下へ下へと落下していく。

近場にいた久遠を抑え、ジンをベストに任せて怒涛の波を凌ぎ切ると今度は空から雷に続いてもはや見慣れた黒いギアスロールが落ちてきた……となればやはりこれは魔

王のゲーム

「ここまですれば魔王との縁が余程だな。箱庭にお祓いつてあるのか？」

「無駄口を叩く暇があったらご自慢の頭で何とかしなさい妖怪！」

……ツツコもうとは思ってただけど存在的にはペストの方が妖怪に近いよな？ まあ――

――コイツほどでは無いのだろうか

見上げた巨竜の存在に身が震える。人の身で届く事の無い頂き……生命としての一つの頂点。

「もはや何を呪ったらいいのかわからないな」

暴風を耐え切り崩れつつある足場に注意しながら振りまかれたギアスロールを掴み流し見ていく――ありえないその項目に目を止められるまで

「――ツ!？」

「日向さん、ルールは!？」

ペストに抱えられ若干流された位置から帰ってきたジンが声を張り上げて俺にそう問いかける。俺はそれを理解しながらしかし答えられない。ルールの謎さもあるがそれよりも何よりも……これじゃまるであのコロシアイの――

——再現のよう

プレイヤー側勝利条件、第二項目。そこに記されているのはこの手のゲームにはよくある単純にして最も困難な条件——『ゲームマスターの殺害』。そしてこのゲームというゲームマスターの名もそこに記されている。よく見知った名だ……だって彼女は仲間なのだから。

「……レティシアードドラクレアの殺害が条件？」

「待って日向くんあなた今なんて——？」

ジンの驚愕の顔も、ペストの苦々しげな顔も、そして最も近い久遠の色の抜けた顔の理由も俺にはよくわかる。その表情は……俺達がずっとしてきた絶望の顔……悲しみではなく……怒りの表情

「このゲームの主権者はレティシアだ。勝利条件はレティシアを殺すこ——」

「日向くんッ!!」

言い切る前に久遠の伸ばした腕が俺の襟首を掴みあげただでさえ近かった距離をさ

らに消していく

自然とより見えるようになった顔は今まで見てきた久遠の表情の中でも段違いと言えるほどに鋭いもので……そして瞳の奥にはそんな強い外側とは裏腹に弱い懇願の意思が揺らめいている

「……仮にそれが真実だったとしても、殺すなんて言わないわよね？」

そう、その言葉は疑問では無い。

必要に駆られれば、究極的な選択を突きつけられる場面になれば俺ならば迷わず切り捨てる選択をするであろうと断定しての言葉だ。

……そしてそれは間違えていない。俺は犠牲という存在を許容できるようになってしまっている。

「言わねえよ。意味がいまいちよくわからないがレティシアは助ける」

だがだからと言ってそれはその選択を迫られた時のみだ。迫られてない内に見捨てるなんて思考に割くりリソースは無い。それに気になるところもある。

このギアスロールにはゲームマスターの殺害が勝利条件として二つ書かれている……片方はそれこそレティシアとそのまま書かれているわけだがなぜもう一つ「魔王ドラキュラ」と別名で書かれているのか……いや、それ以前にレティシアは「元」魔王のはずで今はその力の殆どを失っているはずなのだ。

仮に何か起きたとしても十六夜と行動を共にしていたはずの彼女が十六夜と離れたこの瞬間にそれらの力を取り戻し、これ程の規模のゲームを果たして展開するだろうか？仲間思いの彼女が？

思えば疑問は募るばかりだ。何故巨人族やこのゲームは収穫祭を狙って行われている？ホストがゲストを守るために力を割くからか？だが外部の実力者も同時に招く事の方が危険なんじゃないのか？

“アンダーウッド”の再建……そういつた意志の込められたこの大祭……そしてこれだけのイレギュラーに反応を見せない白夜又含むサウザンドアイズ……

「事はこの狭い範囲のみで起きているわけじゃない……？」

「どういう事ですか？」

「魔王の動きに敏感なサウザンドアイズが動きを見せない。そして明らかに事が起きると分かっていた龍角を持つ鷲獅子の同盟も動きが鈍い……単にイレギュラーが重なっただけならいいんだが——もし一連の事が誰かが意図して、あるいは徒党を組んで起こした事なのであれば問題はあのでかい龍をどうこうすればハイ解決にはならないってことだ」

嫌なのは既に春日部や久遠が田中と接触していること……江ノ島盾子の動きがどんなん全体を巻き込むように大きくなってきているのは感じていたがまさか今度はこの

祭り全体を巻き込む気では無いだろうな。

「仮にそうだとしても結局あの龍は何とかしなきゃならないでしょ。それともあんたの妖怪モードなら何とか出来るのかしら？前見た数の無効化は確かに強力だけれど……アレは強力な一個よ？」

「出来るか出来ないかで言えば多分俺よりも対峙したお前の方が詳しいんだろうが……できる可能性はある。でもその手段は死んでもなしだ、もしもう一度カムクラになったら今度は戻れない」

「こつちに来てから自分の体の変化についてはもうよく実感した。だからこそそろそろ自身の内の希望の限界がよくわかる」

前回のように外部からの協力は何度も期待出来ない……チートはもう使えない

「……わかりました。おそらくこの祭りの中であの龍に挑むとすればノーネームかあるいはウィルオウイスプ以外は無いでしょう。それでも不利すぎる勝負ですがそれは黒ウサギたちと合流してから話し合いますよ」

「不幸中の幸いね。十六夜君がこちらに来て以上、ブレインと肉体労働に関する手札は充実してるってことだもの」

二人の言う通り俺達の優先すべきは合流だ。とはいえ稲妻にまぎれて龍から吹き出す蠍だのの化物や3度やってきた巨人達を超え、この悪天候の中合流するのは厳しいだ

ろう……だが状況に対しこの後の展開は読みやすい。

突然の魔王の襲来にこの意味不明のギアスロール……これは最近経験した展開だ

「……おそらく黒ウサギは審判権限を発動する。受理までの時間は俺にはわからないが合流の心配は必要ないだろう」

手に持つ黒いギアスロールをジンへと押し付ける。頭の中がカオスな十六夜やこの世界の法則を知るジンが持っていた方がよほどいい。

起こせる行動は基本的に散った各勢力の救出加勢。無尽蔵に湧き出る巨人をこのエリアから取り除いたところで意味は無い。やるのであれば戦力が固まっているところでもやるべきだ。とはいえ宿舎からは離れたそこへ向かうのもまた時間の無駄、どうせ十六夜か黒ウサギがいるのだろう。下手に動くよりはここで大人しくしているのが最善だ……

——実際に数分とかからず休戦の意が黒ウサギの声に乗って届けられることになった

……それと同時に龍の身じろぎによって多大な被害がもたらされた事を除けば概ね予想通りと言える



龍の身じろぎが起こした暴風……それにより多くの魔獣は本体へと還り、また休戦の令に従って今は静かに沈黙している。

被害が甚大なこちら側としては魔獣が根こそぎ消えてくれたのは嬉しいことなのだがその回収作業でさえあれほどの被害を招く最強の存在にもはや呆れてしまう。

地下都市に急造された緊急治療所を少し眺めるだけでも絶望という言葉には十分だ。

……白面の少女の安否がいい加減気になってきたが……それよりも身内の安否が今は一番だろう。

集まったメンバーには見慣れた顔が二つほど足りない。

「……駄目だな。これだけ探しても見つからないとなると春日部にも何かあったって事だ」

「初めの雷撃の時点だと下に落ちていったように見えたんだが……どうにもそれ以降はわからない」

春日部の能力を持つてして休戦中に合流できないとなるとそれは尋常な事ではない。

毎度毎度分断されている気がするのだが今回は前回以上に嫌な予感がする。一つは

絶望の気配を感じないこと。田中がいることは明らかになっていくのだから何かアクシヨンがあってもおかしくは無いのに結局未だに接触は春日部と久遠の2人のみ……前回の罪木は俺へのこだわりが見えたから動きやすかったが……田中がどう動くかなんてわからない。殺人が起きてても如何して床下の自分のピアスを回収しようか裁判まですつと悩んでいた男だ。結果としてその行動が役に立ったのは……まあ何とも言えないことだが

「探索に人員を割くのも今回は有りだと思う。参加している敵が敵だけに数だけいればどうにかなるものでも無いし春日部なら生き物の声を辿ってこれる、探索班に生き物の力も使えるだろう」

不安からそう口にしたわけだがどうにも十六夜の反応はよろしくない。戦力を削るわけでもなし、どちらにせよ分散するであろう敵勢力を見越して各地でそのまま伝令をして貰ってもいいはずだ。そこまで悩むような提案だとは思えない

「いやアイデア自体に文句はねえ。他所のところも多くはないにしたって行方不明者は出てる。中には要人もいるって言うんだから放置しとくわけには行かねえんだが……ちよつとだけ気になってな、まあ深くは気にするな」

十六夜がそういうのであればこちらから言うことはないが……十六夜も何か気にしているというのは気になる。そもそも俺の感じているこの嫌な感じはいつもと違うの

だ。先ほど言ったとおり絶望のものではない。

絶望が居て、龍もいて、レティシアの問題もあって、そして春日部が行方不明……これはどれに対してのどのような予兆なのだろうか？

修羅場を越えてきた経験かどうにも俺はこういう事には敏感だ。疑いようも無く、絶望とは別の嫌な感じが今回はこの場にある。

前回の北の祭りには無かった何か……ここで起こる

「……何にしてもこの空白期間を無駄に過ごすわけには行かない。情報集めに出てる黒ウサギが戻ってきて、対策の会議が始まるその前までにこっちでもある程度状況は把握しておかなくちゃな」

「まあ実際うちのコミュニティから敵のゲームマスターが出ちゃってるわけだしな。とはいえ何回読み返したところでしょうもないぜ？これ自体には書かれてること以上のことはねえよ」

……要するに十六夜も「レティシアードラクレア」が敵としてこのゲームに参加している事を否定できないという事だ。

だが何もわからないと言ってない以上一応読み取れることはあるらしいのだが……十六夜の言い方はいちいち回りくどい

「皆さん！耀さんの行方が判明いたしました！」

「本当に!？」

そうして各々が思考をあちこちへ飛ばし、自然と降りてきた沈黙に身を任せる中飛び込んできた黒ウサギとジンが朗報をもたらす。

行方が知れているのなら問題は少し減る。何よりも安心具合が違う――

「yes、ですが……少々まずい事態になっていますようです」

しかし黒ウサギの声は晴れていない。その様子に表情をを喜色に染めていた俺達はそのまま元へと戻し話を促す。

それに対し黒ウサギは腕を掲げて先程まで抱き抱えていたモノを俺達へと見せた。

元の世界においてほとんど存在が確認出来ない希少種……三毛猫のオス、春日部がいつも連れていたひょうきんな彼がボロボロのままグツタリとしてその中で横たわっている。気を失っているだけのようだがただ事ではないのは言われなくてもわかった

「目撃者の話によれば耀さんは魔獣に襲われた子供を助けようとして……」

「そのまま魔獣を追いかけて空へと昇っていったそうです」

黒ウサギの言葉を繋ぐように続けたジンの報告は消して明るなものではない。

よりにもよって消えた先が敵の本拠地……そして交戦禁止の今でさえ帰還しないのだ……何か起こったことがうかがえる

「一人で乗り込んで行ったわけか……城に囚われるお姫様なんてのはゲームの中だけで十分だぜ」

「ゲームならお姫様を助け出すのに何も考えなくていいんだけどな。そのお姫様は死なないだろ？ 助けに行く配管工は何十と死ぬのに」

「……日向お前ゲーム下手なんだな」

……死ぬほど喧しい。

だがいつもと変わらぬ軽口も表面だけだ。なにせこの中で空中を飛ぶことが出来るものは一人もいない。

何でもできそうな十六夜も、神様の道具を持つ黒ウサギも、ギフトの力を使いこなせる久遠も……ペストやジンも完全なる飛行の力を有していない

「……空に囚われた姫様は二人、ついでに要人とやら子供たちもそこだろう？」

「レティシアは置いておいても要人がいるならすぐにでも救出隊が組まれる……このゲームの動き方は主に地上と上空、二つに分かれて同時攻略……そうなるだろうな」

となればノーネームの動き方は微妙なところだ。黒ウサギが参加出来ない以上、現段階の戦力はペスト含め4人……とはいえ十六夜はどうあってもドラゴンに当てなきやならない。久遠は巨人の相手でいっぱいだろうしディーンが暴れるにはあの城の耐久値が不安だ。

ていた状況がここに完成してしまった

映画ならば今後奇跡が起きてきつと無事に危機を脱するのだろう。だがここにそんな奇跡を信じるものなど誰ひとりとしていない。隅にて震える未成熟な子供とてそのことをよく理解していた

だからこそ少女は一人戦わねばならない。休戦中にも関わらず襲ってくる腐肉が今更見逃してくれるわけがないのだから。

「……で隠れてて!!」

だからこそ方位を突破せんと飛び出す。月明かりが穴の空いた壁から差し込む中、時に立体的な起動を描いて闇の中を疾駆する。

友人の力を受けられる少女にとつて一体一体はさしたる脅威ではない。

でかさ故に反応の鈍い一体を高速で打ち据える硬い菌糸の核を無理やり打ち砕く。

しかしそれは消して安い作業ではない。それらの過程の内に他の3体は自分を射程へと収めてしまった。怒号もなく振り上げられた腕がやはり湿つぽい音を響かせながら振り下ろされる。それを軽いフットワークで横へと避けると勢いのままに瞬く間に背後へと回り込み一撃、核には届かないながらも反対側から迫る敵へと打ち出しさらに振り下ろされた腕に砕かれた石床の欠片と呼ぶにはデカすぎる塊を投げつけて動きを抑える。残った一体は素早い少女を捉えるのを諦めてかその巨体でもって押しつぶす

ように迫ってきた。対して少女が選択したのは正面衝突、体力があまりあるとはいえ今日は長距離の移動に祭り、数度の交戦を越えてのここだ。高速機動による攻撃は安全ではあるもののジリ貧になりやすい、だからこそ一体一体の破壊の速度を上げるためのこの状況を生み出したのだ

……一対一、阻むものは誰も居ない。

轟音を立てて少女へと肉薄する肉塊へ少女は腕を突つ張るように突き立て、足でしっかりと地面を掴んで固定した。数瞬の間もなく衝突……多少の後退と共に肉塊は停止し進まぬ体に痺れを切らすように震えている。

細身で可憐とすら称せるような少女が異形の化け物を力で押し伏せる光景に、隠れている多種多様な種族から感嘆の声が溢れた。

「———でやあああああ!!」

普段からは想像出来ぬ気合いと共に巨躯の足は地面を離れ今や世界と繋がるのは少女の腕に抑えられた自身の片腕のみ……その行く末を完全に一人の少女へと握られる。さらにその震えを大きくしグチャグチャと怪音を響かせるクズ肉へ少女はその両腕さらに振りかぶり地面へと叩きつける。自然と頭部の核が正面へと投げ出される事になり無論それを見逃すつもりも無い彼女はボールか何かを蹴るようにそれを雑碎く……未だに隅で失った部位を震るわせのたうち回る2体等もはや敵ではなかった。

念のために辺りの匂いと音に意識を巡らせ数秒……今度こそ危機が去ったことを確認してようやく一息

「……終わった」

「おいおいすげえじゃねえか嬢ちゃん。『冬獣夏草』の核を素手で殴り壊すとか本当に嬢ちゃん人間か?」

「遺伝子的には問題無く人間」

……帰ってきた答えに年のいった獣人は思わず閉口する

周りの多くがまだ幼い少年少女なだけに一人生の哀も甘いも経験してきたその男は目立っていた。

……何を隠そう彼こそが地上で噂になっている「攫われた要人」であり、商業を主な活動とする六本傷の長、東の猫娘ウェイトレスのお祖父ちゃんガロロⅡガンダックその人である。

歩き回る肉塊の正体を教え、弱点を伝えたのもこの男だ

しかしーコミュニティの長とはいえその生業は商いであり戦場に立つようなタイプでもなければ年齢でもない。それでも地上では奔走していたのかあちこちに目立つ傷が彼の性格を表していた

「……待って、まだ来る!」

ボケこそ殺されたものの子供たちを怯えさせまいと口を止めずに喋る彼を止めて無双の少女……春日部耀再び体に入力する。

普段よりも身体が軽い、それを知らぬ間に身体強化系の友人でも作っていたのだろうか
と良い意味で予想に反した現状を春日部はそう判断した

しかしそれにしてもいざれ限界は来る。自分の限界ならばまだいいがそれよりも先にこの場にいる子供たちにそれが来たらどうなるだろう？それはきつとおぞましい惨劇が広がるに違いない。

———自分に現状を打破する力さえあれば……友人に頼った力ではなく……正真正銘自分だけの力があれば

……弱った心へ闇が差し込み、ほの暗い欲望が釜首をもたげる

それを自身で自身の頬を打ち、子気味良い音を響かせることで晴らす。

周りは突然の行動に驚いているが実のところ今の彼女に周りを見ている余裕はないのだ。

以前までなら純粋な正義感で同じ行動を出来ていたであろう少女の今の行動原理はただの自己満足。自身より弱いものを助けることで自身の存在を保つ彼女の仲間の同級生が闇に落ちた考え方そのもの。

彼女はそれを知らないながらもどこか嫌な感情だとは察していた

——とはいえそれと現実とは何の関係もない。再びグチャグチャグチヨグチヨと水つぼく、弾力性を主張しながら肉の塊がなだれ込んでくる

「ヨホホホ、それでは私もお邪魔しましょう」

再び戦闘体制に入ったところで青い豪火が冬獣夏草の同士の隙間からチロチロと漏れ出ては勢いよく悪魔の腕が辺りを舐めまわし炸裂していく。

その勢いたるや直前で春日部が風の壁を作らなければこちら諸共焼きかねなかったほどである

「ジャック!？」

「ジャックさんだけじゃねーぞ、こっちだこっち」

声につられて春日部が視線を向けた先には炎から身を守っていたのかアーシヤが瓦礫の影から姿を現す

「全く、こいつらもジャックさんの前で子供に手をかけようとするとは運がねえな。ま、自業自得だけだよ」

仮にそうだとしても地獄の炎をそのまま召喚するというのはどういう暴挙か、ガロロが怒りを通り越して呆れるほどのことなのだろう。

「さて、城に迷い込んでしまったのはこれで全員ですかね？」

そう言つてカボチャ頭の幽鬼が揃つたメンバーを見渡していく

六本傷の長、木霊の子、春日部嬢、アーシヤ、その他獣人や精霊種の若葉、そして両目の色が異なるアンシンメトリーにも程がある少年――

「――ちよ、ちよつと待つて!!?」

「はて? 以下がなさいましたか春日部嬢?」

思わず反応した春日部にしかしジャックは何に反応しているのかわからずノホンと問い返す

あまりにも唐突すぎて……というよりはあつさりしすぎた登場に震える指でその異端を指さすと、全員の視線が一人へと集中した

「田中^ッ眼蛇^ッ夢は違^ッう……よ?」

なぜ疑問形なのか? その場の全員が思う中全員の視線で針のむしろにされた当の本人は恥ずかしそうにストールに顔を埋め、頬を赤らめたのだった

切ってはまた繋ごう、人の縁はけして綺麗ではないのだから

——時はまた流れ今は何故か久遠とジンが、正式にはペストが向かい合って立っていた。

ああ、そうだ一度まとまったと思つた話も、いざ会議の場になったら一気に話を変えられた……誰に、つて？言わせるな、我らがノーネーム一の問題児様のことを、これ以上考えさせないでほしい

「……で、この戦い本当に必要か？」

「い、いやあ黒ウサギも少し反応に困ると言いましたよ……ぶっちゃけどうなんでしょう？」

十六夜の考える事にいちいち否定を挟むつもりもない。信用であり信頼の結果だが……それでも俺は、あいつが全く間違いない人間だとは思ってない。

しかしよくもまああのスペックと性格を持って、問題児程度に収まっているものだ。俺の中の似たようなやつは世界に絶望して軽く魔王化しているというに……マジでど

ういう育ち方をしたんだ？ちなみにここで大事なのは育てられたわけじゃないところだ。いや、真実は知らないが、あんな暴走列車みたいなのを育てられる親とはどんな存在だろう？江ノ島に苗木でも掛け合わせたらなんか反発作用でも起きて誕生しそうな

——— 思っただが俺ちよつと黒くなつたか？

「それにしても久遠が上に行きたがるとはねえ。デインでどうやって戦うつもりなんだか」

「そう思うならちゃんとして止めて下さればよかつたじゃないですか!？」

「一応伸縮自在だからなあ……如意棒の取り柄はデカさじゃなくて伸びることだし狭くてもまあ戦えるとは思うけど、質量が変わらないなら当たればそれなりに力が出るってことでもあるしな」

……加えて十六夜もだ。俺達が城に行くのは救出が目的、もちろん万が一に備えて戦力が必要なのは変わり無いが、また初めのようにドラゴンが出てきた時のために十六夜は下で待機しているはずだった。

それに対して自分もついていくと言い「足で纏い」の一言に見事にバツサリ切られたのが久遠だ。それでも食い下がる久遠に十六夜が提示した条件がこれ……ペストから

一本を取ることに

「……春日部に加えて久遠の心まで折れても俺はなにもできないぞ?」

「まあ確かに勝ち目が薄いのは事実ですけど」

—— “薄い”。それは人を勘違いさせる言葉だ。

望みは薄くともある、と危険な一步を踏まこませる魔性の言葉だ。

薄氷という言葉がある、歩けるかもしれないと一步を踏み出し沈むくらいならば初めから水のままがいい。それは取り返しをつかないことにならないからだ。

まあ稀にその水の上を歩いて見せるような、あるいは水を割って道を作ってしまうような規格外の苗木せいしんのような存在もいるわけなのだが……例外は例外である。いくらこの問題児とはいえ、ああいった存在にはなれない

勇気は大事だ、覚悟も大事、時には無謀とて許そう……ただしそれは勘違いがなければだと思ふ。

0.01%の成功率に対し踏み込むのと0%を0.01%と思い込んで踏み込むのは大きく違うのだ

「でも飛鳥さんは今までずっと後ろにいましたから」

……ペルセウス戦、ペスト戦。彼女が対したのは分類すれば “その他” の存在だ。

舞台の裏か表かといえば裏であり、時々表へ出てきてもその立ち位置は隅である。

既に何度も行われており、それはつまり一度として久遠がペストに勝てていない事を表していた

久遠の力は言霊による他者の制御、それには黒ウサギが提示した二つの使い方が存在するが、その中で彼女が選択したのは「物理的、概念的な強化」の可能性だ。簡単に言えば、他者の精神を操るのではなく、「がんばれー」とでも言つて選手を鼓舞するチアリーダーにでもなったと思えばいい。もちろん、それは彼女の性格的にも、そして今持つデーモンというギフト的にも噛み合う素晴らしい力だ。武器が多ければ多いほど、その力は無限に増していく……本人の力を除いて。

「例えば一般人が拳銃をポンツと渡されたとして、しかもそれが狙つて撃てば必ず当たり、対象を破壊するに足る力を持つ物だったとして……十六夜に当てられるかと言われたらまず無理って話だ」

「……それはあの少女のことを言っているのか？」

「はい——つと……いや、ああ」だったな。うん、やっぱり普通に話せと言われてもいきなりは難しいな」

高台にある、いわば観戦席では俺を含めた三人が並んでいる。それはある意味当事者である黒ウサギと、この場所を特別に貸してくれたサラ様だ。

「久遠が操るあの巨人は確かに強い。元々並大抵のギフトではないのに、それを更に本

人の力でブーストしてるんだから、正面からぶつかれば十六夜はともかく俺は少し怪しい」

何せ伸縮自在の存在だ。リーチの面でも対応力の面でも厳し過ぎる——とはいえ、実際戦ってみるとそうはならない

「見ての通り、あのギフトを操る久遠がその特性を活かせていない。そして目にも止まらぬ速度で動くペストを追えていない」

「……いくら飛鳥さんが才能に溢れていても、経験や対応力に乏しい今の内に、魔王を相手にするのは無理がございますですよ」

まあ、そういうことである。だからこそ眼下で行われる戦いに、変化は一切訪れない。久遠がディーンに拳を振るわせ、ペストがそれを軽々と掻い潜り久遠の喉元へその細腕を突き付けてはチエックメイトを告げる。

「見てられないな、やつぱり十六夜のこととは全くわからない」

元々他人のことを察する力はそう高くない。他人に相談されて、その口で説明されて、そこまでしてようやく俺は他人の気持ちを観察することが出来る。人間関係を気にせずには高校生まで突つ走ってきた俺には合理的思考が馴染みすぎていた。

いい加減、飽きたらしいペストが遂に久遠を川へとたたき落とした。ペストからすればこのやりとりに意味なんてないのだから当たり前だろう。むしろ、久遠レベルの実力

者に勝てるかと侮られている事が不機嫌に繋がってる節すら有る

「……終わりでな。やっぱり引き出しの少なさは致命的だよなあ」

何も他人に言えたことではない。むしろこれは自分に言い聞かせるべく、発した言葉だ。

なにせ現状俺が操れる力といえば効果の微妙な三つのギフトに十六夜の劣化版の肉体だ。引き出しの少なさで言えば、俺は正直久遠にも劣るだろう。元の力がカムクラであるだけに、正直ダントツで無力であるとすら思う。

せめて肉体や感覚の力をもっと引き出せれば、あるいは限定的でも技術を引き出せば……そして自分のものとして昇華できれば魔王に遅れをとることも、無いかもしれないのに

「もう終わったみたいだし、先に出てるぞ」

居てもたつてもいられず、足早に観戦席を立ち去る俺の耳に、何やらやたらと近い所で強烈な水音が届いたり、残してきた女性ふたりの姦しい悲鳴が聞こえたりもしたが、すつかり思考の海に潜ってしまった俺に届く事は無かった。

俺も力は足りない。素の俺が、今まで誰かに勝てたことは無いのだから、言い訳のしようもなく力不足だ。

ならば俺はもっと貪欲に求めるべきなのだ、あの時のように、すべてを捨て去る覚悟

で、ただ力を望むべきだ。もちろん、ただ力を手に入れるだけなら内なるカムクラにただ身を任せればいい。すべてを捨て去って、投げやりに崩壊する世界を見ていれば、その内絶望として覚醒することは簡単だろう。

だがそれでは意味が無い、何を犠牲にするわけでもなく、俺は力を手に入れなければならない。そんな我俣を、通すくらいのことをしなくてはならない。

「でも、一度は成功したんだ。七海のおかげだけど、確かに俺は日向として力を手に入れた」

それは前を向く力、胸を張る力……所詮カムクラの力はおまけでしかなかったとはいえ、あの時のあの感覚があったからこそ俺の希望は仲間達に伝播した。

でも彼女はもうここにはいない、いるはずが無い。だからこそ今度こそ独力で成し遂げるのだ、俺が俺として頑張れる道を。力でも技量でもギフトでもいい。せめて絶望にだけは二度と屈することの無い何かを見つけ出さなければならぬ

決戦は近い。独力とはいったものの、いい加減俺も学習しなければならぬ頃だ。独りで出来ることには限界がある。特に俺のような愚か者はそれが際立つ

であれば道は一つ、今いる仲間頼る……ただそれのみ。

だが問題児様方はみんなが皆それぞれ忙しい……そんな中俺が頼れて、兼最も可能性がある存在。そんなのは一人しかいない

——
田中眼蛇夢。
あの男だけが頼りだ

番外 もしも全てを終えていたのなら

そいつは、初めから変な奴だった。

「俺の名前は日向創、よろしくな」

そんな風に俺達へ、何の気兼ねもなく手を差しのべる。

みんな分かっている。ここに居るのは、集められたのはただの人間じゃない。尋常ではない奴らが、選んで集められたのだと、わかっている。

だが奴はそんなことに構いはしなかった。慣れていると言わんばかりに手を差し伸べて、自己紹介までやってのけた——漏れなく落下中の空中で

「このクソ粋な招待方法にも物申してやりてえとこだが、なんだその数倍上をいくオリジナリテイ溢れる自己紹介は!？」

このまま行けば僅か数十秒で俺達は地面へと叩きつけられる。というか数十秒を要する程の高高度でありながら、こいつは一体なんだってこんなに余裕をかましていやがるのか？

もちろん、俺だって特に問題ではない。試したことはないが、この程度の衝撃でどうにかなるような体はしていないつもりだ。たとえば着地点が湖であろうと変わりない。

だが、俺は確かにこの異常事態に心を奪われた。揺り動かされた——つまりは動揺した。

故にその男を見た時、その男微動だにしない心の落ち着き方に、確かな敗北感を覚えた。

それが本当に敗北感なのかは実のところわからない。むしろ物寂しさすら感じられるその心の佇まいから、俺は思わず目を背けたのだから。

「ハハッ、確かに。こんなところじゃ落ち着けない。ちよつと手を借りるぞ、そつちの2人と猫もな」

「はあ？お手々つないで仲良くスカイダイビングの記念撮影でもしましょうってか？」
「ああ、あのよくあるやつな。残念ながらカメラがない、それはまた今度にしよう」

そう受け答えながら、手際よく空中で散らばる俺達を拾って見せると、男は事なさげに大気を蹴り掴んだ。

バツンツ！と空気が引きちぎれる音と共に、俺達は進路を変え湖の畔へと落ちていく。

男に拾い集められたほかの2人は、女子らしく悲鳴なんぞ上げていて気がついていないが、然し俺にだけは見えた明らかな絶技を二度三度と男は容易く繰り返す。

衝撃とは何だったのかと言わんばかりにやんわりと着地した頃には、他の2人も鳩が豆鉄砲でも食らったかのような顔をして男を見上げていた

「…………… オタク忍者か何かか？」

「いや、そんなんじゃないさ。ただの——いや、もう高校生じゃないから…………… あれ？俺つてもしかして無職か？なんとというか世も末だな、元超高校級の希望がまさかの無職とは」

さて、何をひとりで納得しているのやらわからないが…………… なかなかどうして食えないやつがまだまだこの世にはいたらしい。世界は広いとは言ったものだ。

「とりあえず、自己紹介には応える主義だ。俺の名前は逆廻十六夜。こんな状況でもなければ小粋で洒落た冗句も交えるんだが、今回はアンタに譲ってやるよ。びしょ濡れにならずに済んだ礼だ」

言っていてどの口がと言いたくなる不敵具合だが、むしろこのくらいの方がこの男にはちようど良かったらしい。何が面白いのか口元をそつと釣り上げては、微笑ましそうに、何かを思い出すようにこちらを見ている。これは経験則だが、大概こういう顔をしているやつは、誰かに重ねて誰かを見ている。

癖のようなもので、一挙一動に意味を求めてしまう。無駄になることもそう無いので、俺的には治すつもりもない。

「そうね、とりあえず礼を言うわ。あんな高いところへ招待したのが、そもそもあなたでなければの話だけれども」

「ああ、その点は安心していい。俺はそんな事はしてない」

「あらそう、ではありがとう。私は久遠飛鳥、呼び方は自由にしてちょうだい」

3 番目に口を開いたのはこの中である意味一番目立つ容姿の女子。如何にもな気品が身から溢れているのは、俺の錯覚ではないはずだ。

そうして流れて視線が集まるのは4番目。猫を抱えたまま無言を貫く二人目の女子の元。

「……………春日部耀、以下同文」

…………… まあ、ドイツもこいつも随分とキャラが立っている。中学高校大学と発生するデビューではないのだから、ここまでわざとらしく立てる必要も無いのに。

まあ、そんな言葉は自分にも返ってくるわけだが。

「さて、んじやまあ確認と行こう。オタクらは変な手紙を受け取り、それに呼ばれるがままに身を委ね、そして空中へほっぽり出された…………… ここまで訂正はあるか？」

「特に無いわ。手紙を受け取り、光に飲まれて空に投げ出された」

「俺もだ。手紙が届いて、飲み込まれて気がついたらスカイダイビングの始まりって感じだな」

「……右に同じ。気がついたら上から真つ逆さま」

なるほどなるほど、認識に齟齬はないようでよかった。

「んじや、このツケをその茂みに隠れてる誰かしら——あるいは何かしらに払わせることに意義のあるやつは居ねえな？」

そうして俺が意味深な視線を畔のさらに隅にある茂みへと向ける。

対した存在感だ、隠す気があるのか無いのかはわからないが、大方こつちを舐めてい
るんだろう

「NOです！断固NO！何でそんな過激な案がそう簡単に出るのですかこのお馬鹿さまア！」

——おお、ウサ耳。現実では初めて見た。実在するのか、こんな幻想ファンタジーが。

「むしろノーパラスカイダイビングが過激じゃない理由を教えてくださいこれこのウサ耳バニー様」

「十六夜くん、それではウサ耳とバニーで被りがあるわ」

「んじや絶対領域バニー様だな」

「承を飛ばして起転結で締めくくるのをやめてくださいませ！ええ、この黒ウサギ早速理解しました！貴方様方さては問題児ですね!？」

黒髪を振り回し、軽く赤く染めながら暴れるウサギの耳を無造作に掴む。

今コイツは自身を黒ウサギと呼んでいた。確かにウサ耳である。だが体は人間の少女だ。まさか動物が擬人化したファンシーな世界でもあるまい。獸人……とでも呼べばいいのか？よくあるファンタジー小説に出てくる種族の類だろう。

「ぎゃ?!いきなり乙女の耳を掴むとか何事ですか!?! 一体黒ウサギがどれだけこの毛並みを出すために苦労してるのかわかつての狼藉で——」

「おう、確かにこれはいい毛並みだ」

「じゃあ私は左の方を」

「……尻尾は？ちよつとジツとしてて」

ぎゃー、としか言わなくなってきた黒ウサギを他所に思考を進ませる。あたりには生物の気配がする。これは確かに小動物の気配だ、だから確実に動物がすべて人間と同じ姿をしているなんてファンシー世界ではない。俺の暇つぶしに、そんな愛玩世界は耐えられない。

では一体どんな世界だ？

…… 答えは近くにあった。俺らが本来落下する予定だった湖、正確にはその上空。

薄らではあるが、何らかの膜が張つてある。明らかに超常現象の類だ。俺らと共に落ちてきた男も、何やら湖の淵にしゃがみながら考え込んでいる。

「——いい加減にしてください——いい!!!」

な所で無闇に暴れてしまうのはとても、そうとてもツマラナイ。

「黒ウサギ………でいいんだよな？」

「——へ？あ、はい。そうですね自己紹介が遅れました。私は黒ウサギ、皆様の案内役にして………まあ皆さんをここに呼んだ召喚者でもあります」

いよいよ怒気も破裂するか、というところで日向創が動いた。黒ウサギからしても、先程まで不干渉を貫いていた男がなぜこのタイミングでという気持ちが強いのだろう。気が抜けたようにすっかり髪からも赤みが抜けてしまっている。そして多分それが狙いだと思うぞ、黒ウサギ。

「なるほどな、案内役とは丁寧だな。この世界にはこの世界のルールがある、それはここにいるみんながよく実感した。そろそろネタばらししてくれないか？これ以上焦らすのは少し意地悪だろう？」

戯ける様な物言いだが、相変わらず男の心に動きはない。

そう、何かがおかしいと思った。この男の年齢は俺達とそう変わらないはずだ。少なくとも、枯れるほどの歳を積み重ねているということはないだろう。

だがこの男の心に、熱はない。感動しきり、動揺しきり、憤慨しきり、愛憎しきった末の枯れきった心。

日向創は、鉄心の様にブレない心を持っていた。

——興味が湧いた。もともと興味はあつたが、殊更湧いたのだ。彼とは対照的に、暴力的な熱が俺の心を浮かせていた。

黒ウサギの語るルールも確かにこの昂揚に一役買っているだろう。だが、そんなものよりも俺は今この男にしか目が行かない。聞くまでもない、この男ならば今すぐにも俺を楽しませることが出来る！

だからこそ、黒ウサギが言葉を締めくくるように用意したゲームに俺は食いついた。拳を交えるのはきつと楽しい。だが、それだけでは測れない領域もある。俺は何も力だけを求めてはいない——俺を満足させられるとすれば、それは全能でも足りない。未完成を孕んだ、完全なる全能こそが俺の求める境地。

「——それではルールのお復習さらいです」

——ルールは簡単。ジョーカーを抜いた52枚組みのトランプのセットの中からエースを選び取る事。

もちろんエースは人数分しかない。最後に取る人間は、1/49を引き当てなければならぬわけだ。

だがここに面白いルールがひとつ……イカサマはバレたら失格というものがあ
る。

これは暗にバレないようにイカサマをするゲームであると言っているわけだ。それ
も当然、黒ウサギの物言いからして、測りたいのは俺達の実力……けして運ではな
い。そもそも運なんぞどう頑張ったところで伸ばしようも無いからな。

というわけで俺達はそれぞれ「黒ウサギが用意したカードに不正がないか、確認させ
てもらおう」と言う名目で細工を施した。俺の場合はただカードの並びを確認するという
至極簡単なものだった訳だが……然し日向創は動かない。いや、厳密には動いて確
認しに来ている。だがどう見てもその動きは緩慢で……何かを仕込む様子はない。
かと言って俺のように並びを覚えようとしているかと思えば、どうにもそういうふうで
はない。まさかとは思うが、本気で運に任せようとしている？

「まさか……な」

はじめにあんな大道芸を見せてくれた男だ、よもや実力を隠すなどという考えはある
まい……だがどうしてもなにかしているようには見えないのだが……まあいい
か。見てればわかることだ

「んじゃ、全員確認も終えたことだ。ゲーム開始か？」

「ええ、お好きな順番でどうぞ？ただし、エース以外を引いた場合その時点でその方は敗

北ですが…… 気負うことはありません。負けたところで、失うのはプライドくらいのものでございますから」

俺らにとってはそのれこそが一番大事。わかっていると言っているのだから大概このウサギも問題児こっぴがわだろう。

「だとき、レディーファーストだ。お嬢様方に先は譲るぜ」

「あら、ありがとう。それでは先に失礼」

すつと前に出たお嬢様が台から引いていったのはハートのエース。無言で続いた春日部はダイヤのエース。ちゃっかりエースを引くあたりは、コイツらも喚ばれるだけの何かを持っているということなのだろう。

「んじや、残りは俺らだな。どうする?」

「先は譲るよ。残った2枚なら俺はどっちでも大丈夫だからな」

…… 2枚なら、ね。事実が謙遜か、どっちにしても奇妙な言い方だ。

「なら俺が先だな」

立ち上がって卓の前に立つ。残ったカードはスペードとクローバー…… 黒ウサギがシャッフルして並べたエースの位置は…… コレか。

手前にあったスペードのエースを手取る。ひっくり返しても結果は変わらない。俺の記憶通りにスペードのエースはココにあった。

ならば残ったクローバーは左から13番目のカードのはずだ。

着々とクリアしていく俺達に黒ウサギは何処か不服そうだが、まあ計算の範囲内だろう。

「ほら、アンタの番だぜ？」

そうして俺はカードを見せびらかすように日向へと向けた。彼が言葉にしたとおり、本当に問題ないのであれば彼はクローバーのエースを持って帰ってくるだろう。

「そんなに期待して見られても困るんだけどな」

「あら、残った2枚なら問題ないのでしょ？」

「期待に添えるかはまた別の話さ」

そう言って日向は入れ替わるように卓へ向かった。

伸ばされた手の行き先は右側5番目——5番目？左側13番目とは真逆の？

「嘘でございませう」

——だが、その男が持ち上げたカードはクローバーのエースで間違い無かった。

確かに、そのカードにはクローバーの記号が大きく一つだけ刻まれているのだから。

だがそれは、俺の記憶とは違う並びだ。入れ替えられた様子も無く、黒ウサギのシャッフルで入れ替えられた順番も正確に覚えている

「……何故これがエースだと？」

かってきてる」

「へえ、そんなこともわかんのか。尚更俺はやりたくなってきた」

だよな、とは日向の弁。

視線を下げた瞬間に合わせるように踏み込み、拳を突き出す。そこに技なんてない。そもそも技等無くとも敵が居なくて困っていた俺が、更に技なんぞ覚えて強くなるはずも無い。

それでも俺の拳は必滅。漏れなく地図を書き換える必要が出てくる威力を、1発1発が持っている。速さとして地球を飛び出す事が容易という速度……ましてそれが不意打ちともなれば防げる道理はない。

俺は一撃を確信して拳を振り切った——だが男は反応する。目線を落としたままに、右拳に合わせて左手が内側へと差し込まれ外へと力を流した。

凄い勢いで視線が流れていく中で、俺は遅まきながら日向創の目が、左右で色が違うことに気がつく。

今まではその恐ろしく静かな心に集中していたが故に見えてなかったその妖眼。そのうちの紅い左眼があやしく輝いていたのだ。

「……ッ！」

俺は空中を蹴るなどということは出来ない。原理は理解できるが、そんな絶妙すぎる

力の調整などもはや人間の領分じゃない。亜音速の蹴りで空気の壁を作り、同じ脚の二発目でその壁を蹴り切つて移動する……正しく絶技。本来ならば、自重で足がいかにれている。

となれば、この高速で吹き飛ぶ体を止めるには力技しかないわけだ。

「——しゃらくせええええええ!!」

俺には技は必要ない。姿勢を直し、足を地につけ踏ん張る。それだけで体は止まる。

遙か遠くで呆れたという顔をした男の姿が見える。俺の力を受けてなお、涼し気な顔でアイツは無風の水面に立っていた。

一瞬で止まったにしては遠すぎる距離。だが詰めるのも一瞬であれば問題にならない。い。

だが、突撃が効かない事はよく分かった。このまま突っ込んでも、先程の焼き増しになるだけだろう。

であれば物を使う。非常に人間らしくて素晴らしい。

幸いここには俺が投げ飛ばされた際にへし折れた木が大量にある。

俺の拳は必滅、ならば投擲物も当然に必滅。

第三宇宙速度と呼ばれる速度で打ち出される物体は、漏れなく星にダメージを与える規模の一撃となる。

「コレならちつたア効くだろ!!」

宛ら槍のように投擲された大木が、一直線に日向へ向かつて直進する。正しく光線の如き様相で一条線となり空間に刻まれた大木の痕跡は、しかしその男に正面から受け止められ静止していた。

あまりの速度に、もはやほとんど質量など残していない。その殆どは空中で燃え尽きている。

しかしそれは威力の証明、力の証。

「……力一つとっても俺並かよ」

高い。人間として、あまりにもたっている領域が高すぎる。

だが、それ故に楽しい。壁を超えることが、試行錯誤することが、あるいは何も考えずぶつかることが、ぶつかることがこんなにも楽しい。

なればこれ以上に求めるものなどあるものか? いや、あるはずもないのだ。俺には、必要無いのだ。

「この世界は……お前は、おもしれえよ」

「ああ、きつとこの世界は面白い。だから、楽しまなきやダメなんだ。みんなが笑えなきやダメなんだ」

何を言ってるかはよくわからないが、通じるものはある。

あいつも結局、望むのは現状の打破ってことだ。

愉快で痛快で爽快で——全開だ。

「——行くぜオラア!!」



ここは完全無欠の異世界。希望も絶望も全てまとめてここにはある。

汝が求めるのなら来るといい。ここは飽きとは程遠い世界…… 飢えは有るけどね。

そう、ここは決して幸せの世界なんかじゃないよ。むしろ不幸の世界、幸運なんてクソくらえ!

それでも君たちが刺激的で、サイコで、ポップな毎日を送りたいのであれば、ボクは魔王として、君たちを歓迎しよう。

箱庭へいらっしやい、カムクラ先輩♡

苦惱こそ知性体の持つ特権である

「まあ待て、俺達は獣ではない。となれば話し合い、分かり合える道もある筈だ」

そう切り出したのは、まさに針のむしろと言わんばかりに浮いた存在。彼の名は田中眼蛇夢。日向創がたつた今頼りにしようとした男——しかし彼は現在縛られた上で床に転がされていた……!! ああ、なんと世知辛い世の中っ!!

「勝手なナレーションを入れるのはやめろよな。何が世知辛い世の中だ、ちゃんと飯も食わせてやつたら？」

「その件に関しては感謝しよう。しかし、しかしだ!! なんだこの待遇は!?! ええい小娘、この頭の湧いた童をなんとかせんか!!」

そうしてアーシヤとじゃれつきながらこちらに助けを求めるさまを、春日部耀は当たり前のように無視を決めて干し肉に齧り付く。

そもそも彼がこうして拘束されているのは彼女の一存。以前仲間より聞いた話によると、この男はノーネームの敵にほかならない。状況が状況だけにすぐさま戦闘とならなかったのが幸なのか不幸なのか……ともあれ保留にされた彼の処遇は不憫と言うに

ほかならなかつた。

『それで春日部嬢、結局の所彼はどうするのです？ 詳しい話に踏み入るつもりはありませんが、あのまま連れ回すわけにも行かないでしょう？』

……問題はそれである。どうやら今回のゲームに創の同級生、つまり田中眼蛇夢は全く関係なく、自分たち同様にただ巻き込まれた存在であるらしかった。放置するにも協力するにもこの中途半端な距離感は何ともし難い。現に彼が大人しくしているのも、このゲームの使用であるペナルティの宣告を同じようにくらっていること、加えてジャックという強者が同席していることが大きいはずだ。

「なににせよ大人しく協力するのは無し。有り得ない」

——というよりも、それをするわけには行かないというのが正しい。これは感情論ではなく春日部にとつては非常に理性的な判断であつた。

恐らくこの世界において彼ら絶望と呼ばれる存在を最も知る仲間から「関わった段階で申し訳ない」と念押しされている。既に関わってしまった以上、取り返しはつかない。お互いに干渉せずというのが落とし所のはずだ。

「フン、それが貴様の結論だとすればまだ甘いな」

「——どういふこと？」

聞き流せなかつた。また、関わってしまった。

床に転がされたまま、芋虫のように這うことすら困難な風体で、田中眼蛇夢はこちらを見ていた

「まあ、気持ちは分からんでもない。対処としては間違つてはいないだろう。だがそれは物事を善と悪で分けた考え」

「それは当然のこと、あなたは絶望で創の敵。なら私にとつても敵であることに変わりはない」

そうでなければなんという？善と悪、極端だと言われようとも、紛れもない真理だ。絶望が善に区分されることはないだろう。この場合においてアンダーウッドは善で、絶望もこのゲームの仕掛け人も悪に違いない

「まあ、その定義に今更文句を言う気は無い。凡そ正しいのだろうな——だがそれは死人の解だ。死ぬのならばひとりで死ぬがいいさ」

そう、断じていたが故に……かけられたあまりにも冷たい氷の言葉が、春日部の心の壁を溶かして染み込んだ。絶望に、僅かに踏み込んでしまった。

「ハッ、なかなかどうして険しい顔もできるものだな。だがそもそもその話、その善と悪の話として怪しい。確かに貴様らには俺が敵に映るだろう？だが、ほかの獣人共はどうだ？そこな幽鬼や土の精、貴様らには俺がどう映る？——悪いところで友人の敵と言ったところだろう。まあ、これはお前にも言えることだが、あくまでも絶望という因縁は日

向創が個人的に持つものだ」

一息に言い放たれた言葉に、足元が揺らいだ錯覚がした。それは、間違えていない。理解出来てしまった。

今まで無意識のうちに敵対心こそ抱えていたが、創はそもそもこれを自身一人の事として抱えていた。それを打ち明けねばならない状態に追い込んだのは彼らではない。その場その場にいた第三者達こそがいつも日向を追い込んでいた。

何故ならば日向創が絶望と戦うのはいつもひとりでのこと。絶望が誰かに迷惑をかけたのでもなく、日向創が誰かを救ったのでもない。真正正銘、一対一の戦いにおいて決着がついた結果、日向創が何らかの影響を受け、組織に所属しているが故に話さざるを得なくなったから話しただけ。

「そこまで敵対心を持たれたところで、残念ながら俺は春日部耀きよさよまの敵にはなつてやれない」

何も、言い返せない。それでも仲間の敵は敵だと、吠えることは出来るだろう……だがそれこそそれは私が勝手に抱えること。この場の人たちには関係がない……!

「気がついたか……そうだ、こうして俺が縛られているのは、この場において俺が一定の危険性、戦力を持つからだ。お前が勝手に爆弾に認定してこそいるが、俺からすれば、あるいは周りからすればむしろいくらかでも有効活用できる貴重な戦力だ」

「……それで、あなたはその縄を解けと？」

「つまらない発想だな。違う、俺が投げかける真理はいつも一つのみ」

何度も言おう、この男は縛られて地面に転がされている。傍目から見ても情のない姿だろう……しかし、この一瞬——この場においてはジャックすら息を飲みその姿に飲み込まれていた。

ひとつ置いた、たった一呼吸……それが彼の雰囲気を一瞬で変貌させたのだ。

そして万を辞して吐かれるその言葉の重みといえば——

「——泥にまみれてでも進み続ける。それこそが俺の希望、生物のあるべき姿だ」

僅か十数年——否、遙は数千年を生きた生物をしてでも押し潰される。

なんの力が働いたわけでもない。これは絶望でしかない。

ただ、ただただ超高校級とまで呼ばれるに至った男の信念。何があっても曲げられないと定めた自身の理。その発露が、私の道すら定まらぬ理と衝突した。

「極論善悪なんぞどうでもいい。他人が俺をどう思おうが構わん。だが、自身の勝手に努力をしないのは生物として——系統樹への暴虐に他ならない。俺にはそれが許せん」

勝てるわけがない、勝るはずもない。そもそも競ることすら許されない。当然だろう、なぜなら私は如何に人外の特徴を得ようとも、超高校級なんぞと呼ばれることはつ

いぞ無かったのだから。同じ高校生であつても格が違う。

希望絶望と偉そうに語る段階にすら立てていなかった。彼らが異常なのは技術に非ず、その技術が備わるほどに壮絶な人間性にあつた。そんな当たり前のことすら理解していなかった

「ごめん、アーシヤ。縄、解いてあげてくれる?」

「……いいのかよ、アタシもジャックさんも、多分向こうの他の奴らだつて、アンタが危険だつて言うなら信じるぜ?」

『ヤホホ、いや実際危険でしょう。笑い話でもなく、今の一瞬私には彼が底知れぬ存在に見えました。今になってようやく彼が本質すら覗けぬ存在であると悟れた。尋常ではありません』

確かにその通りだ。私の中でさえ、田中眼蛇夢という男に対する印象はさらに危険なものとなった……否、むしろようやく本当の意味で危険だと認識することが出来た。

しかし、しかしだ……

「それでも、思ったんだ。やっぱりこの人は——」

“日向創の仲間なんだ”
……つてね

番外 召使いと蛇

—— たまたま、本当にたまたまだ。

普通に門を潜り、城内を歩いていただけ。ただそれだけの事で僕はここに辿り着いた。

「なんだお前、随分と早かったな？」

「アハ、そうかな？僕はただこの広い城の中をさ迷っていただけなんだけど……彼らがまだ来てないなら君の言う通りなんだろうね。ま、そこは僕の運が良かったって事で」

英雄ペルセウスの試練……とでも言えば良いのかな？その1、広い城内を誰にも見つけからずに彼の元まで来る。僕の場合、そもそも誰とも合わなかったから散歩のようなものだったけれど

「ハッ、僕と戦えることが幸運だつて？不運の間違いだろう、お前はこの英雄ペルセウスの子に、ゴルゴンの魔物に、為す術なくただ壊されるんだからなあ！」

「ルイオスさん……だっけ？確かに、君の持つギフトに比べれば、僕なんてちっぽけな存在なんだろうね」

それはそうだ。僕は他のみんなのような特別ななんか持つちやいない。それはここに来る前も、来た後も変わらないんだ。

何一つ写すものがないラプラスの紙片、シルバーに輝くそれを手に僕は続けた。

「でもね、そんなちつぽけな僕でも信じているんだよ、自分なりの希望を」

隠されていたものが暴かれるように、さながら壊れたカセットを空回りさせるレコーダーのように、そこになにかが現れようとする。

それこそがボクの希望。

「だから、これはボクとキミの勝負だ……キミの希望が、ボクの希望を打ち破ってくれることを、願ってるよ」

眩い彼らの道程に、君が立ち塞がるというのなら、僕の希望で持つてそれを排除しよう。

この手の中の、重みでもって。

「——ハアア、だからさあ……この僕を舐めてんのかって話なんだよ。なんだそれ、コイン？まさかとは思うけどさ、そんなもので戦う気か？」

「以前使ったものが、たまたまポケットに残っててね。これもまた、幸運って言うのかな」

「……もういいや、やつちまえアルゴール」

会話は無駄だと打ち切られた。乱雑に振るわれた腕、その影から現れるのは——あの夜見た片鱗、その正体。

「へえ、それが……君の希望『ゴルゴーンの威光』」

黒き化物が、その閉ざされた眦を開く。所詮はただの瞬き。しかし彼の魔王のそれは、それだけで世界の全てを睥睨する。

紅き眼光を拝んだ全てが黒ずみ、自身の全てを忘却していく。

僕の周りの色が、溶け落ちていく。

運良く掠めるに留まった紅線が空を舐める。

「ほら、ボクはこんなにも運がいい」

落下してきた天はボクには当たらない、ただただルイオスさん自身の城を破壊していく。

「チツ、何をしているアルゴール？」

「さあ、コインの光に目でも眩んだかな？」

とはいえ、石になってしまった光に用はない。コインは再び手の中に、一足に瓦礫の影に飛び込む。

「とはいえ、困ったなあ。今回は他の人達が息巻いてたから戦いの準備なんてしてないし。ルイオスさんもまさかボクなんかに初手全力とは……いや、だからこそか」

しかし困ったのは本当だ。ペルセウスとゴルゴーンが手を組んで襲ってくる。ゲームで言えば村人K対勇者&魔王という夢のドリームマッチだ。しかも勇者のマッチポンプなのだから手に負えない……………いや、言葉にすると本当にタチが悪いねコレ。「あれだけ暴れ回っている以上、真正面からの突破は不可能だから、自然と狙いはルイオスさん……………になるのかな」

だけれどそれも難しい。先程も言った通り、純粋な力関係でいえばボクは村人、彼は勇者だ。加えてそれに相応しい装備も持っていると来た。

……………フム。

「それで、行こうか」

悩んだところで仕方がない。どちらにせよ、非才なボクに出来ることなんてたかが知れているのだから。



そもそも論にはなるのだが、そもそもペルセウスとはなんだと思う？

おそらく多くの人は言うのだろう、「英雄である」と。そしておそらくその認識に間違いはない。根本として怪物と相入れる存在ではない。つまり、彼は魔物使いではない。

所有し使役する事は出来ても、彼ではゴルゴーンの相棒になることは出来ない。

——ならば、付け入るべきはそこだ。

黄金が、弧を描く。

何処からか投擲されたその金貨——暴れ居る魔王すらその輝きに目を取られる。

あまりに間抜け、戦場が最中を鼻歌を歌いながら横切る酔っ払いでも見るかのように、その道化にありとあらゆる物は目を奪われた。

「——そこだアルゴールツ!!」

故に、その間にボクは飛び退く。ボクだけがその結果を知っていた。ボクだけがその結末を見ていた。

投擲されたコインは戦場を横切り、その身を何度も砕けた雲に叩かれては軌道を変えて、階下へと落下して行つた。

その行先は城に当然の様に存在する武器庫。

——幾度となく繰り返される一撃。天地を震わす災害から身を隠しながら、ボクはその先を見る。

そう、例えばコインは柵の兜なんかに当たって悠長に床まで落ちていく。ゴルゴーンの化物の攻撃で城が揺れる度に飛び跳ねたりなんかしながら、唯一の扉へと真つ直ぐに。

「石畳の床、戦争中の武器庫、英雄の城……」

「なんだ、何を言っている？」

「さあ、なんだろうね」

声が響き渡るほどの広い闘技場。逃げ回るボクを追いかけ回すように、被害だけが広がっていく。きつと城の中はもつとメチャクチャで、兵士の人も、てんやわんやなんだろうね。

カチリツとコインがハマりこんだ。ボクが引いたコインの軌跡、それは正しく即席の導火線。そこに火がつくのは少し先、春日部さんかあるいは久遠さんに追い立てられた人達が、武器を求めて扉を開くその瞬間――

「ほら――火がついた」



数日前――サウザンドアイズの商店に寄った後の話を俺は思い返す。それは黒ウサギに呼び出されて聞いた仮説の話。ギフトも不明なあの男、狛枝風斗の話。

「狛枝のギフトがわかった?」

「YES——そして、NOでもあります。実はその後、何も表示されなかった狛枝さんのギフトカードの件で少し白夜叉様と話してまいりました」

狛枝風斗——俺たちの中で唯一ギフトカードに何も表示されなかった男。しかし、紛れもなくやつは何かを持っている。それを疑うものは本人も含めてその場になかった。

「恐らくですが狛枝さんは確かにギフトを持っていると思われます」

「だが、あいつのカードにそれは表示されなかった。本人の様子から隠したという様子もねえ。全知全能のラプラスの紙片様が2度もミスをしたとでも?」

「そうですね、言葉をより正しく言い直せば——狛枝さんのギフトは未だ発現していないのです」

曰く、それはギフトとは別種の力を持ち、箱庭に来たことでギフトとなった存在。近い存在では、神仏ではない存在がそうであると語られた結果、箱庭に来る際に神仏として召し上げられるのに近い現象。

「つまりだ、元の世界でギフトを生まれ持った俺らとは違い、あいつはギフト以外の力を生まれ持っていた。しかしそれは今ギフトという存在として新たに現れようとしているって事か?」

「YES、その通りでございます。また、白夜叉様の伝手からその内容を伺おうとしたのですが…… 問題はそこからののです」

サウザンドアイズはありとあらゆるものを見る眼である。過去・現在・未来、外宇宙であろうが並行する世界であろうが、その眼は見通してみせる。

「粕枝さんの話から、彼のギフトが『運』に影響するものであるとの推測は可能です」

「不幸を蓄積し、幸運に変換する…… つつう話だったか？ まあ、いまいちピンとは来ねえがそういうものだっていう納得はした」

「ええ、しかしその解釈は間違いです。彼のその能力、あるいは特性とも言うべきものには未来が無いのです」

従来幸運を呼び込むの様な能力は未来を少し良い方向へ修正する能力。過去・現在・未来に干渉し、元々そういう筋書きであったとするギフトである。つまり『幸運』は『運命』には逆らわない。

「しかし、サウザンドアイズでは粕枝さんが干渉した事象を見ることが出来ませんでした。つまりこう推察することが出来ます—— 粕枝さんの能力は、『因果律』に干渉する魔王級のギフトであると」

「…… 何となくだが、見えてきた。ただの生まれ持ったステータスでは無く、アイツが才能と表現するソレが。つまりはアイツのギフトは幸運じゃなくて才能そのもの——

——コインが事実どういう軌跡を描き、何を為したかなんて実はどうでもいい。だが確かに目的は成った。城全体を揺るがす程の不意の爆発。ボクだけが知っていたその布石は、アルゴールとルイオスさんの機動力を奪う。

「クソっ！」

「そうする——とと思ってたよ」

となれば空を飛べるルイオスさんは宙に逃げる。咄嗟に、何が起きたかもわからず。通常であれば何も問題は無い。でもその結果を知っていたボクには悪手だ。

岩陰から既に飛び出していたボクはそれに追いつく——そして、後ろから抱き着いた。

「なア——っ!？」

する今度はルイオスさんの視点は後方へ固定される。まともに周りを見ることが出来ない。ああ、これはもうボクだけでなくみんなでも分かるはずだ。それも悪手、そうなることが確定していた悪手なのだ。

前を見ないで運転すると、事故に遭う。

「ツツ——ガ……ア!!」

爆発の衝撃で落下してきた巨大な瓦礫が頭を打つ。

意識は朦朧とし、前も後ろも上も下もわからない。音も光も拾えない。しかし、明確

な驚異だけは未だに自分にしがみついて離れない。

そんなルイオスさんが咄嗟に頼るのは——もちろん切り札だ。そう、きっとそれは言い慣れたこんな言葉で——

「やれえ、アルゴオオオオ——ッ!!」

アルゴールは彼に使役された身だ。しかし繰り返すように相棒ではない魔王に、彼の心の機微までは分からない。ただその必死の叫びに、全力で応えるだろう。空中の離れたボクに、彼女が打てる最強の最善手——“ゴルゴーンの威光”で

「そして勿論、君は気づかない。音も光もないホワイトアウトした思考では、自身の切り札が自身にも向けられているということに、気づかない」

だが勿論、このままでは巻き込まれる。沈黙を守りながら、審判の務めを果たし続けた黒ウサギが焦るのを視界を過る——心配しなくとも、その未来も既に確定している。

放たれた極光。そして、寸前でそれに反応できる、それが——英雄だ。

意識を取り戻したルイオスさんが咄嗟に身を振る。しかしそれは僕を振り落とすことに繋がる。ボクでは反応出来ない光の速度にも、彼には反応が可能だ。

「まあ、それで彼が助かるといふ訳では無いんだけどね」

再び掠めた紅がルイオスさん諸共全てを飲み込み、色を奪う。

適度な大きさの雲の破片に着地し、落下する彼を見送った。

「ギフトゲームの内容はレイオスさんの打倒」

魔王を倒すのはボクの仕事じゃない。でも英雄を殺すのは、ヒトであるボクの仕事だ。

「キミの希望じゃ——淡すぎる」

——人間大の石塊が、大理石の床を打つ音が響き渡った

番外 黒く泣く少女へ、幸運は舞い降りる

「アハハ、すごいな……これが異世界か」

月面。荒れ狂い、吹き荒んだ紛うことなき死の荒野にて、少年が1人倒れている。

「否、一人ではない。その傍らには少年と同じ歳の頃と思わしき少女も伏せていた。」

「久遠さんは……のびちやつてるか、ずいぶん遠くまで飛ばされたみたいだね」

「ハハツ、月で遭難とは……僕もほとほと運が無い。故に不運ではなく、無運という。」

「いや、異世界に来てもお異星に飛ばされるなんて経験をして、それは違うか。月面旅行なんて人類の夢だからね」

「夢、言い換えれば希望。」

ああ、なんて素晴らしい響きだろうか。宝くじが当たるよりもなお少ない可能性を引き当てて腐れるほど、僕は幸せじゃない。

「とはいえ、遭難したこともまた事実……か。超高校級の宇宙飛行士なんて存在が居たとすれば頼もしかったのかもしれないけど」

残念ながら僕の才能はそれじゃない。その程度のものでこの状況を打破出来るとは思えないけど

まあ、打破できると思つて行動するしかないか。

「ねえ、君もそう思うでしょ——黒死斑の魔王様」

地球の6分の1。月面における星の引力の話は有名だろう。

だからといって静かに宙に漂う姿に現実味は追い付かない。

なんというファンタジー、空想科学なんでもものでも勉強しておけばよかつただろうか。

「妄言、虚言、狂言……初めは面白いとも思つたけど、流石にここまで続けられるとうんざりだわ」

「心外だな、僕が口にするのは常にひとつ。希望という金言のみだよ」

「ほざけ道化」

酷いなあ。まあ金は金でも貧金に違いないけども。鍍金よりも薄っぺらな僕にはお

似合いだよね。

収束する黒死の風、空に描き出されるその影は、大地より逆上がる月光をもともせずに踊り狂う。

「月の兎とは言えども、天から地を見上げるばかりのお月様じゃ、その膝下までは見えないよね」

超高校級の幸運……僕の身に宿る所詮は小さな才能。他の3人とは違い、僕のこれはギフトとは言えない。

けれど、僕のギフトはそこから形作られる。

「セピア色より淡きその憧憬《ノーバディズ・クラッキングオフホワイト》——それが僕のギフトだ」

「影は消滅する」。突き出した腕の先で、そんな超常現象を目の当たりにした少女は目を剥いた。なにかの干渉を受けた感触すらなく、自身が掌握している力がそのままどこかへと消えてしまったのだからさもありません。

「逆算する幸運、とでも言おうかな。超高校級の幸運である僕にとって奇跡は当たり

前の事なんだ」

宝くじが当たるとわかっていたら、家を買うかな、仕事に着くかな、勉強をする必要があるのかな。

そうだと、幸運が起きるとわかっていたら人の行動は変化する。不確定要素に備えるのが凡人なら、確定要素にこそ備えるのが僕なのだ。

「だから僕は幸運ありきの行動をする。人はそれを未来予知とも思うのかもしれないけど違うんだよ。僕にだつて誰を殺したかったのか分かりはしないんだから。でもその毒は確かに僕が殺してほしかった誰かの手に渡つたはずなんだ」

つまり、それこそが逆算する幸運の正体。

僕が思い描いた理想の通りに、未来が当てはまる。

未来予知ならぬ未来確信のギフト。

「この世に灰色の事実なんて存在しない。全ては黒か白かハッキリした確定事項なのさ」

それがどちらであるのか、僕が知る必要は無い。僕自身が選ばずとも、才能が僕の都合のいいほうを選んでくれる。

「君の黒は、僕の白に飲まれて消えた。この先何度打つても結果は変わらないよ」
未来の黒も全て、既に白色に塗り潰した後だ。

非現実的な世界にふさわしい理不尽な能力さ、全くもって摩訶不思議…

「——意味不明よ」

「わからなくてもいいよ、そこが君の底だったっていう話だからさ」

そうとも、僕にも意味は分からなかった。果たして何故僕の幸運はギフトではなく、他の3人の能力、個性、技能はギフトとして処理されたのか。

こちらの世界に来て学んだことは、ギフトとは必ずしも希望とは結びつかないこと、つまりは才能とは限らないということだ。

人々を、世を、より良く、美しく、活発に

、そんな希望足りうるギフトというのはその実そう多くもない。何よりもそれは使う本人の資質に由来するところが大き過ぎた。それでは絶対的な希望にはなり得ない。

だから、考え続けた。

「言葉遊びは飽き飽きだつて言ったでしょう？ギフトが効かないのなら、拳を交わせばいい事じゃない」

「そうだね、拳を躲そう」

とはいえ避けるのは僕ではなく、拳の方だけだね。

不可解な軌道で攻撃がズレる。僕も魔王も微動だにしないままに、座標がズレたかのように未来は確定した。

「ズレるわけないでしょう!? 月なのよココー」

さてどうだろう。現実で天変地異がその様にして扱われるのは、それを起こせる存在が実在しないからだ。

例えば実際に神様が居たとして、神さまが怒って雷が落ちるのであればそれは果たしてそんなに珍しい事だろうか？

巨人が寝返りを打って地震が起きるのだとすれば、それは本当に稀なことだろうか？ 少なくとも僕が行動を共にしている少年は、その身一つで地殻変動を起こせる。

少女が無数の拳を打ち出してきたように、それ以下の労力でそれ程の現象が巻き起るのだ。

「だからさ、解るかな。月で、100万回地軸がズレるくらいは、今の僕にとっては幸運でもなんでもないことなんだ」

そしてね、拳の雨あられのプレゼントをありがとう。

お礼に僕ももう1つ見せて上げるよ。

「そんな何でもない幸運によつて未来が確定するという事は、例えばそれをずっと前に確定していたらどうなると思う？」

「例えば気まぐれな風が、僕ではなく他の誰かに当たった」

そんな風にあの時未来を確定していたとしたら――

“例えば空を切った無数の魔王の拳が、ひと握りの風を巨大な嵐へと押し上げていた

そんな風に今未来を繋げたとしたら——

「さあ、月にも風が吹くよ。それも黒い風がね」

未来を確定するということは、未来の自分の現在を確定するということ。

蝶の羽ばたきで竜巻が起こせるのなら、神と巨人が実在するこの世界において、世界なんて

「おかえり、黒死斑の魔王。ちようど今君のいるそこが、一番最初に僕が居た座標だ
「よ」

「だから、それがなんだって…ア？」

簡単に滅ぶのさ。

幸運が織り成した終末の光景、それは天より巻降りる黒死の渦。

「ダメじゃないか、僕の虚言きぼうに耳を貸したら。僕のそれは幸運にも実現するんだから
「さ」

痛いけな少女が嵐に吞まれる。生まれた場所へと還っていく。

僕はそれを見送ること無く、背を向けた。

きつと僕にはそれを見届ける資格なんて存在しないのだから。

僕の瞳は、希望を見ることにしか、使えないのだから。